―目　次―

玉千代の廃業……大和禎人……1
花粉は路地の風に乗って……山口健二……21
連載　男たちの藩（四）……三戸岡道夫……29
第二章　春の土
ハイラル挽歌……金子正義……47
第二章　開墾の崩壊
山口健二寸描……Q太郎……46
編集後記……54
表紙……岸田幸雄　カット……小久保勝義

玉千代の廃業

大和禎人

「明日は初日じゃぞえー」

呼出連の美声が部屋の前で聞えていたが、いまは遠ざかっていた。

三段目力士の玉千代が髷を切ったのは秋場所の初日を前にした触れの日のことで、撥の呀えにのって、江東の町並みに太鼓の音が流れ、相撲人気を呼び込むように聞える、そうした日のことであった。

「どっつあんです」

玉千代のほほを大粒の涙が一筋つたって落ちた。それなり拭いもあえずそれがせめてのこと、髷への別れになった。

とりあげられたもとどりがハラリと親方の手からこぼれ落ちるかと思われるかさしかなく、そのことで親方も思わず目頭を熱くしたようすであった。

廃業していく若者の栗髷に部屋うちで鋏を入れることはなにも珍しいことではなかったが、親方としても若い者への一片の憐れみとは別に、この場合、とくに格別のものがあったようすである。

昭和の初頭、あるいは大正末年のころ、電気燈という変った四股名の力士がいた。三段目からせいぜい幕下の下位に甘んじて消えたように覚えているが、彼はつるつるのハゲ頭であるところからこんな名乗りをしたもので、当時、変った力士名の部類だったが、もちろん、他にも「い」でかながしらと訓んだものなどもあって、小兵でアクロバットな四股で人気を馳せた島田川という幕下力士なぞ……、時代は前後するが、個性派として記憶に鮮やかである。かの一代の名横綱栃木山も小軀無双の実力をもちながらの引退は力士のシンボルたる大銀杏を結えなくなったためと今は一般に知られている。その彼は三十九歳の八年後にもなって、昭和六年の選手権大会では、時の第一人者横綱玉錦（当時大関）を破るとい

う実力を保持していた。惜しまれた潔い引退と思えたものが、実は無念を抱いての引退だった。

しかし、一方には年齢とともに頭髪が薄くなっても頑張りつづけた力士もないわけではない。大関名寄岩、藤田山、戦後の鶴ケ嶺、北瀬海、近くは黒瀬川などの例がある。彼らがどんな思いで土俵にのぼったかを考えるとき、そこはかとない哀感を大方の観客は心の中に覚えたはずである。

結髪は国技の伝統として許されている一つの形式美である。かって、天龍三郎らが角界粛正を叫んで協会を離脱し、断髪におよび、結束をするという紛擾の際は髷なしの力士群が次第に興業的にも行きずまりを見た。もちろん髷だけの問題ではなかったかもしれないが、大衆は相撲の伝統美をもとめて相撲場へ来るものという一面の心理を無視できないということであったろう。

このとき、かれらが巨漢力士出羽ケ嶽だけには髷を残すことを許したというエピソードがある。特異な存在である巨漢が髷なしには生きていけない、切らせるに忍びないという仲間の思いやりだった。つまり、天龍らは力士髷を切る悲壮とウラハラに、心のうちでは土俵人生にとって髷の大切さを十分認めていたことになる。

文チャンこと出羽ケ嶽文次郎はそれで救われた。出羽ケ嶽の斎藤文次郎はアララギ派の大歌人斎藤茂吉とは義兄弟、小鳥を飼う心の優しさをもち、巨体をもてあまし、ついに勝負の世界から脱落するのだが、まだこの頃は幕内力士の列にいた。それはともかく、髷にまつわるエピソードとしてこれは面白い話だ。後にかれは単独の復帰をするが、誰からも咎められることがなかった。髷を頭にのせた文チャンのそれからの晩年の土俵上の無残は人も知るところだが、それはこの話とはあまりかかわりがない。

ところで、

「ごっつあんです」

と、師匠に断髪の労を謝した玉千代は本名肝付玉千代、この姓から推定されるように鹿児島の出身とされていた。彼の場合名前をそのまま四股名にとったものであった。二所ノ関系の片男波に（玉）を名乗る力士が多いのが普通だが、彼はそうではなかった。かといって、国もんということでは井筒部屋に同じ出身が多く集っているが、そちらの方でもなかった。

「あれは本名だもんね、勘弁してつかぁさい」

親方は片男波からダメージを出される前に先手をうったものだった。

「それに、あれは薩摩、親方は豊後、まるきし縁がないわけじゃない、同じ九州っていうことだし、可愛がってやっておくんなさいよ」

元玉乃海の片男波嶽太郎は大分の出だった。玉千代の師匠の大木戸は長崎の出身で、やはり九州という親しさ

があった。大木戸は元十両の雲仙嶽だった。

年寄の定員は一〇五名、その資格として十両力士の場合は連続二十場所以上、通算なら二十五場所以上を勤めたもの、という規定がある。十両どまりの力士が年寄名跡を継ぐことは容易ではない。一場所皆勤で資格を与えられる幕内力士とは大変な違いがある。

ここで、私は突然、やはり戦前の力士で雷ノ峰という幕内力士のことを思い出した。雷部屋の雷ノ峰伊助は昭和七年の紛擾の際、髷をとどめた革新力士団に属し、彼一人だけなぜか帰参の機会を失い尾羽うちからして街頭を歩いている姿を目撃したものだ。びんつけ油も切れ、そそくれた髷をのせた落魄した姿に哀れを覚えながら擦れ違ったのである。なぜ彼に帰参の機会がなかったものか、真相は知らないが、バックに乏しい小部屋力士の悲哀がひとつには想像される。この場合もまた髷をのせる力士社会ゆえに無残の印象がいっそう強く刻まれたようである。雷ノ峰のその後を知らないが、陋巷に窮死したものでなければいいがとさえ思われる。

ついでながら、この紛擾関係では大連に客死した大ノ里萬助の場合はもっとも悲惨であった。出羽海一門が片屋を占めた全盛期、その部屋に属し一六一センチ、九〇キロの小軀よく神様とよばれ、大正十四年一月協会役員全員一致の推挙をうけ大関に栄進していたのだから、将来は協会にあって年寄として安泰を得たはずのものを棒にふって天龍らとの義に殉じたものであった。武ノ里、松ノ里ら復帰させた弟子たちの活躍を大連の死床で涙を流しラジオ放送を聞きいっていたという。哀れや哀れというほかない。しかし、その身辺を最後まで看とることのあった粋筋の一人の女性があったというから、せめてのこと救われる思いがする。そのひとの名は貴美龍のちの料亭「蝶々」の女将といわれている。

さて、その大ノ里にはいっ気に寄り切られて負けることのあった男女ノ川登三（供治郎）や鏡岩善四郎は帰参組に属し、それぞれ横綱、大関に昇進しているのだから、人の運命は力士社会といえども、単に腕力や技能だけのものでなく一つの運があるように思われる。

髷にまつわり、力士たちの社会の哀歓といったことに触れたいと思ったことだったが、その力士たちが引き起こした未曾有の紛擾と、大勢の力士たちが髷を自ら切った昭和七年一月の出来事を無視することはできなかった。なかんずく大関大ノ里の悲劇に言及しないわけにはいかなかった。

さてここで、わが玉千代こと肝付玉千代はいみじくもその大ノ里に関係するところがあったことに話題を移さねばならない。彼の番付上の出身は鹿児島とあっても、また肝付姓は明らかに出身を裏付けるものであったが、実のところは祖父の代から青森県南津軽郡に移住していた。

大ノ里は藤崎町、玉千代はその隣町であった。藤崎の鹿島神社には昭和三十五年八月にもなって大ノ里の碑が建立された。小軀よく大関までつとめた功績をたたえるもので、大ノ里の死は昭和十三年、四十九歳であったから、なんと四半世紀も後世の建碑である。戦争時代を経て世の中の様変りにかかわらず大ノ里の名は不滅の光をもって郷土に生きていたと言える。肝付玉千代少年はその事実に感激したものであった。後の力士玉千代は最も充実して、一六六センチ、体重九十キロにすぎなかった。

（よしっ、おれだって）

と、いう思いを秘かに抱き育てるようになった。

「やい、芸者」

「玉千代ねぇさん」

親に名づけられたおのれの名に対し不当の辱しめをうけてきた見返しにもそう思った。小学校時代からこの名前のことではつねに悩まされてきた。

由来、青森県は全国に抜きんでる相撲のメッカともいうべき土地柄である。多くの名力士を輩出してきた。とくに南津軽は傑出する。五郷村浪岡に明治の浪ノ音、弘前の初代若乃花、田舎館に栃ノ海、軽量の名力士が不思議なことに多い。少年が大きく夢を描いたとしてもおかしくはなかった。

「このはんかくせ」

「ほっけなし」

どちらも、方言で（ばかもの）というほどの意味である。少年期をこの地方にあった貧農の家や、そうでなくとも次三男が貸し子にだされる習わしが一般であった時代、大ノ里が、

「おれは力士になる」

と、口走って年契約を改めるに際しては断られたという話がある。玉千代少年の場合もこれに近いケースに違いない。

（ネズミのまねかよ、いい気なものよ）

と、言われるのがオチで誰にも相手にされず、いよいよけあつかいをうけたものだった。ネズミは彼の尊敬してやまぬ大ノ里が力士仲間から呼ばれた愛称であり、同時に蔑称だった。時代は変っても土地柄で、伝説は滅びていなかったのだ。

（したども）

玉千代はあくまであきらめなかった。あきらめるどころか、ますます決意を強めるばかりであった。と、いうのも、玉千代少年は夏休みともなれば子供相撲に出ては毎晩のように賞をもらって帰ったものだ。ネズミに憧れる玉千代はこの夜相撲で「神力」を名乗っていた。

（居反り）

（たすき反り）

（掛け反り）

（撞木反り）

などを得意とする技能でまさに、

（神力っ）

と、大向うの大人たちからも可愛いアイドルとして贔負の声援のかかるほどの人気で、四股名に価する技能もしたたか、人気を博したものであった。これらの技の多彩はよほどの体の柔らかさ、腰の良さ、勝負感の良さを要求されるものだった。

玉千代少年が自らの天分ともいえるものを自覚するに従い相撲にいよいよ魅せられ、なにものをもすててこの力技に淫し、のめりこんでいった成り行きは当然のものとしてうなずけるのであった。

こども夜相撲の呼物は結び前に飛び付き五人抜きがあり、小五番、大三番という取組があった。小五番というのは年少力士で四年生以下、大三番の方は五、六年の力士によるものだった。四年生と五年生の間にはかなりの体力差のあるところから当然だったが、飛び付き五人抜きでは無差別が原則で、神力はどうかすると、五、六年生を手玉にとる活躍ぶりで、ヤンヤの喝采を浴びたものである。もちろんつかまればひとたまりもない相手を倒した。小五番の対戦相手には「団子山」という彼の同級生がいた。団子山はその資質において神力に優るものをもち、肩巾ひろく出っ尻の二枚腰で、しょせんは神力の敵ではないはずのところ、神力の技能は彼に勝り、しばしば例の反り技で快勝していた。ファイトのうえでも団子は人の良すぎるところがあり、粘りがなくあっさり土俵を割ることが多かったのだ。このへんに相撲技の微妙さがあり、奥の深さもあるのだが、神力はそうした醍醐味を堪能させることのできる豆名力士であった。喝采をうけるゆえんであった。

ところで、二人の取組で例によって手に汗にぎる大相撲のあげく、神力がたすきに反る技をみせた際、団子が神力の立褌を取って離さなかったことから、褌がすっぽぬける椿事がおこった。神力はスッポンポンの生まれたての金太郎よろしくの姿になってしまった。前を押えればいいのにそこはこどものことだから悪びれず、しかも勝名乗りを受けようと二字口へそのまま下がり、手刀を切るつもりらしく見えた。だが、そこは行司が見逃さない。褌のはずれ落ちたるは負けと、とっさに団扇を団子にあげたものだった。

ところがこの時、同じクラスの女生徒の何人かが目撃していて、たちまち評判になった。

「ワァー、エッチい」

というわけだった。

「どしたのよー」

「どうしたこうしたのじゃない、ふふ」

「ふーむ、見たかったなぁ」

「エッチ」

と、いった騒ぎであった。

「それで負けたの、なぜよぉー」
「なぜって、不覚につき負けというの」
「フカクってなにさー」
これは珍問答というほかない。
しかし、このことは小幡玉千代少年が天性の美少年であったことにかかわりがある。痩軀だが色白の肌が相撲技の熱闘の中で桜色に燃えて見え、人気を集めないはずがなかった。
昭和初頭の名横綱玉錦の珍しい写真が残されている。少年西内弥寿喜時代の全裸の写真だ。十二歳の時のものだから、無垢そのものいささかのケガレもないものだ。おそらくは玉千代の全裸像はこれに近いものであったろう。
余事ではあるが、玉錦は明治の海山の二所ノ関部屋に属し、小部屋の故に苦労が多く、番付の上でつねに不遇に甘んじ、関脇の初優勝いらい優勝五回にしてようやく横綱という、今日の甘い基準からからは到底考えられない試練に耐えた価値多い横綱であった。昭和五年五月常ノ花の引退いらい実にまる三年も横綱不在の番付が続いた挙句ということでも近来の事情とはなはだ相違する。
ともあれ、玉千代の場合、それが観衆の面前での出来事であったからたまらない。いまのように、小学生がおませでなかった時代でもこれは噂を免れない。ただでさえ人気のあった玉千代だから大変だった。あくまで白い肌にその部分を、女の子たちはそれぞれ勝手に、しかし、無垢のものとして思い描いたようだった。
「フカクねぇー」
「フカクよねー、だぁーんぜん、断然よー」
噂はそんなふうにエスカレートしたものであった。
肝付玉千代少年の大木戸部屋への入門は今では許されないことだが、そこは昔のことで、義務教育中の中学一年の時であった。それというのも、おきまりの東北夏稼業の花相撲興業で親方が青森に来た折、なりは小さくとも抜群の相撲感に惚れこみ、多少は男色の好みも手伝って、いまでいうスカウトをしたものであった。
「しこ名は名前どうりの玉千代がいい」
と、親方の一人合点で勝手に決められた。
（しかし、芸者みたいだが、これは案外いける）
というおかしな皮算用が胸にあったようだ。親方の決めたこととあればしかたがない。入門した以上は親方は父親であった。
それからの修業は予想を超えた辛いもので、歯を食い縛る我慢の日の連続であった。年歯もゆかぬ年少が、いきなりとんでもない苦の世界に飛び込んだ戸惑いは想像を絶するものであったが、選んだ道だから耐えねばならなかった。尻尾を巻いてむざとは国へは帰れないのだった。

（ここでへこたれては大ノ里にすまない）
という気持だった。藤崎の鹿島神社の夜相撲の光景がいつも脳裏に浮かんだ。あの裸電球の下でどんなに自分はめざましい活躍をしたことか、
（泣くな、玉千代）
（頑張れ、玉千代、我慢しろよ、）
と、励ます声が聞えるように思えた。
股割りの辛さ、摺り足、筈、鉄砲、まわしを欲しがらない基本をミッチリ仕込まれる。稽古場の羽目板に叩き付けられる。兄弟子にガイにされればされるだけ、応えてぶつかっていかねばならない。ガイにするというのは可愛がるという意味をもつこの世界独特の言葉だった。頑張りや根性を養うために、引っ張り回しという稽古がある、髷をつかんで引きずられ、足を送ってついていく。力士たちの世界では三年さきの稽古ということが言われ、また、ちゃんこの味が身に滲みなければ強くなれないとも言われたりする。稽古を終れば、終ったで部屋の雑用に追われ、親方や兄弟子の入浴の世話やら、ちゃんこ番、洗濯とこまねずみのように働く。すべて辛抱と忍耐を強くもとめられる社会だった。泥着に震えながらの下積みに甘んじなければならない。
そんな日常はたとえ小部屋でも同じだった。関取がいない部屋であっても一日は同じなのだ。部屋頭は木戸山という幕下中位をさまよい、三段目との間を上下する力士だった。この世界の水になんとなく馴染み、もうおいそれとは這い出せないという手輩であった。大木戸は部屋力士わずか三名という貧寒さだった。十両力士に終った親方だから、弟子までが内心はもちろん、外に出るにしても肩身の狭さを免れないのだった。だが、こうした部屋にこそ発奮して大力士の育つ可能性が秘められていなくもない。さきの玉錦がそうだった。二所ノ関はまさにその例であった。
玉千代は健気にも発奮した。体がバラバラに壊れるかと思うばかり稽古に励んだ。
（野郎、気でも狂ったか）
と、兄弟子の木戸山も思うほどだった。
ぶつかり稽古に胸を出し、胸板を真っ赤にし、木戸山は木戸山で必死にこれに耐え、にわかに小部屋に活気がもたらされた。男同志、それも裸体の男同志がぶつかりあう激しさの中に快感が走る、ぞくっとするような快感である。激しいほどそれは快よいもの、そういう自覚が力士に芽生えればしめたもの、放っておいても成長に導かれる。羽目板に背をもたせ一息つくひまもない。それを板を背にカマボコをきめこむと呼び、この世界ではそうした怠けをもっとも嫌う。竹刀でどやされ、叱咤が飛ぶ。
ところで、力士の卵になった玉千代には中学生としての学業がある。部屋のある位置関係で彼の場合は竜泉中

学に通った。蔵前や両国の中学では力士中学生が珍しくなかった時代だった。ドカ弁を給食のほかに部屋から持たされ、髷を結えないザンバラ髪の中学生がまかり通る、彼等はいわば早期就職の中学生で東京の場所だけ土俵に上った。初、五月、秋の三場所だけのプロ力士だった。したがって昇進は一進一退スローテンポを余儀なくされたものだ。後の北の湖のような史上最年少の横綱昇進記録はこうして可能を許されたものだ。今日では許されないケースである。

「玉千代、早く大人になれよ、大人になれば楽しいことが待っている」

木戸山がおかしな笑いかたをした。

「お前のモノはなかなか立派だな、生えてきたな」

そんなことをサラリとこの兄弟子は言える男だった。お人良しだから、のんきで出世が遅い。悪気はすこしもないのだった。

木戸山の言ったことはいまの玉千代にとってかなり重大な意味をもっていた。青春の萌え出そうとするそうした兆しを誰よりも本人が気にしないではいなかった。気づいているから、

（自分が大人になる）

という不安がなにとはなく中学二年生力士の心にどうやら翳りを投げかけてもいたのだ。

夏場所をひかえているから、相弟子二人が巡業から帰り顔を揃えていた。木戸山を部屋頭としたもう一人は若木戸といって、こちらは成人を迎えたばかりだったが、そばで彼の方はニヤニヤしていた。

ささやかな土俵はあっても小部屋の悲哀で出稽古が多い。おきまりの泥着姿で国際通りを二粁ほど、駒形橋を渡って部屋の多い両国まで歩くのだった。彼らは無邪気なざれ言をそうした時に交わすのだ。場所のある蔵前へもほぼ同じ距離になる。三人が肩を寄せあうには年齢の差が少々ありすぎた。若木戸はせめて近い年齢だったが、もういっぱし先輩顔をしていた。玉千代がひきくらべのできる相手ではなかった。相撲社会に馴染んだもうひとかどの（大人）だった。その大人ぶりをひそかに観察することでいよいよ嫌悪を交え、不安を増すのだった。若木戸の大人ぶりが立派であればあるほど、玉千代はそれが薄汚いものに見え、恐れを抱いた。不思議な倒錯だった。

玉千代はその頃、一方にかなめの相撲技そのものにもある限界をおぼえはじめていた。プロの世界の最初のカベであった。まだ序二段、巧者をうたわれた技がプロには通じないアセリに悩まされていた。こども相撲でやんやの拍手を博した反り、ひねりの合せ技をもちいる余地はなかった。一にも押し二にも押しの基本から鍛え直さないことには通用するはずがないのだった。

「お前の技はしばらくしまっておけ、かならず役立つ

時がある」

大木戸はそう愛弟子に教えた。体のない玉千代には酷なことだったが、たしかに、その通りだった。押しに徹することで玉千代の道はひらけるはずに自分でも納得するようになっている。だから、いっそう辛いのだ。

ソップ形の玉千代にもこの頃から肉がつき、幾分かは腹が出てきたような自覚があった。体重九十キロのピークはこの頃のことであった。

大木戸は前記したように片男波と親しく、この巡業部副部長の信頼をうけていた。そんな縁で平年寄から抜擢をうけ、部員になっていた。如才なさを買われた先乗り込みの役を勤めている。部長の伊勢ノ海も次第に信頼して先発を彼に任せるようになっていた。旅から旅、巡業先へ早く乗り込み、手はずをつけるのが仕事だった。留守を預かるのはお上さんの松代と玉千代だけということが多い。学業のある玉千代は巡業に出られない。昼間は学校を終ると、協会の教習所に出かける。新弟子の教習は修了していたが、彼と同じような仲間が各部屋から集ってきて稽古に励むのだった。関取たちに伍した巡業の中の稽古と違ってレベルの同じ仲間だから、あまり実力向上にはつながらない。指導の竹縄親方はもと鳴門海といって、両の手を足首へもっていってから、おもむろにおろす独特の仕切で知られた人だ。あの姿勢そのまま厳しい監督の目を光らしていたが、そこは仲間同志、結構ふざけあう楽しみがあった。

「巡業中の部屋のお上さんとかけてなんと解く」

「わからんかねぇ、こんなの、いいかい真水の蛤さ」

「どしてか、おいこの野郎」

「この野郎はないぜ、ふ、ふ、教えてやろうか、その心は（ときどき上向きに潮を吹く）わかるか、これ」

相手が呑み込めないとみると、それからあとのところを耳に口をあてるように小声で囁く、

「ふ、ふ」

と、相手もこの謎解きを了解したらしい。だが、わきで聞いていてもわが玉千代にはさっぱりわからない話だった。

「なぁ、玉千代お前なんぞとくに問題だな、いまどき部屋はお上さんと二人きりだろう」

「なにが問題だ」

「オクだねぇ、お前」

どうやら、軽蔑に値する成行のようだった。

「ところで、お前、あれやってみたか」

「うむ」

年頃の自瀆の話だ。

「どうってことないなんて、そんな、どうにかなるまでやってみな」

玉千代はいつも辱しめられる。そして、この場合のこ

とだけは（どうにか）なった。激しく、たとえようもない恥ずかしさで一杯であった。

ちゃんこの店（大平戸）は大木戸の副業である。店のほうがなぜ大平戸かと聞かれることがあるが、

「うちの主人が九州の人間だからですよ、大木戸は部屋の名前ですから、弟子もいることだし、まずいでしょ、でもうちは同じ長崎でも、平戸じゃないの」

そう言いながら、お上の松代は店では親方をもっぱら（うちの主人）と呼んでいる。賢い人なのだ。

店は部屋の右手、路地を入ったところにある。建物は部屋と同じだが、開口部は違っている。路地をほんの少し入っていることで、得意客には親しみやすさを与えているようだ。規模は小さく、暖簾を分けて入ると、わずかな土間にスタンド風の構えがあるといったもの、赤提灯と選ぶところのない体裁なのだ。これなら協会のお偉方もクレームをつけようがあるまい。有力な親方連が名義だけ肩代りしている副業の大店とはわけが違うのだった。

もともと、このちゃんこ店は小部屋の経営上の苦肉策から出発している。弟子を養うちゃんこの仕込みを小人数だから、合理化して両得のものにしようとする発想から出ていた。

お上の松代は水商売の出ではなかったが、生得の愛敬良しの上に、すこぶる艶治のタチである。この世界で言う金星だった。商売繁盛はこのお上さんがあって成り立っていた。

「ねぇ、お上、また場所が始まって淋しかない」

「いいえ、淋しくなんかありませんよ、ちーとも」

「へー、ちーともねぇ、ほんとかなぁ」

さらりとイナしかたを心得ている。

三月、大阪で春場所の場所中だった。

店は六時の打ち出しまでがテレビ桟敷のピークになる。

「はやく関取がほしいねぇ、大木戸でも」

「ハイ、ごっちゃんね、おつぎしましょ、うれしわ」

ちゃんこの客が大木戸のご贔負とは限らないが、やはり、そこはお上さんの魅力に支えられる案配が明らかだった。

「ほしいわ、うちにも関取が」

思わず松代も呟かずにはいられない。

玉千代はこの夜の時間を、客の多い時間だけの手伝いをしていた。ちゃんこの店だから相撲取がいることで看板がわりにもなる。

「この子なんか有望なんですよ、もうこの月で学校も卒業だし、ええ、玉千代っていうの、ご贔負にね、十枚目になったら、みなさんで化粧まわしを贈ってください ね」

「いいとも、ゲンマンしょう」

「ハイ、ゲンマンね」

「よーし、約束した、針千本はご免にしょう」

松代はカウンターごしに、袖をたくした白い腕を伸ばし、小指をからませた。

どうやら、主の大木戸がこの場にいないほうが店が賑う様子だった。

大木戸は在京していれば板場に顔を見せ働いた。そうすることが現役時代の顔つながりを大切に、ご贔負の数は少なくとも、タニマチに対する礼を欠くまいと努める姿に見えた。大木戸は旧大阪方の名門である。大木戸森右衛門という横綱に由縁をたどることができる。

「大阪方では三保ケ関さんと同じことですよ、三保さんに増位山親子、北の湖が出たじゃないですか、ま、見ていてくださいな」

と、どうかすると東西合併の昭和二年に遡る隠忍を爆発させることがある。いま、部屋を空け、あえて苦労を買うような巡業先発の仕事も実は地方に逸材を発掘するチャンスにもなると、ひそかに確信しているのだった。

松代にとっては大木戸が店にいることが時々むしろ疎ましくさえ思える。内助の功をつむことに私だって懸命なのだと思う。店のことはまかせてほしいと思う。幕下以下の無給で、花もさしずめ貰うことのない弟子たちを抱えていれば、協会から支給される養成費だけでは到底やっていけないのだ。

苦労が多いほど松代は弟子たちを可愛いと思う。まだ自分たちには子供運に恵まれていないからなおさらだ。それにつけても玉千代には目に入れてもという、可愛さを近頃つのらせている。

「玉千代ねぇ、いい四股名だ、男ぶりもいい」

「でしょ、いい子ですよ」

「あぶない、あぶない、こりゃあ、お上さんのいいイロじゃない、けっこう図星だったりして、こいつぁ悔しいねぇ」

松代をからかう客が多くなっている。松代にもそう言われてみると、熱い思いもないわけではない。

大木戸と結ばれた時、松代はまだ二十歳だった。力士社会がどういうものか、それまでナマには相撲というものを見たこともない松代だった。ある後援者が当時の有望力士雲仙嶽に娶せたものだ。大木戸部屋の再興に熱心なその大阪の後援者は先代を説いて、まだ十両の力士に早い妻帯をさせたのだ。この世界にありがちな女性問題を封じようというのがねらいだった。しかし、雲仙嶽の大木戸は律儀すぎる男で、膂力は優れていたが、結局のところ、勝負師ではなかった。先代の急逝に会って早々跡目にすわる経緯をたどったのであった。

ちゃんこの大半の準備は二時ごろまでに了えねばならない、松代の女手ひとつでそこまでの運びをつけるのが日常で、親方稼業に縛られている夫はアテにしない習慣

になっている。
ちゃんこ「大平戸」の特色はとりのソップ炊き一辺倒だった。フグだのアンコウ、やれアワビと品数を増やせば手がこむし、お値段も高くつく。お酒を飲んでも三千円以内の手頃なところで押えるといった狙いで、一応成功しているようだ。
（うちのスープは炊き込みながら少し塩味を利かす、アクの出も少なくなるし、素朴な味が引き出せるんですね、ね、お試しになって）
と愛敬たっぷりお上の口からそんなふうに言われると、また出かけて見ようかということになる。いっぱし通ぶる客は仲間を次に連れてくる。松代の艶っぽさが男たちをとりこにする。スタンド風のちゃんこ店として「大平戸」は大衆向きの評価で、アタリをとったようだ。
玉千代の手伝いは自発的なものといえる。兄弟子たちが場所に続く巡業というスケジュールが組まれ、帰京は四月半ばになる。
三／三〇橿原、三／三一伊勢神宮奉納、四／一姫路市、四／二土庄町（香川）、四／三井川町（徳島）、四／四南淡町（兵庫）、四／六津市、四／七大垣市、四／八川根町（静岡）、四／一〇横浜市、転じて、四／一二長野市、四／一四高崎市、四／一五宇都宮市、そして、帰京後四／二一靖国神社奉納
というのがこの年の春巡業だ。「大平戸」の壁間にもこの日程は貼ってある。三月は六日には地中の虫も動きだすという啓蟄、場所は十日からだから、春一番も吹こうという陽気だ。玉千代の卒業は楽日をまたず二十日という予定でひかえていた。その時を待ちかねて、力士として一人前に扱われる。それがなにより嬉しい。
玉千代は三段目下位に一度進んだが、いまは二段目を低迷している。入門して三年目である。昭和四十五年に入門資格を義務教育修了者と限定される寸前の入門という事情から、言わば部屋住み通学の苦労をなめてきた。そのかわり、身長一七三センチ、体重七五キロという基準は大目にみられたことは幸運だった。彼の憧れの的であるネズミの大ノ里は一六一センチという小軀だったから、それに比べればかなり大きいのだ。ただここで心配なのは初土俵いらい五年三十場所にして幕下に達しないときは整理の対象にされるという規定であった。プロ棋士が四段に達しなければならないのと同じである。幕下になると昔は羽織を許されたところから、（羽織男）と言われたものだ。はじめて力士としてあつかわれるわけだ。十両を十枚目と別に言うのは幕下の上位十枚までを関取あつかいしたところからきている。
大木戸の部屋では兄弟子の木戸山、若木戸も右のようなことからいって、まだ一人前ではない。
「しっかりしておくれね、あんただけは根性をもっているようだから、学校され了えたら頑張ってよ」

松代の激励は真情がこもっていて、玉千代の胸に響いた。店の手伝いといっても、仕入れの使走り、下ごしらえ、洗いものといったところだ。手を借りまい、いくら子飼いだからといってもケジメはケジメ、力士は土俵に生きてもらわねばと思いつつ、松代はいくら頑張っても一人では店をとり仕切れないのだった。
玉千代は見かねて手伝ってきた。お上さんの目に入れてもという、心の優しい子なのであった。
子供に恵まれていない松代がそういうことにほだされていったのは無理もないことだった。ほだされるということはついその気になる、危険な予定外の行動に走ることもあり得る兆しなのだった。予定外とはどういうことか、松代もまだわかっていない。玉千代はなおさらわかるはずもないことだった。
（怖い）
という思いはもちろん松代のほうが当然強い。
玉千代もそんな危機をなんとなく感じている。その危機はどういうことなのか、奥深い（大人の世界）に思われてつかみきれない。
教習所の仲間の言っていた謎解きはまだ彼には無理でありすぎたようだ。玉千代はそんな少年をまだ残している。
「お前、部屋で何処に寝ている」
「どこって、いまは兄弟子がいないから、一人で広間に寝る」
「純情だな、感心なもんだ、真水のアレ、教えたっけなぁ、いまがチャンスじゃないのか、春一番思いきりが大切と違うか」
相手の言っている意味を玉千代はいまならわかりかけている。小部屋の事情を知った上で、また、お上の松代を知った上のからかいであることに腹が立つ。許せないと思う。
荒れる大阪場所というジンクスがあるが、横綱大鵬は五日目、関脇大受に敗れるという波乱があった。玉の海北の富士の擡頭の前に初場所三十二回目という優勝の大記録を樹てたのをピークにようやく新旧交代の兆しが見えるかに思われていた。店のほうではあいかわらずテレビ桟敷の客たちが、勝負を肴に賑わっている。まだ優勝予想は早いが、五枚目まで上ってきた貴の花あたりの話題が多い。
「親方も忙しいねぇ、たまには電話があるの、お相撲さんの社会も大変だねぇ、ほっとかれて、お上さんが可哀そうだよ」
（男の話ってなぜこうなんだろう）
と松代は思う。馴染顔をする客にきまっている。
「中山律子って、お上さん知ってる」
「ええ、知ってますともね、いま人気のプロボウラー

の」

「そ、そうそう、お上さん、あの人に似てる、彼女はちょっと冷たい感じだけど、お上のほうは温ったかい、横顔がそっくりだねー」

「ハイ、ありがとうさん、おつぎしまひョ、ガンバラナクッチャ」

松代はおどけてみせる。ガンバラナクッチャは自分を励ます優しさ辛さを微妙についた当時の流行語だった。

玉千代は手を働かせながら松代の横顔を見た。甲斐がいしく凛然としたお上さんに（ガンバラナクッチャ）という言葉はほんとうにぴったりしているように思える。プロボウラーに似ていると言われたのには少々不満があるが、たしかに似ている。彫りの深い美しさでは中山律子以上だとおもう。テレビの画面に追いもとめるその人と違って現実、目の前にこの人の方はいるのだから、これ以上たしかなことはない。と、玉千代は思った。そして、その横顔を改めてそっと盗み見た。

そして、一つの暦をめくる日が訪れた。未熟なものへ成熟したものからの導きがあった……。

それは性が異るから互いに引き合う、ごく自然な成り行きと言えるものだったかもしれない。

玉千代はあえぎ、荒い息づかいをしながら焦り、そして熟したものの導きにしたがった。玉千代の性は松代のなすままになった。相撲社会のアダムは大男だから、みなイヴにリードされるのだと囁かれた。

「玉千代、あなたはそのままじっとしていなさい」

松代は命じるように言うのだった。

北陸の冬の雷はマイナスの極がつねに天上にあるものだそうだ。だから落雷はプラスの極に落ちてくるのが道理だという。

北陸女の松代の肌は白い。そして、もちろん滑らかだった。向きあうその玉肌に豊満な乳房あった。松代も玉千代のなすままに着ていたものを肩からすべらせた。柔肌の弁財天をいま懐に抱いているのはまぎれもない玉千代だった。松代は心得ていて、すべてを優美に導いていた。

「玉千代、男と女はね、こうして結ばれるものよ、無理をしてはだめなの、親方ともそうだったけど、あなたも同じ、これでいいのよ、こうなる予感はずっと前からあったの」

「お上さん、ボクだって……」

「いいのよ、わかっているんだから、安心をおし、それより相撲取りなんだからボクはおよしな」

「……」

「玉千代、それよりも今夜は、お前の若さを全部、一人占めさせておくれ、いいね」

ふと、松代はこの若い、まだ多く未熟をどこかに残す、

それだけにみずみずしいものへの本音の部分を吐いた。力士としては未完成かも知れないが、玉千代はダビデのように逞しい肉体をすでにもっていた。一糸もまとわぬあの惚れぼれするような肉体を現実に独占したことで、歓喜で肌の染まる自分がわかった。博物館でしか見た覚えのないあのダビデはいま生身を委ねて、彼女の手中にあった。スタンドの微光のなかに二人は息づき、甘美に酔い痴れ、たがいをたしかめあい、やがて、昂まりを結びあう行為に達したようだ。

……

男女の間のことは人生にとって予測を許さぬ迷い路のように行く手をふさぐものらしい、迷いこんだあげく、これを過ちとしてしか考えられないとき、それは（不倫）として後指をさされる。しかし、いまの二人に悔いがあってはならない。悔いを残すようなら結ばれないほうがいい。

（私は後悔なぞしない。本気なんだから）

と松代はとくに心に叫ぶものがあった。まして、ダビデの玉千代には罪科のありようもないと思う。

〔本日は都合により
臨時休ませていただきます　店主〕

と、あまり上手とは思えない字の貼紙は朝からで、ちゃんこの店「大平戸」はこの日、戸締をしたままであった。松代は玉千代の卒業式に親代りの出席をしたのだった。式後には謝恩会もあることだったから、着飾って出かけていった。

（今日は一日あの子のために）

という思いが松代を占めていた。力士中学生は一人だけで、玉千代が衆目にさられる、親元を離れ、たった一人で迎える卒業式なのだ。ことさら場所中のことでもあり、大木戸のいないこの際、祝福をしてやれるものは松代しかいなかったのだ。

大阪の春場所はそれから四日後、二十四日が楽日で十四勝一敗で横綱玉の海が五度目の優勝を飾った。千秋楽には大鵬を破り、新旧の交代を鮮明にする優勝だった。片男波と親しい大木戸は自分の部屋から優勝力士を出したように、声をはずませて電話をかけてきた。

「うちの玉はどうしている、シマが優勝したぞ、アレもこれからが正念場だ、よく言っておけ」

（シマ）は横綱の前名玉乃島を親方たちが愛称にして呼んでいるものだった。大木戸は留守の玉千代にまだ大きく期待をかけている。義務教育を了えた玉千代をすぐにでも巡業地に呼び寄せたいらしい口振りを松代が体よく遮った。すこしはあの子にもゆっくりさせておあげ、店の方だってあるし、というものだった。

「そうか、じゃあ、横浜あたりの近まに行ってからに

するか」
「そうしてやって、おねがい」
電話の向うのダミ声にかぶせるように松代は言った。
電話が切れてから、いずれパートでも雇わなければと思った。横浜の興業は月変りの、たしか四月十日だったと日程の覚えがあった。

徳俵を入れて二十俵、直径四メートル五五センチの円の中に相撲人生のすべてがあり、そしてすべてが懸けられる。〃相撲技の角逐はこの円の中に行われ、円を利用することで無限である〃と、名解説者だった蔭平梅吉の玉の海さんは言われたことがある。
（バケツの中をカニがごそごそ這っているような相撲だ）
同じ玉の海さんはユーモアを交え、痛烈な酷評を下す人でもあった。〃本場所は稽古場のごとく、稽古場は本場所のごとくありたい〃無敵の六十九連勝記録を残した双葉山は無口を知られているが、厳しい練磨の道を説いて、こんな言葉を残している。安芸の海の内掛けに敗れてからの双葉山は掛けられた方の足の力をスーットと抜いてしまうことで、相手の技を巧みにそらすようになったといわれる。
玉千代が力士としてこういうことを悟ろうとするにはあまりにも遠すぎる道のりが行く手に横たわっている。
幕下に達しない、まだ本当の力士と言えない力士であった。人生のことはなおさらなのだ。足の力をスーッと抜くなぞの巧技はとうてい望めない。
「玉千代、堪忍ね、親方は十日には横浜興業だし、それまでになるわね……、あんたもいよいよ巡業、しっかりね」
もののはずみとは言わせない、あれからの耽溺の中、玉千代は未熟のうちにも男の目覚めを育てている。
「わかってますよ、だけどそれでいいのかなぁ」
「それでって、わたしはいいのよ」
「そんなもんかなぁ、わからない」
松代は松代でもちろん、すべては火遊びだったとは思っていない。
（私は後悔なぞしない。本気なんだから）
というあの思いは少しも変っていない。むしろ、いっそう熱く炎をつのらせていた。そして、これは人気稼業の世界にありがちな浮名に類するものとは違う。松代はそれをうまく組み立てて言い表わせないが、理性を押し流してしまった得体の知れないマグマの噴き出すまま、まかせて身を焦がしたいきさつがあるだけだ。ただ（本気）としか言いようがない。
しかし、いまは玉千代の言葉にはたじろぎを覚えさせる響きを初めて感じとった。この愛憎の底知れぬ傷口に気付いた。そうとなればなったで、なおさら年嵩の女と

しては年下の男への可愛さをつのらせる逆の心理も働くのだった。
五月の夏場所はふた開け五日目に横綱大鵬が二敗目を貴の花に喫し引退した。双葉山の再来と言われる勝率をあげ、上り坂の横綱玉の海が十月思わぬ急逝をした。わずか二十七歳であった。
「片男波さんが気の毒でなぁ、シマちゃんどうして逝ったか、死ぬはずのない盲腸ぐらいで、やはり体に相当無理があったんだな」
「でしょうねー、こんどは九州場所、あの親方のご当地なのにね」
あれから、もう半年ほど経っている。大木戸は忙しくしていてなにも気づいてはいないようだ。玉千代は五月に七戦全勝を飾っている。
「できすぎだな、ま、よくやった、これで欲が出ればいい」
松代はひょっとしたらこれは二人力かも知れないと考えた。
（いい気におなりでないよ）
楽日の祝勝会の日、姿見の前で少しシナをつくりながらそう思ったことだ。
「お上さん、めっきり磨きがかかって、親方も両手に花じゃあ、ご満悦だねえ」
後援者の何気なしの一言があった。不振の木戸山や若木戸は隅にかくれて、玉千代がチャホヤされていた。勝負の世界は勝たなければ脚光を得られない。たかが序二段優勝ぐらいと思っても、部屋の活気が違ってくる。
七月名古屋は三段目中軸、ここで四勝して、九月の東京は筆頭近く進んだが、三勝して四連敗、負け越している。五年三十場所、幕下に達しなければならない内規は厳しく容易ではない。
九州の場所は昭和三十二年、本場所に格づけされた初の優勝を玉乃海の片男波さんが全勝で飾った、言わばゲンの良い場所だ。この時の黄金の締込みを締めた颯爽とした勇姿は今も語りぐさに残る。相撲好きの土地がら博多の街は相撲人気に賑うのだった。
大木戸にとっても九州はご当地であった。場所の宿舎は西新町百道、二子山さんの平戸屋に近い設備屋、いつも弟子数が少ないので片男波さんともやいであった。
「親方、お上さんが場所に来てるってほんとですか」
木戸山からはこれは思いがけない話であった。
「なにをこきゃがる、冗談言ってる場合じゃなかろ、お前、また星勘定が危ないじゃないか、ケツ叩くぞ」
「へぇ、ばってん、お上さんを見た、いうもんがありますばい」

とってつけたような土地言葉も賢しらなのを、大木戸はまともにせず一笑に付した。

しかし、そこはやはり、

「はて」

と思うフシもあり、電話を入れてみた。話中だった。二度ほどダイヤルを回してみて止めにした。よその親方なみに博多へ呼んでしんねこの時間があっても良いと思いながら、ついつい実現していなかった。大木戸は幾分心に責めるものもあって、気になったのだった。

宿舎のある百道からは中心の街区の夜空が明明として望める。博多は大都市である。その雑踏の中を、ましてそれが昼間のことであれば、一人の女が人目を忍ぶ、忍ばないにかかわらず歩いていることがあったとして、それは季節の木枯しに舞うひとひらの木の葉のようなものだ。夏ならば海水浴客に賑う百道浜もいまは暗く、内湾の穏やかな波音が夜闇を事もなげうち寄せているだけだった。

玉千代の胸の内に閃くような予感があった。姿を見ることのできない応援者の目が自分の相撲を見ている。といっても、場所のスポーツセンターで下位力士が取り組む時間は客足もまばらで、すぐにその人を彼ならそれと気づくはずだった。

木戸山の言っていたことは空耳かもしれないのだが、土俵の上の勝負には勇気を与えられた。

（おれは堕落している、大の里に申し訳ない）

と一方では思いつつ、なぜか久し振りに心気の充実する思いがあり、白星が続いていた。この分なら幕下昇進も明るい見通しがもてそうであった。

（アト一場所のがんばりだ、ガンバラナクッチャ）

と、われからを玉千代は励ましたことだ。

松代がはたして博多に来ていたものか、ついにさしあたり謎に終った。飛行機のある世の中なのだ、本当のことだったとも言えるし、嘘だったとも言いきれないのだった。

だが、実のところ、松代は博多の土を踏んでいた。エアポートからまっすぐ二日市温泉に入り、大観荘に一泊していた。ここからは博多へ出やすく、相撲部屋の宿舎もなかった。急行で市心の天神町に着けばきわめて近く場所を覗くことができるはずだった。自分でも驚くほどの大胆さだった。

「高砂家」、「大和家」、「紀乃国家」といった相撲茶屋、とくにこの三つは江戸時代からという由緒のものがサービス会社と名を変え、一番から二十の通し番号の案内所になったのは昭和三十二年からだ。たっつけ袴の出方衆を案内人と呼ぶようになった。しかし、内実は少しも変っていない、たとえば、二番さんというより紀乃国家さんで通りの良い客筋はまだ多く、桟敷へ運ばれる

小物は屋号をそのままという案配だった。

ところで、九州の場所だけは興業形態が違うので松代は勝手が悪い。サービス会社の手が入っていないのだ。観戦するにしても便宜をあてにできる伝手がないのだった。

「おや、大木戸の、あんた来ていたの、そういえば親方九州だったね」

「しーっ、来ていてもうちのには内緒だから」

「おや、どういうこと、それ」

相手はやはり相撲部屋の顔見知りのお上だった。場所の様子を伺う近間でバッタリ、やはり危ない橋だった。

「だれか関取さんとワケでもあって、なにじゃないの、いいのよあんたなんか若いんだから、あたしだって野暮なことは言わないよ、安心をおしよ」

そのまま別れてきたが、やはりまずい経緯だった。

玉千代の土俵を一目という思いは遂げられることではなかった。女盛りを駆り立てたものへ冷静になって分別を取り戻して見ると、さすがにおぞましさを覚えた。

玉千代は九州を五勝して二点勝越しの成績で巡業に参加している。十二月一日の久留米を振り出しに、宇佐、延岡、宮崎、志布志、加治木、川辺、鹿児島……という日程で帰京は年の瀬になる。

ちゃんこの店「大平戸」のカウンターに松代は頬杖をついてボンヤリしていた。土俵に賭けた男たちのドラマから埒外に置き去られたような自分の堪えがたい寂しさ、といったような感傷が胸に這いのぼっている様子であった。客足のひけた夜のしじまを、この空しさはどうだろう。やりきれない思いなのだ。

フーッと溜息を吐いた。

松代の愛は決して一過性の症候とは言えないものだった。それは自身の想いにも告白されているように、本気であり、また本物であったことを否定することはできないように思われる。

しかし、いまは、

（どうやら、女のわたしのドラマは終ったようだ）

と、思えるのだった。

力士には耳殻、あるいは耳介と呼ぶものの変形する例が多い。耳血腫もしくは軟骨膜炎による変形で、職業病とも言えるものだ。右四つのものは右、左四つならば左にこの変形は多く見られる。彼らの激しい練磨からこの奇形はもたらされる。相手の肩口に顔を埋め、引き付け、顎を上げまいとする修練を反復するからだ。

また、頭髪についてもその力士の取り口によっては影響が考えられるという。頭を相手の胸につける、額を切るほど相手の胸板に頭で激しくブチ当っていくから、前髪が擦り切れるといわれる。しかし、この頭髪の場合は

文章少なく、博多に来たストーリーの中に描きたい

多分に遺伝性を免れないであろう。耳介の変形は力士の勲章に値するものとも言えそうだが、結髪を一つの伝統とし、形式美とするこの相撲社会にあって、頭髪の薄いものは自ら苦境に立たねばならないことは容易に推察できることのようだ。玉千代は若くしてそのような運命を不幸にも担っていた。幕下二十三枚目をピークにして、未完のままついに廃業を決意したのだった。

陸奥弘前、城のある公園北東に亀甲町というなにやら縁起も良さそうな町があった。ことさらそれを選んでかどうか、とある横丁、それはあの「大平戸」の店構えに酷似する風情で、ちゃんこ店「大の里」という新店を開いた男があった。

まだ若そうだがすっかり前額の禿げ上った主は元力士らしいと、一見してわかる体つきであった。

「親爺さん、四股名はなんといったの、まさか大の里ってことはないだろ」

「へ、すっかり昔のことで……、旦那、東京ですか、どうもそうらしいと思った、懐かしいねぇ、ご贔負に願いますよ」

「暖簾は玉千代さんへとあるじゃない、ま、いいやな、それよりも贈り主の松代さんはあんたのなになのさ、れこかい」

「いえね、れこなんて滅相もない、しかし、まあお察しのようなもんで、へ、そんなもんでしたな」

主はそんな風に言い、心なしか顔を赤らめる様子に見えた。

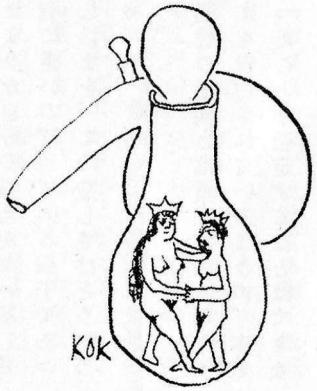
「あっしの弁天さまですよ、いや、菩薩さんかもね、童貞を捧げた相手ですよ」

「へー、今時珍しいねぇ、美談だねぇ、恐れ入ったねぇ」

「へぇ、その通りなんで、美談なんですよ、美談ですともね」

遠い思いを追う目付きをしてこの幕下に終った元力士は言った。

（六一・一・二九）



花粉は路地の風に乗って

山口健二

路地の風は涼しいと云われる。冷蔵庫など買えない井中加和寿氏は、その日の夕飯の残りものをめしと煮物を入れ物に分けて玄関の軒につるす。それから、風の入る窓も戸もあけはなして、猿股一ッになり、机がわりの丸卓子に胡座をかいて、日本語を英語になおす作業をしていた。その作業は隣りの電気学校のセンセが結婚式をやる友人に頼まれて井中氏のところへ持ち込んだもので、何でも米国人が大勢来るので、その花むこさんは英語で一席挨拶をしたいと云うのである。どうせ日本人の英語演説だ。下手くそだってかれらは社交的エチケットにたけているから神妙にきいているだろう。氏は気軽に引受けたのだ。

〃二阡円ぐらいとってやろうか〃氏は腹の中で礼金を勘定していた。昼過ぎには税務署と称する男が玄関に現われて言ったのだ。

「井中さん、あの件の税金、何とか払って下さいよ、帳簿の始末がつかないで困るんですよ」

〃あんたは帳簿の始末がつかないで困るぐらいの所だろ、こっちは大変なんだぞ〃

「金ありませんよ、何でも持ってッていいよ」

井中氏は胡座をかきなおして、胸を張った。かれは学校の給料だけでは女は勿論、酒だって呑めないので、大学受験予備校と云う所で、こっそり金を稼いで来た。五六年になる。大学教授と云う肩書きのあるセンセは千円の時給で井中氏のように肩書きがないセンセは六百円である。そのアルバイト収入に対する税金払えと云うのである。この男の来訪は三度目だった。〃何んでも持ってッて呉れよ〃と胸張ってみても猿股一ッの井中氏から剥ぎとれるものはなさそうだ。玄関の軒灯の下に風呂敷包みがブラブラ路地の風にゆれている。その日の昼めしの残り物である。氏の目の前の木箱の上にラジオが乗っている。金目のものと云えばその位なものだろう。隣の電

気学校のセンセは先日テレビを買った。まち角の電気器具店では店の前にテレビを据えて客よせしていた。人の群れがそれにたかってニュースなどに吸いつけられている。そんな頃であった。三度目の税務署の来訪をかわした氏の気持ちは、それでも矢張り暗い。氏は兵役・教育・税金は国民の三大義務だと社会学と云う講義で教えられ、兵役にも服して、戦争にも行って来た。命を拾ってメリケン兵が上陸して来てからは普段英語の小説読んでいたアヤシイ少尉だと云うので連隊の通弁にさせられ、散々メリケンの兵隊に馬鹿にされた屈辱も経験している。そして今は教員である。税金踏み倒すことはツイに出来ないと云うことも知っている。その受験予備校の事務員さんが「センセ、あなたの収入、年数かけて計算すると十万は税金かけられますよ。大体税務署は時効になる前狙って来ますからネ」と言ったことも胸を張ってみても心の重しになって残っている。〃何でも持ってって呉れよ〃と不貞腐れてみても、崩れかけた長押にわたした板の上に、鼠の小便で色がわりした百冊ばかりの本が横たわっているだけだ。隣りの六畳の部屋には部屋の三分の一を占領して木製のベッドが横たわっている。丸テーブルのある四畳半との境の障子は、家が傾むいて動かなくなったので、そのかわりにカーテンでし切ってある。この六畳の部屋は氏の寝室であり、女の子供の勉強机が二脚あり、更にその奥の変形した二畳程の板張りの部屋は男の子の勉強部屋になっていて、すぐ汲み取り式の便所につながっている。大・小共通である。便所の壷には永年の使用の結果でひび割れが入っているから排地した水分は容赦なくあたりの土に染み込んで、雨の日がつづくと窒息する程の臭気が立ちこめる。六畳の部屋の大形木製ベッドは氏が奮発して古道具屋から買い入れた代物で、たったひとつの洋式家具で、氏が英語屋であることを辛ろうじて示しており、且つは〃せめて寝ている間だけでも安楽であり度い〃果敢ない願いがこめられている。

小紫色の夕闇が、あけ放した戸や窓から這いこんで来て、氏を包んでいた。初夏の風が軒灯からつるした風呂敷包みを音のない風鈴のようにブラブラゆすった。

「こちら様、英語のセンセですか」

夕やみの中で項垂れ気味に沈んでいる氏をハッとさせる女の声が玄関の土間にひびいた。張りのある女の声と一緒に真白いスーツを涼しげに着た女が、氏から三尺程の距離をおいてすッと立っていた。それは余りに突然で足音もなかったから、氏には路地の風の霊が女の姿になって現われたかに思われた。しかも女は花束抱えている。

「ハイ、ハイ英語の教員ですが……」

氏は夢心地で〃何のご用ですか〃という事務的な言葉を省略した。学校の生徒のつながりではなさそうだ。そう云う筋なら〃こちら様英語のセンセですか〃と云う筈はない。氏の目は女の抱えた花束に集中している。〃この花束オレにくれるんかな〃氏には未だ花束を女から贈られた経験がない。だから思いはホンのわずかな間、古い言葉で云えばチヂに乱れていた。でも氏も取り乱す年ではない。猿股一ッであることは少し如何しいが、ままよと立ち上って六十触光の裸電灯のスイッチをひねって土間口に正坐した。目はまだ花束にそそがれたままである。〃何かのまちがいじゃないかナ〃

「アノ……そこの角の花屋さんでうかがったんですが……こちら様英語のセンセでございましょう」

女は確かめる口調になって言った。英語のセンセなら猿股一ッで女の目の前に立って、裸電灯にスイッチ入れるなんて平気でやらないだろう。それに丸テーブルで何かやっている。部屋は殺風景でテレビがあるだけだ。ピアノ位なけりゃ英語のセンセに相応しくないと女は考えているようである。

「アノ……あたし英語を正しく正式に教えて頂きたいと思って……」

はは、それで花束をオレに贈り物にしようと云うコンタンか、シャレてるぞ、だが何だって英語を正しく正式にやりたいんだろう。一体正しい正式の英語ってどんな英語だい。氏は腹の中で呟いた。

「アノ……あたし、あそこの角の花屋さんでうかがったんですが……オハナの講習会に週一度出てるんです。そのお席で、みなさんにうかがったら、こちら様がセンセで英語大変お上手だって……」

〃何だ、花束は講習会の教材か、それにしてもオレが英語が大変うまいなんてスイセンしてくれたのは誰かな〃氏の頭の中が忙しく回転してそれらしい心当りを探していた。氏の家には電話がないから近処の魚屋か酒屋で借りる。そうだ、ついこないだ酒屋で電話借りた時、相手が氏の英語の会話の生徒である大和銀行の外国部長だから気取って英語でやったッケ。あの酒屋の女房は元ダンサーでオレの電話が終ったとき「センセあたしいろんな日本人の喋る英語聞いたけど、センセみたいリューチョウな英語初めてだワ」ッてお世辞言いやがったッケ。ダンサー上りの別品にお世辞言われて満更じゃなかったがあの女、オハナの講習に出てるんかな。

「正式の英語ッて……あなたは今迄どんな英語ベンキョウして来たんですか。お仕事は？学校は高校ぐらいまで……」

氏は矢張りこの際きいておく必要のある質問をした。

「あたし……進駐軍でタイピストしてるんです。アメリカ兵との会話はきまった文句だけですし……きくのは解るんですけど、こみ入ったことが云えないんで……少し勉強やり直したいと思って……」

「わたしのとこへ来るとすると何時頃になりますか。

本当は毎日がいいんだけど、わたしの方にも都合ありますからね」

氏は花束から目をはなして女の顔を見た。かれは若い時から人相とか骨相とか手相とか云うものに興味を持っていて、〃オレは教員なんかやるよりは会社の人事課あたりにいりゃ凄腕なんだけれどナ〃と思う程人間判定に自信を持っている。女は眼鏡をかけてインテリ風でその眼鏡の中で目がキラキラ光っている。そのキラキラしているところにちらりと狂気の相を見た。少し張り気味の顎は精力的な性的かたむきを見せている。色は白く、口許が赤くヒラヒラしているのは言語性の発達を示しているのだ。年も三十を越そうとしているナ。〃オレは好色漢だぞ〃と自信を持っている井中氏にはもってこいの女の来訪者である。花束は貰わなくてもいい。此処暫らくは女房も子供たちも実家へ行って留守だ。女房は井中氏とせまいこの家に鼻つき合せて暮すのはツライことだと思っているし、子供ごと実家へ行っていると暮しの助けにもなる。実家は大百姓だから子供たちを食はすのには苦労もなかろうし、田圃、畑は子供のいい遊び場だし、同じ年頃の子供がワンサといる。夏が来ると幼稚園を早目に休ませて田舎へ一ケ月ぐらい行っている。絶望的に貧乏な井中加和寿氏は女房が実家へ行って長くなっても一向苦にならない。稼いだ金は月給以外は酒と女に化ける。

次の日の夕方、その女は井中加和寿氏と丸卓子をはさんで坐っていた。二人の会話は英語でする約束だ。だから以下会話は英語なのだが、この小篇を読んでくれる人々のために、男女の言葉のちがいをあらわさない生硬な少々文語調にした日本語でかく、例えば、自分を云う時には〃私〃に統一し、相手を呼ぶときは〃お前〃に統一する。

井中加和寿氏が英語の教員になったワケは氏が戦争に負けて太平洋の真中の島から帰った時は、東京は焼野が原で、まともな企業は仕事にならず、従って三十を越していた氏に、碌な職業はなかった。学校は新制と云うことで英語の教員は狩り集められていた。氏は島では上陸して来たアメリカ軍との交渉が必要で連隊の通弁役をさせられ、アメリカ兵のやること、云うことが少し解るだけ屈辱感はそれだけ深く、二度とアメリカ兵の中では働くまいと心の中できめていたことが、英語の教員という職業をしぶしぶ選んだ理由になる。だからかれの発音はメリケン風で、アメリカ兵の中でタイピストしているというその女にはするりと通じる様であった。

「失敬であるが、お前はいく才であるか、独身であるか、それは私の重大な関心事である」

「私は独身である。でもさいきんしきりに結婚したい

と思っている。この次来る時、私の写真を持って来るから、いい相手があったら見つけて欲しい」

「年はいくつか」

「三十三になる。日本流に言うと女のヤク年ということになる」

女は厄年なんて云う日本語を結構ジ・ワーストイヤーフォアウキメンなんて英語にしてくる。可成り強な英語力であるナと氏は睨んだ。〃ヒョットするとオレのまちがい英語を見つけるかも知れん、ご用心ご用心〃

「オ前の家族構成を語れ、私も自分の身辺をオ前に告白するであろう。お互にウソやいつわりのないことがこれからの二人の仲をなめらかにし、引いては英語勉強の効果を上げるために有効であると考える」

「然り、私も同じ考えを持っている。私はウソはきらいである。私は今兄と同居している。兄は芸術大学の音楽科を出て、作曲家を志ざしている。私とは余り似ない程立派な兄である」

「その兄は本当の兄であるのか、それは私の深く心配する所である」

「私は一度失神してこの兄に負さって病院に運ばれたことがある」

「いや私のきき度いのは、その兄と同棲していて、兄妹以上の関係はないかということである。世の中にはよくあることで、オ前は私に結婚したいと語ったが、そのことと兄との関係は大丈夫であるか」

大体日本語では、相手の感情を押しはかって、いきなり余りつっこんだことは言えないし聞けないものであるが、こと英語となるとそう云う心の壁が感じられなくなるから妙だ。妙だと云うより英米人の心使いの仕方を井中氏が充分心得ていないと言うことも出来る。英米人はかれらしくあたりを憚る心使いが、社交のエチケットという形に昇華している。その女に対するような露骨な質問は井中氏だって英米人に向ってはするまい。

一度失神して兄に負んぶして病院へ運ばれたことがあるという問わず語りの告白は、井中氏が昨夜初対面で、その目にキラキラ光る狂気の象ありと観たこととかかわりあいがありそうだ。ご用心ご用心。でも女が色ッぽく見える時は、目がさめたばッかりで、未だ正気をとり戻さない時とか、段々正気から狂気に移ってゆく過程にあると云うことは井中氏の女観察の基本になっている。

「では今度はオ前の番である。オ前の家族構成、オ前の年令、職業について私は知りたい」女は言った。

「私は妻と子供三人と此処に住んでいる。目下妻と子供は、田舎即ちかの女の親の家へ行っている。まだ当分は向うにとどまっているであろう。だから私は独身者と同じ状態にあって、イッソ気楽である。年は三十八才、職業は私立の中学校・高等学校の英語の教員であるが、いつも内心教員であることを恥じている。かのバナード

・ショウと云うイギリス国の小説家が言ったではないか〃出来る者はやる。出来ない者は教える〃と私は何だか英語がロクに出来ないから教えているのだと思えて口惜しく感じている」

「それでは何故英語の教員を止めないのであるか、他に生活を立ててゆく得意な技術を持っていないのか」

「英語の教員を止めないのは、楽に一定の金を月々貰えるからである。だが一ッの学校では酒も呑めない程の月給であるから、銀行を一ッと大学受験予備校一ッでサイドジョブをしている。オ前と英語で相手をすることも私の収入を助けることになる」

井中氏は此の女とまだ月謝の額をきめていない。此処らでそのことを持ち出す伏線をしいた。出来れば前金がいい。そうでないと途中でポッキリ来なくなる場合がある。

女は氏の伏線を無視して更に意地の悪い質問をした。

「それでも英語を教えることにはかわりあるまい。私の言うのは英語を教える以外の技術と云うことである」

「ないことはない。私は人相骨相手相や易を見て人の運命を判定することが出来る。特に普通の易者のやらない足紋を見ることを最も得意としている」

「足紋とは何か、如何なることをするのか」

「足紋というのは手相のような見方を足の紋に応用するのである。これは手相より的中率が高い」

「私の運勢を見て欲しい。足紋はどこにあるのか、私は今自分の運命のことになやんでいる」

「そこにある。足を出しなさい」

井中氏は英語で自分の特技について語る晴ればれしさを感じていた。相手は若い女である。その上唇は赤くヒラヒラと好色を帯びて動いている。足紋判定に足の裏を見せなさいと云う要求だって心に何のわだかまりも感ぜずに平然と言える。この分でいけば足の奥だって見せろと平気で云える。かの女も平然と氏の要求に応じそうな気配である。初夏の路地の風は、氏の裸の上半身をなでさすっている。

「キタナイ足で私は恥ずかしい」

「足の裏は汚れ易い。オ前はそんなことを恥じる必要はない」

氏は投げ出して来た女の足の裏を観るために丸卓子を片寄せてにじり寄った。そして足をつまみ上げてタンネンに足紋を見た。時々鼻を近づけて匂いをかいだ。

「センセ、くすぐったいワ、ヤダー」

女は日本語に居なおって、からだをねじって横たおしにころがった。この動作はくッぐッたくてたまらないと語っていると同時に、もうどうでもして頂戴という挑発的な仕草でもあった。井中氏は教員であるから用心深い。挑戦にいきなり応ずることにはためらいがある。

「センセ、お手洗いどこ」

女は完全に日本語に居直っていた。氏は、〃今日は一日晴れていたから便所の臭気もそれ程ひどくはなかろう、ままよ〃と黙って指先で便所の方向を指さしていた。床下でツルツルと名も知れない虫が泣いた。初夏であるが床下にはもう秋がしのび込んでいるらしい。今迄もないていたのであろうが、若い女と英語で喋り合う気持よさに酔っていた氏の耳には入らなかったのであろう。

二日間をおいた女を氏は〃やっぱり出来心の冷やかしか〃と、それでも夕方は丸卓子に頬杖ついてハナエ・ハナムラと名乗った女を待つ心持になっていた。

「グッイーヴニング・先日はありがとう。今夜は約束の写真を持って来た。オ前の家族は未だ留守であるか、私はオ前の家族がづッと留守であって欲しいと思いながら来た」

「まだまだ帰って来ぬであろう。私もそれをのぞんでいる」

お互に怪しからぬ挨拶である。写真を見て井中氏は心中〃こりゃ実物の方が、乙にすました写真よりいいワイ色ッぽくて〃と思いながら無雑作にラジオの箱の上にポイと投げるように置いた。正式の英語を習い度いと云う女がいきなり自分の結婚の方も頼み度いと云う、これは可成り厚かましい頼みである。その上女は言った。

「今夜は、オ前との英語の勉強は止めて日本語で話し合いたい。日本語の方が思うことをはっきり云えるように思える。この私の考えについてオ前の考えをききたい」

〃何んだ正・し・い・正・式の英語のベンキョウは止めたのか。一体日本語で何をオレに物語ろうと言うのか〃井中氏は躊いた気分になりながら、それでも素知らぬ顔で言った。

「O・K・アズユープリーズ、では此処らで日本語に切りかえよう」

「ねえセンセ、あたし淋しいのョ、淋しいッて言うより……不安なんかな。自分が段々変になっていく予感がするのよ。あたしの母のこと……本当言おうか。井戸に入って自殺したのよ、あたしが未だ子供のころ……」

矢ッ張りそうか、この女の目のキラキラが気にかかったが……氏はなぐさめを言う日本語を探していた。日本語はむずかしい。英語ならアイフィールリグレットフォユーッヒヤユアマダーズデスで済むことだ。

「そんなこと気にすることないや、誰だって死ぬんだし、死ぬとき意識が消えてゆく頃は誰だって気が変になるもんなんですよ。気にしない、気にしない」

「あたし今晩特別淋しいワ、兄と一緒にいてもいつも見張られてる気がして……」

「ハナムラさん、呑みに行こう、気晴らしになる。それに此処はあんたの淋しい気分を聞かして貰うのにふさわしくない」

淋しい気分の話などしらふで聞けるか。氏は女を連れて、土地感のある安食堂に入った。安食堂風の呑み屋は絶望的に貧乏な井中氏に安らぎをあたえてくれる。その店のテーブルは宵の口もう大部分客で占領されていて、中に可成り酔った女客もいて白い目をむいてわけのわからぬことを口走っていた。

「あたしもあんな風になりそうだワ」ハナエ・ハナムラは言った。

「どうしてそんなに心配するんだ。オフクロ様が自殺したなんて世間にやザラにあることだぜ。その子供たちだって世間並みにちゃんと暮していける世の中だぜ。きみは余り上をのぞむからシンが疲れるんだヨ。オハナだって、正式の英語だって暇がありすぎるんだナ」

井中氏は批評的なことを言って盛に女に酒をすすめる。女もよく呑んだ。酒に強いことは湯呑みコップに五杯も呑んでも目のキラキラにも顔色にも変りがない。氏の方が四、五杯でぐでんぐでんの体たらくになっていた。酔う程に氏の口からは日本語のかわりに、リュウチョウな英語が飛び出す。

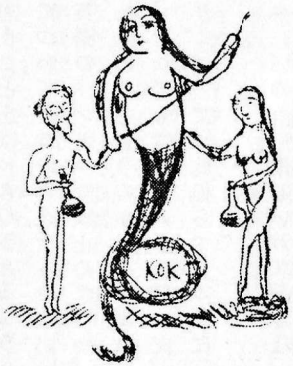
「英語やめようヨ、センセ、英語のわかる人にきかれたらあたしたちの関係うたがわれるわヨ」

「いいじゃないか。関係うたがわれたッて、うたがわれる程のカンケイじゃねえや」

女の肩に助けられて路地の奥の住家にたどりついた氏は一直線に六畳の部屋の三分の一を占める、かれの家で唯一の洋式家具である木製ベッドに女を拗じこんだ。女は無抵抗にベッドに上ったが飛び下りて言った。

「お手洗いに行ってくるわ」

氏は朦朧となった頭で、しゃがんでいる女の姿勢を描いていた。戻って来たら下着を一枚一枚ゆっくり脱がせよう。そして両足を思う存分にひろげさせて……と、女とたわむれる幻想の世界の中にいた。そこには恐れも、迷いも、うたがいも入りこむすき間はない。ただの好色な思いを越えたすき通った甘美な世界であった。破れたベッドわきの雨戸は明け放されている。路地裏の初夏の風が名も知れぬ花の花粉を、かすかに運びこんで来る気配であった。



連載

男たちの藩（四）

第二章　春の土

三戸岡　道夫

〔四〕

高柳玄宰はゆっくりした手つきで羽織に香をたきしめた。いつも外出する時のたしなみであり、高柳の贅沢であった。倹約令などは無視している。高価な香の匂りは羽織の内側だけでなく、部屋の中にも馥郁とただよった。供を一人だけつれ、深編笠で顔をかくした。人に知られてまずいわけではないが、しかし顔を見られない方がいい。

侍屋敷を抜けて菊掛川を渡り、町並に入ると、川に沿って東に歩いた。その一角が川住町といって、料亭街である。その中でも風格のある一柳という料亭に入った。話は事前に通っており、髷をつややかに結った主人が走って出迎え、長い廊下を奥の離れ座敷へと案内した。

「来ておるか…？」

「はい、すこし前から……」

二人は小声ですぐ言葉を交わした。

しかし座敷の少し手前まで来ると、すぐには入らずに

「……」

「……」

二人は視線だけで頷きあうと、高柳は、とある小さい板戸をあけて、その中に消えた。主人はそのまま、いま来た方角に戻った。

高柳がひそかに入ったのは、離れ座敷の裏側にしつらえた小部屋であった。違い棚の一箇所に見えないように仕掛けがしてあって、その裏側から覗くと離れ座敷の中が見えるようになっているのであった。

高柳は暗がりの中にかがみこみ、小さな穴に右眼をあてた。かしこまって坐っている男の姿が眼にとびこんできた。

年の頃なら四十才前後か。道を歩きながら想像していたよりも、まともな男のように思えた。だがよく観察し

ていると、一見武士の姿はしているものの、どんな商売をやっているのか正体不明のところがある。しかし、なにせ六千万両（約三兆円）という厖大で正体不明な金の話を持って廻っている男である。少しはうろんなところがあってもおかしくはないと高柳は思い直した。

その男の名前は笠倉彦五郎。江戸の両替商米島屋に現われてから一年以上たつ。彦五郎は最初の狙い通りに美春藩の国元筆頭家老高柳玄宰に面会するまでに、やっと漕ぎつけたのであった。

ということは高柳玄宰が笠倉彦五郎なる者に逢ってもよいと思うようになるまでに、一年間という時間が必要だったということにもなる。この一年間をふり返ってみると、藩主の交代にともなう財政再建計画、大倹約令の発令、新藩主修身の国元入り、厖大な植樹計画…と目まぐるしい動きがあり、その間を縫って彦五郎のアプローチが絶え間なくつづいていたのである。彦五郎からの手紙が重なるにつれて、話の内容が太閤資金であること、そして江戸の米島屋からの紹介を受けていることなどもわかってきた。

高柳は時々ふーっと

「ああ、金がほしい」

と思った。金があれば何でもできる。何でも解決する。もしもここに二十万両の金があれば、美春藩の借金は直ちに返済できるし、毎年の財政赤字も解消する。けちけちした倹約令などもやらなくてすむ。荒地を開墾したり、二百万本もの茶の木の苗を植えなくてもよい。そして藩の実権はふたたび高柳玄宰の手に戻ってくるのである。金があれば長尾真十郎のような足軽ふぜいが家老になるようなこともなかったし、また若い藩主が他から養子に入ってくることもなかったであろう。先代光寧さまが従来通り藩主の座に坐り、高柳が実権を握っていられたのに…。金だ。金だ。すべてが金だ…。

そう思ったとき、高柳のなかで急に大きく太閤資金がクローズアップしてきた。六千万両もの金がにわかに真実のように思われ、

「いま太閤資金を申し込んだら、ひょっとして借りられるかもしれない」

そして

「一千万両が無理ならその十分の一で結構だ。それが駄目なら、その半分の五十万両だっていい」

高柳は矢も楯もたまらなくなった。早く自分が借りなければ、別の人間が借りてしまうかもしれない。これまで引きのばしてきた一年という時間が、急に重大な損失のように思われた。

あの夜宗悦が帰ると、高柳は筆をとり彦五郎に返事を書いたのである。宛先は江戸は本郷、加賀藩邸内と聞いた。六助を呼び手紙を持たせて江戸に飛ばせると、無事に手紙は届いた。のみならず折返し返事も持って帰ってきた。高柳の指定する日に、指定する場所に行くというのである。それが今日なのであった。

高柳は節穴から熱心にその彦五郎という男を観察していた。そして六助が持ち帰った返事の中味を反芻していた。その文面には

私は加賀百万石前田利家の後裔に当り、現在の加賀藩の家老加賀谷兵庫は私の叔父に当る、そして幕府の先代老中の息子松平外記の奥方は私の姉に当る。

とその家系の立派さが書きつらねてあった。本当であろうか。こちらから聞きもしないのにわざわざ手紙に書いてよこすなど、宣伝臭が強すぎる。人をだますのによく使う手である。

しかし善意に解釈すれば、太閤資金を実現させたい熱心さ、自分を信用させたい一心が彦五郎をそうした行動に走らせたと言えないこともない。穴の奥からじっくり観察していると、それらしい品格が無くもないのである。色はややあさ黒いが、眼もとは涼やかで、鼻筋は高く通り、いわゆる殿様顔という奴である。

だがそれだけの家柄があるのなら、裏に廻った貸金の斡旋などをしていないで、もっとまともな仕事ができないものかという疑問も浮かんでくる。

だが、人は見ているだけではわからない。逢って話してみるのが一番てっとり早い。

高柳は暗い部屋を音のせぬように脱け出すと、いったん廊下に出た。わざと足音を予告するように荒げて廊下を歩き、座敷の障子をあけ、

「待たせたかのう」

彦五郎は畳に平伏して

「おはつにお目にかかります。笠倉彦五郎にございます」

高柳はその動作や言葉つきをよく観察しながら、床の間を背にして坐った。

「一献くみながら気楽にいこうかの」

金は欲しいが、話はまだ海のものとも山のものともわからない。最初からがっぷり組むのは危険である。いざという時の退却路も作っておく必要がある。そのためには酒を呑みながらがいい。そうしておけばいざという時に、あれは酒の上の話だったと逃げることもできる。

「それは私の方も願ってもないことで…」

彦五郎も如才なく調子を合わせると、そのタイミングをはかっていたかのように廊下の障子が開いて、酒肴の膳が運びこまれてきた。

「では、一杯…」

「頂戴いたします」

これから展開される話の先行きを、酒の味にさぐるよ

うに、二人は最初の一杯をのんだ。
「新しい殿様もお国入りされまして、いよいよ大変でございますな」
彦五郎は少し遠まわりに話を始めた。やんわりまず相手の反応を見ようというのである。
「さよう…、まあ、いろいろとな…」
高柳も酒を口に含みながら、程よく答えた。
彦五郎は美春藩の大倹約令、藩主修身のお国入り、植樹計画、それに最近の江戸と国許家老の微妙な変化など、驚くほどよく知っていた。そんなことをしばらく話してから彦五郎は
「そうそう、最初にお出ししなければならないものを、すっかり忘れておりました。米島さまからのお手紙でございます」
懐から袱紗に包んだ書状をとり出して高柳にさし出した。まぎれもなく米島屋善右衛門の直筆になる紹介状であった。高柳は最後の署名の筆跡を念を入れてもう一度眺めると、そのまま懐中の奥深くにしまった。
米島屋からはすでに十三万両（六十五億円）の金を借りている。そしてその借入れも限界だということも高柳は知っている。現に最近の米島屋には美春藩に対しての貸し渋りが目立っている。今年もまた米島屋から金を借りなければやっていけないだろうが、その金をもう米島屋は貸さないかもしれない。米島屋が彦五郎に紹介状を書いたのは、太閤資金を借りて来年の財政はそれで賄ってくれという謎かもしれないのだ。手紙を書いた米島屋の心を動きが高柳に伝わってくるようだった。

〔五〕

「さて、本題に入りまして、太閤資金のことでございますが…」
頃はよしと見ると、彦五郎は話を切り出した。
「だが大閤資金というのは本当にあるのかな」
最初わざと高柳は出鼻をくじくように言い、彦五郎の反応をためしてみた。しかし彦五郎もさる者
「太閤資金、あると言えばある、無いと言えば無い、まあそんなふうに言えましょうか。世の中には、ほら、そうしたものがあるではありませんか」
顔にうっすらと笑みを浮かべて、謎めいて答えた。今の段階では言いて妙というべきであろうか。「あると言えばある」というのは、うまく引っぱり出せば「ある」、「無いと言えば無い」というのは、引き出し方が下手ならば「無い」―そういう意味だろうと高柳は一人で解釈した。
彦五郎は話が極秘であるということを、あたりを警戒するしぐさで現わしながら、声をひそめて話しだした。
「太閤資金とは太閤秀吉が残した厖大な隠し金のことで、総額で六千万両（約三兆円）、五人組の組織のもと

に運用されております。その秘密組織が全国各地にあり、私が江戸における事務局長をしております。太閤資金は資金の性質上、個人や商人へは貸出をせず、各地の大名、小名に限って対象といたします。」
そこまで一気に喋ると、彦五郎は高柳の反応をうかがいながら
「さて、太閤資金の貸出方式には『天の味』と『地の味』の二通りがございまして……」
と説明をつづけ、
「私が美春藩におすすめしたいのは『天の味』でございます」
「まるで料理の献立のようだな」
「いえ、真面目な話でございます。天の味というのは、三十万石以上の大名を対象に貸出す大口貸出で、金額も六百万両（三千億円）までの貸出しができます。それ以下の大名に対しては地の味、二百万両どまりとなっております」
闇の世界に動く資金にもそうしたルールがあるのかと、高柳は次第に未知の世界への好奇心にとりつかれていった。
「でも、わが美春藩は二十万石じゃ。天の味の資格には欠ける」
「いえ、そこは私の力でなんとかいたします。それに美春藩は今でこそ二十万石ながら、その昔は百二十万石の大藩、十分に資格がございます」
なるほど。
「次に金額のことを申しあげますと、たとえば二百万両借りましても、実際に藩の手許に入る金はその半分の百万両だということでございます。だから、もしも正味で二百万両ほしいというのであれば、その倍の、四百万両を借りる手続をしなければなりません」
「……？」
高柳には彦五郎の言うことがすぐには理解できない。
「そのかわり、この天の味でございますと、藩に入った金は返済する必要がありません。つまり、貰ったのも同然…」
「そんな馬鹿な！」
「いえ、本当なのです。そのからくりを説明いたしましょう。たとえば四百万両借りたといたしましょう。半分の二百万両が藩の手に入ります。残り二百万両のうち、八十万両は元請けである五人組の調整料として天引きされます。そして残り百二十万両が借りた藩の名義で、三十年間、大阪のさる両替商に預け入れられます。その証書は五人組の手元に保管されますが、百二十万両の預金の利息ともども、三十年後には四百万両の倍以上の金額になります。借りた太閤資金はその金で返済すればいいわけですから、藩が借りた二百万両は結果的に返さなくてもいいという工合になるわけでございます」

何が何だか高柳にはよくわからない。もっとものような気もするし、目茶目茶な理論のようにも思える。果して信じていいものか、どうか。しかしともあれ、只で金がもらえるのである。もらい得である。それをおかしいと言ったり、いやだと言う方が、むしろおかしいのであろう。ダメモトという言葉がある。ダメでモトモト。話に乗って損ではないと高柳は判断した。巨額な金が眼の前に落ちてこようとしているのである。話に乗らなければ馬鹿である。

「ところでもう一方の地の味というのは？…、念のために聞いておこう」

高柳は興奮でからからになった喉を押しあけるようにして説明の続行を求めた。

「地の味というのは普通の方式でございます。貸出先は三十万石以下の大名を対象にし、金額も二百万両以下。平均は二十万両くらいになっております。こちらの方は五人組に入る手数料も一割程度ですし、また利子も年三パーセントていどはつけて返済していただかなくてはなりませんので、この方式はあまり妙味がありません。したがって出来ることなら天の味でいきたいわけでございます」

「でも当藩は二十万石、規準からいえば地の味、その点は大丈夫なのか」

高柳がもう一度念を押すと

「私の力を信用くださいませ」

前田利家の後裔に当るという毛並みのよさや、太閤資金の事務局長という地位を信用してくれといわんばかりの言い方で

「ルールといってもおおよその目途ですから、それほどはっきりしているわけではありません。私が五人組に申込めば充分可能です。太閤資金としてもどうせ貸すならば、いい藩に貸したいからでございます」

「美春藩がいい藩だと申すのか。財政がまっ赤なこの藩が」

「さようで…」

「ほう、してその理由は…？」

「まず美春藩は外様大名の名門でございます。そして第二の理由としては、名君、名家老が揃っております。名家老とはもちろん現在私の前に坐っておられる高柳さま、あなたさまでございます」

お世辞とはわかっていても名家老と言われれば悪い気はせず

「ふむ…？」

「ここだけの内密に願いたいのですが、ただいま私が進めております仕事に、もう一つ別件がございますが、その中から二百万両ぐらいを廻して美春藩の金額に上乗せするぐらいは、私の力で何ということはありません。私を

ご信用ください」

言いながら彦五郎は持参した風呂敷包みを解いた。かなりの書類の中ほどから、二、三枚を大事そうに引抜くと、高柳の方に見せるともなくするようにした。それは新しい書類で、まぎれもなく花岡藩の借入申込書。一千万両という金額と花岡藩主の署名と花押とが見えた。本物らしい。

たしかに花岡藩は澄田藩と並んで財政が困窮している二大筆頭であると聞いている。そのうち澄田藩は最近太閤資金が入って財政再建に成功したようであるから、残る花岡藩に太閤資金導入の話が進んでいるのも、もっともな気がする。

「わかった。それに本当に利息を払わなくてもいいのだな」

「本当でございます」

「期限がないというのも…」

「本当でございます」

「とすると、結果的にはもらったのも同じこと」

「やっとおわかりいただけましたか。だから天の味でございます。珍味この上ない」

「まあ冗談ならばそれでもよかろうが、だがそんなにうまい話なら江戸や大阪の両替商たちがよくだまって見ているな。現に米島屋だってこんな紹介状を私に書くよりも、自分で直接借りて、それに利息をのせ、わが藩に貸せばいい商売になるのではないか」

高柳がつねづね疑問に思っている点であった。本当にうまい話ならプロが飛びつかない筈はない。触手を伸ばさないのはやはり危険な金だからではないか。あるいは太閤資金とはやはり実体のないインチキ話で、プロは詐せないが素人ならば詐せるということなのか。

だが彦五郎の答えは、待っていましたと言わんばかりで

「そこが太閤資金の太閤資金たるゆえんでございます。でも、その点に疑問を持たれるとは、さすがお目が高い…」

高柳をおだてあげながら

「太閤資金は個人や商人には貸さないのが主義だからでございます。というのは太閤資金は豊太閤の隠し金で、徳川幕府の知らない金でございます。ところが最近各藩とも財政が苦しくなってきている。そこで旧豊臣派の大名で困っている藩があればこれを助けようとの意図から、長いあいだ凍結されていた金が最近になって動き出したというわけなのです。だから太閤資金は商売として金を貸すのではありません。言ってみれば人助け。旧豊臣派の大名を助けるのが目的で金を動かしているのです。だから借りることができるのは外様大名に限られ、徳川幕府に近い譜代大名や旗本には決して貸しません」

「なるほど」

「だからこれまでの太閤資金を借りた藩をみましても、すべて外様大名ばかりという実績がそれを証明しております」

「でも太閤資金を借りた藩はそんなに多いのか」

高柳はわざと聞いてみた。

「ございますとも。早川藩、細梅藩、奥泉藩、それに最近では澄田藩への大口貸出し、これは近頃珍らしく成功しました天の味でございます」

また太閤資金ははるばる朝鮮へも貸出したという噂も耳にしているので、その辺の質問をしてみると、それも本当のようであった。その金で宮殿を建設した王族もいるようで、それは秀吉の朝鮮征伐の罪ほろぼしであると彦五郎は答えた。

彦五郎は風呂敷包みから花岡藩の申込書を取り出すと、高柳の気持を再びあふるようにちらちらと見せた。

「よくわかった」

高柳はうなずいた。早く借りなければチャンスを失するのではないかという焦りが高柳の中に潮のように湧きあがってきた。

だが高柳の太閤資金への渇望には、政権奪還という必要性のほかに、もう一つ他人に言えない必要性があったのである。それは高柳個人としても金が要るのであった。高柳は筆頭家老という立場を利用して実は多額の藩金を着服していたからであった。米島屋などから金を借りるときに、その金を帳簿にのせないで、個人で使いこんでしまっているのがあった。それがどの位になっているのか、はっきりした金額は、長年にわたる流用なので自分でも摑んではいないが、もうかなりの金額にのぼっている。

藩の中で実権を握りつづけるためには、いろいろと金が要るのである。表向きの金だけでは足りない。いわゆる政治資金。だが高柳の場合はそれだけではない。生れつき贅沢の好きな高柳は、倹約、倹約とやかましい指令の蔭で、贅沢な暮しに金を使い、また川住町に女を一人面倒見ていた。

それが流用した金を早急に返しておかなければならない事情が迫っていた。若い藩主が先頭に立って大倹約を実行しているからである。いつ高柳の贅沢な暮しへの批難が起きないとも限らないし、それが発端になって公金流用が発覚する危険があった。あの長尾真十郎は財政収支に細かく眼を通すなかで、必ずつじつまの合わない金の流れを嗅ぎ出すにちがいない。そんなことが起れば高柳の政治生命は終りである。そのためには早くこれを消してしまわなくてはならない。

それには太閤資金は絶好のチャンスといえた。二百万両もの金が高柳の手を通して入ってくるのであるから、流用した金をその中で消すことぐらい容易であろう。現に彦五郎も

「太閤資金が二百万両もし入れば、二割ぐらいの金は話の窓口になった者の個人の自由にしてよいことになっている」

とまるで高柳の胸の中を見抜き、それをそそのかすようなことを言うのである。こんなうまい話がまたとあろうか。うますぎて、空おそろしくなってくる。高柳が太閤資金にひかれた本当の理由は、あるいはこの点にあったのかもしれなかった。

「借入れにはどんな手続をすればよいのかな。やはり申込書を出すとか…」

自分の方から話を切り出すまでに高柳の気持はたかぶってきていた。しかし彦五郎は

「話はゆっくりいたしましょう」

わざとじらすようにそう言った。

「なにせ大きい金のことでございます。相応に難かしい手続がございます。ただ申込書を出せばいいというわけにはまいりません。ところで高柳さま、豊国祭というのをご存じでございますか？」

「なにやら聞いたことはあるが…」

「年に一度、大阪の豊国神社で太閤秀吉の例祭がございます。そのとき豊臣家ゆかりの者たちが、ひそかに集って資金の運用について協議をするのでございます。その場で毎年の貸出方針とか、貸出枠の決定がなされます。まずその決定がないと太閤資金は動けません。幸いその例祭が来月ございますので、ちょうど申込の準備をなさるのにいい時期と申せましょう」

急に話が具体的になってきた。しかしちょっと話が大袈裟すぎるような気もする。しかし金が入るかどうかの瀬戸際である。話はよく聞くべきだ。

「申込書をその協議会へ出すのか？」

「いえ、具体的な貸出の審査、決定、管理は五人組へ一任されております。しかしたとえ申込書が五人組の手に届き、そして五人組が貸出決定をしたとしても、年一度の協議会が最後に判を押さない限り本当の決定にはならないという、何段構えにもなっております」

「何百万両という金が動くのだから、そのくらいは当然であろう。それで、いったい協議会の顔ぶれは誰なのじゃ」

「それはわかりません。見当はつきますが、うかつには口に出せません。」

「では五人組の顔ぶれは？」

「その名前もまだここで申しあげるわけにはまいりませんが、高柳さまのことです。その一端をお知らせいたしますと、その中には前田なにがし、毛利なにがしという名前の人達がおります」

「はて、由緒ありげな名前…」

「さようでございます。これだけはお教えしておきま

しょう。いわゆる五大老の子孫でございます」

「ふーむ、五大老…」

「五大老とはご存知のごとく、太閤秀吉が五奉行の上に政権の最高機関として置いた五人の大老で、秀吉が死の間際に枕許に呼んで遺言を残した、前田利家、毛利輝元、上杉景勝、宇喜多秀家、徳川家康の五人でございます。もっともこの中の徳川家康は秀吉への裏切者ですから五人組のメンバーに入れるわけにはいかず、それに代わって豊臣家の忠臣である真田幸村の子孫が加わっております。この五人組のメンバーは世の表にはその子孫として顔を出してはおりませんが、いずれもがれっきとした血筋を引いた者であることは間違いありません。そして五人組の頭が加賀藩前田家なのでございます」

ああ、だから…、彦五郎の連絡場所が江戸の加賀屋敷になっていたのが、なんとなくわかる気がした。

前田利家は五大老の中でもとりわけ豊臣秀吉の信任が厚かった。前田家は徳川幕府も一目を置く外様大名の雄である。太閤資金は親子代々にわたって生命がけで徳川の眼から護り抜かれてきたというが、その中心は加賀藩であったのか。こうなってくると加賀藩の家老加賀谷兵庫が彦五郎の叔父に当るという血筋は、太閤資金の組織の中における彦五郎の力の裏付けになる。

「でもなぜ五人組が直接太閤資金の話しにこないのか」

「それは秘密を守るために、五人組はいかなる場合にも自分から行動を起してはならないことになっているからでございます。五人組が直接太閤資金の貸付先を探すことは厳禁されており、すべて仲介人、斡旋人の手を経て行うことになっております。これは掟でございます。そのために私のような人間が走り廻っているわけで、仲介人が話をまとめ、そこから上ってくる書類を、五人組は評議し、承認決定するだけなのです」

彦五郎は仲介人の存在の必要性を力説した。

「貸付が決定されますと、その二割に当る金額が調整料として五人組に渡されます。もちろんこれは五人組だけで独占するのではありません。そこから協議会のメンバーにも然るべき金額が配分されるわけですが、誰がどのくらい受取るのかは極秘でございます。もちろんこの調整料は藩の手に入る前に天引されておりますから、藩の方から払う必要はありません」

一つの貸出が完了すると五人組の手には何十万両という調整料が入るのである。しかし秘密を守るために派手な生活をすることは禁じられているという。闇の集団の掟のこわさが、高柳の身に伝わってくるようだった。

〔六〕

申込書などの書類を提出する日どりについては、いずれ近日中に連絡するからということで、その日は彦五郎と別れた。

契約の日をのばされたことが、かえって高柳の中の太閤資金への渇望感を高めた。

正直なところ、彦五郎と逢うまでは半信半疑であった。それが花岡藩主署名の一千万両の申込書を見せられたり、机の上に拡げられた太閤資金の詳細な組織図の説明を聞いているうちに、すっかり信用する気持になってしまい、早く申込書を出さなければ遅いのではとまで思いつめると、その日程はまだ先だという。彦五郎のじらしの技術に高柳はうまうまと陥ってしまっている。

いらいらした気持で彦五郎からの連絡を待ったが、なかなか来なかった。ひょっとして駄目になってしまったのでは、こちらから加賀屋敷に使いを出してみてはと焦れはじめた頃、やっと待望の連絡があった。

『明日、午後三時、料亭水上にお出で下されたし。なお、印鑑ご持参お忘れなきこと』

秘密を守るために場所も先日とは変えてある。高柳が行ったことのない料亭であった。

一夜明けるのが待ち遠しかった。

次の日、城から戻ると印鑑を懐ろにして屋敷を出た。

『印鑑ご持参お忘れなきこと』

この文言が契約への確信度を高めた。書類に印を押すということがどういう意味を持つのかと考えるよりも、早く申込書を提出したいという焦操感の方が高柳の心を占めていた。

高柳は先日と同じように供も連れず編笠で顔を隠して歩いていったが、しばらくすると辻駕籠をひろって身を隠した。

『尾行に十分気をつけられるようー』

文書の末尾にそう書いてあるのを思い出したからである。

料亭水上の少し手前で駕籠から降りると、あたりを見廻し、脇道をすばやく歩いて、料亭の入口を潜った。

奥に深い、うす暗い廊下を案内されていくと、彦五郎が現れて

「早いお着きでございました」

廊下を泳ぐように歩きながら

「本当に今日は日がようございました」

半ば独言のように、半ば高柳の方に聞かせるように、日がよい、という点を強調した。

「……？」

高柳が彦五郎の方に顔を向けると

「ご紹介したい人が二人、偶然にも今日間にあいました。いつかお引き合わせをしたいとは思っておりましたが、偶然にも、都合がつくということがわかりまして、事前にご相談もいたさずにお連れいたしました。本当に高柳さまは運がおよろしい。一人は私の叔父に当ります加賀藩家老の加賀谷兵庫さま、もう一人は澄田藩の勘定奉行の岡島文之丞さまでございます。加賀谷さまは五人

別のところに書く

組にもごく近くにおります方、また澄田藩はご承知の太閤資金の実績を持つ藩にございます。必ず今度のお役に立てるものと存じます」

部屋に入るとなるほど男が二人坐っている。一人は老人で、一人は若い。

老人の方を

「加賀藩のご家老、加賀谷さまにございます」

と紹介し

「私の叔父に当ります」

とつけ加えた。でっぷりと肥って風格があった。顔にも気品がある。高柳は逢ったことはないから顔は知らないが、その風格からして加賀藩の家老と信じてよさそうだった。加賀谷兵庫は

「五人組の頭取は私の血縁に当りますゆえ、よく知っております。話はなんでもツーカーの間柄にあります」

聞きもしないのにそう答えた。

「よろしくお願いいたします」

いちおう高柳は頭を下げた。

それきり加賀谷はものを言わず、ただ坐っていたが、しかし坐っているだけで場にかなりの威圧がただよっていた。

若い男は

「岡島文之丞でございます」

それだけ言って頭を下げた。若いといっても三十の半ばはすぎている。

彦五郎は

「太閤資金の生き証人をお引き合わせした方がいいと思いまして、今日お二人をご紹介したわけでございます」

そう話をつなげながら、澄田藩への太閤資金導入の経緯や、実績手続を説明しはじめた。彦五郎は今日も、先日と同じ風呂敷包みを持っていた。風呂敷のうす汚れているのがすこし気にかかるが、これを現代風にいえば、得体の知れない書類の山を古ぼけた鞄に腹がふくらむほどつめこみ、あっちこっちと持ち運んでいるといった工合であろうか。

風呂敷包の中から、澄田藩の申込書だとか、念書といったものを説明の裏付にいちいち取り出して高柳の方に見せる。その度に岡島文之丞がうなずき返す。

借入のすんだ申込書がなぜ仲介人の手許にあるのだろう、当然五人組の手に納められているはずではないか、という気もするのだが、しかし太閤資金には常識を超えたところがあるからなんとも言えない。

だが、また別の考え方もできる。この風呂敷包は彦五郎のものではなくて、実は五人組から預っているものを、あたかも自分のもののように持ち歩いているのかもしれないのである。高柳の考えは様々に揺れ動くのであるが、しかし事の理非はどうであれ、要は金が入ればいいのだと、次第に度胸を据えはじめていった。

澄田藩の成功談が終っても彦五郎の話はとどまるところを知らず、次から次へと書類を手品のように取り出しては、延々と成功談が続くのである。成功談ばかりというのが高柳が噂に聞いていたのと若干ちがうので

「だが、そううまい話ばかりではありますまい。失敗した例や、詐欺にあったという話もよく聞きますな」

さぐりを入れると

「お説の通りでございます。この世界には私達のような真面目な話ばかりでない、太閤資金をネタに一ぱい喰わせようとする人間がいるのもたしかです。私達は非常に迷惑しております」

と巧妙に切り返し、

「一年ぐらい前のことです。その藩の名前は申しあげられませんが、金額一万両（五億円）の証文が詐しとられるという事件がありました。太閤資金の大口を引き出すには運動資金が必要だといって、証文を書かせたのでございます。大阪に行きますと、そのような藩の証文が額面の半額ぐらいで売買され、お金に替えられる、闇の金融市場がございます。だました男たちは一万両の証文を五、六千両に現金化して、仲間で山分けしてしまったのでしょう。事は巧みに仕組まれたので藩では最後まで気がつかず、期日に闇の金融機関から証文をつきつけられて、はじめて大騒ぎする始末だったのです。しかし証文通り払わなければ公儀へ訴える、そうなれば藩の生命は断絶なので、泣く泣く決済したということでございます」

「こわいことですな」

「さようでございます。そのようなペテン師にひっかかったら身の破滅です。しかし実際には詐欺事件は少くて、失敗であったが話は本当だったという方が多いのです。世間へは駄目だったと、表面の話ばかりが伝わってくるので、詐欺だと思いがちになるのですが、本当はそうではないのです」

「と言うのは…？」

「たとえば、本当の話が実現の寸前まで行ったが、間際になって藩の気持が変わり、仲介人に手数料を払うのを拒否したために、話がご破算になってしまったという例があります。これなど結果としては成立しなかったが、話は本当だったのです。約束通り手数料を払えば金は手に入った」

「なるほど…」

「また、こういう例もございます。貸付の話は成立して、大阪の指定両替商の口座に金はいったん入った。ところが両替商との打合せがうまくいっていなかったので、『こんな巨額な金が入る口座はきっと偽の口座にちがいない』と大騒ぎになってしまったのです。太閤資金は極秘裡にことが進まなくてはなりません。それが大騒ぎに

なったのではと、せっかくの金が引き揚げられてしまったのです」
と彦五郎はこれも決して詐欺ではなかったことと力説し、
「言ってみれば太閤資金に問題があるのが多いですね。例はたくさんあります。これも私が扱った藩のことですが、話はトントン拍子に進み、うまくいったのです。最後の証文も入り、承諾書もおりて、さあこれからという時になって藩の主脳部が弱腰になり、藩が直接やらずに両替商を代理人として事に当らせたのです。すると両替商から情報がもれ、闇の金融筋が騒ぎ出したものですから、あわてて話を打ち切ってしまったという例もございました」
「おっかなびっくりで、他人まかせでは、駄目だということだな」
「さようでございます。巨額な金を握るのです。最後まで自分のリスクで摑むんだという覚悟がなくては…。そんな失敗の典型的な例としては、こういうのがあります。ある大藩です。四百万両の天の味方式。五人組の審査も通過しました。美春藩が希望しておられるのと同じケース。筆頭家老に藩主を交えて八回も会合し、やっと話が煮詰りました。それが明日正式契約という段階になって、藩主が尻ごみを始めたのです。藩主に勇気がなかったのですな。藩主は家老に『そちの名前で契約しろ』という。すると家老の方もおじけついて『いえ、殿の署名でなくては…』と、なかなか話がまとまらない。そのうち五人組の方から『そのように誠意がないのでは話は無かったことにしたい』と通告されて、話は水泡に帰したことがありました。後で悔んでも始まりません」
「積極的に自分から摑むという態度でないといけないのだな」
高柳は独言のように言った。
「さようでございますとも。必要なのは、積極性と、もう一つは秘密厳守でございます。いま申しあげた例の中にも、秘密が保たれなくなって壊れた話があります。だから実際には入っていても、世間へは入らなかったと故意に言う場合があるのです。たとえば昨年世間を騒がせた飛羽藩や紀城藩の場合、あれは失敗したと言われておりますが、本当は入っているのです。それなのに世間が騒ぐのをおそれて、わざと『入らなかった』と言っているのにすぎません。たとえ入っても、入らない、と言うのが、ある場合、この世界の常道になっております」
「それでは何が何だかわからなくなってしまうではないか」
「さようでございます。極端に秘密漏洩をおそれるため、仕方がありません。表面と本当とは違います。表面だけ見て詐欺だとか、インチキだというのは当りません」
彦五郎が先日

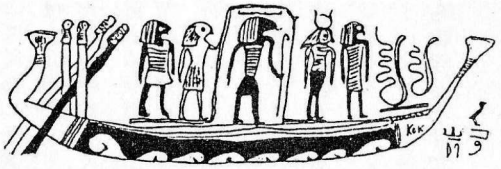
『太閤資金はあると思えばあるし、無いと思えば無い』と答えたことを思い出した。要は双方の反応の仕方次第によって、成功もするし、不成功にもなる、ということであろう。
「以上いろいろとたくさんの例をご説明いたしましたが、これで太閤資金の秘密がおわかりいただけたと思います。同時に太閤資金が本物であることもおわかりいただけたと思います。最後に重ねてお願いいたします。秘密厳守です。もしも秘密が洩れたらその段階で話は壊れてしまいます。したがって高柳さま、今の段階では絶対まだ他言なきよう。城中でも絶対に秘密にされるはもちろん、たとえ藩主修身さまにもお洩らしになってはなりませぬ。話が実現するまでは、高柳さま、あなたさまお一人の胸にお納めおきくださいますように…」
彦五郎は呪詛師のようにささやいた。
彦五郎の説明が終ったとき、高柳の心は完全に太閤資金の虜になってしまっていた。
眼の前に拡げられた書類の散乱は高柳の心を圧倒していた。借入の申込書、依頼書、証文、手数料の念書、請負書、経過記録書、それから太閤資金の組織図、借入実績者一覧表、その他さまざまな書類がある。中には直接藩主の花押が書かれたものもあって、どれも高柳には本物と見えた。文字の筆跡も達筆で、風格があった。はっきりと家紋の入った用紙にしたためてあるものもある。
そんな高柳の気持に、彦五郎は最後のとどめを刺した。
「ちょうどいま五人組の一人が江戸に来ております。いま申込めば翌年の借入れには間にあいます。すぐ申込書を出される方がいいでしょう」
「そう願いましょう」
もはや高柳の心には何の抵抗感もない。進んで申込書を書きたい心境である。
彦五郎は立ちあがると、違い棚から硯箱を持ってきて蓋をあけた。墨の匂りがただよう。墨は高柳がくる前からすでにすられて用意されていた。
高柳は筆にたっぷりと墨をふくますと、彦五郎の指示するままに申込書を書いた。
「ご印鑑はお持ちいただけましたな」
高柳はうなずくと懐から金襴の袋をとり出し、朱肉をつけ、署名の下に赤々と押した。その一瞬、高柳は強い力に導かれて、なにか別の世界に入っていくような気持になった。
その姿を加賀谷兵庫と岡島文之丞の二人は冷静に眺めている。
彦五郎は出来あがった申込書を手にとってしばらく眺めていたが
「結構でございます」
つづいて

「では加賀谷さま…」
と、加賀谷兵庫の方にそれを手渡した。加賀谷兵庫は申込書の左の余白に
『この貸付成立は間違いない』
そういった趣旨の文言を書き添えて高柳に返した。
「ありがとうございます。こうして加賀谷さまの保証をいただいた以上、大丈夫でございます」
彦五郎は晴れやかに言った。
高柳の体内を興奮の戦慄が走り抜けた。これで太閤資金借入は成功したのだ。二百万両という巨大な金が散華のように高柳を包んだ。その高柳の耳許へ
「ついでに念書もお書き願いましょうか」
彦五郎の悪魔の声がささやいた。
「念書…？」
だが、感覚のすでに麻痺した高柳には、さしたる疑問も湧かなかった。
「手数料の念書でございます。借入が実現した時には、斡旋料として仲介人に二百万両の一パーセント、金額にして二万両（十億円）を支払っていただくことになっておりますので…、この念書は、その仲介人である私個人あてのものでございます」
仲介人に対する手数料は、五人組に対して差引かれる二十パーセントの中から支払われるのではないか、そのように最初聞いたと思ったが…、しかしこの場の雰囲気がそうした高柳の疑問も押し流してしまった。
高柳は言われるままに彦五郎あてに二万両の手数料の念書を書き、署名と押印をした。
「今日のところ書類はこれで結構でございます。さっそく五人組の方に話をおつなぎいたしましょう。高柳さま、あなたさまはラッキーでございますよ。五人組の一人が江戸に来ております。私が江戸に戻りましたら、さっそく手配いたしましょう。いいチャンスです。ですから運動費をすぐ二百両（一千万円）ばかりご用意された方がいいと存じます。」
運動費のことなど、はじめて聞く。だが高柳はこれもまた当然のように受けいれてしまった。なにせ二百万両の金が動くのである。手土産や、付け届け、それに接待費も必要であろう。むしろこれは彦五郎の方から言われない先に言い出すべきではなかったか、そう高柳が思ったほど彦五郎の発言のタイミングは絶妙であった。
「それから、今日来ていただいたお二人には、旅費を差しあげることが礼儀になっております」
まだ、あったのか。
「どのくらいで、いいのか…？」
「……」
彦五郎は高柳の耳許に、旅費としては多すぎる金額をささやいた。その中には謝礼や、今後の運動費も入っているというので高柳は承知した。

高柳はふたたび硯箱をとり寄せると、これこれの現金をすぐ揃えて持参するようにと手紙を書き、料亭の下男に持たせて、屋敷に使いを出した。
こうして一連の手続きが終ると、緊張が解けて、急に部屋の中に晴れやかな雰囲気が漂ってくるのを感じた。
「さあ、お祝いに一献いただきましょう」
彦五郎が手を叩くと、用意された膳が手際よく運びこまれた。
「おめでとうございます。これで美春藩も萬々歳でございます」
「かたじけない。今後ともよろしく」
四人の男は芳香のある酒を一気に乾した。
重要な仕事が終了した後の解放感が、四人の男の酒量を上げた。話もほがらかにはずみ、唄なども出、宴が終ったのは夜も更けてからであった。
さきほどの手紙によって屋敷からは現金がすでに高柳の手許に届いていた。
「これはささやかではございますが、運動資金としてお納めください」
と二百両の包みを差し出し、つづいて
「これもほんの些少ながら今日の駕篭代として…」
それとは別に三人の男にそれぞれを置いた。
「これは、かたじけない」
慣れた手つきで三人は懐に入れた。
駕篭が四つ呼ばれた。
人に顔を見られるのを警戒して、駕篭にすばやく身を隠すと、夜の町に消えていった。
しかしこの時、実は、この四人は、ある小部屋から見られていたのであった。それは千羽功兵衛という若い侍で、美春藩の武士であったが、長尾真十郎の配下であった。二人の同僚と小部屋で酒を飲んでいたのだが、中庭ごしに廊下を帰っていく四人の姿を見ると
「おい、あれは高柳さまではないか」
眼ざとく見つけて注意を促すと、他の二人の視線もいっせいに外を見た。
庭は暗い。廊下にこぼれる灯りの反射だけなので見にくいのだが、しかし先頭の男が高柳玄宰であることはまちがいなかった。他の三人は知らない。美春藩の人間のようには見えない。
「……？」
なにか変だ——暗い予感が三人の頭のなかに稲妻のように抜けた。
「……」
三人は顔を見合わせると、無言でうなずきあった。そのまま部屋を抜け出し、廊下をすべるように四人の後を追った。
「おれはご家老の後を追う」

千羽功兵衛がそう言うと、あとの二人は彦五郎たちの駕籠を夜の町に尾行していった。

（つづく）



山口健二寸描

「江戸の時を刻む町・東京・谷中界わい」という番組を見ました。まさに山口さんの背景をなす舞台でありました。氏はその雰囲気の中で小説を書いています。そのこと自体すでに他から見て一編の作品を書けそうに思われます。TVの方はそれほどには応えてくれませんでしたが、山口さんの書くものには期待が持てます。それは氏が谷中に根を下している住人だからです。

「さいたま屋風土記」その他一連の作品は粒こそ小さくとも、谷中に生きる人々を活写しています。春らんまんの季節、私はかの露伴の五重の塔跡あたりに氏の誘いをうけ、花見をした覚えがあります。その席にあの「さいたま屋」に登場する誰彼が氏を認めて寄ってきて杯を交わす光景を現出したことでありました。これぞ、氏の作品の人を魅する根源に外なりません。馬中センセ得意の世界であります。どうぞドンドン書きまくってください。

Q太郎

連載

ハイラル挽歌

第二章　開嶺の崩壊

金子正義

（四）

上田中尉は第四軍司令部の極秘命令を胸に秘め、八月九日午前二時、新南興の師団司令部前に集結した車輛部隊を率いてハイラルに向って出発した。

十車輛編成の車輛隊は前衛一番車に、八中隊の清水軍曹以下八名、二番車を本部として上田・浜田両中尉と八中隊五名、九中隊二名が乗り、続く各車輛に九中隊の三十八名が分乗した。最後尾は九中隊の大田少尉が兵五名と殿となって、真暗闇の興安街道を穏密裡に北上した。

開嶺から暫くは両側の山が暗く道に迫って覆い被さり、空は雨雲が低く垂れこめて暗かった。車輛隊はその闇夜を幸いとヘッドライトを消し、後尾の螢光灯だけを点けて夜通し走り続けた。

興安街道は、満鉄線の東側を鉄路に沿ったり離れたりして延びていた。イレクテ駅付近を通過した午前三時頃、引揚邦人を満積した列車と擦れ違ったが気付かれなかった。

夜が明けたが今にも降りそうな濃霧であった。漸く太陽が薄く輪郭を表わした午前八時頃、爆音が聴えてきたと思う間も無く、曇り空に突如双葉機が現われ車輛隊の真上を旋回し乍ら追尾して来た。兵隊達は護衛の友軍機と思っていた、中には車輛から顔を出して手を振る兵隊もいた。

悠々旋回していた双葉機は突如急降下すると、いきなり車輛隊に機銃掃射を浴びせた、上田隊は余りのことに対応の間もなかった。双葉機は唖然としている上田隊を尻目に機銃掃射で開戦の挨拶をすると颯と飛び去った。

上田中尉は、ソ連機の意表を突いた襲撃で、一挙にソ連と交戦状態に入ったと知ったので、直ちに各車輛に、

『戦闘開始、警戒を厳にして前進』

と継送して遠く草原の果ての北方の空を警戒し乍ら走り続けた。

一時間程走行すると前進方向左手に九十野砲陣地の在る擂鉢山が見えてきた。陣地は未だ構築中であったが九十野砲一個中隊が配属され、迫撃砲五門、高射砲二門があった。配属歩兵隊は開嶺の二百五十五連隊の分遣隊で、小川見習士官以下六十名が陣地の防衛に当っていた。

走行する車輛から上田中尉が双眼鏡で陣地を見渡すと、歩兵隊では未だ開戦を知らず、兵隊達が作業衣で頻りに動き廻っていた。

恰度この時小川見習士官が、いざ開戦となると陣地の防衛に弾薬が不充分なので、開嶺の連隊本部へ弾薬受領の車輛を向けようとしていたのだった。

上田中尉はソ連進攻を陣地に知らせてやり度いが、伝令を出す余裕が無いので車を徐行させ乍ら、丸山上等兵に手旗信号させ、

『ソレン　シンニュウ　セントウカイシ』と送ったが受信を確認できなかった。已む無く上田隊は其の儘通過して暫く走行すると、車輛隊の後方から再び一機また一機とソ連機が襲いかかって、次々と車輛隊に爆弾を投下した。上田隊は街道を全速力で疾走しているので直撃弾を被らなかったが、最後尾の一台が至近弾の煽りで横転し、大田少尉達は振り落されて草地へ転がり込んだ。上田隊は構わずに全速力で其の儘走り続け、街道を外れた白樺の疎林に走り込んだ。車輛の迷彩と白樺の茂みで上田隊を見失なったソ連機は反転して擂鉢山へ鋒先を変えた。

漸く危機を脱した上田隊は大きく起伏する草原に出るとウノールの聚落が見えた。何にかの急を告げる鐘がカンカンと満人部落で響いていた。減速前進し乍ら擂鉢山を振り返ると、ソ連機が擂鉢山陣地を襲撃し急降下爆撃を反覆していた。擂鉢山の日本軍は高射砲・機関銃で克く反撃して激しい銃爆撃音が草原に鳴り響いていた。

日本軍の対空砲火の激しさにソ連機は一旦去ったが、直ぐ新手の二機が襲来して執拗に旋回しては急降下爆撃を加えた。数弾が陣地に直撃して盛んに弾薬が爆発し火煙が黒々と上った。

攻撃は空軍だけでなく、戦車砲の激しい連続音が上田隊まで響いて来た。雲が地表を覆うように拡がっているのでソ連戦車隊の姿は見えないが、擂鉢山の西方から攻撃しているようだった。

上田中尉は此の儘前進すると、ソ連戦車隊と遭遇すると危んで全員に下車を命じ、各個に匍匐前進し乍ら横隊の肉迫攻撃体勢をとって其の儘草叢に俯せ隠れていた。

空漠と拡がる草原一面に響き渡る対空砲火・機関銃・戦車砲の激しい音響に、爆雷を抱いて草に俯せている兵隊達は敵戦車が見えないだけ恐怖がじわじわと迫ってきて、カチカチと歯を鳴らして震えている兵隊もいた。

午前十時を回ると砲声は次第に遠んで執拗に反覆旋回していたソ連機も姿を消して、黒煙のみが盛んに擂鉢山

に昇っていた。

上田中尉は擂鉢山の友軍を救援できぬばかりか、生存者の救出にも行けないのが無念であった。『機密特別行動中なのだ、已むを得ない』と陣地に向って隻手を挙げて瞑目すると、散開している兵隊を纏め車輛隊を組み直して再び北に向って出発した。

上田隊はソ連軍の出現を懼れ乍ら擂鉢山の北端を大きく迂回して西方に向きを変え、イレクテ川を目差して走り続けた。

無人のウノール駅前を突切って満鉄浜洲線を越えると、街道の両側は湿地帯となった。イレクテ川の工兵隊架橋を渡ると前方の雲が切れて青空が見え始めた。街道は湿原の中を帯のように伸びていた。風が出て湿原を吹き渡ると、葦穂が海原の波のように滲り乍ら拡がっていった。

ソ連機の襲来に備えて車輛間隔を広く取っているので最後尾の一台は点のように小さく見える、縦隊で進行する車輛隊は海洋を航行する船団のようだった。悪路で動揺は激しいが、ホロンバイルの草原と違って砂塵があがらない、広漠たる大草原を疾走していると先刻の擂鉢山の攻防戦など白昼夢のようであった。兵隊達は緊張も解けて携帯口糧を噛んだり、ぐったりと車の動揺に身を托して睡ったりしていた。

正午を過ぎて先頭車が湿原から笹山丘陵へ向う坂道に入った。更に右折して北方に転じた時、突然、稲妻が草原に走り続いて激発音が各車輛を震わせて響き渡った。ソ連軍戦車砲の一斉攻撃であった。先頭車は忽ち横転して斜面を転がり落ちて湿地に滅り込んだ。清水軍曹等はやっと這い出て街道を駈け抜けて山裾に飛び込んだ。後続車も一斉に急停車して兵隊達はバラバラと跳び降りて、車の蔭や道路際の溝に伏せて状況を窺った。

青天の霹靂の一斉砲撃を受けたが、ソ連軍戦車隊の姿は高く伸びた野草の彼方に沈んで見えない。どうやらソ連軍戦車隊は上田隊を発見したが取るに足らぬと、先を急ぐので擦れ違いざまに砲撃を浴びせて通過して行く模様であった。

上田隊の被害も湿地に滅り込んだ先頭車だけだった。それも被弾でなく突然の砲撃に衝撃を受けて急停車したので、下り坂もあって自から横転して湿地に転がり込んだのだ。

戦車も去ったので、泥塗れの兵隊達を二番車、三番車に収容し、三番車を偵察車として先行させ、二番車を先頭に前進を再開して三十分程行くと、先行の偵察車が街道の遙か北方の起伏する曠野に見え隠れして前進して来るソ連戦車群を発見した。

水の引いた一面の湿地帯なのでキャタピラの音が吸引されて、音も無く迫って来る戦車群は、原始の怪獣が襲って来るようで無気味であった。

上田隊に気付いたらしい戦車群は、砲塔を触覚のよう

に上下に動かし乍ら横一列に大きな横隊をつくって迫って来た。怪獣が歯を剝き出し双手をあげて襲いかかるようであった。最早、前進も後退も出来ない。車輛から飛び出した兵隊達は各個にバラバラと湿地に駈け込み、必死に円匙や短剣で蛸壺を掘った。戦車が殺到する迄に身を隠す蛸壺を掘り肉迫攻撃をかけるのみであった。

その時、散開した上田隊の背後の丘陵に激しい速射砲の一斉砲撃がおきた。最左翼に散開した清水軍曹の丘陵際は、真上に台地が迫っていて湿原一帯が見渡せた、そこに九十野砲の一部隊が陣を構えていた。

ソ連戦車隊の攻撃目標は上田隊でなく、始めから台地の野砲陣地であった。偶然上田隊がその中間に走り込んだのだった。

戦車と台上陣地の砲撃戦は日没迄続いていた。上田隊は唯、蛸壺の中に潜って激しい砲撃戦の真下に逼塞しているだけだった。戦闘の帰趨は判らなかったが、夜となって砲声が休んで三日月が幽かに山の端に昇った。蛸壺の兵隊達は何にか救われたようにホッとして淡い三日月の微かな運行を見守っていた。

夜の静寂は無気味であった。風も無く虫も鳴かず、全ての音が死に絶えたように静かであった。清水軍曹はたった一人此の世に取り残された様な不安を覚え、隣の蛸壺の丸山上等兵をそっと呼んでみたが応答が無い、壕から乗り出して夜露の草地を這って丸山上等兵の蛸壺を覗くと、三日月の薄明に蒼白く丸山上等兵の顔が浮かび、目が狼のように炯った。

小林上等兵は突然の清水軍曹を、怪訝に思って、

「軍曹！どうしました、大丈夫！」

と訊いた。清水軍曹は弱気を起して動き廻った自分を恥じて、

「おっ、異状無いか」

と言って自分の蛸壺に戻ったが、悔恨の念が胸を衝き、銃を抱え込んで深く壕に沈んだ。

優れた装備の敵機甲部隊を目のあたりに見た彼は、日本軍の破甲爆雷などではとても爆破どころか、擱坐すらできないだろう、それにあの速さはどうだ、トラックより早い。それに米軍マークのU・S・Aと塗られた重戦車だ。噂さでは沖縄を攻略した米軍は愈々日本本土の上陸を狙っていると云うが、ソ連軍に大量の戦車を回わす程に物量があるのか、この分だと本土が戦場になったらもうお仕舞いだ。故郷の妻子は一体どうなるのだろう、と胸騒ぎを覚えるのだった。そして、

上田中尉の軍命令とは一体何んであろうかと疑惑の念も生ずるのであった。ハイラル急援の物資輸送と言うが途中何台か引っ繰り返った車輛には何も積んでなかった。他の車輛もシートカバーの下には兵器弾薬など何も無い。自分の車だっていくら坂道の急停車でも、何にか積んであればあんなに簡単に横転などする訳が無い、全車輛が

余りにも軽快に疾走する、可怪しい或いは逆に重火器をハイラルから搬出する為かも知れない。だが、此の付近で敵戦車と遭遇するようでは到底ハイラル迄行き着ける筈が無い、それにしても全滅しているかも知れないハイラルに、多くの犠牲を払って行く必要が有るのだろうか、或いは数日来ハイラルとの交信が杜絶しているので、軍司令部の将校斥候としてハイラル守備隊と連絡を取る為で、車輛隊は擬装なのかも知れない。

などと様々に思い巡ぐらせている内に疲労と睡眠不足の為にいつか崩れるように睡って仕舞った。

同じ頃、離れた蛸壺壕で上田中尉と浜田中尉は、陣中なので声こそ潜めているが激しく諍っていた。

浜田中尉は、

「未だ直接ブチ当らないが、強力なソ連の機甲部隊に直接遭遇したら軽火器すら充分でない中隊は一溜りもない、我々車輛隊は何にを目的に行動しているのか丸る切り分らないで可愛いい俺の兵隊を死なせることは出来ない。それに、上田中尉の八十旅団への口頭伝達は一体何んだ。軍機密だからと言っても貴様が死んだら誰も伝えられないではないか！」

と直情径行の浜田中尉は次第に激昂して上田中尉の腕を摑み、

「車輛隊の使命も、口頭伝達の命令もソ連との開戦前のことで、ソ連軍が此処迄進攻して来たのではもう意味が無いではないか！」

と、胸元を締め上げた。

上田中尉は、剛直な浜田中尉が今迄は、師団命令であるから黙って中隊を連れて一緒に行動して呉れたが、ハイラル迄程遠い中途で開戦となったのでは、秘密を或る程度明かさないと納得しまい。已むを得ないと、

「車輛隊はハイラル急援の物資輸送でなく、逆にハイラルの東山軍事基地の倉庫にある弾薬糧秣を、ソ連の進攻前に開嶺陣地へ至急に運び出して山中持久抗戦の糧にするのだ」

と打ち明けたが、浜田中尉は益々疑惑を深めて、

「可怪しいじゃないか、東山の弾薬や糧秣は師団の輜重隊が五月以降何度も運んだじゃないか、未だ何にかあるのか、地下倉庫に金塊でもあるのか！」

上田中尉は恂然とした。金塊の噂はノモンハン事件の時、多くの犠牲を出した二十三師団の重傷者の譫言に、第六軍の司令部の地下金庫に満洲国軍の金塊があると洩したのが、噂となって流れた。全くの流言蜚語であったが、ノモンハン事件後の関特演大動員の時期の関東軍の対ソ作戦が、東正面沿海州攻撃、北西持久国境劃定にあった。その為に満州国軍への援助と内蒙古義勇軍育成の機密資金がハイラルに備蓄されていると言われていた。

「莫迦なことを、」

と上田中尉は打ち消したが、思いもよらなかった疑念

が浜田中尉の言葉で湧いてきた。
浜田中尉はそれ以上金塊に触れなかったが、
「八十旅団への秘密命令は一体何んだ」
と追求した。
「極秘の口頭伝達は、関東軍の基本作戦は『東辺道の確保』にある、つまり、新京より図門の京図線の南。新京より大連の連京線の東の内で、その外隔は逐次撤収される。だが八十旅団は如何なる最悪の情況になろうとも妄りに玉砕することなく、堅塁に據って持久抗戦し、大興安嶺山中で持久遊撃戦を展開する百十九師団と共に、戦局の挽回を待つべし。と言うのだ」
上田中尉はそう言い乍ら、此んな督軍的なことを事新たに伝える必要があろうか、東山基地から物資を搬出するのを尤もらしくする為めか、或いは、何にか秘密物資を運び出す密約が野村旅団長と、第四軍司令官上村中将とにあって、そのカモフラージュの為に十車輛もの車輛隊を編成したかも知れない。だが、ソ連軍の進攻が余り早かったので物資の搬出どころか、ハイラルには到底入れまい。浜田中尉の言うように車輛隊は速やかに開嶺へ引き返えさせよう。俺は秘密を確かめる為にもどんな事があろうとも野村旅団長に会わなければならない。と決意を新たにして、
「浜田中尉の言う通り、兵隊は帰そう、だが俺は飽く迄もハイラルに潜行して野村旅団長に妄りに玉砕せず、持久籠城するように伝える」
と言った。浜田中尉は憤然として、
「貴様だけを死地に遣ることが出来るか、中隊の兵は返して俺も一緒に行くぞ」
と訊かなかった。
上田中尉は車輛隊を一刻も早く引き返えさせようと決断すると、夜半であったが全員の集合を継送させた。命令は口伝えで上田中尉の潜む最右翼の壕へ集合せよと次々と蛸壺壕に達した。
最右翼の集合地点は、跳べば跨げる程のイレクテ川の幾筋もの源流の中で分り難く、三日月の微光も消えて仕舞ったので、兵隊達は仲々集らなかった。
漸く集合して分隊ごとに確認すると肝腎の清水軍曹の姿が見えない。最初のソ連機の襲撃で横転した車輛の大田少尉と五名が、追い着いていないのは解るが、戦車砲を浴びて湿地に転がり込んだ一番車の清水軍曹の分隊は殆んど怪我はしていなかった。或いは先刻の砲撃戦の逆りで負傷して動けないのかも知れない、と上田中尉は諦めて兵を草叢に座わらせ、
「我々の任務は戦闘ではない、ハイラルへ行く事だ、だが、此の儘の情況では前進は困難である。其処で、自分と浜田中尉だけでハイラルへ潜行する。八中隊の丸山上等兵と九中隊の半田上等兵はご苦労だが連絡員として同行を命ずるが、他の者は九中隊の玉野軍曹が引率して

原隊へ引き返せ、幸い車輛は道路上に放置した儘敵に発見されていない模様なので、一台を残して動く車輛に分乗して直ちに原隊へ帰れ」
と命じた。玉野軍曹は清水軍曹の安否を気遣い乍ら湿地帯を抜け、道路に出て放置された車輛に分乗してもと来た道を全速力で引き返した。
幸い夜明けは未だ遠く闇であったのでソ連軍に発見されず、翌朝擂鉢山の下を通過して夕刻には師団司令部に着いた。
出発時車輛編成の指示を受けた前原大尉に玉野軍曹が報告して車輛を返納すると、前原大尉は「大隊迄乗って行け」と二台を借して呉れた。お蔭で大隊本部にはその夜の内に着いた。
大隊本部で当直司令の佐藤少尉に玉野軍曹が報告すると、佐藤少尉は、
「ご苦労だった、九中隊は今、大隊本部前の蛸壺壕にいるぞ、既に大田少尉達は空襲で車輛がやられたので引き返しているぞ、お前達も早く休め」
と労った。
九中隊は浜田中隊長以下四十名の中隊主力が出発した後で、八月九日のソ連開戦となった。留守隊長の石坂見習士官は、僅か十五名の残留戦力では広い陣地は到底守り切れないと、大隊本部へ増援を求めた。
皆川大隊長は、
「増援は出来ない、九中隊の残留隊は陣地を撤収して大隊本部前に蛸壺壕を作り、豫備隊となって待機せよ」
と命じたので石坂見習士官以下の残留隊は、装具だけを持って陣地を引き払い大隊本部前に蛸壺陣地を造って入っていた。
翌朝、残留中隊の兵達が起き出すと、ハイラル急援の車輛隊が疲労し切って大隊本部前に夜霧に濡れたまま睡っているのに驚いた。
驚て起き出した車輛隊の兵隊達も、もう会えないと思っていた大田少尉達が無事に帰っていたので吃驚した。
兵隊達は互いに手を取り合って喜んでいたが、玉野軍曹は何にか気の抜けた風船のように力が抜けてボンヤリした状態だった。八月九日以降必死になって車輛を走らせていたのが無意味のように思え、何か狐にでも誑らかされているような気持だった。

編集後記

第十八号の作品は正月休みをはさんで、じっくりと構想を練ってもらい、充実した新年号にしようと話し合っていた。そして一月末日に掲載原稿をまとめる予定を立てた。

しかし、誰しもが、からだは空いていても、こころせわしい年末年始であったようだ。なかなかまとまった一人だけの時間がつくれないのだ。私なども例外ではなかった。

本誌を応援してくださっていた、青柳幸男氏が昨年十一月に逝去された。謹んで哀悼の意を表したい。八十三歳でいらっしゃった。

まえの号で、八十島　元氏が同人のO氏寸描ということで一文を草した。本号でもその企画を継続している。同人のプロフィールである。

この第十八号には金子氏と三戸岡氏の長編が連載されている。まだまだ続くという作者の弁だが、晴れて一冊になる日がたのしみである。

次号は短編特集として、この号と同時に出発進行にしたのだが、少々もたついているというのが実情だ。珠玉の掌編を集めて、本誌としてはじめての企画を成功させたいと念願している。

（も）

「まんじ」第十八号

昭和六十一年二月二十七日発行　（非売）

編集　大和禎人

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三ー十一
☎（261・5743）

発行　「作家群」（まんじ）編集部

〒一〇一東京・千代田区神田駿河台二ー九
☎〇三（二九三）〇〇九四　柴田方
郵便振替口座　東京二ー九〇八一五

―目次―

姓名学叙事詩……山口健二……1
電話……井上二三男……7
夕映え……山根三枝子……10
結婚……柴田富佐子……16
李赤の雪隠の死……金子正義……19
吉原遊廓……八十島元……21
コマーシャルタイム……三戸岡道夫……24
夢芝居……大和禎人……38

短編特集

松尾芭蕉……八十島元……32
八十島元寸描……Q太郎……6
三戸岡道夫寸描……Q太郎……31
編集後記……49
表紙……岸田幸雄　カット……茂田良光

姓名学叙事詩

山口健二

金子豊二は子供の頃から自分の姓と名前が好きでなかった。これは、かれが自分に誇りを持って生きてゆく気勢を殺いで、かれの一生を駄目にした原因のようだ。親たちは〝ホウジ〟と呼んだ。豊二にとって、ホーという音は力がぬけて頼りなく腹にこたえない。明治・大正のエライ人たちの名前はどこか重味があって立派な感じがしていた。〝ホージ〟じゃ、どうもエラクなれそうもないぞと子供の時に、早くも感じていた。だからかれは子供ながらエラク成りたいと思った時期があったのだ。勿論エライと云うことがどんなことか、しっかりした考えがあったわけではない。母方の祖父のように、肩からなめに襷をかけ、勲章をつけて、三角の白い毛のはえた帽子を小脇にかかえて、玄関の車寄せで写真がとれるのもエライ感じであったし、自分の父親のように口ひげを生やして、ステッキをふりふり病院と云う所に行ったり来たりしている医者もエラク見えた。大きい家に住んでいる人は、小さい家の人よりエライんだという感じも持っていた。巡査は剣を腰につッていたからエラク見えた。まちの停車場で駅長や助役は金と赤の帯のついた帽子をかぶっているから、帯の黒いだけのほかの人よりエラク見えた。明治の初め頃、駅長は短剣を海軍士官のようにつるしていて、汽車に乗りおりする人を監督したその名残りが今でも帽子にだけ残っているのだそうだ。敗戦後、巡査の剣はなくなったが、かわりに短かい棍棒を腰につるし、ピストルをつけている。そしてエライとエラクないを襟の金筋や銀すじ、星の数で区別している。殊に婦警という女の巡査の服装はキリッとしていて恰好いい。ああいう服装や恰好にあこがれる子供も少なくあるまい。だが豊二は軍人や駅長や警官になりたいというねがいは子供の頃からとうとう持ったことはなかった。

何を言っても子供の頃一番エライ人はテンノーヘイカであったようだ。親たちがテンノーヘイカの写真を飾っ

たり、拝んだりしていたなどと云うことはなかったが、正月の元日に、家の裏の田圃の中にあった商業学校の軍事教練のセンセである特務曹長どのが、胸に勲章つけて白い毛のついた三角帽をかぶって家の前を通った時、「ワーッ、テンノーヘイカが来たッ」と家の中へ駈け込んだのだからテンノーヘイカはエライんだと感じていたにちがいない。その頃の遊び仲間であったニシが〝オレンチの父ちゃんはな、テンノーヘイカを乗せて汽車を走らせたんだぞ〟と威張った。かれの父親は汽車の釜たきで、帽子に金筋や赤い帯はついていなかった。仲間にいじめられた時に、ニシが切り札として威勢を張った時の言葉であった。だから子供たちもみんなテンノーヘイカが一番エライと言うことには異存はなかったのだ。

友だちは、かれを〝ホーちゃん〟とかさらに短かく簡略にして〝ホー〟と呼んだ。ひどく軽い感じである。エラクならずに終った金子豊二が駄目な一生になった上に、性格が軽はくなところがあるのも、この名前のホという音に影響されて来たにちがいない。又金子という姓は、サトウ、タナカに並んで、その数が多い。数が多いということは平凡で屑の様なものなんだ。又小学生の頃には、金子という姓は隣国、いやその頃は隣国ではなくて地図では日本と同じ真赤にぬられていた朝鮮のキムさんが日本風に改名したものにも多いということもウスウス感づいていた。小学校四年生の頃には、金子はキンスとよめることを知った。いッそキンス・ユタカと二を取って縁起よくしたらなァと思ったりした。

父親も、ほかの兄弟がみな一字の名前だから豊二の二をとって欲しいと名づけ親の加老風外に申し込んだことがあったらしいが、風外は承知しなかったということだ。何しろ風外は豊二の父親金子木曽夫の姉シマの夫で木曽夫は風外に一目も二目もおいていた。風外はその当時、政友会関東支部長であり、又野州新聞と云う新聞社をやっており、自分の女房シマの実家が北関東の地主で大百姓であったことから、その家の最長老でありシマ・木曽夫の父親金子為一郎に一種の催眠術によって一家ぐるみ仏教から神道に宗派がえをさせた怪腕の持ち主であった。かれは明々教と云う新興宗教の四天王の一人でもあった。催眠の術も並々でない腕前だったのだろう。若い時から家を捨てて放浪し、その放浪の間に武者修業者のように学問を身体でやった強味は、学校の出来がいいからとほめられて親たちもその気になって明治三十年代に中学校・高等学校・大学と云う階段をのぼって医者になった木曽夫が、愕然として傾倒したのも、尤もなところがある。自分の想像をこえた体験の持ち主に、人間は恐れ入るものなのだ。だから木曽夫は五人の子供の名づけ親に加老風外を選んだ。木曽夫もこの風外の催眠の術にかかって

大学生の頃から明々教に入っており、結婚すると妻のクラをも明々教の集会に連れて行った。

「加老の伯父さんはアヤシイ人だよ。お父さんは自分の姉さんよかれと思ってあの伯父さん立てているんだよ。新聞社やってるッて言ッたって、自分の所で印刷までやる正式の新聞社じゃなくて赤新聞とか乞食新聞ッて云う所だろ。自分の家なんか子供がいないのに障子なんかボロボロに破れたままだよ。インチキな人だね」

クラはインチキなんて流行語を使って、風外の悪口を云った。どうも女房と云うものは亭主の家の筋のことをヨク言わないものだ。自分の一族に身びいきするのだ。又普段の亭主の圧力を、こういう悪口で腹いせすることもある。だから子供の豊二は母親の言うことを信じて、政友会関東支部長で明々教四天王で、野州新聞の社長であると云う加老風外を少しも尊敬しないばかりか、名付け親であるばかりに、その名前をも嫌ったのだ。明々教という神道宗教についても、うたがいを持っていた。母クラの次のような言葉が記憶の中に残っているからだ。

「お父さんは私と結婚するとすぐ明々教の集会に連れて行ったんだよ。加老の伯父さんにすすめられたんだね。だが今でも不思議だと思えることが確かにあったよ。あたしたち信者に年に一回お教祖が見せる神通力の儀式ッて云うのがあったんだョ、信者が向い合った中を少しあけて二列になっているその上を、お教祖が鳥になって飛ぶッて云うんだよ。あたしたちはのりとをあげながら頭を低くしていると、その上をだよ。信者の集りは六十名ぐらいだッたかな。十五畳の部屋を三ッぶちぬいた部屋で、お教祖が鳥になって飛ぶッて云うんだよ。確かにバサバサッて鳥の羽音が頭の上を通ったよ。一寸頭あげてみたら、向うのはしの神棚の前で、お教祖が倒れていて、弟子がよってたかって介抱してるんだよ。すぐ別の部屋へつれて行ッちゃッたけど。あたしあれだけは今でも不思議だね。バサバサッて鳥の羽の音、頭の上をさッと羽がつくる風がなでたんだから……」

加老風外という人が、どう云う人であるか、豊二は風外が死ぬまで自分の目で確かめる機会はなかった。只かれが造った二冊の本が残っている。一冊は「唯物論か唯心論か」と題がついた百五十頁程の小冊子である。豊二が十才頃のことで、マルクス、エンゲルスがはやっていた。唯物論研究などと云う本が出版されたりする一方、宗教界では、全国宗教大会があったりして唯物論と唯心論が、それこそ辯証法的発展をして何がうまれてくるかと言った時代であった。ところが唯物論はこの国の国是になじまなかったのであろう。国家権力の力でおさえこまれ、少しづゝ少しづゝ日本敗戦の方向に走り出して行った。

もう一冊の本は「野州紳士録」と銘がうたれている。上野、下野出身の知名の人の名前と家庭の出来具合をいろは順に並べたもので正式の出版物と云えるか、どうか。大正の終りにつくられて金拾円也の定価がついている。その時分の拾円は今日の拾万円に当る、こう云うものは、ヤクザッぽい興信所とか私立探偵社とかを営業する者が、四、五年に一度興行風につくって、知名度のある人や、寄附金を出して自分の名をのせたい人や、義理でおつき合いに金を出して買う人目当てに、そう云う人の閨閥関係や家族の出来具合を並べ立てたものである。その本の「か」の部に金子木曽夫という欄と金子金之助と云う欄がある。ちなみにその欄をうつしてみる。文章が文語であるから今日風に手なおししてみる。

〃金子木曽夫＝河西郡・雀の宿村に明治十六年十月に生れる。妻クラ・明治廿三年生れ、東京府下西大久保出口争之助長女・三輪田高等女学校卒・長男啓大正二年生・中学校在学中・君は金子為一郎の五男にして明治三十六年県立中学校をおえ第二高等学校を経て、東京帝国大学医学部に入り、明治四十年卒業す。直ちに同大学医学部副手となり研さんに努め大正二年五月日本赤十字社長野支部病院医長として赴任、同十二年二月医学研究のため欧州各国に出張す。此の間学位論文により医学博士の称号を授けらる。家族・次男豊二、三男候、四男上、長女佐久良〃となっている。この記録が全部が全部つくりごとではないが木曽夫の死後、母のクラが豊二に語った思い出話と大部ちがいがある。〃研さんに努め〃という所が先ずいけない。

〃お酒ばッかり呑んでいたんだよ。その上あたしに悪い病気うつしてサ。医者だから毎日シャアーシャアー洗って直したけど、結婚したばかりのあたしゃホントに恥ずかしいことだッたヨ〃

これは豊二にとってもいやな話であった。〃オレも兄弟もシャアーシャアー洗ったあとで生れたんか〃さすがにこう云う話は母のクラがいよいよ九十才を越して死の前年豊二に語ったのだから捨てぜりふめいていたが、亭主の悪事をバラすとは余程因果なことである。

〃欧州各国に医学研究のため出張す〃もあやしい。かれが大正十四年にまとめた〃途上並に滞欧雑信〃という野州新聞で出したらしい手紙集は、〃上海便り〃〃香港より〃〃シンガポールより〃〃ペナンより〃〃印度洋上より〃〃コロンボより〃〃ポートセットより〃〃リオンより〃〃巴里より〃〃仏蘭西便り〃〃伯林より〃〃ポツダムより〃〃ブレスラウより〃〃ウキンより〃〃ブタペストより〃〃匈牙利便り〃〃ミュンヘンより〃〃再び伯林より〃〃倫敦より〃〃瑞西便り〃などとかれの歩いた跡は明らかであるが、医学研究については一行もない。かれが歩いた国々の医学を日本のそれと比べてみるような文章も見当らない。母親のクラの木曽夫の医学研究に

ついての批評は更に深酷であった。

〃お父さんはね、帰って来てから、ホラあの時分のうちの裏に畑があッたろう、あそこで仲よくして来た独乙の女の手紙焼き捨てたんだよ。ほら女中のノブがあたしに言い付けたんだけど、手紙の束のほかに何だかゴム製品もいっしょに焼いたんだって、独乙じゃ避妊用のゴム製品など、もうずい分はやっていたんだろうね〃

金子木曽夫は明治十六年生れだから〃人生五十年〃という言葉に忠実に昭和十六年五十代で死んだ。木曽夫の女房、すなわち豊二の母親のクラは

「お父さんはお前が殺したようなもんだョ。お前が一兵卒で軍隊からよこした手紙よみながら〃豊二のヤッ〃ッて言って、そのとき心臓麻痺おこしたんだからね」と嫌味を言った。木曽夫の死後間もなくクラの父出口争之助も死ぬ。車寄せづきの屋敷をどうしたのか、終りは女房のカツと発狂した末子の利夫と三人暮しであった。明々教の教祖も死んだ。あとつぎが先代の神通力をうけつぐ力がなくて、女狂いがひどく、元も子もなく消滅した。加老風外も死んだ。シマには早く死なれ、催眠の術で親子程年がちがう後ぞいを手に入れて回春をはかったが死んだ。この小篇に出てくる人物で最後に死んだのは、木曽夫の女房、豊二の母親のクラであった。危篤のしらせで田舎の病院へ馳けつけたつもりの豊二に向ってクラは酸素吸入をやめて言った。

「ホーかい、暮しは立っているかい」

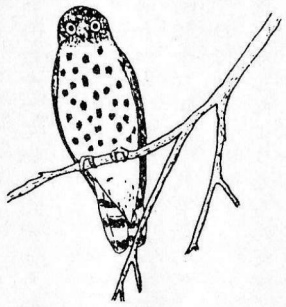
九十三才であった。

豊二も七十才という年になって、自分の駄目であった七十年をボンヤリと思い出しながらテレビの前に丸くなっている。母親のクラの九十才時分の姿勢と同じである。

かれは七十才だから可成り長く生きてきたことにはなる。自分の生涯は、姓名を嫌ったのがそもそも起りだと云う考えをガクモン的にかためるため姓名学と名のついた本を古本屋の棚に見つけて買って来た。この本は名前の音は全く問題にしないで、字の画数で吉凶の判定をする仕組みになっている。そのカクスウでゆくと豊二の名前は、〃路上に突然倒れて死ぬ運命〃となっている。

豊二と名前のカクスウを同じくするものは何百万といるだろう。そのカクスウの者が、皆々路上で倒れて死ぬとすればずい分路上は忙しくなる。でも七十になる豊二は親ゆずりの心臓弁膜症があると思っているから時々呼吸のくるしさを味わっているので〃路上で倒れる〃こともありそうだ。スウッと意識がうすれたら歩道の中に身体全部を入れて自動車をかわしてしゃがみこもう。それから先はオレの知ったことじゃない。自動車にひかれたら身体の形が無惨にこわれる場合があるから豊二は気に入らないのだ。それからかれは毎朝風呂に入る。死んで

から湯灌されるのもかれには気に入らない。毎朝自分で湯灌することにしているのだ。満州で馬賊で鳴らした豪傑某が死んで湯灌をされた時に、かれの陰茎が五分程にちぢんで、うなだれていたと描いたモノ書きの描写を読んだことがある。豊二はエラクなれないことを矢張り口惜しいと思っているから、せめて死んだあとまでちぢんでうなだれた陰茎のことを云われてはかなわんと思っているのだ。



八十島　元寸　拙

もと「作家群」では本名の松野優が「まんじ」では八十島元として「松尾芭蕉」三部作を書いて今号で完結させている。仲間内の評価はきわめて高いのだが、気まぐれな彼は合評会に遅れてきたり、欠席したりでロクにそうした声を聞いていない。（無駄に年はとっていない）といえば口が悪いが、彼の場合まさにそうした好例であろう。人呼んで彼自身を（松尾芭蕉）と呼ぶ。これはただごとではない。彼のこのテーマに打ち込む姿勢が他をうつからである。

俳聖と呼ばれる人物をとらえ、芥川の「枯野抄」あたりとはまた違う芭蕉像を描き、その弟子たちにおよんで群像を描く、これは並の手腕ではない。独自の味を盛り込んでいる。史料探索にも抜かりなく、「武江年表」を傍証するなど丹念な作品に仕上げている点はなはだ見事である。松野優の脱皮ぶりはただ驚くばかりである。

しばらく小説を離れ十七字の世界に親しみ俳句協会会員でもある彼、これは多年書きたかった素材でもあったろうが、これから先どう小説世界に復帰を遂げるか、大きな期待をもって見守りたい。

（Q太郎）

電　話

井上　二三夫

書斉のテーブルで、役所から持ち帰った資料に眼を通していると、

「ズズズー、ズズズー」

という響きが壁の奥から伝わって来る。

続いて、妻の調子の高い声が廊下を越して聞こえて来る。

「あ、電話か……」

納得して、また、資料に眼をやる。資料は、明日の会議の説明と質問に対する答弁のための資料である。

「お父さん、電話！弘からよ」

妻が居間から一段と声を張り上げる。

廊下から居間のドアを開け、

「どうした」

「ううん、親父はどうしたって言うから……」

受話器を私の方に差し出す。

「元気か」

「あ、この間は、お世話様でした」

「勤めには間に合ったのか」

「そう。いつもの出勤とまったく同じだった。本当にお世話様になりました」

相変らず他人行儀なところのある奴だ、と思う。弘は二男だが、子供の時から、欲しい物を買った時など「ありがとう」と頭を下げるようなところがあった。

大学進学の時、送る荷物があまり少ないのに妻が驚いたが、余計な物は持っていなかった。受験用の参考書もほんの数冊がある程度だった。京都では、大学に近い旧家の北向きの部屋に下宿したが、

「弘は、きっとあの部屋は変らないわよ」

という妻の予言どおり、卒業までその部屋を移さなかった。

東京で銀行員になって、やがて一年になる。

この二、三日前に、弘の高校時代のギター・マンドリ

ンクラブの仲間が急逝し、勤めを終えて新幹線で通夜に馳せつける弘を車で高崎駅へ迎えてやった。
高崎駅の新幹線改札口を出る弘は、今様のコートに身を包んで、背がまた一際高くなったように感じられた。
車の中でネクタイを黒に替えている弘にバックミラーを向けてやる。
「ありがとう」
「香典の用意はしてあるのか」
と声をかける。
「袋は買って来た。筆字でないといけないかなア。サインペンは持って来たんだけれど」
「社会に出ると筆が必要なことがあるよ。今日は間に合わないし、社会人一年生だ、しかたあるまい。……金は出してやろうか」
と言うのに
「いいよ。自分の金でやりたい」
と言う。
車の窓から街の灯を見ながら
「どこを走っているのか分からなくなったなァ……」
五年の間の街の変りように感慨を覚えているようだった。
通夜の席で旧友たちと顔を合わせて、弘の帰りは遅かった。
紺のスーツが似合う息子に妻は目を細めた。
「コートは新調ね。いくら位したの」
「つるしで二万五千円。冬のがなかったから」
「どうお、お父さん。補助してあげない」
「いいよ。いいよ」
弘は手を振る。
近く一週間まとめての休暇があるので京都へ遊びに行くと言う。
「じゃあ、お餞別をあげましょうか」
妻は、あれこれと援助を申し込んでいたが
「いいよ、いいよ。本当に無くなったら、その時は貸してください」
と手を振られてしまっていた。
翌日は勤めに間に合うように帰ると言うので、前橋駅まで車で送ることにした。
翌朝、早く起きて、新幹線の中で食べるという朝食の握り飯をつくった妻に、弘は
「大変お世話様になりました」
と頭を下げて車に乗った。
まだ夜が明けておらず、駅までは、ヘッドライトが必要だった。
「今度は、また正月まで帰れません。いろいろお手数をおかけしました。お世話様でした」
背の高い若者が足早に駅の階段を上って行った。空は明るくなって、帰りの道にはライトはいらなかった。—

二、三日前に会ったばかりで格別の話題があるわけではない。
「用件はお母さんに話しました。まだ電話代が入っているから……」
「これから寒さは本格だ。風邪を引くなよ」
そんなことを言っていると、ピーという音がした。
「あ、時間だ。じゃ、元気で！」
「あゝ、弘も……」
受話器を置いて
「別に用もなかったようだが……」
と妻を振り向くと
「この間話をしていたアンプの送り先を言って来たのよ。で、親父はどうしたって言うから……部屋にお父さんがいない気配を感じたみたい」
「ふーん。受話器の先にまで気を配ってくれているのかあ」
私は、明け方の駅の階段を上って行く、親離れをした息子の背の高い後ろ姿を思った。

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。
「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。
同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。
雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。
年齢、職業を超えた同志の集団です。
あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。
維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。
＊同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

夕映え

山根三枝子

昨年のことであったが初歩のキリスト教通信講座の宿題に人生とは何か、とか神についてはどんな考えを持っているかを書く宿題が出ていた時のことである。平素よりは少しばかり意識してそういうことを考えていたせいか聞くつもりで聞いていたのではないがインタビューで中曽根夫人がこんなことを話しているのが耳に入った。

「……ほんとに雑用に明け暮れする生活だものですから私の人生って何時になったら始まるのかしらと思いますのよ」。又そのすぐ後のドラマでは若い男が必死のまなざしで「神に誓って私はそんなことをやってません」などと言っているのも私の耳に飛び込んで来た。

人生とか神とかいう言葉は日常かなり頻繁に用いられていると思うし、それでいてあまり深くは考えないで使われ或いは又いくら考えても分からないのでほうり出したくなるような言葉であるのかも知れない。

人生とは何であるかと問われると答に窮するが、あなたの人生はどんなでしたのとかあなたの人生観はどんなものですかと尋ねられると大低の人は答えるものを多かれ少なかれ持っているようだ。人生をどんな風に感じて受止めているか、そして受止めた認識を如何に用いて人生に対処していくかがその人の人生の生きざまを決めていくようでもある。

しかし何故自分は生れてきて、いま存在しているのだろうかとか、何を目的として生きているのだろうか、又目的なんて果たしてあるのだろうかというような本質的なことに関わってくると何も分からないというのが普通の人間の状態ではないだろうか。古今東西を問わず文学の中には作者の人生観や哲学が表現されているものが沢山あって、その思いにしみじみとした共感を覚えるものも多い。

さて「人生とは」なのだが私は十人位の人達に「人生とは何んでしょうか」と主に電話で尋ねてみた。結論か

ら言うと私の心を捉える答や何か私を啓発してくれるような答は残念ながらと言おうか当然のことゝ言おうかほとんど返って来なかった。

「そうねーむずかしいわ。今すぐ返事しなきゃあ駄目なの」「えゝ、簡単に、でいゝから今」「私にとって人生は苦難の道だったわ」病弱の時が多かった七十才の婦人。人生というと先ずあゝあたしはなんて病気で苦しむことが多かったのだろうと思うらしい。

「あたしね、人生って精一杯生きることゝ思うの。幸せも苦しみもしかと受止めて力一杯に生きて行くこと」。明かるくて元気な声で、はっきり言い切った四十代の主婦。彼女は人生観通りに張り切って幸せに日々を送っているように見える。

「人生とは楽しむことだ」とろくに考えもせずにブランデーを飲みながら速答した男、これは私の夫。大して楽しそうな顔も見せてくれないくせに……でも自分が楽しんですることは何んでもやってるみたいだ。

「人生とはだって？わしや分からんな。目的か？そうだなあ、今ぢやあ生きのびることかな」これは元高級官僚。

「この世で死を迎えるまでが戦であって、与えられた人生を生き抜くこと。神さまの力をいただいて」。と、これは信心深い六十代の女性。彼女は一寸変った声の持主で礼拝堂の高い天井の一角からひびいて来るような感じの人間ばなれのした声であった。

「自分で此の世に出てきたわけでなし、気が付いた時はこの世にいたぢやあない。目的なんて持ってこなかったわ。継母に育てられ、アクセク暮してきてよ、五人の子供を育てあげ、そしてこの年になってしまい、未亡人にもなってしまって……。今自分の人生って何だったのだろうかとつくづく考えるわ」謡曲の先生もやっているせいかしっかりした声で答えた七十才も間近い頑張り屋さん。

夜間大学の講師などもやって自活している後輩の女性に夜おそく電話してみた。疲れたような或いは眠りかけていたのではないかと思われるような返事で出てきた彼女は私だと分かると急に目覚めたような調子に変った。

「そうね、私にとって人生とは——音楽よ」と思いつめたように熱をこめてキッパリ言った。私はフト彼女がくれたあの写真のことを思い出した。それはたしかザルツブルグの町並木を背景にウィーン・フィルハーモニーの息子のように若々しいヴァイオリン弾きと彼女が二人並んで写っている写真である。しばらく間がありため息をついてから「わたしがどんなに孤独であるかなんてほんとに誰にも分かって貰えないわ。家族をみーんな失くしてしまったのですもの」彼女は主に独語の音楽関係の書物の翻訳をしていて昔私と共に同じ先生についてヴァイオリンを習っていたことがある。

娘に電話したら
「何いってるの、あたし今忙しいんだからあ。人生だって？」と言ってから何やらいつか聞いたことのあるようなメロディーでシャンソンらしきものを歌いはじめた。フランス語だったので最後のところで〝C'est la vie〟（これが人生だ）というところだけしか分からなかった。
M夫人には会ってお喋りをしながら聞くことが出来たので、可成、沢山のことを聞くことが出来た。彼女は散歩から帰ったところで手に桜の枝を持っていた。ほのかにピンク色を帯びた白い花の美しさと香りは遠い昔の感覚をふとよみがえらせ一瞬息苦しくさせる程の何かを持っていた。彼女は話をはじめた。

「私はね、私の人生はね、先ず決して立派なものであったとは思えないわ。大体私達年令の者は人生のど真中に戦争っていう大きな不幸の塊を投げ込まれているって感じね。戦争によって人生が変ったり狂ったりした人はどんなに沢山いるか知れないわ。自分でいてそれで自分でどうすることも出来ない、大きな力に流される自分自身。でも狂ったなりにもそれを肯定すれば面白いことも楽しめたことも一杯あったわ。これから先は分からないけど今までには、どうしようもなく困ったということは無かったみたい。神さまの罰が当らないかしらと思うような悪い感情も懐いたことあるし行動に出したことだってあるわ。そのうちに罰があたるかしら。でも仕方ないわね、自分が悪いのだから、償なわなくてはね。人生には美しいなあと思うものも一杯あったし汚いものも不思議なものもあったし、憎しみやたわいない競争心や、やきもちや恨みなどの火を燃やしたことも。よい事も沢山したと思うし、誰かの役に立つことも結構やった積りよ」
「ふうん、そうお」と私は何んていってよいか分からずに相づちだけうった。
「それにね、悲しいことも結構あったと思うわ。涙を流したりしたこともちゃんと覚えているもの。大のおとながね。絶望感や諦めなど何度味わったことでしょう。その度に神さまから載いたきれいで素直な心が曲げられ、かたくなになっていくのを感じたわ。でも本当に深刻な悲しみなんてものは未経験のような気がするわ、それが来たら一寸怖いな」
「ほんとね、全く。本当の悲しみなんていうものは岐度心の苦しみであるだけでなく体にこたえる、つまり心臓とか胃なんかがほんとに痛んだりするようなものであるに違いないわ。だってハートブレイクとかブロークンハートなんて言葉があるものね。本当の悲しみって怖いものなのね」
「あゝ、それからこれ言うの忘れるところだったわ。人生では一所懸命に戦ってきたっていう感じ。外界のものと戦うのは勿論のことそれも自分の為にだけでなく、

身の回りの家族の為にもね。そして外敵ばかりではなく、自分の内なるものともね」
「だからあなたは何度も戦死したし又他人も戦死させてきたのでしょう」
「あーら、人殺しなんてそんな意地悪なこと言わないで。その桜の枝何処からとって来たの、あなたが枝を折ってくるなんて珍しいことね」
「そうよ、桜の枝を折る人ってあまりいないそうよ。だってすぐに花が散ってしまうもの。これはね、団地の中から折ってきたの、丁度枝が低く下がってきていて手折って下さいとばかり目の前にあったんです。私ね団地のもっと向うの住宅地の中をT.さんと一緒に歩いていたんです。珍しいことに通りがかりの家の庭にダグウッド（はなみずき）の花が満開で、あたり一面の景色と不釣合な位きれいだったわ」
「はなみずきって本当にきれいだものね」
「その時三人のおばあさんが私達の前で道を横切ろうとしていたの。そのおばあさん達はかなりの年令で腰をかゞめ体の平衡を保つ為なのか両足を広ろげたまゝのような恰好でモタモタと歩いていて、進むのだか誰かを待っているのか分からない様子。お互いにあたりを無視したような大声で話している彼女達をみて快い気持になるわけはなかったわ。美しくないものはどう考えなおしてみても美しくない。老いは確かに醜態だ。その見苦しいあわれさをこまごま具体的に描写することは彼女達と同じ年恰好の女として、私のプライドも又T.さんのプライドも許さないものだったわ。T.さんは小声でこっそり私に言ったんです。
『ホラッあそこみてごらん、あの人達を』あたしは何故T.さんが私にそう言ったのかを説明して貰う必要は全然なかったわ。だってその言葉は私がT.さんに話した言葉としてもよかった位だったから。私達は同じ思いをかみしめ、寸分たがわぬ同感の快ささえ感じることが出来た。それはいやーな感じだった。
老いというものはこっそりと忍び寄ってきて肉体のあらゆる所で浸蝕しはじめやがて破滅へと進ませていく自然現象。そのひそやかさは人目のつかぬ静かな入江の浜辺にヒタヒタと寄せては返す波にも似ていて、若い者も更に幼い者達さえもやがて灰にそして土に変えてしまうのだ。死とは無惨で冷酷なもの、強力な拒絶であり、どんなに泣きわめいても動かせない厳しい判決でもある。
何処からともなく吹いて来る微風に盛りを過ぎた桜は花びらを散らしていた。まるで雪でも降るように時折私達にふりかゝって来ていた。
『あの人達は何故モタモタした感じなのか分かる？そうよ、あの人達にはもう次にさしせまってしなければならない仕事とか張り切って果さねばならぬ責任なんかないのね。例えば六時迄に夕食を子供達の為に作るとか七

時にはピアノのレッスンの生徒が来るからそれまでにアレもコレもしておかねば困るとかいったような。なにもセカセカといおうか生き生きといおうか、急ぐ必要なんか全然ないものね。たゞ何んとなく時を過ごしていればいいような。いやね、あゝいうの見るのは』

『あたし達の先の人生を一寸早目に見せてくれているんだわ。私達の姿もあんな風な姿に近いと思うとくやしいわね』

『同感だわ、本当にいやね』二人でフウーッと溜息をついて顔を見合わせたのです。

『でも死に直面したら……そして或いは歩くことも出来なくなったりしていたらあゝいう人達だってとても羨しく思うに違いないわ』『そりゃそうよね。兎角何んといったって生きていてそして桜見物も出来るんだもの』『ふむーう……どうしようもない情なさね』『そして、あゝこれが今の私達の人生なのよ』

その時私はフト思いついたように言ったのです。

『でもね私、もう人生に希望がないなんて言ったら嘘になるわ、希望はあるんだから』『あら、そうお』『っていうよりその希望に自分を託したいような気がするそういう希望。もう色々なことにつくづくたびれちゃってね……』『そういう希望ってどんな？』『何んだか恋人でもいそうな人生の春のようなそんな期待』『へえーッ』『うそよ、そんなこと。本当はね、もう人間は相手にしてくれないでしょ。だから神様に恋をして、そして神様が少しでも反応を示して下さるようなことがあったとしたら――。本当にそんなことが可能であったら私はどんなことにも絶対耐えられそうな気がするの。死ぬことさえ若し神様がついていて下さったなら快いことのような気さえするわ』

『まあ、ずい分ロマンティックなことね、それに死ぬことが快いなんてよくもそんな暗示にかゝることが出来るわね。また神様に恋だなんて何んとはしたないこと言うの』

『そんな言葉を用いると誤解を招くけど私が感じてることは恋なんかよりずうっとハイレベルのものよ。一寸低俗な感じだけど昔こんな流行歌があったでしょ。（せまいながらも楽しい我が家、愛の光のさすところ……）つまり愛の光のさす所だと相当ひどい環境でも何んとも感じないで幸せであり得るっていうことね。産みの苦しみも育ての苦労も物ともしないのは愛とか希望があり、そして又未来を信じているから若い二人の男女の家は楽しくあり得るってわけ。

広漠たる宇宙の中のこのちっぽけな地球上にある私達の世界はほんとは表現出来ない程淋しくてすさまじいばかりに怖ろしい世界なのだと思うわ。若したった一人で地上に立てばね、でも二人の愛がそして又無数にいる人間達の複雑にかゝわり合った相互間の愛がそんな冷酷な

世界をも耐え忍ぶことが出来る位にといおうか否それを上回る位に明るくて楽しくて美しい世界に見せているんだと思うわ。人間同志の愛というものは神様がそのように背後からしむけていて下さるんぢゃあないかしら。丁度、あっても気がつかない空気のように愛はあふれるばかりにあるんだと思うわ。そうでなきゃあとても生きてなんかいられない位ぢゃあないかしら。私そう感じるからそう信じるわ。愛は信頼感を育み更に人間一人一人が希望の灯を輝やかすことが出来るようにしてくれるのではないかしら』

『ふうーん。何だか難しいみたいだけど分かるような気もするわ。私達位の年令になると回りの人達が皆一種の諦めといったような意識で私達に対し、期待もしてくれなくなるし、そのうちあまり本気で相手にもなってくれなくなるんぢゃあない。このことは淋しいことね。まあかばっていてくれるんだと善意に解釈することも出来るけど』『でも神様はこんな私達でも愛していて下さるんだって、そして何かの御用に立てようとしていて下さるんだって。神様の愛こそ唯一のそして我が人生の最終的段階にでも与えられ得る希望なのね』『で、さっきの話に戻るけど神様に恋をして若し駄目だったらどうするの』『だめだったらね……』とまで言ってふと絶望的な無力感がおそった。それは丁度テレビの映像がストーリーのクライマックスにさしかゝった時にパッと消えて白一色となり中央に「終」と出る時のように頭の中を空虚な白さで一杯にした。白さは無であり無は苦しい感覚だ。

神様なんていないのよ。そんなものは無いんだ。無いものを神様と呼び、分からないもののことを神様というんだと思った。しかし気をとり直したような口調で私は言ったわ。『あたし何度だって忍耐強くトライしてみることにしたわ』『うん、そうしなさい。あーあ、そんなことするのも一つの人生ね』と冗談ばなしでも聞いたようにT.さんはからかい半分に笑ったの」

M.さんの話はこれで終った。彼女は「これ、お散歩のお土産よ」といって手折って来た晩咲きの八重桜の枝を下さった。私は「どうもどうも沢山のお話をほんとに有難う。その上こんなに綺麗なお花までもね」と礼をのべた。そして過ぎ去った人生の追憶に沈潜するかのように目を閉じて花の中に片頬をうずめた。そしてそこで人間の若さの持つすべての美しいものが未だ息づいているのを感じるのであった。それは一日の終りに空一面をくれないに燃えたたせる夕映えにも似た純化されたあこがれ、叡知という枷をつけられた愛、そして明日又陽が昇ることを信じる希望でもあった。

結婚

柴田富佐子

「来月の二十九日は、母さんの祥月命日だがら、十二時頃『精進』へ来てくれないかしら」

と姉から電話があった時、咄嗟に、え、今年何年だったか、と指を折った。

「あら、年忌じゃないわよ」

「いいのよ、丁度日曜だから『精進』で食事して、その後お寺でお経あげて貰うの。いつもの法事のメンバーは大体来てくれるようよ」

「え、外の人も呼ぶの」

「うん、結婚した事を披露しようと思って」

ああそういう事だったのかと、私は思った。

法事で何度か使っているので『精進』への道は知っている筈なのに、その日車を運転した娘が曲る角を一つ間違えたばかりにひどく遠廻りをし、その上駐車する場所を探してのろのろと廻っている間に、定刻を十五分も遅れてしまった。私達一家が『精進』の二階へ上った時、もうみな席についていた。私達夫婦は私の従姉妹達の間に、娘と息子は彼等の従兄弟達の間に席を占めた。私が坐るのを待って右隣りの従姉妹が私の袖を引張った。

「環さんからの電話では、伯母ちゃんの法事だっていうから、あたし黒着てきちゃって、困っちゃったわ」

「あたしも、黒にした方がいいのか、お祝いの方がいいのか解んなくて、どっちでもいいようにして来た」

こういう従姉妹は紺のスーツの衿元にピンクのコサージを飾っていた。ロの字型に並んだ二十五・六人の出席者の中には、外にも黒を着てる人が三人いた。その事だけでも何かおかしな結婚披露宴であったが、もっとおかしな事に私は気付いた。

床の間を背に、姉を間に挟んで井草先生と城野が坐っている。井草先生は黒の礼服で、姉はこの日のために作ったらしいベルベットの黒いスーツで胸に金色のコサージをつけている。誰れの目にも花婿花嫁は井草先生と姉に見えるだろう。肝心の城野は、薄茶の替上衣にスポーツシャツで背を丸め俯向いそいる。

「今日位、ちゃんとネクタイしめさせればいいのにね」

母と仲の良かった従姉妹が上目使いに城野を見ながら言った。母の口から城野との長い葛藤の経緯を聞いているのだろう。十年余にわたる長い年月の間に支払われたもろもろの犠牲を考えれば、城野を平服のまま衆人の前に引出す姉の神経が私にも理解できなかった。

甥が司会のマイクを握って立上った。

「では、これから私達の伯母である環先生と城野さんの結婚披露宴を行います。最初に仲人役の井草先生に御挨拶していただきます。」

井草先生と姉は同じ病院の同じ医局のインターン仲間である。小柄なこの人は、若い頃からそのやさしい目と穏かな話しぶりで仲間の信頼を集めていたようであった。姉も又職業上の相談相手として、ずっと頼りにして来た。

「：：：仕事仕事で、環さんは一生行かず後家かと思っていたら、いつの間にかこんないい人を見つけて、今頃になって結婚するなんて言うんで、本当にびっくりしました。

環さんおめでとう。幸福になって下さい」

膝の上でハンカチを握りしめていた姉の手が、そっと目頭を押えた。

甥の紹介で、姉の友人や古い附合いの患者さん、出入りの薬品メーカの人、看護婦さんが次次と祝いの言葉を送った。涙を納めた姉は顔にも体にも嬉しさを漲らせ、一人一人の言葉に笑ったり頷いたりしていた。

集った人達は一人残らず姉の身内、姉の友人、姉の知人であり、これまで陰の存在だった城野の事は噂では聞いていても、会うのは初めての人ばかりである。結婚相手として披露する以上、例え城野がどんな人間であれ、前面に押出す心遣いを姉がしなければ、城野の立場はない。笑いさざめく空気の中で、城野一人が黙々と料理を喰い、ジュースを飲んでいる光景は異様であった。私は姉は結婚という言葉に酔っているだけなのではないか、とその時思った。姉がどれ程結婚したがっていたかを証明する苦い記憶が私にはある。

もう三十年も前、私の結婚式が近い日の事であった。姉は私にこう言った。

「この家は私が借りてる家なんだから、式の朝、この家から出ていかないでね」

当時、母と私は姉が借りて開業している家に一緒に住んでいた。親の家ではないのだから、という意味だったのかもしれないが、私には十才も年下のくせに先に結婚しようとする私に対する鋭い憎悪と受取った。その頃の姉には勤務医時代の仲間の恋人がいたが、向うの事情でなかなか結婚できずにいた。

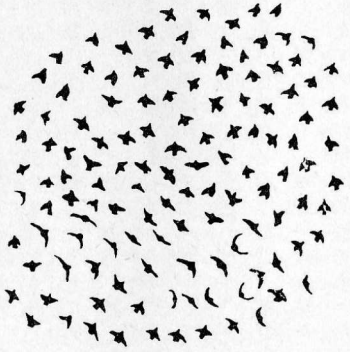
開業して間もない経済的・精神的な負担も大きかったのだろう。母と私は式の前日から式場のホテルに泊りこんだ。

その事は、ずっと私の記憶から消えはしなかったが、年月と共に色褪せ、私にも当時の姉の心境を思いやるゆとりが出来て、その事で姉を詰る気持ちは全くない。しかし姉には、その事がずっと心の古傷として残り、私に対する負い目になっていたようだ。口でこそ言わなくても、姉から何らかの援助を受ける度に――実際姉は私がいくら辞退しても、押しつけがましく割と高価な品物を度々買ってくれた――これはあの時の詫びなんだ、と私は思った。

これまでに何人の身内や友人・知人が結婚して姓を変えただろう。結婚して夫の姓を名乗る、その晴れがましさが、姉にはダイヤモンドの光にもまして輝いて見えたのではなかった。だからこそみんなの反対を押切り、医師免許証をはじめ動産、不動産の名儀書替え、印刷物の刷り直しなどの面倒な手続きをしてまで城野の姓に変った。

姉にとって相手はだれでもよかったのでないか。法的に結婚できて世間に結婚しましたと公表できればそれでいい。その上、その相手が姉を愛し、母がしてくれてたように姉のために家事・雑事一切を引受けてくれれば申し分ないだろう。その点、城野は正にうってつけの男であった。妻子と縁を切るまでに可成り手間暇はかかったが、城野は身一つで姉の城に飛び込んできた。今の城野には姉しかない。姉の頼みなら、いつでもどこへでもプロの腕でハンドルを握る。元来が手まめで料理も器用にこなし、ゴミ一つでも拾って歩く程にきれい好きだという。

結婚は姉のための結婚であり、これは姉一人のための結婚披露宴なのだと思った。そう思った時からこれまで城野に対して抱いていたあのどうにもならない疎ましさが、少しずつ憐れみに変化していくのを私は感じていた。



李赤の雪隠の死

金子正義

唐宋八大家の一人李赤、江湖の浪人で漂泊の詩人、李白に類すとして自から李赤と号していた。

遊士として自由に生きたらしいが、最後は雪隠の神に惑わされて死んだとある、いったいどういう死にかたであったろうか。

私には思い当ることがある。高崎の東部三十八部隊在営中初年兵教育が終了し、幹部候補生として前橋予備士官学校に行く前に幾日かの余裕があった。古兵の目を盗んでは物干場や便所の中で密かに文庫本を読み耽った。

日曜日の物干場見張には進んで出て、襦袢袴下の垂れ下る石積に座り込み、他中隊の者に盗まれないように目を光らせ乍ら読書した。他中隊の者ばかりか迂濶にすれば自分の班の敏捷な奴にやられるので油断が出来ない。

初めての物干場見張の時に文庫本に心を奪われている隙に古兵の靴下を盗まれた。己むを得ず同年兵の僧籍にあった召集兵と組んで、隣中隊の物干場に忍び込み、盗まれた員数を合わせる為に盗む側になったりした。

その物干場の裏手に古い大きな建物の便所があった。各中隊ごとの普通の構えの便所と違って、どうした訳か平家造りの兵舎程の便所であった。区切られた一部屋の大便所は裕に二帖敷程の広さがあった。用便用の穴の側面に両脚を伸ばし、隣りとの境の壁板に背を凭れて楽に本が読めた。

穴から下を覗くと、床から二米程下にコンクリートの糞便槽があって、干乾びた糞便の下は相当な深さである。床の下は隣りとの仕切が無いので、干乾びた糞便は、刈入後の稲田のようにずうと長方形に広がっていた。殆ど使われないので臭気は新兵には我慢できない程のものではなかった。

日曜日の午後は付近に誰も近かづかないので二時間ぐらいは入っていられた。

或る日、不注意にも文庫本を大便穴から下の糞便槽に

落して仕舞った。読んでいたのは確か「神仏習合論の本地垂迹説」で未だ半ば程読み残してあった。

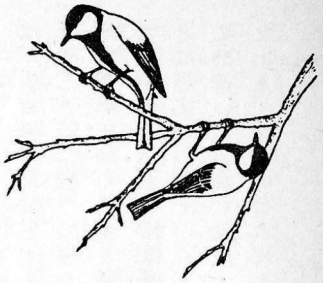
本は干乾びた糞便の上にふわりと乗って浮いていた。軍隊の便所であるから糞便の落し穴は大きく人の頭ぐらいは入る、無理をすれば躰全体も入るようだ。始めは屈み込んで右肩を入れ腕を伸ばしてみたが、どうしても手の届く距離ではない。そこで穴の両側に両臂を掛けて躰を穴に入れ、両脚を垂れ伸ばして足趾で挟み取ろうとした。仲々旨くいかず散々苦労している内に、永い間使用していない便所の床板が変な音を立て始めた。支えた両臂も摺り込みそうになって穴から躙り出ることも出来ない。この儘落ちれば軍隊の糞便槽である、測り知れない深さで恐らく陥ち込んで糞死するであろう、これは大変なことになったと恐怖が背筋を走った。助けを呼ぶ訳にはいかない、それでも苦心惨憺やっと這い上って荒い息を吐き乍ら下の本を覗くと、足先で何度も突き探ぐり、足趾で挟み廻わしたので、本の背を上にした山形の読み伏せた形になっていた。あれに竿を差し通せば何んとかなると思い付いた。物干場の物干竿は長すぎるが、竹垣は手頃な長さだと着想し、密かに物干場の竹垣から一本抜き取って再び便所に忍び込んだ。

漸く成功して掬い上げた文庫本は、ところどころに糞便が黝く凝びり着き、本の地が黄色く染まっていた。苦心の果に戻った本である捨てる訳にはいかない。洗濯場で丁寧に洗い落し、物干場の玉石の上に拡げて一頁一頁乾かした。勿論、物干場当番のような顔をして大きな敷布などの垂れ下った蔭に隠れ乍らであるから、これも辛んどく惨めな限りである。

五月の強い陽光で乾いた文庫本は安物の浅草海苔のようにパリパリと反り返っていた。何にか可笑しさが込み上げてきて

「危く糞死する処であった、これが李赤の雪隠の死と云うものか」

と腹を抱えて蒼空に向って哄笑した。



吉原遊廓

八十島　元

私はいま、江戸の城下町を俯瞰している。家康が江戸城構築計画を天下に布令てから、三代目将軍家光の時代もなかばを過ぎた寛永十七年の完成に至るまで、三十六年間かかっている。

大名屋敷は別とし、城下町として形をなしたのは、北は神田川、東は隅田川、南は新橋を越えること約一粁ぐらいまで。西にいたっては、城を中心に、大名屋敷と旗本の屋敷がぽつぽつとあるくらいと見ていい。

その西方の大地は、麻布台地、麹町台地、市ヶ谷、千駄ヶ谷と凹凸が激しいが、反面、江戸湊とそこへ注ぐ隅田川、それにもまして日比谷の入江は江戸城構築にどれだけ役立ったか知れないし、小石川大池から日本橋の下を流れる平川、赤坂溜池から日比谷沿いの流れなどが江戸城下坂誕生に果たした役割ははかり知れない。

神田山を堀り割りして平川の流れを小石川から浅草川へと変え、隅田川へ通し、水路をふやすやら城の内堀や外堀にするやら、民衆にとっても生活の基盤を築き易い土地柄になった。

新橋から神田川へ向って南北に扇状に四粁近く町家町とし、その両側を城側に大名小路、隅田川側を武家屋敷や蔵屋敷が構えて挟み、その扇状の尖端、神田川沿いの一角にも武家屋敷が屋根を連ねている。

そのどこを見ても、水路には船が往還し、道路は画然と整理され、当時の人々には城下町の端から端まで殆んど頭に入っていたものと推測できる。つまり、ほんの一足で、江戸の郊外に出ることが出来るほどであったのだ。

ところが、松尾芭蕉が江戸へ下って来た寛文十二年頃の江戸城下を俯瞰してみると、北は上野、西は四ッ谷、南は麻布あたりまで町並がやや伸びて来ている。寛永十七年以後三十三年間の変革である。

隅田川から引いた堀割がずっと尾張町の先あたりまで

水を湛えて止っている。これが堀留。その堀留に面し道路ひとつへだてて四方約二百米ばかりの土地を板塀で囲み外郭に巾六米ほどの濠をめぐらせたのが元吉原である。

堀割から大門の橋のきわまで船は入れるが、それ以内は禁じられている。もとは葭の茂った原っぱであったので「吉原」と名付けられ、郭内にその名残りの溜池があるが、多分晴天が続くと、干上りに近いかなり汚ない景色になったことと想像できる。

だが考えてみると、江戸の町は、家康が入国して以来五十年余は、建設事業で世上は精神的に落ち着く暇もなく、ようやく大平の時代の気配がやって来たのはそれからなほ三十余年を要した筈だ。そして、ようやく民衆が大平の息吹きを甘受しだしたのは芭蕉がようやく江戸へ出ようか出まいかとしていた頃である。しかしその芭蕉の知っている吉原は、日本堤の新吉原である。

天和三年に開かれた元吉原が、明暦三年のいわゆる振袖火事と称される大火で、その歴史を閉じるまで四十年は、新吉原が昭和三十一年に売春防止法で消えるまでのほぼ三百年に較べて短かいものだが、つくずく眺めるに、その四十年間の歓楽と愛欲の世界は、大名や武士、そして裕福な町人のものであって、一般庶民のものであったとは思えない。その点新吉原になると、欲には金の世界には違いないが、庶民が充分欲望を果たせる機構に変っていた。だがいづれにしても吉原も新吉原も愛欲がかもしだした事件はさまざまと限りない。

元吉原遊廓の建築様式は大名や金持を相手にするだけあって、華美を尽し、傾城遊興の名を誇ったが、ついに明暦の大火を機に幕府の命によって移転した。代地も元吉原よりも五割も大きく、その上引料として一萬五百両も援助金が幕府から出て、業者達は（まことに有難き代のめぐみにてありける）と歓喜している。

さて新吉原も、大衆へと遊客層が変遷してゆく歴史はあるが、主に芭蕉の時代に焦点を絞ってみたい。

金持から庶民まで巾広く、従って遊女屋にも格があり遊女も太夫から最下級の局女郎と遊客の懐具合に合わせている。

下級の遊女の場合は、すぐ客の求めに応じるが上級遊女になればなるほど、初会（初登楼）、裏（二度目）、馴染（三会目）と飲み喰いの遊興の末、ようやくこの三度目で床入りと面倒なものである。それも、通とか粋とか、になると、まづ引手茶屋で鷹揚に料理を前に飲み、花魁が迎えに来るのを待ってからまた散財し、やがて花魁、禿、太鼓持、番頭新造とを引連れて遊女屋へ向い、そこでも贅を尽した中庭などを眺めながら、三味線、小太鼓にあわせてなにかを唄い……などとやる。

太夫の下が格子（呼出し）、昼三、附廻しの順で上級遊女で、芭蕉の頃は散茶女郎といわれ、呼出しが格子と

稱ばれた頃は中級以下だった。その下に座敷持、部屋持、局女郎と並んでいる。

私の別発表作品（具おほひ）で描いたが、その時の芭蕉の敵娼は、座敷持の遊女を設定した。遊女の呼び名は時代によっていろいろ変り、なかなか呑み込みにくい。

遊女にまつわる事件は無尽蔵である。

痴話けんか、性悪な客や金蔓の客を多勢の遊女が待伏せ、座敷へ引連れて罵り嘲弄するやら髷を切ったりのいたづら騒ぎ、などは笑いを呼ぶが、遊興の果てに支払いの出来なくなった客を楼主が命じて、小窓のある大桶をかぶせ道路に晒しものにしたり、それに加担した遊女や禿も素裸にされ荒縄でしばられたり、雪の降る日など飢えで死亡することもあったという。

その他、遣手婆の遊女への私刑。遊女と客の馳落、心中の仕損じや相対死、恨みを抱いた客の遊女への刃傷、遊女同志の陰惨な争いと切りがない。

遊廓はもしかすると江戸時代の縮図といえよう。

遊廓内は茶屋と遊女屋ばかりがあったのではない。そば屋も寿司屋も銭湯もある。

金に困まれば質店があり、腹が空けば米屋、生活必需品は小間物屋、夜の路地を流れる按摩の呼び笛も哀しく、夜泣き蕎麦屋の爺の淋しげな顔もあった。

夜更けに廻って来るのは、印袢纏に紺の腹掛けに股引、片手に提灯片手に鉄棒をじゃらじゃら鳴らしながらの火の番である。

だが火事は夜に起きるとは限らない。どちらにしてもし火災が起きれば、火消の組織を持たない吉原遊廓は殆んどまちがいなく全滅となる。

ざっと数えただけで、元吉原の時代に二度、新吉原になって大正十二年までに十八度、そのうち、地震による火災が二度、そのひとつが見聞でまだ記憶のうちから消えていない関東大震災である。

芭蕉が遭遇したことになっているのは新吉原になって十七年目の延宝四年のことであった。

しかし、吉原は焼けても楼主達はすこしも困らない。遊女達も囲いの中で束縛されてこそ馳落もあるが、突発的な火災では、示し合わす暇もないし、ただ闇雲に逃亡しても逃げ場所はない。遊廓は仮営業が許され、本所、深川などの民家を借りての仮宅の方が江戸中心に近く繁盛したのでむしろ火災は歓迎したばかりか、吉原の景気が悪くなると火災が起きたりしたこともあり、その原因に謎めいた事件もかくされていたりする。

芭蕉は、情において豊かであり、きびしい道徳観で身をしばりながら晩年を閉じた。だが若いときの多少の遊興があってはじめてその晩年があったことと思う。

其角は一生を通じて粋を通した。どちらが人間らしいかは別の論議である。

昭和六十一年二月

コマーシャル・タイム

三戸岡　道夫

暮にビデオの生テープを、近所のレコード店で、十本まとめて買った。

日頃あまり愛想のよくない店主も顔をほころばせて

「お正月用ですか。これだけあれば、ゆっくりテレビ籠りができますね」

お世辞を言った。

「ええ、安心してビデオが撮れますよ」

「これを入れておきますから」

ショッピング・バックの中に、年末年始TV番組タイトル・シールをサービスに入れてくれた。

そのタイトル・シールにあるように、年末から正月にかけてのテレビ番組は盛りたくさんで、翠川のような録画愛好家には百花撩乱の感があった。彼の録画の中心はその年令を反映して、昔の映画、それもモノクロを中心とした古い名画にあったが、しかしその他にも、美術、音楽、舞台中継、紀行ものと広範囲であったので、録画をスムースにするために、二週間分の番組が掲載されているTELE・PALというガイドブックから、自分なりのカレンダー式の録画計画表を作って、見落しのないようにしていた。

ウイークデイの昼間や深夜のものは直接録画できないので、ほとんど予約録画で切り抜けていた。しかし困るのは、欲しい番組が重復する場合だった。

息子の澄夫も二階の自分の部屋に、専用のテレビとビデオを持っている。だから重復するときはその一方を澄夫に頼めばいいのだが、それが出来ない事情があった。

というのは澄夫がテレビを買うときに、一つの家の中に二台もあるのは贅沢だと翠川が文句を言ったからであった。しかし考えてみれば澄夫も大学生、自分自身の世界を持っていい年令であるし、それにバイトで貯めた金で買うのだと言えば、それ以上反対もできなかった。

といっても、もちろん頼めば澄夫はいやだとは言わないであろう。親と子の間である。翠川の方がこだわっているのかもしれない。多少意地を張っているのだ。

正月映画の録画の心組みは、「オーケストラの少女」、「終着駅」、「誰がために鐘は鳴る」、「哀愁」、「喜びも悲しみも幾歳月」、「チャップリンのサーカス」、「エノケンのチャッキリ金太」、「人肌蜘蛛」とほぼ決めていたが、さて細かく時間をつめていくと、一つネックにぶつかった。

それは一月一日の夜で、映画「喜びも悲しみも幾歳月」と、バレエ「デイオニソス」の時間帯が重なるのである。木下恵介監督になるこの名作は、折があったら市販のビデオソフトを買おうと思っていたくらいであったから、やめるわけにはいかないし、またバレエの方も、世界的に活躍している現代バレエの演出家モーリス・ベジャールの作品をベルギー国立二十世紀バレエ団が公演するものだから、これも絶対逃がすことはできなかった。

どちらも欲しい。だが駄目だとすれば、残念ながら片方を諦めるしかないだろう。もし諦めるとすれば市販でも入手可能な映画の方ということになろうが、買えば一万八千五百円もする。ちょっと勿体ない。

やはり澄夫に頼むしかないか。そろそろ澄夫との間も修復する時期かもしれないと翠川は思った。

そう考えると気持の切り変えは早かった。もともと翠川が一方的に意地を張っているだけで、たいした問題ではないのである。

さて、そう決めたのはいいが、いざ澄夫に頼むのは映画とバレエのどっちにするのかという段になって、翠川にちょっと迷いが出た。バレエはNHKでコマーシャルがないが、映画はフジテレビなのでコマーシャルをカットしなければならないからだ。頼むとすれば技術的に面倒をかけないですむNHKのバレエということになろうが、頼むのがバレエの方だということになると、絶対澄夫は失敗しないだろうかという心配があるのだった。映画の方なら万が一失敗しても金さえ出せばもう一度市販で買えるが、バレエの方はそうはいかないからだ。

そう翠川が思うのは、澄夫がこれまでに友達から頼まれた録画を二度ほど失敗していることを知っているからであった。一度は録画チャンネルのセットをまちがえて他の番組を撮ってしまったし、もう一度は開始の時間がおくれて最初の部分が飛んでしまったという失敗である。

今度もそうしたミスが絶対ないとは言いきれない…、とすれば…、翠川は、とつ、おいつ考えながら、結局九時三十分からのバレエはまず自分で録画することに決めた。そうすると映画の方は必然的に澄夫ということになる。コマーシャル・カットまで頼むのは無理だから、コマーシャル入りで我慢するしかないだろう。

だが、それでは、いかにも、すっきりしない。とすると、これも自分で撮るしかないか。しかし自分でやれば

映画の頭が十五分飛んでしまうのだ。バレエは九時三十分から十一時三十分まで、映画は十一時十五分から午前二時三十分までと、バレエの最後と映画の最初が十五分重復するからである。

だがその時翠川は、重復する、重復するといっても、重復する時間は、わずかに、この十五分だけではないかということに、はじめて、ギョッとするように、気がついたのであった。はたと頭の中に妙案が浮かんだ。

夕食のとき、澄夫に

「今夜、ビデオ、撮ってほしいのが、あるんだけど…」

切り出してみると、案外あっさりと

「うん、いいよ」

澄夫の方でもそうした機会が来るのを待っていた節があった。

「ちょっと変ったやり方だけどね」

「どんな…？」

翠川は撮りたい番組のことを話し

「重復する十五分だけを澄夫が撮ってくれればいいんだよ。階下では十一時三十分までバレエを撮っているから、十一時十五分になったら澄夫の方で映画を撮りはじめてくれ。バレエが終った時に、映画のテープを外して持ってきてくれれば、あとは下で引つづき映画を撮る。テープの移動には最初のコマーシャルの時間を使うのだ」

このコマーシャル・タイムにテープを二階から一階に移動させるという案は、澄夫にも気に入ったらしく

「うーん、面白いね。空とぶテープというわけか…」

まるで小さな冒険にいどむかのように、はずんだ声を出した。

「じゃ、これを渡しておく」

渡されたテープと番組内容のメモを持って、澄夫は二階の部屋に引きあげていった。

九時三十分になると、NHKの「デイオニソス」は始った。鬼才モーリス・ベジャールの演出による肉体と色彩とリズムとの強烈な混合は、圧倒的な迫力で、白鳥の湖や眠れる森の美女などとは異次元の美の世界に吸いこまれていった。やがて場面構成の流れから、そろそろ終りに近いなと思い、時計を見ると、ぴったり十一時十五分。翠川は思わず天井の一角を見上げて

「おい、スイッチ、大丈夫か？」

澄夫の部屋に呼びかけた。この一瞬にスイッチ・オンを過まれば、すべてが水の泡なのだ。二階に駆けあがって確認したいくらいだった。

やがてクライマックス・シーンがきて、バレエは終了した。

スイッチを切る。

テープを取り出す。

チャンネルを3から8に切りかえる。

受けいれ態勢完了。

途端にテレビの画面に、「喜びも悲しみも幾歳月」の燈台守夫婦の、佐田啓二と高峰秀子の顔がクローズアップされてきた。

翠川はコマーシャルの来るのを待った。

十一時三十五分…、四十分…、なかなか来ない。やっと十一時四十五分に近いころになって、最初のコマーシャルが入った。

世紀の一瞬。

翠川は顔をあげて、二階の気配いをうかがった。澄夫はスイッチを切り、テープを外し、大急ぎで駆けおりてこなくてはならないのだ。

だが、その音がしない。

翠川はいたたまれなくなり、部屋を出て、二階の階段を駆けのぼった。

そのとき、ドアの開く音がして、テープ片手の澄夫が廊下を走ってきた。その姿を階段の途中で見上げながら

「ああ…」

感きわまった声を出すと、澄夫の方も

「うん…」

興奮した声で答えた。

「早く…、早く……」

短いコマーシャルの間に受け渡しを完了してしまわなければならない、という緊張感が、二人を一体にさせていた。階段の途中でテープを受けとると、部屋に駆けこみ、口を開けて待っているビデオ・デッキに音をたてて差しこんだ。

ガチャンと蓋をしめる。完了。画面を見る。まだ、コマーシャルが続いている。間にあったのだ。

映画が始った。

スイッチを入れる。テープは回転しはじめた。

「ありがとう」

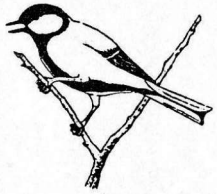
「成功したね」

二人はまるで、ロケットからロケットへと移転の放れ技を演じた宇宙飛行士のような興奮にかられて、しばらくテレビの前に頭を揃え、なにか大切なものでも眺めるように、画面にしばらく見入っていた。

「これが佐田啓二…、中井貴一のお父さん」

「うん、知っている」

（終）



夢芝居

大和禎人

なにやら島倉のお千代さんがあたりをとった演歌の題と同じみたいですが、この掌編の外題はこのタイトルをぜひ借りたいと彼の切なる希望なのです。

（この話はわてが主役じゃ、題はわてが決めたる）

と言う経緯があったものでありました。

なんとなく襟首摑まれた案配で、身動きもならず、足下にフワーッと寒気が走るような、一度も乗ったことのない飛行機の旅でおました。わてそりゃあ神妙にしておりましてん。ダッチロールなんてことになりましたらいやでおますものな、とにかくも地球から足は絶対離しとうないと思うてたわてとしたことが、一体どうしたことと思いますやろ。な、そうでっしゃろ。ともかくわてむしょうに会いたい人がでけましたんや。むこうも会いたい言うてからに、手紙くれよりれましてん。いえ、いえ、それが、なんの、男ですねん、なんとも不粋でおまんな、むこうさんでもこっちゃへ向って、ある場所で落ち合うことにしとりますんや。

わて、見とうもない夢いまもって時々見よりますねん、ほんま、未だに見よりますねん、なしてわて何度もシベリヤへ送られんならんやろ思うて、それはもう恨めしくなりますねん、やりきれぬ気持だす、ああ、またあの夢や、頭の隅でそう思うとりながら、繰り返し見るのだす、大声で助けをもとめ叫びたくなる思いだす。

……

ところで、これからわての会いにいくのはそういう仲間だす。そうだす、シベリアで偉ろう苦労なめた仲間だす。あちらさんは中尉さん、こちらは伍長。中隊長と分隊長という関係でおます。おかしな組み合わせだっしゃろ、そこんところにこの話の意味があるのでおます。

八月十七日になって敗戦知ってからに、兵隊が何人も脱走しよりましてん。

「いいか、脱走者は戸籍に傷がつく、行動を過ってはならん、脱走はならぬ」

中尉さんは本当にそう思っていやはったんと違いまっか。戸籍に傷がつけば内地に帰って困りますわな。この際の殺し文句は効果がありよりましてん、そうでのうても脱走したところでどないして家族のいるところに帰れますねん、兵隊は弱いもんだす。悲しいものだす。羅南から東に移動して定平いうところにしばらく集結して幕営をしておりましてん。すると、なんとどうしたことでおましたか、もはや敗戦した日本軍というのに、いまさら一割ほどの招集解除がありましてん、わてそん中の一員でおました、名前呼ばれましてん、当然でおましたろ、なんせ長い兵隊暮しでしたがな、さすがほっとしたことでおました。

ところが、ここであの村瀬が中隊長に泣きつきよりましてん、自分を解除して欲しいというものでおまんがな、なかなか自分の口からは言えんことを申し出たものだす。奉天に妻子を残す村瀬はとくに細君の臨月を控えている事情を訴えよったのですねん。

ここでわてらの部隊の成り立ちが現地招集であったことを申しておかなならへんな、関東軍は北朝鮮の守りをもしよりましてん、羅南に入隊した我々の仲間は家族を大方満州に残していたのだす。じゃけん、脱走しても、たとえ解除されてみても、危険な北を目差す以外はなかったのでおます。不安がありましてん、ここで解除はいいが、放うり出されてどないして家族のもとに帰る、ソ連軍はすでに南下を始めている情報をわれわれは聞きよりましてん、率いるはターニー少将とか、どないしてそれがわかったものか今思うても不思議でおます。ま、なに少将であろうがよろし、そうした情況下いずれは武装解除される、その時までは集団の中にいるからこそ心強く、むしろ安全、一人一人ではもはや生き抜けぬ、そんな運命を皮膚に感じとっていよりましてん、解除者も手放しでは喜べぬ四囲の情況でありましてん、脱走と同じことで解除されればされたで計り知れない危険にさらされる覚悟が必要でおました。むしろ大勢と運命をともにという考えが浮かびよりましてん。

しかし、その頃はまだ、と、いっても九月に入っておりましたんやけど、まだ満鉄の社員など運ぶだけの汽車は確保されていたようでおます。すくなくとも、鴨緑江までの朝鮮の中は列車がなんとか無事に動きよりましてん。ほんまだす。

で、わてかて帰りたいはやまやま、そうした外部事情を知らないところへ、中隊長が困った言うてわてに相談しょりました、村瀬をどうするか言うて、まこと敗軍の無秩序を暴露するようなことでおました、ふと、わて譲

る気になりましてん、先か後の違いこそあれいずれは帰れるものと思うとってからに淡白すぎましてん、これが運命の岐かれ道でおましたな。

村瀬の喜びようは大変でおました。無理ないこったす。まるで小踊りするように幕舎を彼は出ていきよりましてん。

ほんま、わても功徳施しましてん。しかし同時に心細うもなりましたわな、わてこの先一体どうなる、思うてよう寝られませなんだわな。情けないこったす。男らしゅうおまへんな。

われわれの部隊が武装解除をうけたのはそれから間もなくだす。そしてシベリヤ抑留生活という過酷な運命に堕ちましてん。

部隊もろとも、中隊長ももちろん一緒だす。階級はすでに無意味でしたが、そこは盗作問題まで起した山崎豊子とかおっしゃる人の「不毛地帯」やまたその原著者を名乗る今井源治とおっしゃる人の「シベリアの歌」にそっくりの生活でおました、階級に生きてきた方々が、階級ゆえに苦しむ、日本人同志の奇妙な相克を避けられないという悲劇はいくらでもあったことでおます。

素っ裸になったヤポンスキー
ジロリと一瞥
「マワレミギ」
脈もとらず
「一キュウ」「二キュウ」「三キュウ」
判定

われわれはこうしていくつかの運命に身をまかせ、より重労働に、また何処とも知れず貨車に乗せられ行く方も知らず、運命のまま流転して止まぬ月日を明け暮れ、絶望の日々だけがありましてん、中尉は職業軍人ではありませんでしたから、なんぼか辛うおましたろう、純粋なお人だけに気の毒でおました、

「あんたには悪いことをした、あの時解除になっておれば……申し訳ないことをした」

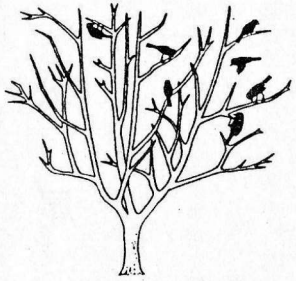
わてに向って言うのでおました。なんべんも言いよりましてん。むしろわてが慰めたくらいでおました。運命ですわな、それにしてもどえらいドラマでおました、戦争という魔力に引きずりこまれた人間の運命なんて、この際は激流に漂う藻しべみたいなものでおます。その（過酷）の分だけすべていまは自分でさえ信じがたい悪夢のようでおまんがな。伍長は中尉を慰め、しばしば励まして生きよりましてん、死んでたまるかと互に生き抜きましてん。わては中尉より年上でおましたから、しかたおまへん、年の功だす。兵隊はこの生活の中では雑草のように強ようおました。

あの際、村瀬という兵隊を解除することでは二人の謀りごとがそのとうり実現しよりましたが、わてが譲ったことを徳とし、また逆にそのことで罪を意識する、いわば二人だけの秘事を共有することから心がかよいあい、触れあいをもちましてん、これは、わてらの言語に絶する体験の中の一つの友情でおました。あくまで不思議な将校と兵のそれは友情でおました。

いまとなれば夢芝居見る思いだす、よう見る夢の中だけに生きるいきさつだす。あの極限に生きて夢とは不都合でっしゃろが、ほんまだす。人間本来は楽天的なのと違いまっか、時が経てば忘れもする、それでいいのでおまっしゃろ、あの村瀬という兵隊が無事家族のもとに帰り得たものかは不明だす。聞くところによれば、脱走したり、解除になった兵隊の多くは汽車で国境までどうにか行き、鴨緑江をなんとか渡り、捕えられた者もあり、また奉天までを歩いて辿りつく者もあったといいます。

わてこれから中尉に会うて手を握りしめたいと思うとりますねん。ちぎれるほどに、と思うとりますねん。

（六一・二・四）



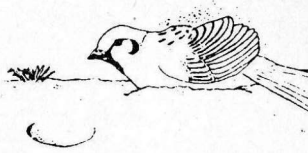
三戸岡道夫寸描

どれだけ空想の糸を吐けるか、これは作家資質にかかわる大切なポイントに思われます。氏はその点で仲間うちに群を抜く人です。しかも速筆ですから申分ありません。締切に必ず間に合う、間に合わせる、これはそれだけでも立派な技量と思われるものです。遅筆は決して自慢にはなりません。まして、実体験や書く時間に乏しいことを歎くようなら、これまた小説など書く資格はないと思います。三戸岡さんはこの上なく多忙の身で、しかもそれが出来る人です。覆面の都銀副頭取の役職にある人と聞いてはきっと驚かれる方も多いに違いありません。

「ソクラクレス」、「別の世界」、「黒いバス」などの奇智縦横の作品群があり、また「絢爛の哀れ」のようなしっかりした歴史物があります。

昭和二年から七年にかけていわゆる円本時代に平凡社から刊行された「現代大衆文学全集」全六十巻を若い氏が揃いでポンと買い込まれているという話はわれわれの耳に新しく、びっくりする事でありました。偏狭な純文学の垣を破る旗手を氏に期待してやみません。

（Q太郎）



松尾芭蕉

貝おほ

八十島　元

一

日本橋本小田原町は魚問屋が軒を並べている。中でもひときわ目立つ店構えは、幕府御用、屋号が鯉屋。主人は杉山市兵衛で俳号を杉風という。

そこののれんの端をぱっと鳴したかと思うと、店のなかから草履をつっかけながら出てきた大柄な若者がいる。丁稚でも手代風でもない。総髪を無造作に束ねているが武士ではむろんない。ちょっと粋な着こなし、風貌も品よく垢ぬけている。その後からあわただしく顔をのぞかせたのは紛れもなくこの店の主人市兵衛で、

「高札場にちがいありません、きっと……あそこにおれらますよ。信章様が物見高いお人だから……いやでつもきあわされておいでに違いない。早く桃青様をつれきてて下さいまし」

せかされて若者は迷ったように左右の人混をすかし見てから足早に日本橋の橋に向って歩きはじめた。

今日昼近く、商家の若い妻と手代が不義密通の末心中を仕損じ、日本橋の南詰東側の高札場に晒された。もう日が西の雲を赤く染めだしているから、男女とも首の根も坐っていないだろう。三日間の晒の後非人の手下にされる運命が待っている。一日で舌を噛み切って死ぬ力もなくなるらしいのが常だ。

「へっ、酷いこっちゃ。まったく……それにしても師匠もいつもならとっくに帰っているのに、どこをうろついているやら……それどこじゃねえお方が尋ねておいでだというに」

若者はぶつぶつ口にしながら目はきょろきょろ探している。

師匠というのは俳号を桃青といい、後の芭蕉である。若者は其角という。桃青の連れの信章はやはり後の山口素堂だが、今朝早く二人連れ立って、隅田川を浅草まで猪牙船で遡り吉原へ、そして駕籠か馬で浅草田圃の風に

吹かれながら日本橋堤を帰ってくると云って呑ん気に出掛けていった。

その留守に、桃青を頼って、伊賀上野から、身内の者と名乗る幼い女児を二人ともなった女が尋ねてきたのだ。

手代の伊兵衛がやや訳知りらしいが、杉風も、ちょうど来あわせていた其角もただならない予感がして、その対応に戸惑っている。

吉原からは半刻もまえに桃青も信章も戻っていた。杉風と其角の想像どうり、高札場の人だかりにはまり込んでいたのだ。

桃青が人の肩と肩のあいだから掻いま見たものは、男も女も散ばらに崩れた髷が真黒に胸へ垂れ、括られた躰が坐らされた膝の上でくの字に曲り、口から吐き出されたらしい汚物に彩られていた。

しかし桃青は目を反さなかった。彼は胸の中から湧きあがってこなければならない筈の言葉を待っていた。そしてついにそれが無駄だと悟ったとき、顔をそむけて雑踏をかきわけながら橋の中央までくると、欄干に両肘をついて、輻湊する魚船や荷船の水尾を暫く黙って眺めていた。

「いやなものを見てしまったものです」と桃青が云った。

往き交う船の櫓のきしる音が、澄み切った水の中に水尾と一緒に吸いこまれてゆきそうな感じだ。

春とはいっても、まだ遠く眺められる富士の峯は白々と雪におおわれていて、頬を弄る風のほんのりと冷いのは、そこからやってくる気分がしないでもない。

信章は目を細め、

「やじなど飛ばす者もいたが、ほんに気が知れぬ……色恋なくてなんの浮世か、と云いたいが、色と欲と力に気儘になりたければ死ぬより仕方ないのが世相。それでなければわれらがようにものに執着しないか、世間のはみだし者になるしかないですなあ」

「こうゆう事件を見聞きする度、私は浪花商人の井原鶴永を思いだします」

「ああ談林派の先輩ですな」

「私は京にいた頃、二三度たづねたことがあります。俳諧に飽きたらず、浮世草子に手を染めはじめたと熱っぽく訴えられました。金と愛欲の姿を描きたいと……それは醒めた眼で浮世を見つめているのを感じました……きっといまに名だたる散文家になることでしょう」

「二年ほどまえに、名も西鶴と改めたと聞き及んでますな」

「それに会ったことはありませんが、近松門左衛門という人。やはり男女の人情を描いて浄瑠璃作者をこころざしているとか……世相の膿を出していてくれているのです」

桃青は激しく顔を二三度振ると、節をつけて唄いだし

た。

「伊達も浮気も命のうちよ。やがて死ぬ、死ぬ、ひっぴけ、うんのめ。あすをも知らぬ身に……」と欄干を離れて歩きだしながら、「伊勢のお玉に乗りたがり、京女郎にホの字……とは」それを引き取って「……とは、この放蕩児……」と信章も桃青の背中へ投げかけるように唇を突きだして行った。

信章は桃青と同じ三十一才。近頃上方談林に対抗した江戸談林という新風の担い手で、桃青は彼の感化をずいぶんと受けてはいたが、すでに其角、嵐蘭という弟子もいて、住居やら生活やら、いたれりつくせりの世話をしている鯉屋の杉風も、暗黙のうちにそんな雰囲気になりつつあるようだった。

杉風にとって放浪者桃青は転がり者だが、性来の大商人らしい侠気と、手代の伊兵衛の叔父という関係もあって夜食はもとより、他へ住みたいといわれればほかへ、ここがよいと呟やかれればここにと、手厚く、主従のように尽している。

「師匠、お師匠！」

「おっ、其角ではないか」

「おっ、其角ではないか……ではありません」

「そのような怖い顔をして……女をと鹿や毛に毛がぞろうて毛むづかし……」

「ふざけていてはいけません」

「これがふざけずにいられるものか」

「そちらにはそちらの事情もあるでしょうが、こちとらの事情も聞いてもらいてえ」

其角は半分そっぽを向いて巻き舌になる。

「どうなされた、其角どの」と信章が云う。

「はい、実は師匠を尋ねて子連れのお女中が伊賀上野からまいられています」

「伊賀から……それは、幼い子が二人か…其角……それはおなごか」

「はい」其角は桃青の眉間が曇ったので、やっぱり、と思った。「では、寿貞とは云わなかったか、その女は」

「確かに、そう名乗られて」

「さようか」と桃青は不機嫌に黙って歩きだした。

二

鯉屋の二階の奥まった杉風夫婦の部屋に寿貞と幼い娘二人は、手代の伊兵衛のまめまめしさに戸惑いながら、旅の垢をとすすめられる湯浴みも遠慮したり、真新しい衣服も部屋の隅へ押しやって固辞したりしたが、さすがに寿貞自身は食べなかったけれど、娘達が運ばれた食膳のものをむさぼるのを、ほっとしたように見つめていた。もう伊兵衛も階下に降りていた。

そこへ廊下をきしませて桃青だけ上ってきた。

けれども彼は、閉された障子に背を向け、手摺に両掌

をかけて立ったまま中庭を見下ろした。

杉風自慢の紅梅白梅がほんのり彩づいて、池籔の水面に影を映している。深いみどりにときたま赤いものを混えて池の色が動くのは、飼われた鯉の群れが移ってゆくからだろう。

「約束がちがうではないか」と桃青は云った。

「あっ」と声がして部屋の中で立上る気配がしたので

「障子を開けてはいけない」とまた云った。

「時期がくれば呼ぶ、と私は云った筈だ……住むべき家もない、浮草のように昨日はその岸、今日はここと流れては、食わせることも出来ず、ひとつにいては門人の手前も工合悪いと因果を含めての離れればなれだ」

「わかっています」と寿貞の云いかたにはちょっと恨みがましくけんがあった。

「名をあげれば、大名旗本の俳席に呼ばれるようになり、たつきも立とうが……今は、やっと神田上水堀割の役所日記係のような役人まがいの仕事をやっているが、それも非番が多くてままならぬ。それも他人の食客でぶらぶらしているのも退屈だろうからと、本船町という町の名主が周旋してくれたのだ。だが私は習俗事にうといし、日記書きなど、ぶらぶらしているよりまだ退屈でいやになっている近頃だ……」

「忠左衛門様は、京においでの時からちっとも変られません。ずいぶんなお方」

「ずいぶん……か。私は今、桃青、と名乗っておる」

「その桃青様、なぜお頼り申してまいったかをお尋ね下さいませ」

「おお、聞きたい、おふうは達者か。おまさはあい変らずお茶目か」

「そのおふうもおまさも、ここにおります。なぜ、逢おうとなさいませぬ」

「なぜ、と問われて、そなたに理の通る、納得のゆく返答は出来ぬだろう」

「それは、女の考えは浅そうでございましょう。でも、おはぐらかしになってはいけませぬ……桃青様……あなた様は昔から、そのように、はっきりとお心をお示し下さらないお方ではございましたが……なぜ親子の情に障子をお閉てになられたままでございましょう」

「あははは、寿貞、私は別に浄瑠璃の中の真似事をしているわけではない。不憫な、と思えばこそ私の本心をはじめにこのように現わしただけだ」

「相変らずまわりくどいお方……で、ご本心とはさぞかし、どこぞご門弟衆の眼に触れぬところへ、とのお考えでございましょう」

と寿貞はそろっと障子を開けた。着ているものは粗末でも、武家の妻女風な身拵え。

桃青の方でも、もう障子が開かるな、そんな呼吸は心得ている女だと思っていたので、すっと腰を降ろしたと

ころだ。今日、吉原での馴染の女の顔と、日本橋高札場での晒者の男女の姿態とが重なりあって映ったので、桃青はぱちぱちと目をしばたたいた。寿貞の瞼に涙があふれていたので、桃青はうろたえ気味の表情。

寿貞は両脇から二人の娘を押し出した。

「おおっ、おふうにおまさか。二年振りで大きうなった」

姉のおふうは病弱で、こめかみにうっすらと血の脈の筋を浮かして、ときどき眼をきつく閉じる癖のある児だ。妹のおまさは御俠でよく近所の子供を泣かす児だった。

京に寿貞親娘を残して江戸へ出たのは、桃青にちゃんとした目論見があってのことではなかった。どちらかというと気分に流される性格があって、悪くいえば怠惰だが、なにかひとつことに夢中になると寝食も忘れるが、そのあと二三日は体調を狂わせて、ひがなごろごろ寝ていたりした。

上方も面白くない、郷里の伊賀上野も近いし、主家を脱藩した身であればなんとなくいろいろ噂も流れて煩わしいので江戸へでも出てみるか、といった少し無責任な、思惑ともいえない思惑であった。

北村季吟のもとで俳諧をつづけたのもいはば惰性のようであったかも知れない。季吟は旧主藤堂良忠の師であったから、死んだ旧主の師を京によりどころとして求めたとしても自然のことに違いない。そして桃青がもし彼を師と呼ぶことが出来るとすれば、季吟の書斎にねむっていた、古事記、古今集、源氏物語、百人一首、謡曲など古典を読むことを勧められて読破したこと。連歌、俳諧の式など、語らいの中で盗み学んだことからだろう。退藩後の桃青は、漢詩を伊藤坦庵、書を北向雲竹と精力的であった。

その狂気のように使った精力の余滴みたいなものがいつまでも続いた。

謡曲を読み漁り、小唄、端唄にまで及んだのだ。その結果、俳諧仲間と俳諧好きの商家などに招かれたりすると、自然酒席になり、色の街巷へくりだす。小唄、端唄のひとつもうたい、洒落も玄人筋に受けたりしては他愛なくのめりこむ。

むろんそんな生活が桃青の経済力で出来るわけもなく、彼自身が意図するとしないにかかわらず、俳諧仲間の誰彼に混って調子づいていれば、態のよいゆすりたかりにあっている商人がいたりした。

そんな仲間にも飽きあきはする。北村季吟にもそれとなく窘められる。

「同じ京に住みながら、なぜ寿貞どのと離れてお暮しか。それも上のお子が軀が弱いとお聞ききすれば尚更のこと」

桃青にしてみれば季吟の苦言は一番堪えた。寿貞親娘のことを云われてしまうと、もう京には居場所がなくなったように思われた。

自由奔放、悪くいえば放浪の身が桃青は欲しかった。季吟のもとで、彼の古典注釈の執筆をときたま助けていたので、その礼として、季吟が寿貞親子にいくぶんかの生活の足しにと届けているのを桃青は知っている。

伊賀上野の兄半左衛門から季吟宛に信書が届いているらしい口振りもあった。むろん、表面上は、弟の身を案ずる、という内容に違いないが、寿貞のもとに届けられるものは、桃青の行状が耳へ流れてきて迷惑だ、といった意味を言葉に衣を着せて云ってきている。寿貞は、それをいちいち種に桃青を責めるような女ではなかったが、不用意にしまわれていた書状を寿貞の留守におとづれて目に触れたことがある。

桃青は季吟の苦言をしおに江戸へ出る決意をし、寿貞親子には因果を含めて、伊賀上野で暫く時期を待て、と旅立たせることにした。桃青に父親としての情がない訳ではない。おふうにもおまさにも古びた着物しか着せられなかった。いつも子供のことは忘れなかった、といば嘘になるが、俳諧好きの商人の御機嫌をとり、酒の席になり、はてに三味線鳴りもので鱈腹食べて、芸妓と縺れている遊び仲間を見るともなく見ているうち、ふと寿貞親子のことを思って、なにか悪い夢でもみているような気がして、ぞっと酔眼を見開いたことがある。

桃青は気を変えて自分も一緒に京を発つことにした。

伊賀上野へ寿貞親子を伴って帰郷した彼は、はじめ赤坂町の私宅へ兄半左衛門をたづねたが、留守居の老婆が、お勤めで夫婦共々主君の中屋敷へ詰めているというので、上野城の東、玄蕃町にある藤堂家の重臣藤堂良長の中屋敷へ行った。ちょうど運よく主君の用を終えた夫婦がお長屋へ戻ってきたところであった。半左衛門は事情を聞くと、桃青や寿貞や、おふうにおまさを俯向きかげんにそれぞれ視線を移しうつし「うむ、うむ」と喉の奥で声をだしているが、あぐらの膝を指が叩いているのは否定的な表情だった。はじめからこころよく寿貞親子の世話を引受けてくれるとは思っていなかったから、人の良い嫂を口説くつもりでいたので桃青の軀は兄より彼女の方へ向いていた。

六年前、桃青の退藩のとき、寿貞ともども一番世話を焼いてくれたのは嫂であった。

「お咎めのない身とはいえ、脱藩者であることを忘れてはなるまい」と半左衛門は云った。

先君良忠公とその死去のときにまつわる、その小姓だった桃青と良忠公の侍女だった寿貞とのさまざまな噂が藩内に流れた、そのときのことを半左衛門は云っているのだ。

そればかりではない。良忠公が俳諧に嗜みがあり蟬吟と号し、甚七郎といった当時の桃青に俳諧の手ほどきをしてくれたり目を掛けてくれたため、同僚の嫉みもあっ

てかなりきわどい噂が伝播した。

良忠公が死逝したのは桃青の二十三才の時である。古来、主人の死にさいして恩顧を蒙った臣の殉死があったが、いつの時代でも禁じられてもその例が絶えない。徳川家の代になって寛文三年に幕府は、強く禁止を触れた。にもかかわらず、桃青の殉死の意志のないのを詰る声が囁やかれた。

「理不盡である」と一部の者の不穏な視線を浴びながら桃青は次第に自棄になってゆく。いっそ殉死してやろうか、と夜中に短刀を抜いて明方まで刃を眺めていたこともあった。

そのうち、今度は兄半左衛が屋敷から帰ってくるとあらぬ噂があることを聞き及んできた。それはこうである。

桃青は主君の死をしをに武士を捨て、自由気儘に生きるため俳諧で生きてみようかと莫然と考えていたので、その旨をそれとなく先君の夫人に伝えようと、一刻ばかりお目通りをしたことがあった。そのときいづれ家督を継ぐべき幼い良長君がいて、庭の竹垣にとまっていた蜻蛉を獲ってくれとせがまれ、羽織を脱ぎ、薙るようにしてとらえて幼君を慰めた。ところが羽織の袖を破ってしまった。それを見た夫人が、先君の侍女だったが、今は良忠君の腰元になっている、寿貞に縫うよう命じた。

それが噂の種になっているに違いない。

足軽ほどもない身分で夫人に懸想し、度々夫人の部屋へおとづれ、幼君の機嫌をとり結び、あろうことか腰元の寿貞とも逢曳を重ねている。というものであった。

寿貞とは桃青の母方の親戚筋の女であるが、早く両親を亡くした頼る者のない、松尾家と同様身分の低い出生であった。

半左衛門は苦虫を噛んだように「お前があまり噂を生んでくれると、書で生計をたてているから藩の子弟が来なくなっては困る」と云った。

夫人は桃青の武士を捨てるという意志を許さなかった。良長に忠勤してくれと逆に頼まれる始末である。

寿貞とは、そんな噂がたつと不思議なもので互いに意識するようになった。

桃青も出仕を怠るようになる。それに対する非難がかかまる。それでなくとも桃青はすでに武士としての将来に希望を失っていた。

先君の跡目を継いだのは、弟君の良重であるが彼には彼の生れついてからの家来がいる。やがて当主となるべきさだめの先君の子の良長君にも同様であるし、夫人は良長のために勤めて欲しいとはいっても、家中の雰囲気は自然桃青は余り者の存在になりつつあった。それも部屋住みとあっては藤堂家における将来は彼にはなかった。

桃青はある夜、藩への届もなく、ただ一人自分に理解のあった隣家に住む同僚の家の門の前に手紙を残し、京へ発った。後日、自分を追って来る筈の寿貞を心にえが

きながら。

三

嫂の説得もあって、半左衛門はしぶしぶ寿貞親子の世話を引受けてくれた。それから二年の歳月が流れてしまった。

家庭を持ってしまうことが、自分にある筈の才能を殺すだろうことを桃青は予感している。武士も捨てた。家庭という世間的な幸せへの憧憬は捨て難いが、そこに安住しては昨日新しかった俳諧の流れが今日は古びているめまぐるしい流動の渦にすら触れられなくなってしまうだろう。

今年の秋には、談林派の総師として全国の俳壇で注目を浴びている西山宗因が江戸へ下ってくるという。その報が桃青の元へも大名俳人内藤風虎からとどいている。それはとりもなをさず、自分の俳壇的地位がいくぶんでも世間に認められかけていることを示すものだ。これで運がひらけるかも知れない。江戸における生活の見通しもたつようになれよう。ひとかどの宗匠としてたとうとする白い夢に淡い色がほんのりとついてきたように思う。

「俳諧の天地一風にして白土と化し、今また一風にして赤土と化そうとしている。時の流れに乗じ、時の流れより頭角を現わして新風を起すは今ぞ」と桃青は思う。

松永貞徳総師とする貞門の風は衰え、談林の風に染まりつつある。古い貞門を固守していては門人達が離れてゆき、宗匠としての地位が危くなってゆくとすれば江戸に数あるそれぞれの俳諧師達も、談林の色彩を容れざるを得なかった。

桃青は誰をも師として仰いだこともない、吹き荒れる談林の風の外にいるわけではないが、西山宗因を時の主流として認めたうえで「やがて談林も昨日の俳諧となろう」とも思う。

信章と知りあったのは桃青が江戸へ出て間もなく、京の北村季吟か紹介状をもらって尋ねた小沢卜尺と結社を起した時、やはり京から江戸の新天地を求めてやって来た、卜尺と同じ季吟門の人たちの中に彼がいたのである。

その信章が寿貞親子をあづかってくれた。といっても、深川猿江町に庵を結んでいる彼が、その家主の老夫婦の屋敷の一部屋に世話をしてくれたのである。

姉のおふうはよく病んだ。その度に杉風は医師を送った。桃青はときたま寿貞をたづねたが、手代の伊兵衛か其角が使いで付け届けをすることが多い。それも杉風の意を含んでのことが殆んどである。

「お師匠様は気鬱を病んでおられます」

杉風は桃青を慕ってくる俳諧仲間に、今までのようにはなかなか会おうとしないので、よくそう云う云い訳けをするようになった。

其角に嵐蘭という門人にすら三度に二度は不機嫌な顔を隠そうとしなくなった。
「師匠は勝手なお人だ」と其角は嵐蘭や杉風に仏頂面をむきだしで訴える。生粋の江戸人、それも若いだけに、ややもすると「べらぼうめ」の啖呵も飛び出しそうだ。
食べては寝る。ごろごろしていたかと思うと、ふらっと出掛ける。行先は日本橋中橋にある猿若座か、小挽町の山村座あたりに芝居を観にゆくらしい。
「なにを考えておられるのか、俳諧のことなら、よほどなにか期することがあると見える」
信章もここ五、六ケ月何度か訪ねて来たが、手土産を置くと、様子を聞くだけで帰ってゆく。（隅田川の色、雨にてやや褪せたり、木母寺の山吹盛りなり）とか（亀井戸の萩やや散りぬ）とか（ゆうべのあらしにて草木みな枯れたり、秋の気配多し）とか書きのこしてゆくが、大名俳人内藤風虎屋敷についに西山宗因来る、という報せが伝えられると、とうとう業を煮やして案内も乞わず桃青の部屋に上って来た。
「おお、これは信章どのか」
「今朝は薄氷が張り申した。ご存知か」
「はははっ。いかに籠ることが多くとも、季節の移ろひに敏いのが俳諧者でござろう……ところで寿貞におまさ、おふうは達者でしょうか」
信章は黙って頷づいて、「まづ問いたい」と云った。
「宗因宗匠が内藤様の屋敷にご逗留だが……」
「いや、」と桃青は手を上げて制してから、「参りません。手前は……」と云った。「談林には情味が乏しいのです……」とつづけて言葉を継いだ「談林になにか足りないのを感じ、それが情味だということにやっと気づいたのです」
「ふうむ」と信章は唸り、ややあってから「そのことでか、杉風どのが、気鬱と云うのは」
「信章どの覚えておいでか。今年の春、日本橋の高札場で男女の晒しがあったのを」
「ふむ、しかし別に珍らしいことでもありますまい」
「なら、尚のこと所詮、男女の情に楔は打てぬもの…」
「ほう、では寿貞どののことは如何するおつもりか」
「ああ、寿貞はふしあわせ者です。おふうもおまさも」
「それだけか。あなたのお考えは」
「それだけです……手前は、寿貞という女とめぐりあわせました。情にあっては嘘いつわりがない……だが、寿貞に望めるものなら、京都の町を日がな売り歩く薪売、あれ、あの青い単衣をからげ、赤い腰巻をだし、白い手覆いに脚絆と、帯に身を固め、春は　躑躅や山藤の花を茅花虎杖と一緒に束ねて頭にのせ、仕事が終れば時雨にぬれながら遠い道を帰ってゆく、あれあのような女がいい……自分の賤しいこと考えると、やんごとなき官女を迎えて妻とするわけにもゆかず、世渡りの下

手なことを考えると遊女を相手にすることは尚出来ぬし、もし夫婦になるならあのような女がいい……」
「桃青どの、わたしは、簡単には煙りにまかれませぬぞ……といって仰言ることがいちいち合點がまいらぬのではない……もうこれ以上談林の風に染まらぬ、というのも分った。それだけわたし等より深いものをお持ちだということも。いや皮肉では真実ござらぬ。……日本橋の晒のことが桃青どのを悩ませたことは迂遠なことだが分らぬでもない。だが、寿貞どのとお子のことは云い訳けがましく聞えますぞ」
「俳諧のために……」
「ははは、それが勝手というもの。俳諧など人の情のまえには塵芥も同然」
「そのちりあくたに手前は惹かれたのです。武士を捨て、町人にもなれず、ちりあくたを捨ててはは自分はないのです。
「……」信章はながいあいだ黙った。
「よろしかろう……だが内藤風虎様に桃青どのを引き会わせたのはわたしだ。立場を考えて下され」
今度は桃青が黙った。が意外と素直に「はい」と頷づいた。「参りましょう。手前の思い上りかも知れません」
信章も、ふっと目を細め、「いや桃青どののことは、なにやら分る気がする。ははは……ところで気晴しに吉原へでも繰りだそうではないか」
桃青も釣られて笑った。「よろしいでしょう。だがもう暫く籠らせて欲しいものです。せめて、それではせめて宗因宗匠を囲んでの最初の句会を終えてから……」
「おお結構でしょう」
と信章は機嫌よく帰って行った。

四

延宝四年も押しせまった十二月七日、この年は不思議と暖たかく、もう梅に蕾がうっすらと色づいて、曇天がもの憂く江戸を覆いつくし、その枝々は動きもしない。
「駕籠も風流ですが疲れていけません、やはり猪牙舟でまいりましょう」と桃青と信章は互いに示しあわせて、朝、柳橋の舟宿街の一角で落ち合った。やはり出掛けてくるときは、わかっていても何に喰わぬ態のものだ。二人とも、通だの粋だのと誰もがやるようなことをやった。（丸忠）という船宿で軽く一杯酒をひっかけると頬被りして舟に乗った。舟は細長く底が浅いので客の座り具合で船頭は漕ぎにくいという。桃青も信章も跌坐をかいて重心を低くし、両手を後に突っ張って顔を見あわせにやりと笑いあった。
舟が大川へ出掛かると岸から大きく枝を張り出した見上げるような松の木が、水面のかすかなさざ波に黒々とした影を投げかけている。対岸の佐賀の領主松浦公の屋敷には椎の大木があり、邸内は木々が鬱蒼としている。

そこを椎の木屋敷とも呼び、こちらを首尾の松といい、粋がった連中の首尾を見とどける松ということらしい。

「うれしい（椎）と首尾の間を猪牙でゆき……か、ははは」と信章が云えば、桃青も「しいと松にらんで猪牙を通すなり……ともありますぞ、ははは」

流れにでると、船頭も水棹から艪にかえていきおいよく漕ぎだした。船頭二人が腕によりをかけて漕ぐから風はなくとも頬被りがややもすれば飛びそうになるから桃青も信章も上目使いで行く手を見ている。駒形堂を過ぎ、花川戸を後にした頃、右手に三囲神社の鳥居の頭が見え始めると、猪牙舟がぐうとその鳥居へ尻を向けて三谷堀へと入ってゆく。棧橋にはまた船宿のお内儀連が愛想を口々に云っては入ってくる猪牙船へ誘いかけてくる。

「よいよい、通い馴れたる道じゃ、案内はいらぬ」と信章が手を振る。

「それに茶の一服も結構。川風で喉もうるおうている」と桃青も真似る。

葭簀張の水茶屋が日本堤の両側に並び、遊客がぞろりぞろりと行き交っている。桃青たちが柳橋を出るとき、前後に猪牙舟が三四艘だったのに。この土手を歩く男の目的は同じだから、なかには、「はて、これは珍らしい対面」などと云いあってぺこぺこ頭をさげあっているのにも出喰わした。桃青と信章は顔を見あわせてくすりと笑った。

左側は土手下の林の向うに田圃に囲まれた吉原遊廓の家並が見え、月の晩など歩いたら、さぞかし風流であろうと思える。ぽつんぽつんと見えるのは武家屋敷の瓦屋根ばかりである。長い堤の中程までくると、衣紋坂を下る。駕籠で乗りつけてくる者、馬で揺られてくる者、武士も町人もなく貴賤もない。にわかな賑いである。左に見返り柳 ―― 遊廓帰りが吉原を名残り惜しんで振り返るところ、という。その右に高札場、そこから廓の大門まで曲りくねって編笠茶屋がずっと並んでいる。大門のあたりで駕籠や馬から降りる客で混みはじめていた。桃青と信章はそのあたりで編笠を借りて顔をかくしあった。大門に入る前であれば知人に会っても言訳けがましいことも互いに云って「では後日おめもじを」などと後腐れない。それでなくとも大門の両内側には、隠密廻りの与力や同心のいる面番所や会所があってうるさい眼が光っている。

仲の町の桜並木の枝の尖がかすかに動いているのは風が出たためらしいが変に生温かい。

桃青と信章はぶらぶらと仲の町を歩く。左右の引手茶屋には、茶屋女と戯れている酔った商家風の若旦那がいるかと思うと、頭巾を背中まで垂らした裕福そうな老人がぞろりと羽織を着流して、遊女や大鼓持に機嫌をとられながら遊女屋へ案内されてゆくのもある。

茶屋の裏手が、左右それぞれ江戸町一丁目とか伏見町

とか京町二丁目とか、路の入口に木戸があって一区画づつ遊女屋が軒を並べている。

桃青も信章も茶屋で飲み食いしたり、手足を洗って遊女を迎えに来させる程の贅沢は最初から考えてはいないが、せめて馴染の遊女を喜こばせるため土産物を買うくらいの気持があって、ところどころに店を張っている、雑貨屋や魚屋などを覗いて歩いた。間もなく突き当りの常夜灯まで来てしまうと二人はまた引き返した。

「夏になるとこの辺りで螢を売っておりましたね」と桃青が前をゆく信章に云った。

「おおさようでした。廓の外へ出ればいくらでも獲れるものを」

「風流も裏腹に、まこと考えさせられることで……」

「ははははっいつもの情け心がでましたな。遊び心には禁物々々」と信章は桃青を細い目をして振り返った。

桃青は黙って空を見上げた。朝出掛けには覆われていた雲が北西に向ってなんなく力を籠めているように眺められる。

「なんとなく忌な風。そういえば桜も柳も妙に騒がしい気配」と桃青は顔を曇らせた。

「さて、そろそろ昼見世の時分、土産を買いましょう」

二人はやはり食べ物がいい、と寿司屋へ寄った。桃青も信章も夜の吉原を知らない。噂では、そのにぎやかさは想像以上だという。それも暮れ六ツになると神棚の鈴をじゃらじゃら鳴らし、着飾った遊女達が、表通りに面した格子部屋にぞろぞろと並び、大夫などの高級遊女は別にして、中央から左右そして格子に近くへと、灯の影を受けて、そのきらびやかさを競うという。

昼も同じく格子部屋には出てくるが、客が少いと、手習いの真似事をしたり、百人一首で遊んだりしていて、勢揃いした夜の張見世のように三味線も鳴らない。

桃青と信章は大して喜こびもしないだろう寿司の折詰めを土産に廓の奥に近い角町の木戸をくぐった。ずっとおはぐろどぶまで突き当ってしまうと吉原では最下級の遊女の町並である。二人は「西田屋」という中見世の二階へ登った。

五

吉原遊廓で瘡毒（梅毒）が恐わかったら、金銭の苦労はしても座敷持ちを。と教えてくれたのは弟子の其角である。その其角とは、流石に面映ゆくてとても一緒をする気になれない。信章だって決して桃青より経験が多いわけではないし、互いにゆとりのある身の筈がない。

自分の部屋をもち座敷をもった中級遊女といっても、大夫なら遣手婆も機嫌を結ぶが、落度があれば、なにかにつけて、楼主も遣手も頭に鬼の字がつく。

桃青は女から、廓内では比較的自由だが、その辛さは地獄だとくどくどと訴えられ、身売されて来たときの悲

しさだとかを聞かされる。手練手管とわかっていても、騙されてやるのも遊びのうちと思いつつ、杉風がそっと手渡してくれた内証を手離す気になってしまう。

先程まで桃青の馴染の遊女の座敷で、腰を揉ませたり酒を飲んだりしていた信章もその馴染の遊女と自分達の部屋へ引取って行った。それで桃青も部屋へ移ったのである。

「風が強くなりんした」と遊女が云った。

多分どこかの寄部屋で客のつかない遊女達が騒いでいるのだろう、三味線の音が調子なく聞え、わっと嬌声が上ったかと思うと、遣手婆らしい叱る声がして、暫くしいんと静まったりした。

屋根に風があたって、どこかの柱が軋しむ。木戸のあたりらしいが、犬の喧嘩とみえけたたましい物音がした。用水桶でもひっくりかえしたのか、楼の若い者の怒鳴り散らすのが聞えたかと思うと、俄かに廊下を駈け走る跫音との叫び声が入り混じった。

「はて、どうしたのか」

桃青は、木枕に頤をのせて俯せになっている敵娼を覗き見たが、女は案外落ち着いていて、「昼間から馳落ち騒ぎでもおざんすまい。心中の仕損じか痴話喧嘩か。いつものことでござんす」と云って長煙管で煙草盆を引寄せて火をつけ「吸いなまし」と桃青へ差し出した。

「いや待て、妙にきな臭いぞ」、とむっくり床に起きなおった。

「そういえばずいぶんと騒々しくおざりいす」とやっと床を離れて廊下をのぞいた。

そこへ楼の若い者が「江戸町二丁目あたりが火元で火事だ。一丁目も揚屋町も火の海で伏見町ももう駄目らしい。家具のひとつも背負って逃げろ」と我鳴りながら、うろうろする客は手を引き、他の客へは、どこどこのおはぐろどぶの刎橋でお逃げなせえまし、とか教えながら去ってゆく。

桃青は驚いた。身仕度をして廊下へでたところへ信章が「まだ火の手は遠い、慌てなさるな。互いに身ひとついくらでも逃げられる」と珍らしそうにあたり見回すゆとりである。楼内は若い者総出で家具を背負い出している。桃青と信章が外へ姿を見せた頃、煙が強風にあふられて屋根から路地へ吹きつけ、路地で渦まきながら向いの軒から屋根へと激しく流れ昇っているが。火の気らしいものはまだないが、じっとりと汗ばむほど熱気を含んだ風が頬から髷へとまといつく。桃青も信章も編笠を忘れている。

木戸から仲の町へ抜けると大門に近い揚屋町の茶屋や遊女屋から黒煙といっしょにめらめらと焔が一面に吹き出している。気がつくと吉原廓の奥京町一丁目の一角にも飛び火したらしく猛烈な黒い炎だ。木戸からわあっと

遊女が群をなして吐きだされ、転ぶ者、他の遊女を突き飛ばし我れがちに逃げて用水桶にぶつかる者。花魁を背負って桜並木を火の見櫓の方へ走ってゆく屈強な若者。

「ああ、これはいかぬ」と信章は桃青の腕を執るとその若者の後を追った。今でて来た木戸を戻ったか京町二丁目の木戸だったか二人とももう分らなかった。裏木戸が薙ぎたおされているので、みなばりばりと踏んで羅生門河岸へ殺到した。そこはもうおはぐろどぶで、おろされた刎橋を渡る遊女達の悲鳴と悲鳴のあいだで、廓の若者たちの怒号が飛び交う。

刎橋がせまいので、ひしめきあふだけで桃青も信章もなかなかそこへ行きつけないでいるうち、火の粉が降り始めて信章の背中がくすぶりだした。桃青は自分の羽織を脱いで揉み消していると、「九郎助稲荷の刎橋がおりたぞ」の声がして、わっとそちらの方向へ群が動いたので、二人は思わず釣られそうになったが、今まで派手な衣裳に埋って見えなかった橋板に空きが出来ているのに気付いて、よろけながら遊女と一緒に渡った。

その時はすでに河岸に面した遊女屋は殆んど火が廻っていた。刎橋に火が移ったので、どす黒い溝へあわてふためいた遊女が五六人落ち込んだり、遣手婆が花魁の手を引き、花魁が禿の小さな手をひっぱって田圃へ転げたりしている。

「やあ、少しでも燃え残すな、みんな焼けてしまえ、やいお前たち、火が落着いたら見廻って焼け残りそうな家は火をつけて燃やしてしまえ」と若い者へ誰彼なく命令して歩いている、水太りのような、顔の油切った老人がいるがどこかの楼主らしい。

「おかしな男だ」と桃青は云った。

「ははは、気狂いでもなんでもない。少しでも焼け残れば、御上から他の場所での仮商いの許しが出ないからさ、ほれ町火消たちをご覧あれ、手を拱ねいて見ているだけなのはそれを知っているからばかりじゃなく、吉原は江戸の外なのですよ」

二人とも助かった気軽さもあって、もう弥次馬になってしまっていた。

六

まる二日焼けに焼けてようやく吉原遊廓は沈火した。

出火した日、桃青と信章はその夜更けるまで、衣紋坂の上、日本堤に立って火事の行衛を見守っていた。寒いので見物人は薪を拾って来てはあちこちで焚火をした。そこで、信章も、ことに桃青は不思議な光景をいろいろ見聞きした。

もと、吉原遊廓は日本橋葺屋町にあったが、明暦三年に今の場所に移転した。幾度かの火災に遭っているが、新吉原となってからは今回が初めてであった。

まづ桃青が意外に思ったのは、花魁から煎茶女郎まで、

俗に二千余といわれる遊女達のどの顔も、火事で死んだ同僚を傷む気持は別にしても、むしろ生きいきと明く、逃亡を企てる気配もなく、日頃から自分達をややもすれば虐待しがちな楼主や遣手婆に意趣返しをしようとする雰囲気もない。大火のさいは、三日間に限って自由放免だという。

遊女になるにはそれ相応の事情があって、ただやみくもに逃げても、駈落とかの色事ならば、目当てあっての掟破りだが、やがて仕置覚悟で戻らざるを得ない逃亡はしないものだと分った。

気心の通じる遊女同志、いたわりあい、はげましあっている姿が桃青の心を打った。

反面、楼主たちは、まだ廓が炎の海で天を焦がして、どうどうと音を放ちながら、旋風が旋風を起して降らす火の粉の中で、まづ商品である遊女がどれだけ助かっているかに血眼になり、家財がどれだけ運び出されたかで若い者に怒声を浴びせ、楼主同志よりより集っては、どこで仕入れたか酒をあおり、もう仮営業の儲け話に唾を飛ばしあっている。

「ふううむ」と桃青はあさましげな男女の因業な貌つきを眺めながら、

「馴染の敵娼の案否もわからぬままだが、信章どの、帰りとうなりました。」と云った。

「また桃青どのの気鬱が始まりましたかな」

「ふむ、図星じゃ、信章どの……水は舟を載せ亦舟を覆す……の譬えもこの世界は通じぬものとみえます」

「桃青どのとは、そのように多感な方なのじゃな……わたしの方が少しは江戸は長ごうござれば吉原についての見聞には慣れたのか、このような事態はわたしも初めてだが、なるほどと思いはしても、あなたに較べて自分の鈍なのを悲しむばかりだ……」

二人は浅草観音裏の田圃道を語りあってゆく。

物見高い江戸の人々は、火事場めざして往くもの、飽いて帰る者、まだぼっと彼方の廓は空を染めている。

「御上公認とはいえ悪所は悪所。悪所に火消など許される筈もない。少しでも焼け残れば仮宅商いが許されぬので、楼主は必死で火事を大きくする。町火消もそれを手伝いこそすれ見ているだけで遊女を助けにも廓内に入らない。……楼主は楼主で仮宅商いの方が不思議と繁盛するから大喜び。御上は御上で悪所ながらなくてはならぬ悪所ということで廓復興には手助をする……遊女は遊女で、浅草、本所、深川あたりの民家を借りて仮宅商いになれば、外出も自由、張見世もしなくていい。楼主は焼けぶとりする。といった具合だそうな……」

「不思議なことばかり」

「だから、虐待された遊女が恨みに思って火付けが原因のときもあり、憶測の境は出ぬが、もしかすると商いの不振を嘆じる楼主の火付けもあるやも知れぬ」

「ああ、いやなことです……それにしても、互いの敵娼の無事であればよい……が」

と桃青はふと遠くなった遊廓の方向を振り向いた。が森の陰にかくれてもう見えなかった。

その二日後の朝、桃青は其角と連れだって吉原に向った。もう江戸中が吉原の火事の噂でもち切りの様子であった。瓦版を杉風が桃青のところへ持ってさた。——遊女の死体三百——とある。

吉原遊廓は、おはぐろどぶにもその澱みの中によく見ないとそれと分らぬ焼け焦げた板塀の破片が浮かび、大門の柱と火の見櫓と、仲の町の桜と柳だけが、見る影もなく崩れ落ちた廓の真中を貫ぬいて天を指していた。

衣紋坂から大門までの曲りくねった五十間道に踏み場もないくらい累々と連らなっている死体の殆んどは遊女と禿の小さな躰であった。貌の見分けもつかず、裸体に近く、膨れあがった四肢は苦悶とも狂気とも歓喜ともつかない。

「師匠、師匠、お止めなさい。役人の真似は……」

「わかっておる。詮ないことだが、其角、お前だって儚ない一夜の夢を結んだ女がこの中にいるやも知れぬ」

「師匠だって運が悪ければ、この屍体と並んだかもしれねえのですよ、そうなんでしょう」

「なればなおのこと……判別はつかずとも、また、見知った女は無事であろうと、生きた人間の眼に触れられた仏が少しでも往生に近づけば、死屍の川に入るも無駄であるまい」

そう云って桃青は屍のひとつひとつへ掌を合わせながら歩き始めた。師匠がそうするので仕方なく其角もその後に従わずにはいられないが、「まったく物好きな」という顔つきである。

大門の側まできたとき、呼び声が聞えた。火事場での火後の弥次馬というものは案外静かなものである。群がりながらも立ち盡す態の人々を縫って手を振りながら近づいてくるのは信章である。

「小田原町へ寄ったところ、其角どのとこちらに向ったということなので、是非とも会いたくて追って参った」

「さようですか。では信章どのも一緒にお詣りなさっては如何」

「よろしかろう……で、後ほど……」

「後ほど……？」

「あっ、いや、寿貞どのの言伝てがありましてな。」

「さようですか……で、寿貞におふうにおまさは達者ですか」

「ははははっ、あなたはいつもそればかりだ」

「面目ない……ですが、もう暫く寿貞親子を……いま手前は……大きな節目を迎えて……おります」

「……」

桃青も信章も其角も黙って、そのまま歩きだした。その眼の前を非人達がまた遊女の死体を運び出してきた。鈍い音をたてて遊女屋の残骸が崩れ、鳶の者の喊声が聞えた。

もう新しい吉原遊廓の息吹きがそこにある。

「そうです。消え去りしものと、新しく来るべきものの気配……節目とはそれです」

「……」「……」

「談林の風は言葉の遊びです。生きている人間と自然との融けて結びあう姿のない、ただの語呂合せなのです」

桃青の熱を帯びた言葉に釣られて、三人はいつの間にか日本堤を降り、浅草寺の横を馬道から花川戸の土手を登り、大川を眺めて立っていた。

川べりの枯葭が触れあってか、さやさやと鳴っている。おだやかな日射しが、川の真中辺りの流れのさざ波を輝やかしていた。

ふと話がと切れた時、信章が云った。

「ところで、先程の寿貞どのの言伝のことだが」

「おお失念しておりました……これから手前は寿貞を訪ねようと思うております」

「その寿貞どのだが」

「はい、どうか致しましたか」

「まづ、これをご覧あれ」と信章は懐から一通の書状を取りだした。

「はて、どういうことであろ」

桃青が、風であおられながら解いてゆく書状に喰い入るように眼を走らせているのを見ながら、信章が静かに、ゆっくりと云う。

「家主の老主人が届けてくれたのだが、誰も寿貞どの去られた姿を見てはいない。昨日のことであろう……これが届けられたのは今朝で、わたし宛のはこれだ」と差し出すのだが、桃青は聞いてもいなければ、見てもいなかった。

――再びとおめもじ致すまじく候へば　心置きなく俳諧一途に御精進なされたく――と、寿貞の心境をせつせつと訴えた上で、こう結ばれた書状を読んでしまうと、黙ったまま丁寧に巻き終え、いつまでも、いつまでも無言。

信章も無言、其角も師匠の心を察して口を開かずじっと横顔に視線を注いでいるばかりである。

「寿貞はふしあわせ、おふうもおまきもふしあわせ……ついに貝は合わずにしまいもうした」

ふと川の向うの森のあたりを見ながら、

「寿貞よ、おふうよ、おまさよ、どこへ行くのであろ……そしてこの桃青もどこへ行くのであろ」

どこかの空で、ちちちちっと、なにかの鳥が鳴いて飛んだ。

昭和六十一年二月十五日

編集後記

やっと春めいて、ご近所の庭の梅が満開で、散歩の途中、立ちどまって眺めさせてもらっている。今日（三月二十日）暑さ寒さもなんとかで、部屋の温度計もようやく十度を越す日がふえてきた。何かやろうという意欲を感じさせてくれる。

この十九号は、同人全員の掌編を集め、「短編特集」をつくろうと企画した。変化を求め、趣向をこらして、いいものを、と張り切っていたが、諸般の事情で、予定通りにはいかず、ご覧のような出来栄えとなった。

連載中の「男たちの藩」と「ハイラル挽歌」は今回だけ休ませてもらった。

去る二月八日、九日、十日、大和氏のたいへんなお骨折りで、静岡方面への旅行が実現した。参加者は同人六名であった。二泊三日が夢の間に過ぎたという感が深く残った。仲間と共に旅に出るということは、各自の都合もあり、難しいことだが、とにかく素晴しいことには違いない。

次号は二十号という節目を迎えるので、なんとか、みんなで頑張って、記念すべき号にしたいと願っている。

読んでいただいた方からのお便りがほとんどないのは淋しいことだ。率直なご意見をどうぞ。（も）

「まんじ」第十九号

昭和六十一年四月一日発行　（非売）

編集　大和禎人

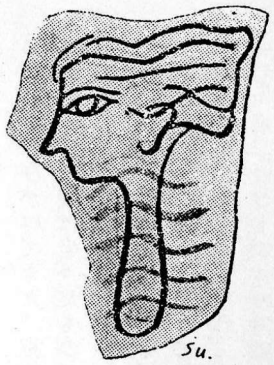
印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三―十一
☎（261・5743）

発行　「作家群」（まんじ）編集部

〒一〇一東京・千代田区神田駿河台二―九
☎〇三（二九三）〇〇九四　柴田方
郵便振替口座　東京二―一九〇八一五

第二十記念号　目次

老桜　三戸岡道夫　1
井中加和寿氏の易占術　山口健二　16
ゾーリンゲンのかみそり　山根三枝子　27
ライスカレー　柴田富佐子　35
天皇誕生日　茂里英介　42
松尾芭蕉　八十島元　49
―坐り胼胝の蚊―
（連載）
ハイラル挽歌・第二章（四）　金子正義　56
逆島記　大和禎人　65
―佐原の喜三郎―（一〇三枚）
柴田富佐子寸描　Q太郎　15
表紙　岸田幸雄　・　カット　吉田　漱



老桜

三戸岡　道夫

「たーさん、そろそろ、お座敷つけましょうか」

宴席での芸者の踊りを「お座敷をつける」と言うのだと、高村は料亭一桜に出入りするようになって、はじめて知った。長年にわたって手慣れた老妓の、タイミングを読む勘に狂いはない。

「そうだな、そう願いましょうか」

高村もさっと宴会の進行状況に眼をくばると、頃はよしと判断し、そう返事した。宴席設営係である「たーさん」の高村と、地方（じかた）をつとめる老妓のうず花との呼吸はいつもぴったりあっていた。

会社での高村の担当は営業なので、宴会が多い。その設営や進行係などは、もう部下に任せておけばいい年令なのであるが、お座敷の接待はむつかしい。だから不慣れな若い者に任せておくわけにはいかず、どうしても部長の高村が常任設営係になってしまうのだった。

春になると、隅田川の長堤には、白の油絵具を横に一直線に引いたように、あざやかに桜が咲いた。爛熟の桜は、桜並木から溢れ出てさらに、桜餅で有名な澄明寺の境内を埋めつくし、その延長が魔手のように料亭一桜の庭に届いている。

その夜桜の中に、宴席の灯が明るい。

「今日は、たーさん、何を唄うの」

「今日は唄わない」

「だめよ、そんなの」

うず花は年令に似あわない、つやを含んだ眼つきで高村を見上げ、唇をちょっと、とんがらせた。

「じゃあ、さがしておく」

「そうでなきゃ、今夜帰してあげない」

そう言いながら、うず花が立ち上ると、それを合図に他の芸者衆も隣の部屋へと潮の引くように吸いこまれて、部屋から一瞬華やかさが消えた。

と思った瞬間、正面の舞台にライトが灯り、桃山時代

の襖絵を思わせる桜花大樹の六曲屏風が二双、絢爛と浮かびあがった。
緋毛氈の赤が、口紅をなすったようにその前に敷かれると、うず花が坐り、三味線の根じめをたしかめた。ぴたりと坐ったうず花は、肥って大柄なので貫録があった。
最初は桃割れ髪に振袖の半玉が太鼓をたたき、終ると、奴さんを踊った。つづいて若い芸者が二人で辰己を踊り、最後にえん子というこれも若い芸者が、季節にちなんで春霞を踊った。

春霞たつや名におう江戸桜
伊達な姿の鉢巻は
すぎし頃より待ちわびて
……

終ると、
「たーさん」
うず花が呼びかけてきた。招待側のエチケットもあり、まずはと、緋毛氈に坐ったものの
「まだ、きめてないんだよ」
しかし決めてないといっても、高村にそういくつも持唄があるわけではない。それに芸者が踊れる曲に合わせるとなると、かなり限定されてしまって
「じゃあ、いつもの花の雲にしようか」
「季節もので上上よ」
高村が唄って、えん子が踊った。
「もう一つ…」
「じゃ、これも高時か」

みなここに
三つのうろこと名も高時が
浮かれ天狗の酒もりに
……

これもえん子が踊り、結局今日もいつもとあまり変らぬ選曲となってしまった。
唄い終って、席に戻ると
「いやあ、お見事……」
客は大袈裟にほめあげて
「まあ、一杯」
とビールを注ぎ
「いまどき小唄とはお珍らしい。どこでお習いになりました」
「お恥かしい次第で…。関西におりましたとき、片手間にちょびっとかじっただけでして…、ええ、あちらでは、小唄の一つも唄えませんと商売の仲間に入れてもらえませんので」
ビールを一気にあおると

「たーさんは音感がいいんですよ」
三味線を片ずけたうず花が、もう横に坐っていた。
「わたしにも一杯ちょうだい」
「二杯でも、三杯でも…。もう三味線が終ったんだから、天下ご免だ」
「おっしゃる通り。今夜はじゃんじゃん飲みましょうよ。ホ、ホ、ホッ……」
アルコールは強い。三味線を弾くまで我慢していた堰が一気に切れたように、たてつづけに飲みながら
「ああ、おいしい。ねえ、わたし、今日、桜まつりの接待に出てきたの」
「桜まつり…、どこの?」
「どこって、そこ、隅田川堤の桜並木。いつも四月のはじめの十日間、桜が咲くと桜見物のお客にお茶の接待をするの。芸者衆が昼間、交代でサービスに出るのよ」
「サービスね」
「変なサービスじゃないわよ。ちゃんとしたサービス。赤い襷をかけて、お茶を出すの」
「どうせそのお茶、高価いんだろ」
「あら、無料よ」
「それは結構。サービスは昼だけ?」
「もちろんよ、夜はお座敷がありますもの」
「そのお座敷も無料だといいのにな」
「夜も…? そうはいきませんよ」
終りの方は、『いかない、いかない、そうはいきません…』と、牧村三枝子の『みちずれ』のメロディで歌いながら、煙草をとり出した。
煙草は酒と並んだうず花の好物で、酒を飲むとますますひどくなった。煙草をくわえたのを、高村は眼ざとく見とめ、マッチで火をつけた。高村は煙草を吸わないので、煙草の火については、いつのまにか客と芸者の仕事が逆になっていた。
「まあ、いつも、おやさしい」
火を持った高村の手を押しつつむようにして、うず花は煙草の先に火をつける。うず花の、白く、小さく、肥った指先は、まるで子供の指のようだと思った。
「ありがとう」
深々と吸って、煙を吐き
「ああ、生き返った」
「煙も、三味線が終るまではお預けかい」
「別にそういうわけじゃないけど…、まあ唄う前は少しは控えないとね」
「でもうず花姐さん、ずいぶんのむね、煙草……」
「あーら、姐さんだって、うれしい。姐さんって言ってくれるの、たーさんだけよ。みんな、わたしのこと、婆さん、婆さん…」
「煙草あんまり飲むの、よくないよ」
「でも、煙草はやめられないわねえ」

「お酒だってやめられない…」
「あら、本当だ。あ、は、は、は」
「それに男もやめられない」
「うそ、男はもう、とっくの昔に卒業よ。いまは一人、まったくの一人、もう何十年もこのかた、男なし…」
「まだ、そんな年でもないのにさ」
「あら、ほんとだ。お世辞がうまい。あ、は、は、は…」
うず花は笑うと眼が細まって、童女のように、くったくなかった。
いつのまにか舞台の緋毛氈は片ずけられて、ギター・バンドの用意ができていた。
昔とちがって最近の宴席は、踊りのあと、客が三味線で唄って芸を競うということがなくなって、バンドやカラオケが入って、すぐ歌謡曲である。カラオケブームが料亭にも侵入し、定着してしまったのであろう。こうした現象は若い芸者衆にはたのしくていいのだが、うず花のような老妓には工合が悪い。昔のように次から次へと三味線を弾かなくてもいいから仕事は楽なのだが、手が空いてしまう。張り合いがない。要するに老妓は不要なのである。
『昔はそうでなかった。小唄、長唄と、芸のできる客がちゃんと来た…』
だが、これも世の流れで仕方がない。それで三味線がすむと、いつも高村の横にぺたんと坐って
「いつも婆さんが横で申し訳ありませんわねえ」
そう言いながら、あとは終りまで酒を飲むしかないのである。そしてさかんに煙草を吸う。
「せっかく一桜へ来たのに、高村さん、婆さんとカップルじゃ、つまらないね」
卓の向うから客の一人が、ちゃちゃを入れる。
「あら、婆さんで、悪かったわねえ」
うず花がツンと横をむくと、客の相手をしていたえん子が
「あら、いいんですよ。お客さんに若い妓をお廻しするためにやっているんですから」
「ああ、そうか。なかなか立派な心掛け」
うず花がえん子を睨んで
「あとで、ひどいから」
ギター・バンドの演奏が始まると、待ってましたとばかり客が次々に舞台に立って、マイク片手に歌った。
愛人とか、長良川艶歌、北の蛍、ホテル、つぐない、わかれ港町とか、新しいものが多い。ナツメロだけでなく、いかに最新のものを歌うかが、ひそかな競争なのである。客の歌の間に芸者衆の歌も入り、やがて歌合戦も最高潮になった頃
「そろそろ、たーさんの替え歌の出番よ」
えん子がいつものように声をかけてきた。

「だめよ、たーさんに、そんな歌、歌わせちゃ、だめ、だめ」
うず花が止めるのだが
「バンドさーん、ささんかの宿…」
えん子が大声で注文してしまった。えん子をうず花が心よく思わないのは、こうして高村に卑猥な替え歌を強要することにも原因があった。しかし高村の方も酔いに加えて、招待側としての客へのサービスもあるので、ふらふらと立ち上ると

くもりガラスを手で拭いて
あなた　あしたが　見えますか
……

と歌うところを、ちょっと替えて

濡れた　おそそを　手で拭いて
穴に入れても　いいかしら
……

「ああ、また、歌っちゃった」
うず花のため息。
だがそれとは反対に、客は爆笑の連続で、拍手喝采。
席にもどってくると、うず花が
「だめよ、そんな歌、もう歌っちゃ。たーさんの品が落ちるわ。さあ、罰金よ、うんと呑みなさい」
高村のコップにビールを音をたてて注ぎながら
「わたし、一つふえたわよ」
「なんの曲…?」
うず花のお得意は『無法松の一生』だった。とくに度胸千両の節まかしがよかったが
「無法松だけじゃだめだと思って、この前、一つ覚えたの」
「すごいな」
「奥飛弾慕情よ」
「それじゃ今夜は、それでいこう」
「でも、うまく歌えるかな、覚えたばかりだから」
めずらしく、ちょっとはにかむと、舞台に立ってマイクを持った。
うず花がいなくなると、すーっとえん子が寄って来て
「ねえ、聞いて、たーさん。うず花姐さんって、意地悪なのよ」
「どこが…?」
「わたしを、いじめるの」
「いじめられて困るほど、しおらしくもないじゃないか」
「それが、でもないのよ」
「きっと、若さと美貌への嫉妬だろう」

「まあ、調子のいいこと言って。でも、そんなこと、うず花姐さんの前で言って大丈夫？　あとでお灸すえられるわよ」
「でも、事実は、事実」
「まいった」
なまめ横からの感じが八代亜紀に似ているというのがえん子の自慢で、その少しばかりの美貌を鼻にかけた小生意気さが、うず花とうまくいかないのは事実のようで、たとえば高村が小唄を唄って、えん子が踊るときなども
「まだ、たーさんの覚えてないの」
緋毛氈の上から露骨に嫌味を言うことがあった。高村の持唄の踊りを稽古しておきますといいながら、それがいっこうに踊れない。
「すみません」
とは言うのだが、それは口先だけで、本気で覚える気持はない。
「でも、困るのよね。ひどい時には、踊ってる途中で唄をわざと飛ばしたりして、わたしの踊りを狂わすの」
「そんなこと、できるのかい」
「あら、姐さんの腕前なら、朝めし前よ」
「じゃあ、やっつけちゃえば、いいじゃないか。最近はやりの、くれない族の反乱…」
「でも、お客さんの前でそんなこと、できないわ。それに先輩にさからったら大変。この世界に居られなくなっちゃう。なかなか大変なのよ、芸者も」
そうこうしているうちに、うず花の歌が終って席に戻ってくると、えん子はまたすーっと他の席に移っていった。
「また、わたしの悪口、言ってたんでしょう。見えたわよ、歌いながら」
「いえ、いえ…、そんなこと。それより、まあ、ご苦労さまでした、どうぞ一杯」
だが、その夜はなぜかうず花の腰が落着かなくて、奥飛弾慕情を歌った後、ぷつりと座敷から姿をくらましてしまったのだった。
だが地方の姐さんが足らないときは、座敷のかけ持ちはよくあることなので、てっきり他の座敷でまた三味線を弾いているのだろうと、高村は気にもとめなかったが、宴が終って、帰りの客を玄関口に送りに出た芸者衆の中にも、うず花の姿は見えないのだった。
どうしたのだろう、と思っていると、おかみがつと寄ってきて
「うず花さん、ちょっと風邪の工合がわるいって、途中で帰ったの。たーさんによろしくって。心配かけるといけないからって、だまって帰ったの」
「大丈夫かな」
「大丈夫よ。でも春だというのに、冷えるわねえ」

おかみは形のいい襟もとを、ちょっと、かき合わせるようにした。
「こういうの、花冷えっていうんだろう」
「そうらしいわね。たーさんも風邪ひかないように」
「ひいたってかまわない、おかみにうつせば、すぐ治っちゃうから…」
「あら、たーさんからなら、うつされたい」
外に出ると、前庭の満開の桜が、高々と夜目に白かった。その先の闇に隅田川の桜がある。
しかしこの夜が、うず花の顔を見た最後になろうとは、神ならぬ身の知るよしもなかったのである。

高村がはじめて一桜を使ったとき、地方をつとめたのが、うず花だった。もうかれこれ、三、四年前になる。
宴席に芸者衆が入ってくると、一人だけ年とった妓がいるから、地方の姐さんはそれとすぐわかる。うず花の場合もそうだった。
年令は六十を越していた。その代わり三味線は達者で、貫録があり、若い芸者衆からは一目も二目も置かれていた。
物事が偶然重なるというのは、よくあることである。一桜の場合がそうで、どうしたわけかその時決まる宴会場が次から次と一桜ばかりで、たてつづけに四回も重ってしまった。その三回目のとき、うず花の三味線で高村が小唄を唄うと、
「いまどき小唄を唄うなんて、若いのに感心」
「若くなんてありませんよ。もう五十ですから」
「あら、うそ、そんなに見えないわ。もっと若いんでしょう、たーさん」
だがその夜、うず花との間にちょっとしたアクシデントがあったのである。というのは料理のなかに汁気の多いものがあって、高村の箸がすべり、ピチャッ、汁がうず花の着物にはねてしまった。
「あッ」
と叫んだが間にあわない。
「あーっ」
二人は同時に声を出して
「すみません、手がすべって」
「いいわよ、小唄が唄えたから、かんべんしてあげる」
口ではそうは言ったものの、うず花の表情は固かった。卓上のおしぼりで着物の汚れを必死に押さえていたが、そのくらいではすみそうになく、うず花はばたばたと部屋を出ていった。着物は女の命だという。困ったな。
その翌日が四回目だった。
高村は昨夜のおわびをしなければと、一桜への途中、本郷を廻って藤村の羊羹を買った。うず花の年令から推して、これなら喜んでもらえると思ったからである。

「あら、そんなに気を使っていただいて、悪いわねえ」
「いえ、女の着物の汚点はとれないから大変だ、と聞いたことがあるからね。申し訳ないと思って、ほんの気持…」
「たーさんって、本当にやさしい」
それから高村の宴席の地方は必ずうず花ということに、いつのまにかなってしまったのである。
芸者の名前にうず花とは、変った名前である。
「どうして、そんな名前、つけたの」
「本当は、うず桜って、つけたかったのよ」
「うずざくら…?」
「わたしの好きな花。雲珠桜って書くの。むかし子供の頃、家のまわりにいっぱい咲いていて、どれも古い木ばかり。それはきれいだったわよ。だけど、うず桜じゃ、芸者の名前にはちょっと変でしょう、それで桜を花にかえて、うず花」
「ふーん、なにか由緒ありげな名前だと思っていたけど」
「由緒だなんて言いながら、どうせ、うば桜なんて言いたいんでしょ」
「いや、いや、お若い、お若い」
年令の話になると、どうしてもうず花はひがみっぽくなる。色が白くて、大柄で、肉づきがいい。その上指で押せば水がしみ出そうに、ふっくらと丸い柔らかな肌なので、年令よりは若く見える。笑うと童女のようである。しかし六十才という年令は隠せない。
いつのことだったか、いっしょに行った笹沢という同僚が
「お婆ちゃん、もう年金もらっているの」
などと口を滑らしたものだから大変。
「知らない」
憤然と横をむき
「検番に言って、このお客さん、つまみ出してもらおう」
軽くからかったつもりの笹沢が、窮地に陥るという場面があった。酒の上の冗談と、言う方は軽い気持でも、受ける方にしてみれば残酷なのである。それからというもの一桜へは、笹沢とは、極力いっしょに行かないように気を使っていた。
みどり濃い葉群の桜並木がさやさやと青空にそよぐ頃になると、高村はいつも郷愁のような桜餅への渇望を感ずる。澄明寺の桜餅はもちろん一年中売っているのであるが、なぜか桜餅は葉桜の季節のものと、高村には思えてならないのである。
江戸時代から伝わる澄明寺の桜餅の注文は引きもきらないようで、桜餅をつつむ見事な葉は、隅田川長堤の桜の葉を使うものだとばかり思っていたが、実はそうではなく、他所で特別に培栽したものを一年分貯蔵するということであった。毎日作る桜餅の数が葉の貯蔵量にあわせて決っているために、予約でないと買えなかった。だから葉桜の季節になると、いつも一桜から土産に予約でとってもらっていた。
ちょうど昨年の葉桜の頃であった。
当日になって急に客の一人が欠席して、桜餅が一つあまってしまったことがあった。宴が終り、客を送りに、玄関口に華やかに並んだ芸者衆の中央に立ったうず花に、高村は桜餅の籠を差出して
「余りものでわるいけど、よかったら、たべて…」
「あら、くれるの、うれしい。わたし、この桜餅だいすきなのよ」
うず花の顔が総くずれに笑って
「たーさんのくれるものなら、何でも、もらっちゃうわ、ありがとう」
すると横からえん子が
「あら、お姐さん、桜餅なんかでいいの」
はすっぱな声をあげた。
「うるさいわねえ、いいのよ、子供にはわからないの。あんたには、あげないから」
その時高村はふと、死んだ祖母のことを思い出していた。中学生のころ、修学旅行のお土産に布の財布を買って帰ったら
「お土産をくれるの、ありがとう」
その時の祖母のよろこんだ顔が、うず花の上に二重写しになっていた。
うず花の笑った顔を正面から見ると、肥った河馬の顔に見えるときがあった。それが祖母にそっくりだった。
しかし
『祖母に似ている』
なんて言おうものなら大変で
『知らない』
と、たちまち柳眉を逆立てて、やさしいたーさんが、一躍大きらいなたーさんに変ってしまうことは眼に見えているので、もちろんそんな言葉を口にしたことはなかった。
高村は一時期、祖母に育てられたことがあったのである。だから祖母への愛着はひとしお深かった。両親が仕事の関係で転々としたので、祖母は一人で街に住み、高村はそこから中学校へ通ったのである。
若いころ芸者をしていたという祖母は、年老いてもなまめかしいところがあった。ふだんは神妙に裁縫などに精を出しているのだが、仕事に飽きると、押入れから三味線をひっぱり出し、裏庭に面した部屋で、ぽつん、ぽつつんと爪弾きした。裏庭には古いしだれ桜があり、夏になると葉桜の翳りで、部屋はうす暗く、みどり色の水底のようであった。

だが高村の母はそんな祖母を嫌って
「おばあちゃん、三味線なんかもうやめてくださいよ。透だって中学生なんですから」
だが祖母の方はさして気にもかけず
「わたしにだって、たまには息抜きが必要ですよ」
とりあわなかった。高村が小唄に感度のいいのも、そんな少年の頃の環境に遠因があるのかもしれなかった。
祖母と母とが一度大喧嘩をしたことがあった。それは祖母のところへ若い男が遊びにきて、いっしょに酒を飲んだということを、母がどこからか聞きこんできたからであった。
「いい加減にしてくださいよ、おばあちゃん。いい年をして、世間の笑いものですよ。おばあちゃんが笑われるだけでなく、子供の私たちも笑われるんだから、今後はぜったい止めてください」
最後は高村の眼の前で、物を投げあう喧嘩にまでエスカレートした。だが高村はそんな祖母に、なぜか愛着があるのだった。

昨年の冬であった。
夕方から急に底冷えがしてきたかと思うと、雪が降りはじめた。夜に入ると本格的になり、すごい風雪のようになった。
しかしそんな吹雪の夜でも宴会はあって、一桜の部屋の中はいくら暖房を強めても、腰から冷えてきた。障子をあけると、すでに一面の銀世界で、その中を雪がすごいスピードで、風に舞いながら落ちていた。
「こりゃ、すごいな」
「今夜は帰れなくなってしまう」
「いいわよ、泊っていらっしゃって…、二階の大広間で雑魚寝しましょうよ」
「そうだ、そうだ。それじゃ、腰を落着けて、じゃんじゃん飲もうか」
雪なので他の座敷も暇らしく、芸者衆も高村の部屋に集ってきて、終ったのは夜の十一時を廻っていた。
雪はいっとき狂ったように降ったためか、その頃になると、もうそのように止んでいた。だが積った雪で、道は歩けない。雨ゴートに、蛇の目傘のうず花が
「たーさん、逆の方向でわるいけど、ちょっと乗せてくれない?」
ということで、高村はうず花を車に乗せて送っていくことになった。
「ああ、よかった。着物が台なしになるところだったわ」
車は雪を押し分けるようにして、ゆっくりと走った。
「運転手さん、水戸街道に出たら、少し行って、スーパーの角を右に曲ってくださいな」
街道は車が走るので、積雪は崩れていたが、そのかわ

り泥の海であった。スーパーの角を曲ると、ふたたび狭い雪の道で、しばらく走ると
「ここでいいわ、ありがとう」
「家の前まで送っていくよ」
「大丈夫、いいの、すぐそこだから…、それに車が入れないわ」
右手はひっそりした路地だった。もう時間なので人影はなく、雪の中に家が黒々と軒を並べているだけだった。暗いのではっきりとはわからなかったが、路地の奥は戦災で焼け残ったような古びた構えの家が密集していた。
その雪の路地を、うず花は雪に足をとられ、ころびそうになりながら歩いていった。その後姿をしばらく見送っていたが、車を引き返すと、高速道路に入った。
雪景色の隅田川を渡りながら、高村はうず花が消えていった暗い路地の奥を反芻していた。格子戸がはまり、掃除の行きとどいた、少しなまめいた家の内部を想像すると、路地の奥で一人ひっそり暮している老妓の生活は、祖母の一人暮らしとどこか似通っているような気がしてならないのだった。

桜の盛りは短かい。花冷えが通り魔のようにすぎて、二、三日、温かな日がつづいたかと思うと、一日、嵐のような日があり、するとにわかに桜は散りはじめて、あっという間に葉桜に変ってしまった。
その頃になっても、まだうず花はお座敷に出てこなかった。
「風邪がぐずぐずしていて、まだすっきりしないらしいのよ」
おかみからの報告であった。
「季節はずれの風邪は、しつっこいというからね、用心した方がいい」
「だから、無理しないで、ゆっくり休むようにって、言ってあるの」
「やはり年令だからね、なんといったって疲れたんだよ」
「そうよ、そうよ、年令なのよ」
横に坐っていたえん子が突然復讐するように言った。
葉桜はたちまち緑を増し、隅田川の長堤は見る間に夏景色に変身した。
七月に入れば川開きの花火である。毎年高村は一桜の屋上から、花火大会を見ることにしていた。芸者衆は桜の柄を染め抜いた揃いのゆかた姿で登場する。しかしその花火にも、うず花の姿はなく、すこし心配になっていると
「うず花さん、入院しているの」
花火の散りぎわを眼で追いながら、おかみが高村に耳打ちした。

「そんなに悪いのかい」
「というわけでもないらしいんだけど、あんまり風邪が長びくものだから、一度検査をちゃんと受けた方がいいって医者に言われて、大きい病院へ…」
「検査入院？」
「それと、治療の、両方みたい」
高村は心配になった。

そうこうするうちに、いつしか九月に入ってしまっていた。高村の気持には、たえずうず花の病気がひっかかっていて、一度見舞いにと思っていたので
「よかったら一度、病院へと思っているのだけど…」
おかみに聞くと
「うず花さん、面会謝絶なんですよ」
「えっ！　そんな…」
あまり突然なので驚いた。
「わたしたちもやっと先週お見舞いに行ってきたばかり。面会謝絶の札が下っていたけれど、無理に入れてもらって…。肺がまっ白になってしまっているんですって。肺ガン、ね」
「肺ガン…！」
高村は絶句した。
「なんだって、そんな急に。今まで、ちっともそんな兆候なかったじゃないか」

「なかったの。でもね、そう言われれば、これまで風邪をひくと、ときどき胸が苦しくなるときがあるって言ってたわ、でも救心を飲むとすぐ治ってしまうので、それですませていたんだって」
「心臓が悪いんじゃなくて、肺が悪かったというわけか」
奥飛弾慕情を歌ったあの夜、途中で家に帰って、救心を飲んだだけで休んでいたのかと思うと、あわれに思えた。
「それが、うず花さん、医者ぎらいなものだから、知らないうちに肺ガンなんかに進んでしまって…、はやく医者にかかればよかったのに」
「もう、手おくれ？」
「らしいわね。ときどき発作が起きて、呼吸困難になるので、酸素マスクなの。苦しいらしいのよ。物が言えないものだから、わたしたちが行ったときも、筆談ね、紙に書いて話すの。すっかり痩せてしまって、かわいそう」
ふっくらと肥った白い顔が急にしなびて、眼ばかりがギョロつき、酸素マスクであえいでいるうず花の顔を想像すると、高村は胸が苦しくなってきた。
「誰が世話しているの」
「妹さんといっしょに住んでいるのね。二階に妹夫婦、下にうず花さん。それで妹さんたちが面倒みているの」

高村はいつか送っていった雪の路地の奥を思い出した。今まで一人暮しだと思っていたのに、そういう人がいたのかと知ると、ほっと安堵の気持のほかに、ちょっと裏切られたような気持にもなった。
「それにうず花さん、病気だけでなく、この春、慕っていた人が亡くなって、すっかり力を落してしまっていたの。その精神的ショックも重なって、がっくりきてしまったのね」
おかみの突然の『慕っていた人』という言葉は、高村の中を電流のように走り抜けた。
うず花を慕っていた人って、どんな人だろう。高村の脳裏には、なぜか自分と同じ年恰好の、下町の職人風の男の姿が浮かんできた。その男はどんなふうに、うず花を慕っていたのだろうか。高村の心は動揺した。その夜の客の接待は、うわの空だった。

行こうか、行くまいか、迷いながら、結局病院へ見舞いに行かなかった。面会謝絶という病院側の事情もあったが、突然二人の間に闖入してきた男の存在が、高村の足を鈍らせたことは、まちがいなかった。
十月も末のお座敷だった。
「その後、うず花さんの工合は…？」
隣に坐ったおかみに聞くと
「亡くなりました」

ひと言、そっけなく、そう言った。
そしてすぐ他の客との話に顔をむけてしまった。それ以上うず花の死について、口にしようとしなかった。それは予期せぬ冷え冷えとした態度で、高村には意外だった。それは、死んだ人にはもう用はないといった態度にも見えたし、そんな縁起でもない話はお座敷で出さないでほしい、というようにも受取れた。
死因は肺ガン。
しかしあれほど好きだった煙草で命を縮めたのだから、うず花にしてみればあるいは本望だったのかもしれない。
高村はしばらく茫然としていた。急にうず花がこの世からいなくなったことが、現実のように思えなかった。
高村は一つだけ、おかみに聞いておきたいことがあった。それは『慕っていた人』というのは、どういう人だったのか…。だがおかみの態度には、その質問を受けつける余地がなかった。
高村は心の中に、ぽっかり、空洞があいた思いだった。

うず花が死んだと聞いた日から、高村はしばらく悩んだ。『慕っていた人』の姿が、たえずうず花の面影に重って、高村を苦しめるのだった。
だが、そんなある時、高村はふっと、あることに気がついた。それは『慕っていた人』というのは、うず花を慕っていた人というのではなくて、うず花が慕っていた

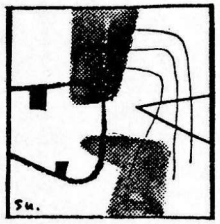
人のことではあるまいか…、そう気がついたとき
「考えすぎだったんだ」
自分の迂闊さにあっと驚き
「そうなんだ、絶対、そうにちがいない」
気分が、すっと、楽になった。
そう言えば、おかみはたしかに『うず花さんを慕っていた人』とは言わなかった。ただ『慕っていた人』と言っただけである。それを高村の方で勝手に『うず花を慕っていた人』と解したのである。
しかし考えてみれば、それが当り前であった。いくら酒の席で、わたしは一人、こんな婆さんに男なんていない、と言っていたって、年老いた女一人が生きていくのに、支えになる人が必要なことは当然すぎることである。そうなればうず花が慕っていた人というのは、年令も彼女より当然上で、会社をすでに息子にゆずった楽隠居のような人でもあろうかと、高村は想像した。
だとすると、慕っていた、というよりも、世話を受けていた人といった方があるいは当っているのかもしれない。おかみは『世話を受けていた』というのをはばかって、『慕っていた人』と婉曲に言ったのにちがいない。
それからというもの、うず花のいない宴席は、同じ座敷に同じメンバーが揃っても、なぜか以前とは勝手が違う気がしてならなかった。

そんな高村の気持を察してか、えん子はできるだけ高村の横に坐り
「やっぱり　うず花姐さんがいないと、淋しいわねえ」
などと調子を合わせてくれるのだが、ある時
「うず花さんねえ、一桜に、たくさん借金があったのよ」
ふと、言った。
「え、借金が」
高村は初耳だった。
「驚いたでしょう。おかみさんから、ずいぶん融通をつけてもらっていたらしいの。それがそのまま死んでしまったものだから、おかみさんがとても困っているのよ」
「返せないの」
「みたいね」
「預金なんか…」
「少しはあっても、入院とか、お葬式の費用がかかって。それに妹さんの旦那さんってのが、とてもがっちりしていて…」
「保険金なんか、入らない？」
「お金のことはよく知らないけど、保険なんかに入っていなかったみたいね」
うず花さんは亡くなりました、と言ったときの、おかみの冷え冷えとした態度が、高村にはわかった気がした。
それにしても世話になっていた人がいながら、どうしてそんなに金が要ったのだろうと高村は思った。生前の

うず花の生活が特別派手だったとは思えなかった。
とすると、やはりうず花を慕っていた人がいて、その年下の男に金を注ぎこんだのか…、再び疑念が拡っていくのだったが、しかし、もうこの世にいない人のことである、すべては終ったのだ、もう何も考えまい、と高村は頭の芯を強く振った。
結局高村はうず花の病気見舞にも行かず、葬式にも行かず、そして墓参りにも行かずにしまった。
心残りはしたが、それが一番いいのだと思った。それがうず花への気持をもっとも純粋にしておくことのような気がしたからであった。
晩秋の晴れた一日、高村は隅田川を渡って、堤を歩いた。
桜並木は赤と黄に色ずいた紅葉のトンネルで、梢は半ば落葉しはじめ、高い秋空がすけて、明るかった。
来年の桜のシーズンに、花見の茶の接待をするうず花の姿は、もうこの桜並木にはないのだと思った。
落葉は半ば地面に散り、半ば川面にも散って、水にたゆとうさまは、いつかのうず花の着物の模様のようだった。
晩秋の明るい桜並木を、高村は南から北にむかって、ひたすら歩きつづけた。

柴田富佐子寸描

このひとの文筆歴はもう長い。初初しい東京外語の女子学生の昔、われわれ『作家群』の仲間に加わってきて「人形」という作品を朗読した日のことがいまも鮮明に思い出される。大変昔のことだ。早すぎる結婚で一時遠ざかったことを惜しいと思ったものは私だけではあるまい。しかし、やがて彼女は仲間に戻ってきた。よほど文学への執着が深くなければあり得ないことだ。女性の身だからなおのことまれと言えるだろう。ハシカ患いのようにいまはケロリと文学を忘れ去った仲間があまりにも多いので、とくにそう思う。
「浅草育ち」という作品は復帰してからのヒットだった。『まんじ』になってからは第四号に同じ題名で髪結いおんなのことを書いた。よほどこの題が気に入っているようだ。そしてこの作品も佳品だった。有吉佐和子が好きということをもらしたことがある。なにやら解るような気がする。浅草に根ざして人生派的な、そしてあくまでオーソドックスな作風を堅持している。
近頃では「藤木屋酒店の終焉」が佳作だった。抑制の利いた文章で短編の妙を示してくれたように思う。
（Q太郎）



井中加和寿氏の易占術

山口健二

「住所と電話番号を……」
「タイトウク谷中、谷中墓地ッてきいたことあるでしョ」
井中氏は谷中が好きだから、青山墓地とか雑司ヶ谷墓地とか谷中墓地は誰でも知ッているときめこんでいる。
「墓地ん中ですか」
氏は口ん中の痛みが一段はっきり感じられて、ふくれッ面で云った。
「墓地ん中へ行くにゃまだ早いよ、行き度くないから此処へ来たんだ」
田舎から刈り集めた年端もいかない看護婦に、医者の前座をつとめさせて、既応症の有無や、親子シン族の健康や生存状態をきかせるこの中小企業病院のやり方に氏はムラムラと我慢ならなくなっていた。熱のせいもある。紳士を気どった応対には、もう飽きあきした。最後に、胸にD子と名札をつけたその看護婦はきいた。
「職業は何ですか」
「いろいろやったョ」
「どんな職業を一番長くやりましたか」
井中氏の一番長い職業は教員である。十三ぐらい職業をかえたことがある。今でもやりたいと思っている職業もあるが、もう身体がきかない。こう云うことを看護婦にきかせるのは、多分職業病とか職業と病気の因果関係や疫学の参考にでもするつもりか。まだこの世に出て来てから二十年かそこらの女にそんなこといろいろ喋ってみたって当方の口ん中が痛むだけだ。
「易者だョ」
「易者ッて……あの路に立って手相みてる人……」
D子の顔には明らかに軽侮の色があらわれた。
「あゝ、あれは〝立見〟ッて云うんだ……、街で人あつめて、そこで集めたお客を前もって約束してある家へ連れこむヤッは〝しきり〟ッて云うんだ。キミ東京に何

千人易者いるか知ってる？でも自家に電話おいてやってるのは三百人位だよ。ボクはその三百人のうちの一人だ」
井中氏は腹立ちまぎれにツイ言い過ぎた。医者があとでこのD子の報告をじかにきくのか、それともカルテのどこかにD子が整理して書いたものを読むのか知らないが、いずれにしてもこんなことは時間の無駄使いだ。それより先に手当てしてくれ、こんなことが予診になるとは思えん。こっちは熱もあってイライラしてるんだぞ。
ところが、氏の捨て台詞が変な結果になった。三日程は、点滴だの、検査だのと引きまわされて、氏もすっかり患者になり切っていたし、看護婦共も帽子のうしろについているナイチンゲールを彫った止め金の手前、やさしい女になっていたが四日目の夕方、血圧を計りに来たP子が言った。
「井中さん、アンタ易者さんだってネ、あたしんとこ見てくれない？」
そして掌ひろげてにゅッと出した。随分不躾なヤッだ。井中氏は又々中腹になってきた。大体年をとると人間はおこりッぽくなる、自分の身体が若い時のように、思う様なす早さで動かないから、あたりが馬鹿にしているかに見えてくる。僻みのせいだ。病気で身体が不具合なら猶更のことだ。その上井中氏は誇り高い人柄でもある。
「手出して手相観ろッて言うんかい。手相でわかるところは五十％位のもんだよ。アンタがそうやって立ってりゃ立相ちゅうもんがあるんだ。坐れば坐相、歩けば歩相、寝れば寝相さ。そう云うもん総合して判定するんだ。特に女のヒト観るときにゃ、ボクはアソコ見せろッて言うんだ。それを裸相ッて言うんだ。大概の女、キャーッて逃げてくョ」
「まあヤダー、患者さん助平ねえ」
この中小企業病院は、看護婦は東北の田舎から中卒の少女を集めて来て、看護婦学校に通わせ　そこで出来のうんといい子で二年、大概は四年・五年かかって看護婦の試験通ったのを、お礼奉公風に安い給料で働かしている。都会ッ子でないから悪ずれしていない。帽子の止め金のナイチンゲールになり度いのぞみも強いし、東北人だから粘りもつよい。この看護婦養成法は出来上ったのを雇い入れるよりうまい仕組だ。子飼いだからよその風に汚染することが少ない。だが仕事から離れたり、看護婦の制服を脱ぐと途端に東北の田舎者に戻って脱線することがある。キョウイクされたことは簡単に忘れられるものだ。それが露骨に出るのは矢張り言葉使いだ。テイネイにヤサシクと教えられるのだが、ひどく忙しくなったりすると地金が出る。年をとると地金はいよいよひどく出る。帽子に一本線が入った〝主任〟級になると患者を見くびることも出来るようになるし、結婚からおき忘れにされて来た過去も口惜しく思い出されて、眉間に縦て筋が目立って、患者や若い看護婦に意地悪くなる。〝あ

れがヒステリーッて云う病気だよ。可愛いい子ははやばや相手が出来てやめるもんだが、あゝ云うのが主任だとか婦長だとかエラクなるんだな〃談話室兼休憩室兼喫煙室で善良な患者がひそかに悪口を言う。

氏は急救車と云うもので担ぎ込まれたから、その晩は、看護婦部屋からガラス越しにのぞける観察治療室に入れられ、次の日雑居房の方が満員だと云うので、二人部屋で一日七千円也の部屋に入れられた。多分氏の女房がそのことを承知したのであろう。一日七千円也だと十日で七万円、一ヶ月二十一万円の宿泊料になる。これは病気の治療・検査の費用以外のかかりで、井中氏は〃そんな金ありゃ、温泉へでも行きてえや〃と熱にうかされて叫んだのだが誰もかれのヒッウな叫びに感動する者はなかった。〃どうも女は医者を信用し過ぎるぞ、見栄ッ張りもあるんじゃねいか、俺は身体の具合の悪いとき、まさか傘の修繕や時計の修繕のように傘屋や時計屋へ行くワケにも行かねえから病院へ来るんだ。俺の身体が治せるッてそんなことわかるもんか〃と不貞腐れている。

三日目に熱も少し下って、頭の働きもまともに戻った感じになった頃、未だ三十をいくつも出ていないかれの子供の年頃の医者に言った。

「センセ、俺はこんな部屋に入る身分じゃねえ、雑居房の方へ移して下さいよ」

氏は拾五年前に、未だ現役で教員やっていた頃、矢張り急救車でこの病院へ担ぎこまれたことがある。その頃は雑居房は八、九人相部屋で、同室に昔浅草の六区で寄席に出ていた芸人くずれがいて、その老人のつきそい女房が変に色ッぽくてこの病院の雑居房が気に入っていたのだ。だから今度はこの病院を指定して担ぎこまれたのだ。ところが、何時の間にか、その大部屋は二人部屋、三人部屋、四人部屋、とこま切れにされて入れる患者の数によって部屋代がちがう。氏が入れられた部屋は増築された新館と云う方にあって、冷蔵庫・テレビ・電話・手洗所がついていて二人用で真中をカーテンで仕切る仕掛けになっている。カーテンの向うにいる猿のポスの様な顔した爺様が、カーテン引かずに便器使ってシャーシャブッブッ大小の用をたすのも甚だ不愉快だ。こっちは熱にふらふらしたって便所へは行く。

「婦長に言っておきましょう、キミ婦長にそのこと言ッといて……井中さんは旧館の方へ移り度いッて……」

医者は氏の横ッ腹のうしろあたりに太い注射器をぶちこんで、小便色の液体を吸い出しながら、手許をつとめている看護婦に言った。かの女は医者が液体を吸いとっている間、氏の血圧を計っているのだ。

「九十まで下がりました」

「ひと先ずこの位だな」

〃ずい分とれるもんだ。膿盆一杯の赤黄色くにごった水、何だってこんなものたまッたんだ。俺の命のばそう

としてこんな水ためるんかな、それとも俺の命の悲鳴の涙みずかな〃

「センセ、何だってこんな水たまッたんですか」

「少し楽になりますよ、この水が肺を圧迫してたんです」

医者は氏の質問には答えずにサッサと出て行った。その背にむかって氏は重ねて言った。

「センセ、俺はこの部屋に入っていられる身分じゃねえ。雑居房の方へ頼みますよ」

病気だと日数を数えることを忘れる。一週間は過ぎた頃、氏の希み通り雑居房にあきが出来て、引越しということになった。氏は結構歩いて行けるんだが、雑居房に入る時、重症者をよそおッた方が貫目がつくから、ナイチンゲールが言う通り車椅子に乗った。この車椅子と云うヤッが、氏の気分をいよいよ病人に仕立ててくれる。

五〇七号室は旧館五階の七番目の部屋である。看護婦部屋に近い方から一号・二号・三号と号数がふえて五階には十四号まである。回復の見込みのない患者は看護部屋に近い個人部屋に入れられる。個人部屋でもこれは差額ベット室の様な特別施設はない、それでも部屋代は一日二千五百円也、但しここに入れられると大体二三日から十日位で昇天することになっている。金のない人間の最後の贅沢である

この病院は、関東大震災後にその教訓を生かして建てられたから、耐震のため柱の数も多く鉄筋も密に入れられているのだろう、総じてガッシリした姿勢で建っている。だが何と言っても六十年の年令をとっている。何より骨董然としているのは、エレベーターが太い刃金のロープ黒々と井戸の釣瓶式に上下するのが裸で見える代物であることだ。建ったばかりは、あたりを払う近代的高層建築物であったにちがいないが、今日では軒なみの仏壇仏具屋が何十軒も六階・七階・八階のビルに変り、その狭間に古色黒々とうずくまっている。初め五階の建物であったものに、もう一階追加してからも四十年は経っているのであろう。豪雨が降ると雨漏りがして廊下に馬穴がおかれる。一階は、事務室・薬局・外科・整形外科・形成外科・レントゲン検査室・内科診察室・糞尿検査室・特殊診察室・血液検査室・霊安室等に分れ、二階に眼科・耳鼻科秘尿器科・物療科・第二事務室等があり、三階が産科・婦人科、四階が外科、五階六階が内科の病室になっている。医務室・職員合同食堂も六階にある。だから一応は総合病院と銘うって、病床数二百を数える。新館と云うのは、旧館の三階から渡り廊下で道路を跨いで、別ビルにつながっている、この方は新式の器械検査室例えば電子検査室・心電図室・胃カメラ検査室・C・Tキャット等々の部屋と三階までの新式エレヴェーター、広

く出来ている医務室・看護室、それに差額ベッド用の個室が縦横に並んでいる。五萬円クラスの高級室も三個程ある。総じて上等と思はれる空間である。だから井中氏の入っていた二人用七千円也の部屋は新館では一番低級な差額ベッドと言うことになる。そこを車椅子で出発した氏はさすがに落人の感じを禁じ得ない。でもナイチンゲールは氏の落人感覚には委細かまわずに長い渡り廊下をわたり、太い鋼鉄ローブが裸で露出しているエレベーターに乗せ、やがて五〇七号室のの廉をはねて中に入って言った。

「みなさん、新しい方です、ヨロシクお願いします」

氏は素早くこの七人用の雑居房を見わたした。仕切りのカーテンはなく、申し分け風に立っている仕切風屏も片隅へよせられ、見通し甚だよろしく、隠し立てのきかない風景である。〝こんな連中に挨拶なんかしてやるもんか〟氏は車椅子にふんぞり返った。〝死に際になって人間共に仲よくして貰う必要はない〟

ベッドの患者は一斉にうたがわしい目をむいて井中氏を眺めた。十五年前には雑居房に見られなかった人間の険しさである。たった十五年で人間はこうも変るものなのか、先ず入口寄りの隅の方には、頭のツルリと禿げた、七十を越した老人が、目だけ見開いて仰むけに煎餅の様にベッドに張りついて動かなかった。〝これが入口の赤札の患者だな〟あとは氏を含めて全部白札になっている。自分の用を足せる患者だ。三尺余の空間をおいた氏の向い側は、ベッドに将棋盤をひろげて詰め将棋を考えている。その頭の方には青白い三十男の顔が見え、その向いには老人が、郵便貯金帖をひろげて、物思いにふけっている。多分貯金の減って行くのを暗然と思いなやむ姿勢である。動けない老人の向い側の偶には学生風の若者がベッドに足を投げ出して、ベッドの頭の方の鉄柵によりかかっている。一人の女がかれに並んでベッドに足を投げ出している。どっちが病人だかわからない。もう一人の若い女がベッドの脇の椅子に坐ってベッド上の女と競争する風に患者の若い学生にからみついている。その学生風の足の方に、これは完全に知能の発達が停止してそのまゝ年をとったと思える小男が漫画の本を十冊程窓ぎわにつんで読んでいる。ベッド脇の物入台の上には鏡がかざられ、かれは時々どこから見ても歴然とした蒙古症面をその鏡の中にうつしてみている。到底鏡にうつして観賞する顔ではない。学生風は松葉杖をベッドに立てかけているから足を手術したのだろう。五階は内科となっているが整形外科の患者もいるのだ。この学生風と女二人はキャッキャッとからみ会って、すぐ三尺余の空間をおいて横たわっているもう点滴のうち所もない程やせた煎餅老人に一片の同情も示そうとしていない。その老人のベッド下と廊下の窓下に二尺程の空間をつくって布団を敷き、女房と見える中年の女がはべっている。

井中氏は肺炎と云うことで、この病院に担ぎ込まれたのだが、検査の結果、肝機能がひどく衰えており糖尿病があり、且ッ胃潰瘍もあると云うことになっていた。その上にこの病院に来る前に五年間口内腫瘍治療のためにうけた放射線が放射線性骨膸炎に発展して、此処に入院してからも一週一度は外出という形で歯科大学に治療をうけに行くことになっている。要するに全身が総体駄目になって来ていたのだ。だから氏は医者を信用していないし、人間と礼儀正しくつき合うことにあきあきしていた。エライ人なら、此処らで死ぬ時期の近づいたことを知って、おのれの魂を情くしておき度いとでも考えるのだろうが、氏はエラクないから、死が近づいたことは知ったが、意識がうすれ、呼吸が止まる最後まで、自分の好奇心を満足させたい慾望が猛然とつき上げて来て、併せて他の人間共を豪然と見下ろしてやり度い気分にかられて、大急ぎで未だ読み終えていない横文字の本を枕許に積んだり、遺言を書いたり、こんな時でないと読む暇のなかった易占の本や手相術の本を当てもなく読みあさっていた。ある日回診に来た整形外科の主任医師で、この病院の看板の一人になっている男が、氏の枕許の本を横目でながめて言った。

「マスターコース・イン・ヒポノティズムか、あんた、催眠術やるんか」

氏はこの医者が、自分の整形手術の腕前を鼻にかけている様に思へて何となく好かぬところから、黙って横をむいた。〝この医者の発音は悪い。こんなヤツに答えてやるもんか〟、医者は連れて来た若い医者に、先輩面で学生風の骨折の状態を説明して、氏にそっぽをむかれた不名誉を少し挽回してそり返って部屋を出て行った。

死に際にツッ張る気分が全身に行きわたった井中氏は、五〇七号室を氏の高い誇りをきずつけかねない危険な空気が充満していると感じて家の者に特別に注文をつけて差入れさせた太めの樫のステッキを枕許に据え、夜中に便所へ行くときにも油断なくそのステッキを腰に引き据え、殆んどどうとばかりうしろにころびそうに反り返って歩いた。便所は五〇七号室を出て終夜明りのついている看護婦部屋につき当って廊下を左へ折れ、談話室兼休憩室兼喫煙室の前を通って手洗場兼用のガスコンロ室からドアをあけて入る。内科の入院患者の中には尻や前の締りのゆるんだ者もいて壺に到着する前にタイルの床にして仕舞う。又蓄尿ビンがずらりと名前入りで立ち並び、糖尿患者の小便の甘たるい臭いが立ちこめて氏にとっては便所の出入りは足許にも細心の注意を払はなばならない苦しい試錬のときである。又コンロのうしろの壁の中には、ゴキブリが集団で長年越冬をくりかえして住みついているらしく、廊下のその辺に来るとゴキブリの臭い

がぶんとにじみ出ている。だから氏は用が済むと救われた気分になって隣りの喫煙室に入って一服して身心を浄める気持ちになる。真夜中でも、誰か一人か二人の患者が寝られずに煙草を吸ったり、あるいは危篤におち入った患者のところへつめかけた家族が黒々と黙然と一団になっていることがある。

その夜も氏は夜中の便所におきて、その部屋で一服不快を浄めて、さて五〇七号室に帰って再び寝込む前に、痛む口中を何度か嗽をくりかえして清める。これをしないと口の中の痛みを宥める手段がない。豪然とした姿勢の氏もさすがに夜中を意識して、なるべく嗽のガロガロ云う音を殺して洗面器に水を吐き捨てる。ペッペッペッ。あたりは森閑と真夜中の静まりの中で、時々五階下の大通りを暴走するオートバイの爆音が闇をつんざいて登って来る。突然室内に声があった。

「うるせいな、眠れねいじゃねいか」

それはオートバイの爆音に対して怒鳴ったのか、それとも井中氏の嗽の音に対するものか、オートバイは五階下の大通りを走っているのだから此処で〝うるせえ〟と怒鳴ってみても仕方ない。これはテッキリ氏の嗽の音に対する抗議である。氏の心中にふつふつと対抗的な怒りがこみ上げて来た。でも氏はその対抗的な怒りをおさえながらぐっと声を低く落して言った。

「お互いに病人じゃないか、少々のことは我慢してくれよ」

声がかえって来た。

「夜中にペッペッペッはねいだろう。きたねえや。死んじまえ」

これは、明らかに、蒙古症面の低能氏である。井中氏の怒りは脳天をついた。氏は暗闇の中で、枕許の樫のステッキを引きよせ、力をこめて、リノリーム敷の床をたたいて言った。

「何を！コトバが過ぎやせんか、俺の生き死には俺のもんだ。手前ごとき者の指図をうけるか！」

もうこうなっては夜中だから声をおさえようとする努力は無駄である。井中氏はステッキを握ってベッドから滑りおりて蒙古症面のベッドに近よった。がそれは、勢力を張る姿勢に止め、踵を返して、ドアをあけて廊下へ出た。自分を沈静するためにもう一服する気か、いや、かれは明りのついている看護婦部屋へそり返って一直線に歩いた。〝今のオレの声は可成り高かった、隣近処の病室にも充分きこえている。看護婦たちにもきこえたであろうが、こんな喧嘩は両成敗になる〟蒙古症面と両成敗では氏の誇りがゆるさない。氏は出来るだけ顔の筋肉を和やかにゆるめる努力をしながら看護婦部屋に首をつっこんだ。丁度十二時の定時巡回ということを終えたナイチンゲールが一人帰って来た。

「ボクは、五〇七号室の井中ですが、ボクのななめ筋

向いにいる患者は甚だ危険な人物ですよ。今後ボクとの間に何が起ってもボクに一切の責任はないからネ」

井中氏は国際外交に使われる言葉を使った。

「何かあったんですか」

「いや、夜分嗽するボクに〝うるさい、死んじまえ〟って吠えたんです。これは非常に重大な発言で常人の口に出来る言葉ではありませんぞ、これから多分ボクはかれをコラシメねばならぬことがあるでしょうが、あらかじめ了解を得ておき度いと考える」

井中氏の日本語は東北の田舎出のナイチンゲールには難かし過ぎる。かの女は只ニヤニヤして立っている。井中氏にしてみれば自分がおこすいざこざに対する一種の予防線のつもりである。蒙古症面に対抗するためにナイチンゲールを初め他の入院患者や医者や付添人に先手を打っておく必要がある。そのためには、そう云う人々に対してもう少し愛想よく振舞い、かれらの手相を見てくれと云う申し出にも気軽く応じてやることがこの際よさそうだ。

その次の日から、氏のうしろへそり返って歩く姿勢には変りがなかったが、ナイチンゲールや他の入院患者や、つきそい人に対して気軽に手相をみてやるようになっていった。尤も手相をみる前に、あらかじめその人間の人相、骨相・立相、坐相に注意を払った観察し、過去・現在・未来を語る材量を溜める必要がある。街頭に立って人を集め、そのうちから何人かを連れて約束済みの家に連れ込む所謂〝シキリ屋〟方式にはサクラが必要だが、病院の中でサクラを用意することは出来ない。矢張りズバリ言い切って相手の度胆をぬいてゆかねばならぬ。その上相手と世間話をしながら、その人を取り巻く環境を洞察する必要もある。そうでなくても三角にとがっている氏の目付は一段と凄味を増してゆく風であった。

「センセ、あたし普通に結婚出来るかしら占ッて……」

ナイチンゲールの一人が談話室兼休憩室兼喫煙室へ入って来がしら手を出した。顔を観ると兄弟局のあたりの毛が薄い、然も魚尾・涙堂が黒ずんでいる。これは兄弟が少なく、その上過淫の兆候がある。独身女のくせに過淫の兆候とはどういうことか。井中氏をセンセと呼ぶのはまちがってはいない。ヤクザ、ヤシ、テキヤの世界では易者の呼び名はセンセイ又はボウズである。このナイチンゲールがそんなことを知っての上で氏をセンセと呼ぶのではなかろうが、かの女らにとってベッドの枕許に横文字の本や、何やら得態の知れない本を積んでいる氏は矢張りセンセなのである。

「ウン・結婚は普通に出来るよ。だがキミは兄弟が一人しかいない。兄さんだな、その人の意見がモノを言うナ」

井中氏は、かの女の手の運命線・頭脳線・感情線の走り具合を、それらを庶る支線から流年法によって判定し

てズバリ一気に言ってのけた。
「まあホント…あたしたしかに兄一人なのよ。どうしてそれ分るの？」
「そりゃ秘伝があるんだ。職業上の秘密だから、どこを見れば分るかは今は言わないよ。それからアンタの結婚は二五から卅までの間で割に晩婚になるが……あせッちゃいかん」
「その人あたしんとこ思っていてくれてるかしら……」
「うん、キミの方が傾むいているナ、だがあせッちゃいかん、それから今そのかれと争そっちゃいかん、ときどき、どうしようかしらんとキミは考えこんでるんだろ、喧嘩しちゃいかん。少々は相手が無理言ってもハイハイッてついていく気分でいかにゃいかんナ」
「ついてゆくのネ……実は今かれともめそうなの」
「そうか……」
井中氏の判定は全く当て推量と云うわけではない。〃しきり屋易者〃が秘伝とする人相・骨相の術と最近の看護婦と普通の男の恋愛沙汰にまつわり易い人事人情の機微の洞察が基礎になっている。
「この上は手相だけじゃはっきり言えない、易をみてやろう……と云っても筮竹算木が手許にない……そうだ、一番簡単な方法、擲銭の術でみてあげよう。いいかい、先ず、キミの名前をいい給え、あゝ此処にある。大玉スキ子さんか」
「いやだワ、ヨシ子ッて言うのよ、大玉なんていやな名前ネ、センセ姓名もみるの？」
「いや姓名学は別だ……いいかい」
此処で氏は初中終手首にはめて持ち歩いている皮袋から財布をつまみ出して、百円硬貨を六枚とり出した。この皮袋の中には小銭と煙草、ライターと鼻をかむ手ぬぐいと老眼鏡しか入っていない。忘れッぽい惚け寸前の老人井中氏の常用必需品である。
「いいかい、これをこうするんだ」
氏は六枚の硬貨を両方の手の平でかこみ、数回、上下左右に振った。そしてナイチンゲールの目をヂット見据えて、三度大声で叫んだ。「爾泰筮の常あるに由る」「爾泰筮の常あるに由る」「爾泰筮の常あるに由る」
ナイチンゲールの顔の筋肉が少しづつ引きしまって来た。「乾元亨利貞」「乾元亨利貞」「乾元亨利貞」と今度は声をおとしてうなった。かの女は段々氏のあやしい呪文に引きこまれて顔が赤くなってゆく。頃合よしと氏は再び大声に戻って言った。
「大玉ヨシ子結婚のこと、えい!!」
そして右の手のひらに反りを持たせて硬貨を次ぎつぎと一列に並ぶようにリノリームの床上に擲げた。もうこの頃には談話室兼休憩室兼喫煙室のソファで雑談していた患者や、付添人たちが結果如何にと氏とナイチンゲールをかこんでいる。

若い医者も何ごとかという顔つきで入って来た。氏は床に並んだ六枚の硬貨の裏と表を確認して手許の鼻紙に裏を陽、表を陰に配した易卦になおして言った。〃山火賁〃という卦だ、矢張りあせッちゃいかん。短気なれば未だ遂げがたしという卦だ。ところで……〃と氏はかの女の耳もとに口をよせて、あたりに聞えないようにささやいた。
「あれヤッチャッたか」
ナイチンゲールは一層赤くなりながら〃うん〃とコックリした。「この卦はナ、産後瘀血の滞りありという卦である。遠方の医師より近くの医師をヨシとす、わかるかな」
腕を組んで見ていた医者が手を出して、ついに云った。「ボクのも見てくれんか」静観していた医者に大玉ヨシ子はサクラの役をつとめたことになった。〃どうも医者は威張っていて気に入らん。少々この際おどしておく必要がある〃
「センセかね、いいですよ」
氏はつき出された手の平の主な線や筋の走り具合、その深浅と色艶を横目でチラッと見て「おゝ！」と叫んだ。これは相手の度胆をぬいて相手を氏の領域に誘いこむ術である。
「こりゃ大したもんだ、アンタは名医になるウツワですぞ、先ずこの頭脳線がグッと月丘にたれこんでいる。これは科学を元とする西洋医学をやりながら甚だ理想主義者であり、文芸的才能を包蔵していることを示している。ツモンモ医者は五者でなけりゃイカン。先ず(一)に学者でなけりゃイカン。学問しなけりゃ藪になりますぞ。(二)に医者は慰者でなけりゃいかん。患者の心をやわらげる術を身につけにゃいかん。ご存じの前日本医師会の会長であった某氏はテンノー医者を自負して医師会にクンリンしていたが、晩年入院して初めて患者の苦しみがわかったとコクハクしているが、あゝ云う非医者になってはいけませんぞ。(三)に医者は易者でなけりゃいかん。徒らに患者の延命を策して苦しめるのはいかん、ここらがこの患者の定命であるという洞察力を持ち且つ深くカミをおそれる心を持たにゃいかん。(四)に医者は達者でなけりゃいかん。自分の身体が弱いようでは人様の健康の修繕は出来ませんぞ。(五)に医者は芸者でなけりゃいかん。芸ゴトの一ッや二ッ、医学の勉強の傍ら身につけておきなさい。これを五者といいます。その点でセンセ、仲々いい。将来名医になるウツワでございます」
「ウンそう言われりゃボク、医者のくせに小説かいたりしている」
この若い医者は大玉ヨシ子をみて、我が意を得た風にニヤリとした。多分かの女らナイチンゲール共の間で、この医者が小説かいてることが知られているのであろう。

井中氏はそもそも蒙古症面の攻撃をかわすために味方をふやそうと患者、付添い、ナイチンゲールと相手かまわず気軽く手相をみてやることになったのだが、当の蒙古症面は、談話室兼休憩室兼喫煙室にあらわれることはなく、朝五時頃から病院の一階から六階まで馳けまわって、ゴミ処理人が処理する前に、捨てられたり置き忘れられた漫画雑誌や漫画本をあつめて歩くことに専念している。だから枕許や窓ぎわにはその集めた本がうず高く積み上げられてかれの読書慾の旺盛さを誇っている。あの夜以来井中氏に向って吠えつくことはなくなった。太い樫のステッキが物を言ったのか、それとも氏の易者の名声がせまい病院の中にアッと云う間に広がって井中氏の作戦が効を奏したのであるか。

その様なある夜、ベッドに張りついた老患者の枕許に明りがついて、廊下を馳け歩くナイチンゲールの足音が乱れた。やがて医者が病人の首のあたりに注射をして、病人は担架にうつされて音もなく運び去られた。付添、の女房らしい女が担架のあとを追って走ったが、明け方、疲れた顔にホッとした安堵の色を浮べて帰って来た。病人は死んだのだ。拾余年ベッドに仰向けにねて煎餅の様にやせ、点滴する場所もなくなって息を引きとったのだ。自分の意志を言葉にすることも出来ない患者の命を最後の最後まで引き延ばして来た医学と云うものの残酷さを井中氏は呪った。並びの学生風の男も不相変見舞いに来た二人の女にからみつかれながら、又漫画によみふける蒙古症面もこの同室の患者の死に関心を払う形跡は見られない。病院と云う所は死生について人間を無感動にするのであろうか。

「主任さん、あんたたち病人が死ぬとどんな感じ？」

氏は帽子に一本線のある主任の古手ナイチンゲールに聞いてみた。

「自分で係になっている患者さんの場合、矢張りイヤな感じだネ」

かの女は無感動な顔で言った。〃そうか自分の係になった患者なら少しは感じるのか〃氏は自分が飼っている鳥、金魚、亀の類でも死なれると二三日は無常感におそわれる自分に引きかえ、人間の死にさえ無感動でいられるこの強いナイチンゲール共に恐怖を感じ、〃こりゃ此処に永くいちゃいかんワイ〃とその次の日、医者に退院を申し出た。氏のカルテ帖の最後のページに〃未だ完治と云うに至らざるも本人のたッての申し出により、退院を許可す〃と書きこまれていた。氏はふらつく足で病院を出ると黒々とそびえるその建て物を仰ぎみて、もう二度と此処へは来ないぞ、今度は病院はやめて、真直ぐ墓場へ行こうと声にならぬ声で呟いていた。この中小企業病院へ入った頃、初春の風が吹いていた街頭には、いつしか酷暑の候も終って秋の陽差しが弱い影を落し、やがて冬の来ることを告げていた。

ゾーリンゲンのカミソリ

山根　三枝子

晩春の時期も駆け足で過ぎ去り、ブラウスだけでも夏物を着た方が心地よさを感じる初夏の午後であった。第二次大戦も終ったのち数年を経てこの日本でも世の中はいくらか落付きを取戻してきていた。国分寺駅から十分そこ〳〵歩いた所にある官舎の辺りは新しく開けた田園調豊かな所であった。朝子は毎日のように午後には買物籠をさげて駅前の商店街に出かけ、決まり切ったような晩御飯のおかずを買って来る日が続いていた。その日も午後の日差しがあたり一面のうすみどり色の世界にキラ〳〵と反射し、単調とも考えられる筈の毎日が朝子には別に単調とも感じられなかった。あの戦争という大きな試練を乗り越えるのと共に、子育ての一番体力を要する時期も乗り切りかけていた頃であった。もう空襲警報のサイレンが鳴り響いたり頭の上に爆弾か焼夷弾が落ちて来はしないかと首をすくめて肝をひやすこともなくなっていた。あの万事不自由な戦争中に次々と生れた子供達をおぶったり手を引いたりして、日々を暮した時代も過ぎ去った。小学校の一年と二年になった男の子は何時の間にか朝子より早く歩いたりするようなこともあって朝子を驚きであわてさせたこともあった。ヤレ〳〵苦労も一段落かなというような解放された思いがあったかも知れない。何年ぶりかで身も心もやっと自分自身を取戻したような気がする毎日であった。もう再びおなかを大きくふくらませることなどないようにしたいものだと思った。食べ物も出回ってきているし、主食もパンだったら時折切符がなくても買えるようになって来た。先日のこと露天商が洋服の布地を少しゴザの上に広げて売っているのを見付け、娘のスカートにとピンク色の小切れを五百円で買ったりした。「あゝ、もう服地も買えるような世の中になったのか」という感慨があったのか朝子はいつまでもそのピンク色の布の肌ざわりを忘れないでいた。生活に単調さを感じる程に満たされた暮しではないが戦

中戦後のひどい暮しからどうにか抜け出て、この陽気な光溢れる緑の世界の中にあって朝子はホット一息つくような幸せを感じるのであった。

官舎の横に未だ伐採されずに残っているくぬぎ林があった。その中を通っている小道を通り抜けると下方左手に中央線のレールが見える所に来る。鉄道の枕木の古材で階段をつけられた所を降りると、中央線の他に西武川越線、下河原線等の数本のレールを横切るようになっていた。そこは地形がまことに複雑なところで、踏切りなどはおろか普通の道路さえも作ることが出来ないような所であったが駅に行く近道なので通勤者や主婦などがそのレールを横断する危い道を利用していた。

丁度電車が通過するのを待っていた近所の石田さんの奥さんに追いついた朝子は一緒に買物に行くことにした。初夏の午後の一時、すがすがしい自然の中、午前中にキリキリと家事を片附けたあとではあるし、誰でもいゝ誰かと一緒に話しながら歩くことは楽しいことであった。石田さんは人なつっこくて、くせのない人柄でこんな時にとりとめもない会活を交わしながら共に歩くにはうってつけの人であった。その危ない鉄道線路を横切ると、すぐ右側にレールのある小道がしばらく続く。左側はゆるやかな崖になっていて草が生い茂り、ずっと下方の茂みの中に湧水があり、そこから出る水が小川となって線路の下をくぐって南に流れ出していた。駅に行くこの道は朝子にとって色々な物語りの種がまつわりつく道なのであって、長年の月日が経ってもいつも鮮かに思い出されるものとなっている。レール沿いに百メートルも進むと又さっきと同じような階段があり、土手の上の小道にあがるようになっている。道巾は狭く左側は日立研究所のコンクリート塀なので二人並んでは進めず縦に並んで歩いて行った。中央線をまたいでいる陸橋からの道路にこの小道がつながる角まで来た時であった。道端の草むらに三十そこ〳〵かと思われる男が色あせた紺色のナッパ服を着てそこに腰を下ろしうつむいていた。曲げた両足をひらき両肘をもものあたりにつっかい棒のようにつき、手を頬にあてて頭を支えているような恰好であった。何処か具合でも悪いところがあるように見えた。一人の和服姿の初老の女がのぞき込むようにして何か話をしていた。今日では和服姿というとおそらく外出用とかおしゃれ用でキチンとした身なりを想像するが戦前から戦後にかけてもよく見かけた所謂オバサンタイプの人で着物姿で家事万端の労働をするので何かしら粗末さと汚れっぽさを感じさせる着物を着ており使い古したような半巾帯を雑作なくしめくくっていた。石田さんと朝子はお喋りを続けながら大して気にも止めずに彼等の傍を通り過ぎた。しかし

「あらっ、どうしたのかしら」

「一寸変ね、病人かしら」

二、三米先に進んでいた二人は引返えした。ひょっとするとその男の体に何か重大なことが起っているのかも知れない。それならこのまゝ知らん顔で行き過ぎることは出来ない、何か手を貸さねばこの初老の女一人では困るのではないかと思った。

「この人どうかなさったのですか」と朝子はその女に尋ねた。女は

「この人ね、何か行商してたんだけど此所にきて脳貧血でも起こしたらしいんです。あたしがこゝ通りかゝった時フラ〳〵って倒れるようにしゃがみ込んでしまったんです」私達二人は吃驚して思わず同情してしまい、その女と同じように「どうしたらいゝのかしら」と思いながら暫く立止っていた。その女は腰を曲げてしきりにその男から何か聞き出していた。

「どうしたんですって?」会話の合い間をみて朝子は尋ねた。彼女はあまりハキ〳〵せずに、少しのろまのようにも見えたが要領を得ないような話しぶりで話し出した。その間にも男は苦しそうに咳込んで、咳を止めた時一寸うめいた。彼女の話に依るとその男の働いていたかみそりの会社がつぶれ退職金のかわりにかみそりを貰ったとか云うことだった。女は

「あんたあ、それ売ったお金で田舎に帰るんだって?」と云った。男は如何にもひどい病人らしくわずかに頭をふってそうだというような返事をした。

「どれがかみそりなの、え、この風呂敷包だって」女は男にきいた。男は下を向いたまゝ僅かにうなずき、さも大儀そうに風呂敷包を片手で解いてかみそりの箱をあけて見せてくれた。

「これはゾーリンゲンなんです」

男は弱々しい声で終始顔をあげることなくかぼそい声で言った。ゾーリンゲンのかみそりは終戦後の日本では中々手に入れることの出来ないものだということ、値段は割引くから是非買って欲しい、兎角田舎に帰る旅費さえ出来ればいゝんだからということが男と女のやりとりするはかばかしくない会話から朝子達は知ることが出来た。

ゾーリンゲン(Solingen)は古くから開けた西ドイツの工業都市であり、ライン川沿いのデュッセルドルフの近くにある刀剣や刃物類で知られた町である。十三、四世紀の頃にシリヤ辺りから技術を導入したようで以来伝統ある刃物の生産地としてその名を世界に知られてきたのである。

そのかみそりは一本千円とか言った。当時主食や調味料の買いおきがあれば千円で四、五日分の副食費をまかなえたと思う。だがらそれは朝子にとっては一寸奮発せねばならぬ金高であった。何しろエンゲル系数が七、八十%の時代であったから。しかし一本買ってあげることにした。

朝子の夫である壮夫は非常にあごひげの濃い男であっ

た。毎朝女房よりも早く起きて剃らないと出勤に間に合わない位、ひげは一夜のうちに目立つ程に伸びていた。神さまの御手によって体が作られる時の何等かのミスからであろうか。又はそうなることが神さまの御心であったのかは分からない。とにかく毛髪が頭のてっぺんとあごの部分を取り違えているのである。だから三十代の半ばだというのに頭のてっぺんは毛髪がだん〳〵と薄くなりかけているのに反し、あごの部分は剃っても剃ってもバリ〳〵と物すごい勢で毛が生えてくるのであった。

戦前には鋏とか、かみそり類はドイツ製が大へん良いとされていたし、朝子はゾーリンゲンのかみそりが良いということを何時か何処かで聞いていてゾーリンゲンという言葉が耳の奥に入っていた。一寸高価なものだが毎日使うものだし、切れ味もよし持ちよしということなら屹度壮夫も喜んで使ってくれるだろうと思った。それにその男に対してもいくらかの人助けになるんだからと、それを買うことがとても良いことのように思われた。石田さんは買おうとしなかった。朝子はふと彼女の夫のひげのない女性的な感じのあごを思い浮かべた。それに彼女はその時あまりお金を持ち合わせて来ていないようであった。その日は月給日のすぐあとだったので朝子の財布のひもは何時もよりいくらか緩んでいたようでもあった。

戦後のあの貧しいゴタついた世の中でも、否無秩序の世の中だったので、かも知れない。何処からとも知れず、たまには品質のよい外国製の品物を手に入れることが出来るようになってきていた。朝子の実家の母は昭和二十一年か二年の頃に進駐軍の伝手からであろうかアメリカ製のベーコンをたまには求めることが出来て横浜からわざ〳〵埼玉の大宮の朝子の家に持参してくれた。「少しだけどね」とことわって小さな一塊をおいて行ってくれたことがあった。そのおいしかったことは長い間忘れられない位であった。又壮夫の実家から送って来たものはラベル無しの缶入りのもので何んだろうと思って開けてみたら、十年も後になって市場に出回って来たあのインスタントコーヒーであった。これも又何んと〳〵おいしいものかと思った。そんな経験のあとだったのでこのかみそりもそういった風にして手にはいることに少しも疑を持たなかったのであった。

代金を支払ってかみそりを貰い石田さんと再び歩き出した。かみそり屋が病気になってしゃがんでいた所で左に曲がると暫らくは左手が林という道で、又すぐに右に曲って真直ぐ行くと、つきあたりが駅前商店街の通りになっていた。その商店街に近づいて来た頃何故かハッと突然朝子の頭に閃めいたものがあった。それは「これはたして本物のゾーリンゲンかな」ということであった。その疑の暗雲はまるで真夏の夕立雲のように心の中に広がって行ったのである。「どうしようか。そうだすぐ引返えしてもう一度確めてみよう。そして若し偽物だった

ら取引きを解消して貰おう」と思った。急ぎ足でさっきの角のところに引返えした。ものの五分とたっていない筈なのにもうさっきの男も女も姿を消していた。疑は更に深くならざるを得なかった。しまったことをしたと思ったが、そうだ商店街のあの理髪店できいてみよう、本物だということだってあり得る、床屋さんが本物だと言ってくれれば納得もいくだろう。石田さんはおとなしくて気がいいだけでこんな時に力になって名案を出してくれるような人ではなかったが理髪店まで一緒について来てくれた。

「こんにちわあ。すみません。一寸みていただきたいんですけど——。これ本物のゾーリンゲンでしょうか」床屋はせっせっとお客の頭を刈りながらあまりちゃんと見てくれようとはしない。不愛想でもなし、かといって親切でもなし、朝子には了解出来ぬ態度。朝子は繰返えし言った。

「道端で今、これをすゝめられたので買ってしまったのですけど。一寸本物かどうか心配になってきて——」床屋は仕事の手を休めずに一寸だけかみそりの方に目を流し「そうではないでしょう」というようなことを小さな声でつぶやくようにあいまいに返事をしてそれ以上かまってくれなかった。或いはひょっとするとゾーリンゲンのかみそりのことを聞いたこともなかったのかも知れない。

朝子は騙されたのに間違いないという思いが強くなり、くやしさがむら〳〵と心のうちに広がった。どうしても此の不正をそのまゝにしておけるものかと戦闘心に燃えたったがどうしたらよいかというよい考は出て来なかった。晩御飯のおかずに何を買ったのか、そして石田さんは朝子と共に歩んでいてくれたのかどうかも覚えてはいないのだが朝子は帰途につき、あのレール沿いの土手道の方に向って歩いて行った。まっすぐ先が突き当りで林になっているT字路の近くまで来た時だった。ふと前方を見て石田さんと朝子は驚いて立止った。いくら探しても見当らなかった先程のかみそり屋が陸橋の方から右手の方向に元気そうにスタコラサッサと歩いて行くではないか。朝子は「ヤイッ」とばかりその男に突進していき、かみそりを引取らせようかと思った。しかしすぐにそんなことは出来ないと思った。何しろ相手は刃物を沢山持っているし、悪者なのだからうっかり近づいたらどんなことをされるか分ったものではないと思いゾッとした。その時だった。朝子にとっては何んとした好運のことだったであろうか、そしてその男には何んとした不運のことだったのであろうか、一人の中年の強そうな巡査が自転車に乗って朝子達の方に向ってやって来た。朝子は「一寸、ちょっと、おまわりさん、大変です。今さっき詐欺にあったんです。その犯人が今あっちの方に歩いていきました。つかまえて下さい」と夢中で言った。巡査

はすぐに自転車の向きを変えてその男を追った。朝子も走って巡査のあとからついて行った。その犯人は巡査に声を掛けられ何んの手向いもすることなくすぐにつかまえられた。

「一緒に警察に来て下さい」とその巡査は犯人と朝子の両方に言った。交番に着くとその男と朝子は別々の室に入った。朝子は調べをとる警察の者に住所から生年月日、夫の職業から家族状況まですべてを書き取られた。そしてかみそりの取り引きの様子すべてを逐一話して、おまわりは事細かに一々書取った。あまり細々と沢山のことを書き取り、しかも字を書くのが誠にのろくてたどたどしいので朝子は少しいらだって来た。或いは事実以上にその時間を長く感じたのであったのかも知れない。

別室に入った男も細々と調べられた。

「職業は？」

「今決ったのはないです」

「もとは何処かで働いていたのだろう」

「終戦までは軍需工場で働いてました」

「兵隊の方は」

「丙種だったんで戦地には行きませんでした。お国の為だというので工場では残業もうんとやったんです」

「戦後は何やってたんだ」

「工場をやめてからは闇商人になり米や野菜の運び屋など色んなことやりました。もともとあまり丈夫な方ではなかったので体をこわし親元に帰りました」

「国分寺の本田新田の今住んでいる所だな」

「そうです。両親は元東京の下町で商売をやってましたがあの三月十日の大空襲で丸裸に焼出され、親籍を頼ってこの国分寺に来たのです。親元といっても父は病死しているし母と兄嫁とその二人の子供とで暮しています。兄は戦死したのかどうか未だに何んの情報もないんです」

「生活はどうやっているのかね」

「母と兄嫁が町工場で細ぼそかせいでくれ、私は時折日雇の仕事を見付けては働いてるんですがきまった所では中々雇ってくれません。それにあたしは一寸胸を悪くしていて――。病院にはいる程じゃないんですが、自宅療養でいゝと医者は言うんですがあまり具合はよくないんです。軍需工場で少し働き過ぎたのです。あの時うんと貯めたお金は戦後、値打がなくなってしまったんです。」

「ふうん、そうか」とうなずきながら調書を作っていた巡査は

「それにしても君のやったことは詐欺だろう。こんなペコ〳〵した代物で千円も取ったりして」男は恥入るように黙って下を向いた。

「このかみそりは何処で仕入れたのだ」

「兄嫁の働いているのがこのかみそりを作っている町工場なのです。ゾーリンゲンをそっくり真似たものなのです」

「これはいくらで売る品物かね」

「市価百四十円位とかいっていました。少しでも高く売れないものかとあちこち歩き回っても大して売れませんでした。生活はとても苦しいのです。疲れ果てて坐りこんで休んでいてふとあんなことを思いついたのです。えゝ、一緒にいたのは母親です」

巡査は先程の千円を男から取戻した。そして朝子はかみそりを返してその千円を戻して貰った。調べ室を出た朝子は随分無駄な時間をつぶしてしまったと思ったが、とにかく自分の不注意から騙されたための損失は取戻したのだからホットして廊下に出た。玄関に向かおうとした時、廊下の長椅子に坐っている人達を見て朝子は驚いた。先程の老女ともう二人ばかりの男や女が警察に引っ張られて来ていて調べられるのを待っているのであった。あの詐欺男を介抱していた老女はぐるの詐欺だったわけだ。あの犯人の口述から芋づる式につながっていた人達が捕えられて来ていたのであった。

外に出て沈みかけている陽をみて朝子は大へん手間どったことを思い、子供達のことも気になって走るようにして家に帰った。土曜日だったので壮夫はもう帰宅していた。未だ電話がついてなかった頃だったが勤務先から簡単な連絡がいっていたし、先に帰った石田さんから帰宅のおそくなる理由は聞いて知っていた。朝子が帰宅して茶の間に入ると、父親によって用意された簡単な夕食が並んだちゃぶ台のまわりに坐った小さな子供達は心配して食事に手もつけず神妙な顔をしていた。

「バカッ」と壮夫は一言発した。子供達は事の成行を読み取ろうとして三人とも同じような真剣な目付をして父と母の顔色を見ていた。一寸だけグッとひるんだ朝子はすぐに言った。

「何がバカッなのよ。あたし詐欺のグループを取っつかまえたんじゃない。何んにも悪いことなんかしてないし、何処も怪我なんかしてないのよッ」

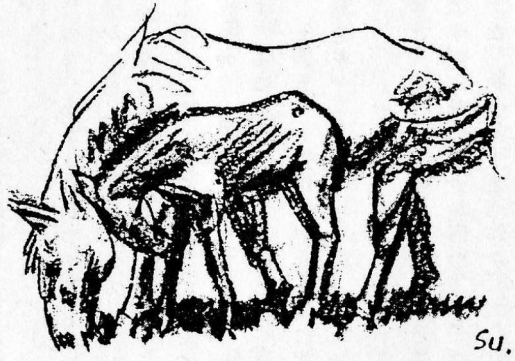
壮夫は朝子のことを怒ってバカッと言ったのではなかった。心配していた自分自身のことそして解決した安堵感、そして多分事件すべてのあほらしさのことをバカッと言ったのであった。家族五人一斉に平静な不断の状態になって夕食を食べ始めた。

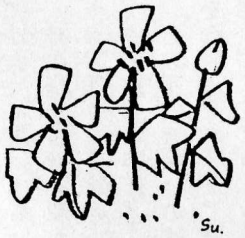
こんな事があった翌年の三月頃であったか末娘が一年生にあがるので入学前の身体検査か何かで朝子は娘をつれて小学校に行った。新一年生を連れた沢山の母親達が集って来ていた。その持一寸驚いたことには例の詐欺事件の時の初老の女も孫で一年生にあがる女の子を連れて来ていた。暫く見ていない顔だし、見た時間も短かかったのに朝子にとって忘れることの出来ないはっきりと記憶に残っていた顔付や姿かたちであった。朝子は自分の娘がこれから一緒に教育を受けようとしているクラスの

中にそういった詐欺をやる人達の子供もいるということがひどくショックであった。そして現実の世の中というものが又一段とはっきり分って見えてきたような気持がするのであった。そういった心の成長がなければそんなことに一寸ばかり耐え切れないような思いがしたのではないだろうか。と同時にこのことは娘には勿論のことPTAで集った時などに決して洩らしてはならないことだと思いそれを守った。あの老女の孫には何も罪はないし、又おとぎ話の中でしか悪者を知らない娘に汚い現実の世界のことを未だ知って貰いたくないと思ったからだ。

あの時は全部の人達がそれぞれの場で不完全なことしか出来ぬ弱い人間であった。色々な点で弱い立場にあり、しかも幼稚で下手くそなやり方で失敗してつかまってしまったかみそり屋のグループ。簡単に騙される位ぬかっていた朝子。そして犯人達をつかまえる協力をした朝子にも又犯人達にも長時間お茶一杯出さずにノロ〳〵と調書を作っていた何んとなく仕事に不馴れな若い巡査。

国分寺のあのうす緑色の草木が美しく風にそよいでいた日、朝子も壮夫もその自然のように青っぽくて若かった日、三人の子供達も幼くつぶらな瞳をしていて、いとおしい程に可愛らしかった日の一つの出来ごとである。





ライスカレー

柴田富佐子

部屋からは又、姉の弾んだ声が聞えた。

「ホラホラ、タカーイタカーイ、ストーン」

幼い笑い声が聞こえ、母の笑い声がそれに被さった。台所にいても、障子を隔てた向うの部屋での光景は、私には目に見えるようだった。まだ歯の生えない小さな口を一杯に開けて笑い声をたてる幼い子を膝に、姉は体中に幸福を溢れさせている。母は脇から腕を伸して抱きとろうとする。少し離れて坐った兄が遠慮がちに笑顔を向けている。

台所の上り框に腰を下して私は部屋の方へ背を向けていた。部屋へ行って笑いを共にしなければと思いながら、次第に大きくなる胸のわだかまりに胸が重たく腰を上げられずにいる自分を持て余していた。

「朋ちゃん、いるんでしょう。何してんの、そんなとこで」

姉の明るい声が私の背中を押した。

「一緒にお茶でも飲んだら」

母の声には今にも障子を開けそうな気配があった。私は慌てて腰を浮かし、背中を向けたまま言った。

「晩御飯の買物に行くんでしょう。あたし行ってくる」

「そう、行ってくれる」

障子が開いて母が顔を覗かせた。

「何にしようか」

「ライスカレーでいいでしょう。カレーなら作れるから」母から財布を受取り買物籠に入れた。

「何怒ってんの、朋ちゃん」

「別に怒ってる訳じゃないの。いつもああなのよ」

姉と母の声を聞き流して私は外へ出た。

ダラダラの坂を下りた所に、焼け残った商店街があって、八百屋・魚屋・肉屋・乾物屋などが軒を並べている。周りの焼跡にもバラックまがいの家がかなり建って来て、どの店先も買物籠をぶら下げた女達で賑わっていた。こ

れまで私は殆んど台所に立った事がない。部屋に行きたくない一心で晩御飯を作ると言ってしまったが、ライスカレーさえ作った事はなく、作り方もおぼつかなかった。ただ、いつだったか、新聞か雑誌の記事で作り方を読んだ記憶があっただけである。何をどの位買えばいいのか解らなかったが、ジャガイモと玉葱と人参を八百屋で適当に買い、肉屋で豚肉とカレー粉を買った。

買物に出ていた僅かの間に、台所は薄暗くなっていた。私は裸電球のスイッチをひねった。

この家の家主である城田の母親がガスを嫌いで引かなかったという事で、御飯は薪で炊いていたし、料理は七輪で作っていた。

私が帰って来た音で母は障子を開けた。

「大丈夫、本当に作れるの」

今にも立って来そうな母を私は押しとどめた。

「大丈夫よ。カレー位、私だって作れるってば」

「そうよね、朋ちゃんだってもう十七だものね。たまには作って貰いなさいよ、ねぇ」

母の横から顔を覗かせた姉に、私は大きく頷いて見せたが、作り方の遠い小さな記憶を引き出す不安が、いつか胸に拡っていた。

その不安を払いのけるように、私は手荒にジャガイモを洗い皮を剝いた。母が作るカレーのジャガイモはどの位の大きさだったか、いざ切る段になって私は迷ってしまった。こんなに大きくはなかったと、考え考え半分に切り、半分に切りしている中に、ジャガイモはどう見ても小さすぎる大きさになってしまった。

（まあ、いいや）次に人参を洗い皮を剝き、ジャガイモと同じ大きさに切った。

玉葱の皮を剝き、これも半分に切り半分に切り、小さくしてしまった。

七輪に火を起こすのは、母の見様見真似で、新聞紙を丸めて火をつけ、消炭を載せ、団扇で煽いだ。その上に炭を置き、又しばらく煽いでいると、炭と炭の間から青味をおびた炎が幾條も上って来た。煽ぐ度に、パチパチと線香花火のような音をたてて火の粉が舞い上った。意外と簡単に火が起きたのに気をよくして、私は鍋を載せ油を垂した。確か野菜は煮る前に油で炒めるんだった、

消えかけた記憶の糸をやっと私は繋ぎ合せた。野菜を炒め、肉を炒め、水を入れて蓋をした。火が少し強すぎるような気がしたので、七輪の口を半分閉めた。

野菜が煮えるまでの間、私は流しの野菜屑を捨てたり、洗い物をしたり、する事がなくなると板の間を拭いたり、三和土を掃いたりした。何もしないでいると、又障子の向うから声が掛りそうだった。

赤ん坊ははしゃぎ疲れて寝てしまったのか、障子の向うは静かであった。

小さく切ったせいで、ジャガイモはすぐ柔かくなった。

私は丼に小麦粉を半分程入れ、カレー粉を混ぜた。小麦粉の方が量はずっと多いのに、粉は一様にカレー色に染った。

さあ、これを入れてひと煮立てさせれば出来上りだ。蓋をとって床に置いた。鍋一面から立上る湯気が、私の頬に快いぬくもりを与えた。何となく幸福な気分になって、しばらく私は鍋の上に頬をさらしていた。箸の先で丼のカレー色の粉を加減しながら少しずつ入れた。全部入れ終ってから、箸を鍋に突込み、ぐるっと一かきした。

（ああ、出来た）

丼を流しに置いて鍋を覗いた私は、一瞬何が起きたのか理解できなかった。

鍋の表面で白い小さな粒が無数に沸上ってくる湯の中で踊っている。その粒がどこから来たのか。

（え、何なの、これ）

火の勢いが強い真中から沸上って、四方に散り鍋一杯にふわふわと浮き沈みしている白い粒を、私は最初白い虫かと思った。しかしどう考えても、これだけの数の虫が、鍋に入りこむのはおかしい。小麦粉の中にいたのだろうか、ただ不思議で驚きであった。私は七輪の口を完全に閉めた。と、火の勢いが弱まって、白い粒の踊りが止んだ。カレー色の湯の表面をびっしりと覆い尽し、手を繋いでかすかに揺れ動いている粒の一つを箸ですくい上げ掌にとった。気味悪いのを我慢して右手の人差指で押し潰した。粒は砕けて粉になった。小麦粉の粒であった。

私は何もかも嫌になった。

鍋の蓋をし、箸を流しに投げ捨てると、そのまま外へ飛び出した。出た所で行く当てはなかった。

もう外はすっかり暗くなり人通りはなかった。通り一つ距てた向い側の焼跡は、片付けられてはいるがまだ家は建たず空地が拡がっていた。

真直ぐ行くとすぐ護国寺の裏塀にぶつかる。

境内の緑が黒々とコンクリートの塀の上に溢れていた。

戦災で家を失ってから、私達一家は母の実家に疎開していた。大学中途であった姉は、何とか東京に住いを見つけようと、小学校で六年間担任であった城田を訪れた。城田の家が戦災をまぬがれたと聞いたからであった。城田の方でも一緒に住んでいた母親が病死し、信頼出来る留守番を探していた。取敢えず姉が一人で先に上京し、続いて母と兄と私が上京した。私達が上京した頃、姉はあと一年の大学を辞めて働いていた。戦災で家ばかりか父まで失った一家の長女として、姉は家族のために働かねばならないと決めていたようだった。近くの印刷会社で経理を担当していた姉は、いつか社長の秋川と関係をもつようになっていた。もともと機転は利くし人扱いは上手いし、私と違ってスラリとして美人の姉は営業に向

いていた。焼け残った機械が少ない上に、折からの出版ブームに巧く乗って、秋川の会社はどんどん業績を伸していた。工場の二階に部屋を作り、姉は秋川と同棲していた。しかし、秋川には仙台に疎開したまま帰って来ない妻子がいた。姉が身ごもって離婚話が具体化した。妻は一人娘であったので年老いた両親が離したがらず、妻も又混乱した東京へ帰るのを渋ったため、娘が一人前になるまで養育費を送る事で離婚話は纏った。

陽が落ちると、急に肌寒くなる陽気であった。何も羽織らずに飛出した私は、肩から背中にかけて肌を突き刺す寒気を振り払おうと腕を廻してみたり、肩をすくめてみたりしながら歩いていた。

私は医者になりたかった。男を頼らず自分一人で生きていくには医者になるのが一番いいと思った。母からその事を聞いた姉は、

「学費は私が何とでもするから、しっかりやりなさい。私は中途で諦めちゃったけど、朋ちゃんはしっかりしてるからきっとなれるわよ。なりたいものになりなさい」

と言ってくれた。家庭教師でもして多少の学費は稼ぐ積りでも、大方の負担は姉の肩にかかるようになるだろう。来春、兄が大学を出て就職したら、母と私は秋川の工場へ移る事になっている。母に子供を預け家事を分担して貰えば、姉は安心して仕事に専念できるだろう。

「朋ちゃんにも、事務の少しは手伝って貰うから、遠慮しなくていいのよ」

姉もそう言うし、秋川もいい人だったからそう遠慮をしなくてもいいのかもしれないが、私にはどうにも捨てきれない後めたさがあった。秋川の娘の事である。父親を失った娘の辛さは姉も身をもって知っていそうなものなのに、身ごもった自分の子供の存在を正当化するために、姉は秋川の娘を犠牲にした。秋川の娘が坐るべき場所に私が坐り、六年間の学費と生活の面倒を見て貰うというのは、いま一歩足がすくんで踏み出せない。だが、自立した道を歩こうとするなら、六年間じっと目を潰っていなければならない。試験を四か月後に控えて、今尚そんな事も割り切れずに堂々めぐりの悩みをむし返している自分が、情無くてやり切れなくなる。そんな暇があったら単語の一つも余分に憶えなきゃならないのに……

母の姉の兄の、秋川の、たった一度写真でみた秋川の妻や娘の顔が、浮かんでは消え浮かんでは消えして、気がつくと白い粉の粒になってふわふわとカレー色の水面に浮いていた。

あみだくじのように、右でも左でも曲り角があると曲って歩いていたら、坂下の商店街に出てしまった。夕方買い物に来た時とは違い、どの店先にも人影はなく、裸

電球を軒先にまで張出している八百屋だけが浮上ってみえた。その時、私はその光りの中に、ついと体を滑り込ませた男を見た。背の低い腹の突き出たくわえ煙草の男は、丸山に間違いなかった。私は反対側の風呂屋の塀にへばりついた。

店先の台に山積みされた密柑を指さして、丸山はくわえ煙草のまま何か言っている。八百屋の小母さんが紙袋に密柑を移し丸山に手渡した。白い紙袋を抱えた丸山は私の前を通り坂の方へ歩いていった。塀から離れて私が八百屋を通り過ぎようとした時、店の奥にいた小母さんが走り出て来た。

「ねぇ、一寸、一寸」

小母さんは私の腕を掴み、

「今さっき密柑を買った人、先生のコレかい」

と私の目の前へ親指を突き立てた。そり反った親指の頭が、私にはひどくいやらしく見えた。自分の事を言われたような恥しさで、胸が急に熱くなった。

「知らない」

私は息を切らし切らし、涙をこすり走り続けた。走りながら、心の中で丸山を罵倒しつづけた。

丸山は学生の頃、城田の家に下宿していたという。その頃から城田が好きだったが、風采の上らない丸山を城田は相手にしなかった。

それから二十年余の歳月が経って、戦後二人が再会した時、丸山には妻子がいたが、城田は独身のままであった。いつからか丸山は土曜日毎に城田の部屋に泊りこむようになっていた。買いこんで来た品物で夕飯を作り二人で食べていた。日曜の朝は丸山が先に起き、流しで城田の下着やブラウスを洗った。調子をつけるように流行の唄を次々口すさみながら、結構楽しそうであった。

「奥さんに何にも言われないんですか」

同じ台所で朝食の支度をしている母の声がする。

「言ってるよ。又おばあちゃんに可愛がられに行くんですか、って。家の奴、あの人より五つ六つ若いから、あの人の事、おばあちゃん、おばあちゃんて言うんだよ」

丸山は一しきりクックックッと含み笑いをした。

「これでもな、わし、家では縦の物を横にもしないから、ここへ来ても大事にされてると思ってるらしいんだ」

母は言葉を返す気も失っているようだった。

一人で含み笑いをしながら、丸山は洗濯物を抱えて縁側へ来た。軒下の竿に洗濯物を干しながら、庭の犬小屋でジュピターと戯れている城田に声をかける。

「人間の子より犬の方が可愛いくなっちゃ、もう教師もおしまいだな」

「そうだね、もうくたびれたから、そろそろ止める事を考えなくちゃ」

ジュピターは気の荒い犬であった。飼主の城田にさえ、

女の言葉で、

気に喰わないことがあると噛みついた。毎朝散歩に連れていく私には、比較的よくなついていたが、それでも一度など、私が何気なく座蒲団に手をついたら、いきなり手首に歯を当てられた。座蒲団の下に、ジュピターの骨の玩具が隠されていたのだった。

ジュピターは城田の蒲団に入って寝ている。

「護身用に飼った犬なんだからね、手を出そうものなら、ガブリだ」

城田はこう言って憚らない。

「だからお前は、いつもからたちの花さ」

「ひでえもんだ」

犬小屋と縁側とのやりとりを私に聞かせまいとするように、母は縁側との境の障子を閉めた。

「学校の先生が、あんなでいいのかねえ、昔はきりっとしたいい先生だったが」

私は聞こえないふりをして机に向っていた。

護国寺の裏門の前に出た。ここは毎朝ジュピターを連れて散歩するコースである。裏門から入り、墓地の間の道をその日の気分で適当に曲って本堂の裏へ出、そこから石段を駆け下りて正門に出る。正門をくぐり今度は右に折れて電車道に沿った坂道を上って、元の裏門の前へ出るのが毎朝のコースであった。

その間約三十分、起きぬけのはっきりしない頭が、確かに目覚める。夜半まで勉強してて三十分早く起きるのはかなり辛かったが、私はまるでその苦行を遂行しなければ自分の道は開かれないような、思いつめた気分でいた。

朝は早いといっても、七時前後の時間にはもう通勤の人で人通りはあったし、墓地にも寺の周囲にも掃除の人の姿がそこここに見えて怖いと感じた事はなかったが、暗くなった墓地はさすがに不気味な雰囲気であった。明りといえば裏門を入ってすぐ右にあるこわれかけた外燈が一つ、ポツンとついているだけであった。二、三歩入りかけて、私は後ずさりした。ジュピターもいない。矢張り怖かった。

塀に沿った下り坂の道を歩き出した。道は急な下りになっているが、護国寺の境内はそのままの高さなので、坂を下るにつれて境内との境は石垣が次第に高くなっていく。暗い道を下りながら、私は肌寒さの上に空腹も耐えねばならなかった。昼にパンを二つほど食べただけだった。早く帰って御飯を食べたいという想いが足を止めたが、私は帰れないと思った。私が居ないのに気がついた母や姉が、鍋の蓋をとってあの白い粒の群れを見た時のあきれた顔、表情、

「やだ、朋ちゃんたら、こんなカレー作って」

姉の声が聞えるようだった。

「どこへ行っちゃったんだろう、あの子」

台所から外へ出て、母は私を探しているかもしれない。

自分を取りまく大人達に、私はもう疲れてしまった。姉も秋川も城田も丸山も、おとなしすぎる兄も、父を亡くしてから自分の坐る席を失ったように、いつも周囲に気を遣ってばかりいる母も、私には疎しい。

父が無性に恋しかった。父さえいれば、母はその脇の席にどっかり腰を落着かせていただろうし、姉は女子大を出て、願い通りどこかの高校の教師になっているだろう。兄もあんな気弱な笑いを浮かべる事はないだろう。城田の事も丸山の事も私は知らずに済んだ。

ゴトゴトという音が背後にして、振り返ると池袋から来た都電が明るい窓を揺らしてゆっくり近づいて来た。数えるほどの乗客の頭が見えた。下り坂にかかっていくらか速度をましていた。

訳もなく私の足は歩道に下り車道に踏み込んだ。

キーという鋭い金属音に続いてギーギーギーと鈍い音がし、

「バカー、危いじゃねえか」

という罵声がぼんやりした私の頭に落ちた。

私は後ろに飛びすさって立ちつくしていた。

「気をつけろ」

車掌が上半身を窓から乗り出して怒鳴っていた。乗客の顔も一斉に私に向けられていた。

歩道に駆け戻った私の胸は、抑えても抑えても抑えきれない速さで脈打っていた。

電車は窓の明りを左右に振って段々小さくなり、坂を下りきった所で左に曲り見えなくなった。両手を交互に胸に当て、動悸の鎮まるのを待った。両の手首が小刻みに震えて止らなかった。

その時、涙でかすんだ瞼に浮んだのは、坂の下にある護国寺前の停留場から乗り、私が降りる停留場の一つ手前で降りていく同学年の高校生の顔であった。

電車はいつも満員だった。一つ手前で乗る私でさえやっと乗れるのだから、その人が乗る時はステップに立つのがやっとの時もある。

その人は人混みの間に顔を動かして私を探す。探し当ててくれるのを心待ちしながら、目が合うと私は慌てて目を外し俯向かずにはいられなかった。それでいて、たったそれだけの朝の挨拶を交した日は、何かいい事がありそうな予感がわくわくと体中に拡がっていくのを感じていた。

私は護国寺の停留場をめがけて駆け出した。

そこへ行けば、あの人が私を待っていてくれそうな気がしてならなかった。

天皇誕生日

茂里英介

朝の交通事情に異変が起きていた。

朝の出勤時、車で都心へ向けて二つの橋を渡るのだが、ここ一週間ほど、車の数が急激に減っているのだ。そして、その頃から橋に「検問中、ご協力下さい」という立て看板と、警察官四、五名の姿をみるようになった。

いつもなら、三方から橋を渡る車が押しよせ渋滞しているのだが、まるで、深夜か、日曜日の早朝のように閑散とし、のんびりと車を走らせることができた。

天皇誕生日と東京サミットに備えて厳しい警備体制が敷かれていた。都心ではとても商売にならない、というぼやきを耳にした。タクシーとトラックの運転手である。

四月二十九日、両国の国技館で在位六十年の式典がある。この式典には数千人の出席者と聞いているが、どのような人に招待状が送られたのだろうか。もし、私に招待状が届いたら、私はどうするだろうか。喜んで出席するだろうか、渋々と出掛けるのか、欠席だろうか。

とても起り得ない、式典出欠のことなど空想していたが、戦後四十年経過したいま、依然として「天皇」に対する、あるいは「天皇制」に対する想いが中途半端で複雑であった。

正月と四月二十九日に一般参賀があり、一度でいいから二重橋という橋を渡り、大勢の人と一緒に、厚いガラスの向うで手を振る天皇家の人々に、日の丸の小旗を振ってもいいなあ、と毎年その季節になると想うのだが、未だ一度も実現してない。皇居へは私の家から四十分ほどで行けた。一月二日は朝から酒をのみ、昼頃からどこかへ初詣でというパターンが繰り返えされている。四月二十九日、私の子供たちが幼い頃はどこかへドライブという忙しい予定がいつも待っていた。最近、妻と二人の時間が、静かに流れていく日々が続いてみると、また一般参賀が頭の中で浮いたり沈んだりする。

皇居を見物がてらとか、心の底から、万歳が叫べない

者の参賀は相手の方にも大変な失礼になるし、まあ、この次にしょう、とテレビのニュースでそんな時の模様を欠かさずみる。そして、いつもながら深い感慨を覚えるのであった。

ちょうど一年前、都議会議員の選挙があった。投票日である日曜日の朝、妻と二人で近くの投票所へ行き、投票をすませた。どの党の誰に投票するか、私の口から妻に言ったことはない。彼女も決してたずねようとはしなかった。それはもうわかっているからという暗黙の了解が成立しているからだろう。彼女は町内会の役員をやっており、自民党候補者の選挙事務所でお茶くみなどやっているのである。私は誰に投票したか、かりにたずねられてもいうつもりはない。妻は、そんな私の性格をよく承知していた。政治向きのことにはある距離をおいている。漠然と保守志向といえば当っているように思う。保守政党への投票は常にある抵抗感を伴っていた。それは年齢を重ねるに従って、自分でも気付かぬ速度で、減少しつつあった。

義務的に投票をすませ、近所の商店街を覗きながら、遠回りして帰宅すると、前夜から泊っていた娘の婚約者と娘の遙子が茶の間でお茶を飲んでいた。

「遙子も散歩がてら投票しておいで」

「都会議員の選挙か……、今回も棄権しよう。ね、いいわよね。もう出掛けなくちゃ……」

と婚約者の竹田芳彦を見て、肩をすくめ、赤い舌をチラッと出して苦笑した。遙子は成人になって四年間、一度だけ投票所へ足を運んだことがある。私と妻と三人で行き、投票所に近づいた頃、

——なんという人の名前を書けばいいの。

と遙子は母親にきいた。母親は保守党の候補者の名を告げて、書く台の上をみれば字はわかるからと言った。

私は娘のその時のいいかげんな投票態度、考え方を厳しく叱ることができなかった。

竹田芳彦が、ためらいがちに、

「もう、投票はすんでしまったのですか」

といかにも残念そうな口ぶりでたずねてきた。何かいいかけて思いとどまったように感じられた。

「芳彦君、投票は社宅に帰ってから行くの」

「そうですね、間に合えばの話ですが。社宅の連中はあの土地の人間じゃないし、ほとんど棄権じゃないですかねえ、遙子さんのように」

「そう、じゃ、特に支持している候補者もいないってわけだ」

「そうなんです。社宅のある市についていえばです。ところで、このA区の候補者についてはある人から頼まれた人があったんで、まだ投票がすんでないようでしたらと思いましたが」

私は一瞬、いやなことを聞かされた思いがした。投票をすませておいてよかった。

「それは残念だなあ。まあ、選挙の話はもういいや」

「そうですね」

芳彦はこだわる気配もなく、明るい表情で遙子に話しかけた。横浜で海をみて中華街で食事という予定を立てて、二人は間もなく出掛ける。

このA区の都議の定数は五名、自民二、あと、公明、共産、社会各一というパターンが、いつ頃からかできていて、変化に乏しく、無風状態といわれ、選挙民の関心も低かった。

しかし、今回は大きな変化が起りそうだった。公明党が候補者を二名にした。もちろんこまかい、確かな状勢分析の上で勝算ありとした上のことだろう。自民二、公明二、残る一議席を、社会、共産、新自ク、その他の政党で争うことになりそうだった。

公明党が一名だった永い過去のパターンを打ち破ることになるのか、新聞の都内版は連日、大きくとりあげていた。

私の家に公明党の都議選候補者の名を具体的にあげ、よろしくという電話が六回ほどかかってきた。

大阪からは二十年も会ってない、名前をきいてもすぐには思い出せない人間からの依頼。神奈川からは、こちらは全く知らない昔の同窓生と称する人間から。電話のベルがなる度に、早く投票日がくるように願ったものである。

私は遙子の婚約者の芳彦が、全国から投票依頼の電話をよこす、同じ候補者の名を口にすることを怖れた。

もし投票がこれからだったら頼みたい人がいる、という彼のことばに、私が、いやなことを聞いたと不快感を覚えたのは、投票依頼の電話のベルに対する反応と同じだった。

彼が具体的に名前をあげなかったことで救われた想いだった。

芳彦が婚約者というのは未だ早いのであろうか。近く、彼の両親が長野県から上京し、正式に申し出があり、結納などの日取りに話が進むはずである。しかし、すでに本人同志、親同志が暗黙のうちに結婚を認めようという状態になっている。

私は娘が選んだ男に、はじめから異を唱えるつもりはなかった。心配や不安、希望とか願いは数知れず、頭の中を去来するが、娘のためだったら耐えるのが親のつとめと思っている。

竹田芳彦自身のことはもちろん、彼の生れ育った家についても全く何もきかされていない。郷里の高校を了え、東京の大学にはいり、下宿生活をし、幸い一流企業に入社し、今、社の独身寮にいる。私の知っているのはこの程度で、あとは、遊びに訪れたとき私の得た印象だけで

ある。

私は彼の思想や、政治上の信条については話題にしなかった。彼の会話のはしばしを注意していれば、いずれわかることだと考えていたが、不安は常にあった。

ただ、革命を旗印にし、政治の体制を百八十度転換しようとする政党の支持者であってほしくなかった。それは遙子がよく知っているはずだと信じている。

そうかといって、宗教団体をバックにして大きく伸びて行った政党はどうなのか、と問われれば、これに対しても私は好感をもって支援しようという考えは全くない。そのなりふり構わぬやり口で、強引に自分たちの信念を押しつけようとする下部組織の学会員の行動に、自分とは異った世界の人間という感じはぬぐい切れない。

信仰の対象があり、それに魂の救いを求め、日々の生活の規範を得て実践しようとする信者には、私は畏敬の念すらいだき、美しいとさえ思うのだが、それに同調するかどうかは全く別次元の問題であろう。

娘の婚約者が創価学会の会員なのか、投票を頼まれたという都議会選立候補者が、公明党から立った者なのか、この二つのことは、ついにはっきりしなかった。相手も名を明かさず、こちらも避けて通りたかったことであるから。

二人は正午少しまえ、明るい声で、いってきます、と大声でいうと車で出掛けた。

妻と二人になっても私はもう選挙のこと、竹田芳彦のいいかけたことをむし返えさなかった。

私は娘の明るい声に、さっき頭の中をよぎった秘かな不安をふき消さなければいけないと思った。長野県の両親、そして芳彦本人も学会員かも知れないが、そうでないかも知れないのだ。芳彦の方にしても私たちの家の宗教や、政治上の信条などについてはおそらく知らないだろうし、娘もまず話題にしたことはないだろう。しかし、あの明るい二人の表情に、私がそっといだいている不安のかげりはない。あるいは長い交際の期間に、この方面のことを話し合い、両方の家が同じような傾向なのか、あるいは、大きな相違点がなかったのかも知れないということもあり得るのだ。

私は堂々めぐりをしそうな想念を追い払うように、頭を大きく二、三回振ってみた。

「あら、どうしたの」

「いや、別に。横浜からの帰り、よっぱらい運転なんかしないだろうな」

「それは大丈夫、往きは芳彦さんの運転で、帰りは遙子の運転、今日はあの子飲まないって」

テレビの画面から眼を離さず妻はいった。

何も心配ごとはなさそうである。この妻の楽天的なところで私はいつも救われる想いがする。物事を悲観的に考えようとする私の想念をいつもぴたっと封じ込める作

用をするのだ。彼女にも人にいえない不安、怖れはあるのだろうが、それを口に出したり、顔に表わさない。私はそれに同調し、心のわだかまりを捨てようとする。

A区選出の都議会議員は自民二、公明二、共産一、となった。過去、何回かの都議選で最下位当然を辛じて果してきた社会党が次点であった。

選挙が終ってからはどこからも電話はなく、投票を依頼してきた連中は、誰に電話したかもきっと忘れているのだろう。

昭和六十年の四月二十九日、天皇誕生日は月曜日であった。前日の二十八日(日)芳彦の両親が上京して、私の家へやってきた。芳彦も一緒だった。

芳彦の父は鉄材を商う事業をやっているという。私の家にはいり、初対面の挨拶を交わし、互いに、娘を、息子をよろしくという、両家の父母がはっさり両名を結婚させてもよろしいという内容のことを述べ合ったが、どちらからも自分の家のこと、家族のことなどは話題にならなかった。きっと若い二人が会っている時、身内のことについては少しずつ出し合い、おおよその輪郭は頭の中にできあがっているだろう。そして、それを芳彦は両親にたずねられて、聞き知っている限りのことは話してあるに違いない。

「そうだ、早速、こちらのご先祖様にご挨拶させてください」

芳彦の父は、持参してきた小さな紙包を手にすると、立ちあがった。

不意をつかれ、私は思わず妻と顔を見合せたが、彼女はあまりあわてる風もなく、すっと立ちあがると、

「どうぞ、こちらです。ちらかっておりますが」

といって先に立って、仏壇へ案内した。芳彦の母も二人のうしろに従った。

私は三人のうしろに立ってあとについたが、突然の申出に途惑いを覚えた。私の家の宗教について予備知識がある気配を感じていた。芳彦が遙子を訪ねてきて、私たちと談笑している中で、宗教の話は出なかったはずだ。しかし、この家に仏壇があるのは見ていたのだろうが、前に坐って合掌するということはなかった。芳彦は私の家の宗教のことは、両親にどう告げているのだろうか。

彼の父は包みを供えると、ゆっくりと手を合せてくれた。続いて芳彦と母も同じようにした。私たちもそんな二人に深々と頭を下げた。幸い仏壇は早朝清められ、妻が娘の縁談が無事に整うよう願っていたのである。

私は熱心な仏教信者ではない。どちらかといえば無宗教に近い。私の両親が真宗を奉じているのでそれを守っているのである。幼い頃はキリスト教の幼稚園に学んだりして、教会へ通ったこともあったが、洗礼を受けることには幼いながら抵抗を感じ、果していなかった。家では仏壇へ合掌するという、かなり奇妙な宗教体験をしている。

のちに、仏教思想をあれこれ学び、ひととおり理解しているつもりだが、どこか常にさめているところのある私は、ついにこれしかないというものにぶつかることができないでいる。

芳彦の家の宗教はたずねなかった。もしかしたら、日連宗、そして学会のメンバー、そして公明党という図式が、あの都議選投票日以後、私の頭の片隅を離れないでいる。

芳彦の両親は私たちが準備したささやかな昼食を喜んでくれた。午後三時頃、芳彦の父は、

「商売上のことでよく上京するんですが、そんなときいつも泊る神田のホテルに今夜は泊り、明日の午後に長野へ帰るつもりです」

とだけ言って立ち上った。

明日は月曜日、天皇誕生日であったが、この祝日のことについては話題にならなかった。私の方から持ち出すつもりもなかった。天皇を話題にし、娘の縁談にひびでもはいったらとり返えしがつかないという思惑があった。政治や、思想の問題については双方全く触れることなく別れたのである。

ずっと遙子と並んで沈黙を守っていた芳彦は、

「ぼく、駅まで送っていって、すぐもどってきます。それから遙子さんと一緒に六時頃、両親の泊るホテルへ行っていいでしょうか、晩ごはんご馳走してくれるっていうんです」

と言い残して、さきに玄関を出た両親のあとを追って行った。

芳彦は両親と駅で別れるともどってきた。

「父と母がよろしくと言ってました。とても喜んでおりました。今夜は、ぼくたちの行きつけの店に安内しろっていってました。遙子さん、どこにするか、新宿へでも連れてって、すこし高級なところでご馳走になっちゃおう。たまにはいいよ。あっ、そうそう、遙子さんのご両親にきいてみてほしいっていってたんですが……」

明日の午後、両親は長野へ帰る予定である。午前中いっぱいどこか夫婦で都内見物をしたいのだが、どこがいいだろうか。遙子の父親にきいておいてくれ、と頼まれた。

「なんかいいアイデアはないでしょうか」

と芳彦は言葉を結んだ。遙子が、

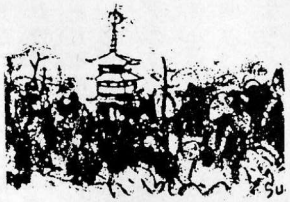
「私たちが遊びに行くところじゃ、どうもねえ」

といい、首をひねって考え込んだ。自分たちが遊び歩く原宿や、六本木、渋谷あたりを思い出したのだろう。

私も妻も、急なことで、ううんとうなってしまった。

神田のホテルからという足場を思い、午後は上野駅という道順を頭にえがいてみた。

私はしばらくためらったあと、
「明日は天皇誕生日で一般参賀があるよ。皇居へ行ってみるというのはどうだろうか」
私としてはかなり思い切った提案だった。芳彦の育った竹田家では、天皇をどう考えているのか、答えがほしかったという、はっきり、具体的な願いを自覚して言ったのではなかった。これをいうことで、私たちの天皇に対する漠然とした考え方は伝わるはずだと思った。
遙子は少しがっかりという顔で言った。
「皇居か、どう、芳彦さん、お父さんたちもっと面白いところがいいんじゃないかしら」
「ううん、一般参賀、いいかも知れないよ。これは明日だけのことだし、うちの両親は未だ一度も皇居へは行ってないよ。きっと」
私は立って朝刊をさがし、一般参賀の記事をみつけ、
「明日、午前十時が最初だから、神田のホテルを九時頃出て、ゆっくりあの辺を歩いて行くとちょうどいいのじゃないかな」
私は芳彦の天皇に対する考え方の一端をかいまみたように思い、明るい気分になり、調子づいて言った。
芳彦は天皇にこだわる気配を全く感じさせなかった。
「遙子さんのお父さんやお母さんもどうですか、明日、ご一緒に」と言ってくれた。
明日は出掛ける予定があった。そちらをキャンセルしてと一瞬迷ったが、その気配を感じとったのか、妻は
「あなた、明日は大切な用件で出掛けるんですから」
と口をはさんだ。私も妻のそのひとことで迷いがふっ切れた。
「そうだなあ、明日は無理かな。折角のいい機会なのに残念だ。私たちも未だ一度も二重橋を渡ってませんよ」
私たちも是非機会があれば一般参賀に加ってみたいという望みをもっていることも伝えたかった。
「じゃ、皇居へ行くように、今夜、二人で話してみますよ。遙子さん、いいよな、いまの話」
「でもね、どこか、もっといいところないかしら」
遙子は未だ双手をあげて賛成とはいい難いという感じで渋っていた。
私は芳彦が今夜、私たちからの推薦ということで話したとき、どう反応するか、あまり気にしないことにした。
少くとも芳彦は「天皇」を否定的にとらえてなく、むしろ親近感をもって肯定していることがわかったからである。
その夜遅く、芳彦は遙子をわが家に送り届けてくれた。
遙子は、
「芳彦さんの両親も物好きねえ、一般参賀の話、喜んでたわ、明日、八時頃ホテルを出て、皇居まで歩くって」
翌日、一般参賀でとても感激したって、両親がお礼言ってました、と芳彦から電話があった。（了）



松尾芭蕉

坐り胼胝の蚊

八十島　元

夕刻まで芭蕉庵で、にぎやかに寄り集っていた弟子の其角や杉風、浄求法師や曾良、千里に李下などが、ぞろぞろと隅田川の河畔へと十五夜の月見にでかけていった。
「今宵は愚老をひとりにしておいておくれ」
と芭蕉はあぐらをかいたまま弟子達の会釈を受けながら見送った。
それからずっと、灯もともさず、庭石や池面を鈍く光らせ、月の輝きの下に庵を沈ませたままにしている。
樹々の梢がかすかに風で鳴ったかなと思うと、重々しくひろげた芭蕉の葉が軒に触れて音をたてる。
苔むした庭石が冴えわたる月の光でぼっと浮きあがるようだ。
芭蕉は文机に両肘を突き、両掌を蓮のうてなのようにひろげて頤をのせ、目をうっすらと閉じている。眠っているわけではないのは、指がときたまこめかみの辺りをたたくのでわかる。
閉じていたかと思うと、ふと眼が開く。もし明るければ、その眼もどこかを見ているわけでもなく、うつろで変になまめかしいのに気づくだろう。
芭蕉は寿貞のことを想っていた。それも十五六才くらいの頃の郷里伊賀上野での寿貞である。けれど、どんなに努力しても自分の若侍の姿も貌も浮んでこない。
主家藤堂家の侍大将藤堂良忠を主人にもった芭蕉は松尾家の次男とあれば部屋住み。兄半左衛門とは主君もちがうが、先ざきも一家の主たることは夢にすぎない身分であった。
けれども若い主君良忠は、武より文を愛した人であったので、新七郎良忠の邸内に起居し、（伽）の者として、茶席の一座にも膝を主君とともに並べ、俳諧の席にも列した。その頃の自分を、水際だった若衆振りだった、と今でも思っている。今でも、というのは、数ある若侍たちからずいぶんえげつない恋の鞘当てを受けて迷惑した

りした。侍女や御殿女中の付け文も知らぬ間に袂にはいっていたりしたこともあった。だから、その頃、彼自身を若い男女の中では恋の中心的存在だと思っていたので、殊に茶席などでは、侍女達お視線を意識すると、立居振舞いにも気をつかい、釜の湯の煮えたぎる音が、しんとしずまり返った時の空間に充ちているときなど息苦しさと喜びで、燃えあがる情熱に耐えに耐え抑えていることだけが生甲斐のような気がしていた。

主君良忠はことに寿貞の点前を好んだ。すると、彼はこの時とばかり彼女の顔ばかり見詰め、その見詰めている自分の視線を、自然を粧って見返したりすると、そのふたりの秘密の行為こそ、人生のなかでいちばん素朴な営みであり、その素朴であろうとすることがものを創る心の原点だという信念が湧きあがってくるのであった。

今、芭蕉の脳裡に藤堂良忠公の広大な屋敷の中のそこかしこの情景がかすめては消える。寿貞のもっとも仲の良かった侍女が身を投げて死んだことがあってから使われなくなった井戸、屋敷裏の下級の侍たちが耕した畑やそこに茂った里芋の葉の艶つやしい彩、めったに開けられたことのない裏門やその側の老桜の下でひらかれた花見の宴。そのあたりからずっと屋敷の奥にむかって樹々が生い茂り、ひときわ目立つのは、天を衝く一本の榎である。あれから二十数年もたつのに、芭蕉の耳に、梢にするどく鳴いていた鵙の声が聞える。

其角たち弟子の、隅田川河畔への月見の誘いは執拗であった。というより、毎年、師弟ともども月見をしたことなど数えるほどしかない。今年はぜひとも隅田川の水面に映る月を、其角と秋風の気配を感じるようになった頃約束をした。

それなのに、今日の今日になって芭蕉は、気分がすぐれぬ、と云いだした。「ねえお師匠、約束を反古になさるなんぞ、師匠らしくもねえですよ。噂ではあまり外に出たがらず、庵の畳の目を数えておられることが多いと聞きますが、それあいけねえ。淀む水には芥たまる、と云います。さあ行きましょう。ねえ行きましょう」

「ははははっそれを申すなら、流水腐らず、ぐらいのことを云っておくれ、……じゃが、云っておくが、愚老の心は絶えず流れておる。多分、今宵の月ほども澄んでおろう」と動こうとしなかった。

芭蕉にも自分で自分の心を計りきれなかった。

おふうにおまさという二人の娘まで産せた女、寿貞が江戸まで自分を追って来たときの日本橋魚問屋鯉屋杉風の屋敷での光景を忘れられない。あの時、庭に梅が咲き、いけすの鯉が群をなして移動してゆくのを胃の中を掻きまわされるような気持で見ていた自分。幼い娘たちにも父親らしいことはなにもしてやらなかった自分。

その寿貞母娘が、自分をあきらめて、どこへともなく去って行ってから七年たってしまった。

どこにどうしているかわからない寿貞のことおふうにおまさのことがしきりに想い出される今日この頃である。だが、誰にもひとこともその心を洩らしたことがない。

「ふしあわせ者の寿貞よ、おまさにおふう」

芭蕉はむっくり立上って濡れ縁に出た。

池面に風があたってきらきらと月光が輝やく。彼は下駄を履くと、沓脱ぎ石から草の上へ降りたが、すぐ裸足になった。しっとりと柔かい大地の感触が踝のあたりをくすぐる。

もと鯉屋のいけすがあって、鯉が飼われていたが、今はもうただの古池になっている。

——藤堂良忠公の屋敷にも近くの小川から水を引込んだ池がある。楓の葉のような形をしているので、手入れのゆきとどかない林の中にまで池の水がはいり込んで、昼でも人目のとどかない場所がある。

寿貞の襟首のあたりに池水に反射した明りがちらちらと動いていて、産毛のあたりからほんのりとなにやら匂うようである。

良忠公の病篤いと聞く。「お殿様にもしものことがあれば……」と寿貞が呟く。その時は彼も生活の場所を失うだろう。寿貞も屋敷を追われるかも知れない。公の血縁の誰が当主となるかわからないが、みなそれぞれ家来を持っている。

茶の席も、俳諧の席も老桜の下での宴も、もう寿貞と彼を結びつけた時間でしかすぎなくなる。

日が傾いて、池の対岸の樹々の影が鈍く光る水面に揺れて見えるようになる頃、短かい逢う瀬だが、やがて藪蚊にせめられてどうしようもなくなる。彼と寿貞は右と左に別れて秘な恋のゆくえの占いを終る。

芭蕉の脳裡にそのようにして逢瀬を重ねた寿貞との、芽生えて燃え、燃えて武家奉公の掟をかいくぐる恋の日々が悔恨となって甦えり、その度に、

「ああ、もう少し優しうしてやれなかったものだったろうか」

いつも男の慾望を果たしてしまうと、彼との恋のゆくえに灯をともそうとする寿貞に冷やかに背を向けてしまっていた己れだった、と責めずにはいられない。——

十五年も昔……芭蕉は古池のまわりを腕組みをしながら歩きまわる。

今、自分は人から翁といわれている。弟子も増え、宗匠としての名も高まった。談林に入ってやや談林を脱けようとしている。来年あたりに、いよいよこの俳諧の道に身を捧げる決意のために初めての行脚の旅を試みようと思っているし、恐らく一生を幾度かの行脚で終ることになろう。そのためにももし寿貞母娘のゆくえが分るのであれば呼び寄せもしたい。親子の生活も味わってみたい。

翁と称ばれて満足している訳ではないが、弟子の増えたことは、風雅の道を求める心の世に認められ始めたこととして銘すべき喜びであろう。

それにしても、ここ五六年で、額に皺を刻み眉に白い毛がまじり、年よりずっとふけて見えるようになったから、寿貞は、会ったとしても驚くだろう。

水際だった若衆振りだったなぞと自惚れていても、また寿貞が江戸へたずねて来て、やがて去って行った、あの頃の面影を彼女が抱いていたとしたら、まったくもって噴飯ものであろう……が、

「なんとか寿貞母娘の居所がわかぬものだろうか」

芭蕉はいくど古池のまわりをめぐったであろうか、やっと、

「名月や……」と いた。「其角たちはどうしたであろう。隅田川の岸を辿ってどちらへ歩いているであろうか」

たぶん月に誘われて隅田川を徘徊する風流人は多かろう。船を浮かべて酒を扱みかわすのを見て其角なぞ流涎の思いであろう。

それにしてもどうしてあの頃の自分の若侍姿が浮んでこないのであろう。その辺にごろごろしている侍の顔をすげかえれば、それでよい筈であるのに、そのようにしたとたんに霞んでしまう。

その代り、寿貞の記憶ばかりはすみずみまで鮮明である。

良忠公が亡くなると、寿貞も彼もそのまま屋敷におれば奉公の形こそ変っても場所を失うことはなかったであろうが、彼にとっては武士としての将来はなく、武士の生活に未練もなかった。

京に俳諧の西山宗因あり北村季吟あり、京へ出ようという思いに駆られて止まなくなった。

芭蕉は伊賀上野での武士としての最後の日のことが忘れられない。

芭蕉庵の月は中央からやや傾きかけていた。薄雲は軽くかかっても、ほとんど貌をかくしたことのない今宵の月である。僧に似てはいても身に塵を帯び俗に似ていても髪はなし、僧ではなくとも無所住無所着の思いに徹し、私意私情を捨つべきの思いを念ずるもののしかししょせん浮世の風の中へひとりでしかない。また帯刀した頃の面影は今宵の月に照らしてもない筈、ただただ佗びしい漂泊に憑かれた旅人でありたい。

芭蕉は「名月や……池をめぐりて……」とまた呟く。

伊賀上野を退去の夜も、雲ひとつない月夜であった。後日自分を追ってくる筈の寿貞の悌を抱いて、彼は孤独ではなかった。匂やかな寿貞の体のぬくもりがまだ彼の胸にあった。寝静まった城下町を歩きながら、いつまたこの地を踏むことになるのか、と月を背に己れの影を追

っていった。

その日、寿貞と会ったのは、かすかに陽に夕のかげりが映り始めた刻で、いつもの池の近くを避けて、榎の大木の根元であった。生い茂った枝葉お下は、短かい草が円をえがいて褥のように拡がっている。

寿貞と彼の初めての逢曳きの場所であったし、不思議と晩くなっても蚊があまり出ないのである。

「忠左衛門様、暫くのお別れでございますなあ」

「ふむ、暫くと云うても、たかだか月がひとたび欠けて消えるまでのことではないか」

「不吉なものの云い方はお止め下さいまし」

「ははは、ものの譬いだよ」

「いいえ、ものの譬いも心あってでなくては出ませぬ」

「あいかわらず気の強いことを申す」

寿貞も彼も眠を見合せて笑った。

「それにしても、あなた様が今宵忽然と姿を晦ましては、誰ももう噂の種をなくしますなあ、淋しいことで……」

「そういうそなたも……ははは、いずれ晦すひとりではないか。これで藤堂家五千石のご家中で恋模様の火が消ゆる」

「これは大層の自惚。わたくしたちを除いては美男美女がひとりもおりませぬようじゃ」

「あはは、そうではないと申すか」

「人のことは存じませぬ……忠左衛門様、……」

寿貞は顔を両掌で蔽って、身に覚えのあるかいなにがすがって笑いが涙声となるのを、彼はそのかいなで寿貞の背をおさえ、顔でうなじを掻い抱くようにしながら

「ああ、寿貞が泣きおった。そなたの涙は今宵の月のように美しい」

「まあ……」と云って寿貞は彼の胸から離れて睨みすえた。

その時寿貞の姿態が崩れて裾から素足がのぞいた。

「はて素足とは珍らしい」

「ほほほっ、素足なのを今お気づきか……約束の刻限に遅れてはと、お湯殿の掃除の時のまま走って参りましたのです」

「どうりで……」

御殿では通常白足袋を着用する。

榎の葉の隙から射し込んで来た陽の光が、その素足を捉えていた。手入れのゆきとどいた透きとうるような皮膚、踝の近くに、梅干の肌に似た桃色の坐り胼胝があった。

「忠左衛門様、そのように女の素足も見据えるものではありませぬ」と引込めようとすると、彼は「いや待て」と左手でおさえつける。

「坐りだこ、というものは不思議なものだ。そのようなものが人間の体の一部に出来ても一向に不思議ではないが、心の虚を突かれたようであり、また人間臭くなまなましいものだ」

寿貞は坐りだこを見詰めている彼の眠をじっと見ていた。一匹の蚊がその坐りだこに止った。蚊は刺そうとしてもなかなか思うようにならないように羽をふるわせていた。

彼はそっと指を伸ばしてその蚊を潰した。

城下町のはずれで彼は城の方を振り向いた。上野城には天守閣がない。慶長十三年に藤堂高虎が建設したが完成目前に暴風で壊れてしまったという。以後館が置かれただけである。もし完成していれば高さにおいては日本一であったといわれる。彼はその館の上に昇った月を眺めた。その月の模様が、あの寿貞の坐りだこのように斑であった。

その斑の月の模様を芭蕉は眺めながら、あれから十五年たった今、寿貞を痛い思いで偲んでいる。

風が運んでくるであろう、かすかな人声が聞えてくる。

（おお、其角たちが戻ったのであろう。さぞかし佳句ができたことであろう……だがわたしにはよもすがら一句も出来なかった）

庵の裏の田圃道から、其角の笑い声が入ってきた。

「師匠、師匠、畳の目を数えずに池の波数をかぞえておりましたか」

「ははは、よもすがら一句も出来なかった」

杉風も浄求法師も、曾良に千里、李下もそれぞれさんざめきながら芭蕉のまわりに寄って来た。

「お師匠様、其角どのは図々しいお人だ。女ばかりの月見船に声を掛けて、とうとう皆んなでぞろぞろ乗り込んでしまいました」

李下が云うと、芭蕉は笑って

「それなら皆んな同罪じゃ」

「それにしても芭蕉庵の月も佳いですなあ」

と其角。

「名月や……池をめぐりて……」と芭蕉は絶句する。

杉風が師匠の言葉を反芻してみる。（名月や池をめぐりて）と。

「そなたたちはさぞかし佳い句の続出であろう。ゆっくり聞かせて頂くとして、一献酌み交そうではないか」

浄求法師が勝手知った庵、酒を濡縁に持ちだしてきて酒盛が始まった。

芭蕉は、其角や李下が話の中心になってさんざめくなかでかなたの森へと傾きかけた月を観ていると、あぐらをかいた足のあたりでかすかな痛痒を感じた。

蚊だな、と思ったが少しがまんした。

痒みがましたが芭蕉は右掌で顔をなでることでまぎらわした。

その時、月に雲がかかって暗くなった。痛みが極度に達すると、びくっと足を動かして芭蕉は思わず両眼に涙を浮べ「うむ」と唸った。　昭和六十一年五月三十日

江戸時代の月見
—創作ノートより—

八十島　元

現代ではおおよそ観月などという風流なことは廃れた感じだが、江戸時代の民衆にとって、雪見、花見、月見は四季それぞれの自然との精神的接触による国民的行事とも云え、貧富を越えた心のよりどころであった。

縁側を開け放ち、三宝に青柿、枝豆、団子などを供え、神酒徳利にすすきをさし、行燈の火を消して世間話のなかで観月をする。これが庶民の一般的風景だろうが、なかには目当ての客を招き、着飾らせた自分の娘に琴など弾かせたりした家もあったが、おおかたの江戸人は、家は家でそんな風に供物をしておいて、出掛けてでないと月を見た心持ちになれなかったものらしい。

年に一度のこの行事に、年に一度の商売もなりたつ。たとえば、すすき売りや団子売りが歩く。すすき売りは、その頃江戸のどこへ行っても野原にはえているものなので、いろいろな秋草をあしらって束ねてでなければ売れなかった。

さて、出掛けてでないと月を見た気持になれない江戸人達のために、高台や水に臨んだ料理茶屋はもとより船宿、人の集まってくる景勝の場所のにぎわいは、武家町家に限らず裏店の者たちでたいへんなものだった。享保の頃までは大川では花火もあげたという。

江戸に高台や水に臨んだ場所は多いが、特に築地海岸、深川洲崎、湯島天満宮境内、飯田町九段坂上、目白不動尊境内、芝浦海岸などと雑然と列挙してみたが、ことに高輪海岸寄りの品川の繁昌はすざましかった。と説明してくれる古書がある。まだ明るいうちから月待ちの客相手に掛茶屋で、茶菓に酒肴、鳴り物が入いり手踊りも飛び出す。詩歌や俳句の連座もあり、軍談講釈師が扇子を叩き、落語家等が月の出るまで演ずるという。

ところでまた一方ではいわゆる粋な連中もいる。これも二種類あって、隅田川に屋形船を浮べ、芸者や踊り子を乗せて押し出す景気のよいものから、柳橋あたりから粋筋の女と差し向いでしっとりと、

月明り見れば朧に舟のうち、意気な二上り爪弾きの、思い合ったる首尾の松……などとやる者がいたり、料理屋の障子に姿を映し、畳の上の松の影と洒落れる者もいたり、もう一種類は吉原にくり出す連中である。

遊女の部屋に三宝を飾り、遊女から馴染の客に杯を賜るのが常だという。

十五夜に月見して十三夜に月見しないといわゆる片月見といって忌み、月見頃は旅を見合せるくらいだから、吉原遊廓ではもっけのさいわい。十五夜の客は十三夜も必ず登楼したという。昔は遊びにも義理堅かった。

芭蕉の——明月や池をめぐりてよもすがら——の句は、貞享四年の作であるから、今号では、その素地がこの時出来た、という設定である。だがこの設定は、芭蕉ほどの人間がすらすらと発句できない、とは、と少しひっかかるが。

連載

ハイラル挽歌

第二章　開嶺の崩壊

金子正義

（五）

零号作戦の戦闘序列により皆川大隊長の命で、第七中隊と速射砲から選抜された四十五名の挺身斬込隊は、園田見習士官が隊長となって、九月十日未明一〇二七高地を出発して連隊本部に向った。

園田隊は他の大隊に遅れては恥と山坂を駆け下りたので、八時には連隊本部に到着した。だが他の大隊の斬込隊は集合時刻の九時になっても姿を見せなかった。

始めは緊張して不動の姿勢で隊列を正していた園田隊も、長時間待機しているのが苦痛となってきた。

園田見習士官は何度も連隊本部へ着陣を報告して指示を求めたが、連隊本部指揮班は斬込隊のことなど訊いてもいない様子で、もっと重大な事が起きているように慌しく動き回っていた。

顔見知りの田村中尉が気付いて「そうか、暫く待機せよ」と言ったが、その儘だった。

園田隊は草叢に腰を下ろして為すことも無く空を見上げて待っていた。軍隊はいつも慌しく動くことと、為すことも無く待つことだと心得ているが、余りにも長いので次第に緊張も薄れ、全員敵陣に斬込んで散る覚悟も消えて、攻撃は中止になったのかも知れない、と半ば救われた思いとなった。

十二時過ぎやっと伝令が「斬込隊長は連隊長室に集合せよ」と言って来た。

園田見習士官が白樺造りの連隊長室に入ると、空襲下のハイラルを脱出して九日夜半開嶺に着き、明け方連隊本部に入ったばかりの清水連隊長が疲労し切った顔で椅子に掛け、傍に田村中尉が立っているだけだった。

園田見習士官は、他の大隊の斬込隊長が居ないので心許無かった。

連隊長は園田見習士官の敬礼に応え乍ら立ち上ると、

「今や、ハイラルは敵重戦車の蹂躙の中にある。圧倒的な敵機甲部隊は数日の後には開嶺に殺到するであろう。挺身斬込隊は突入する敵の間隙を狙って潜入し、一台でも多くの敵戦車・重火機を叩き潰し、優勢なる敵戦力を少しでも損耗させ、大陸内部への敵部隊の侵入を減少させるのが任務である……」

と演説調で命令すると、園田見習士官に歩み寄って手を取り、

「どうか、死んで呉れ」

と力をこめて握手して、

「おう、昼飯は未だだろう、一緒に食おう」

と当番兵を呼んで食事を命じた。

昼食が運ばれる間に、田村中尉が出撃拠点の開嶺北方の瓢箪山陣地の位置を示し、第二大隊からの斬込隊は既に直行している。園田隊は瓢箪山で合流して、第二大隊の宮坂少尉の指示で出撃せよ、と言った。

田村中尉も伴食して会食となった。死出の門出の餞けであろうが、食卓には鯣・昆布・勝栗まであった。園田見習士官は、予想もしなかった連隊長の厚遇に戸惑い、身を固くして食事も碌碌咽喉に通らなかった。

本部前に待機中の斬込隊にも、連隊本部炊事班から握飯が運ばれた。兵隊達は久し振りの白米の握飯と梅干沢庵を、今生の喰い納めとばかりに頬張った。

午後二時、園田隊は三台のトラックに分乗して興安街道を北上し一旦開嶺駅に入り、其処からは徒歩となった。連隊本部から積んで来た重い破甲爆雷を背負って、地図を頼りに草原を北進した。第二大隊の四〇五〇高地を左手に望み開嶺より五粁、イレクテとの中間に陣地が在る筈だったが、敵邀撃拠点なので擬装されているのか発見できず夜となった。暗闇の草原を徒らに歩き廻れば迷うばかりと、笹山陵の東端に野宿した。

翌朝早くから生い茂った草原を探し続けていると、敵機に発見されて機銃掃射を激しく浴びせられた。素早く散開したが、執拗な機銃掃射で三名が負傷して仕舞った。

敵機の再襲を惧れ負傷兵を庇い乍ら夕刻迄瓢箪山を探し求めたが、何処迄行ってもなだらかな丘陵が起伏する広袤たる曠野で、瓢箪山は影も形も見えなかった。遂に夜となり再び野営であった。決死隊なので食糧は僅かの携帯口糧しかなかった。それも大方は尽きていた。

夜露に濡れた野草に臥せると飢渇が迫った。兵隊達は当途ない明日の不安に睡れなかった。空は星一つ無く真暗で寂として音の絶えた闇に、魑魅魍魎が出て園田隊は黄泉の国にでも引き摺り込まれるように無気味だった。

翌朝、園田見習士官は、隊員に不安を抱かせまいと、尤もらしく地図を拡げ、方向が解ったように頷いて、

「今日こそは瓢箪山陣地へ出るぞ、今迄ソ連戦車隊に出会わなかったのは、敵が未だ進攻していないからだ、

今からでも充分斬込みに間に合うぞ」
と兵隊達を元気づけて磁石を頼りに北上した。
昼近く偶然五中隊の分遣隊陣地に行き当った。分遣隊の高橋軍曹は、焦粋し切った園田隊に同情して備蓄の糧秣を提供して呉れたので、兵隊達は地獄に仏と喜んで炊餐を始めたが、園田見習士官の心は暗かった。
高橋軍曹から訊いた瓢箪山の位置は、分遣隊の遙か十粁も東南にあった。園田隊は二日間ぐるぐると草原を迷い続けた挙句北へ行き過ぎて仕舞ったのだ。
その間にソ連軍は浜州線の西側の草原から進攻せず、堂々とハイラル街道を南下して開嶺に迫っている。園田見習士官は、既に戦機を逸したと思った。今からソ連軍を追って体当りしても犬死と同じであった。徒らに死地を求めて彷徨せず、連隊本部に戻って四十五名の兵隊を原隊に復帰させよう。会食して激励して呉れた連隊長に面目無いので、兵隊を返した上で自決しよう、と秘か覚悟を決めた。

（六）

ハイラル要塞攻略部隊を残して陸続として内陸部へ進攻するソ連軍主力は、後続部隊を増強し強力な機械化兵団となって十二日早朝には開嶺に迫った。
開嶺の真西に聳立する四〇五〇高地に第二大隊が山陣を構えていた。その北端に第六中隊の洞窟陣地があった。東側は眼下に開嶺の市街や駅が見え、鉄道も街道も判っきりと見渡せた。
中隊東側の六十三陣地展望台に朝から監視哨についていた梶原上等兵が、昼を過ぎた頃イレクテ方面の草原稜線に、横隊に並んだ戦車隊を発見した。最初は点々と罌粟粒程に見えたが、緩やかに起伏する草原に隠れたり現われたりする度に、蟻から黄金蟲、兜虫と次第に大きくなり、キラキラと砲塔を光らせ、遠雷のように地響を伝えて迫って来た。上空には戦車隊を護衛する数機が旋回し乍ら、次第に旋回の輪を拡げて日本軍の山陣迄飛来し、急に山狭に在る開嶺市街を襲い、駅を爆撃して飛び去った。
急報を受けて反田中尉が駆けつけ、崖際の展望台から観測鏡で戦車を数え乍ら、
「畜生！此処からなら敵戦車を一台残さず狙い撃ち出来るのに、迫撃砲の一門すら無いとは何んたることか大隊砲や三機の連中は一体何をやっているのか、早く砲撃せんのか」
と歯軋りして残念がった。
洞窟陣地から望見する兵隊達も、野砲隊は一体何をしているのか、と唯焦々するばかりだった。
ソ連戦車隊は草原のスロープに見え隠れしていたが、夕暮れとなって霧の中に見えなくなった。

翌十三日は霧の深い朝だった。太陽が昇り霧が吹き流れると、前日大きく鶴翼の陣形を拡げて迫って来たソ連戦車隊は、翼を縮めて密集縦隊となって山狭の開嶺攻略の構えとなっていた。軈てハイラル街道より進撃した後続部隊が合流すると、鋼鉄の河のようになって押し寄せて来た。
邀撃する日本軍は、イレクテの東山岳に布陣する免渡河連隊と、西側の饅頭山の十七迫撃砲大隊の挾撃により相当の打撃を与え、更に南下して開嶺に迫れば、溢路に吸い寄せ南西の山陣から砲撃を加え、此れを殲滅する作戦であった。
だが、最初に攻撃を加える筈の免渡河連隊は、三河方面より国境を突破したソ連軍がナラントの日本軍を撃破してホロンバイル高原を南下して来るので急據出動して仕舞った。十七迫撃砲大隊は、林田少佐以下四百名で、饅頭山陣地の頂上、中腹、山麓と三段構えの陣地を構築したが、肝腎の火砲が殆ど無かった。山頂の主力中隊ですら迫撃抱三門に過ぎず、弾丸は僅かに三十発であった。中腹、山麓の中隊では砲が無いので山を降りて肉迫攻撃隊となって草原に潜んでソ連軍を待伏せしている始末だった。
饅頭山東側の山裾には福富中隊の百五十名が携帯口糧を雑嚢に詰め、爆雷を抱えて敵進攻路に潜伏していた。
山狭に沈み籠っていた濃霧も次第に薄れていった。街道近くの草叢に哨壺を掘って潜んでいた福富隊の尾崎伍長隊は、昨夜来狭い哨壺の中に屈んでいたので矮屈した背筋を伸ばし乍ら、霧の吹き流れる切れ目から前方を見ると、五百米程前方に忽然とソ連大型戦車が現われた。重戦車は黒い砂煙を濛々とあげて次々と大きな姿を現わし、饅頭山陣地に向って来た。尾崎伍長は愈々最参の時が来たか、と肉迫攻撃に突っ込め！と号令をかけようとした瞬間、ビューン、ビューンと砲弾が頭上を越して敵戦車群に撃ち込まれた。続いて次々と裂帛音を引いては砲弾は敵機甲軍団に炸裂した。
開嶺東側一〇二七高地の第三大隊背後に在る日本軍野砲陣地からの砲撃であった。砲弾は次々と福富隊の直前迄迫って来た敵戦車に落下した。福富隊の兵隊達は元々迫撃砲兵であったが、砲撃するばかりで身辺に砲弾の落下を浴びるのは始めてであった、目前に落下する砲弾の爆発音と炸裂閃光の凄まじさに縮み上がり、鉄帽の頭を抱えて哨壺の底にへばりついていた。
砲弾が命中した戦車が吹き出す黒煙と、砂煙や爆煙が濛々と立ち罩って見通しが利かなくなった。ソ連軍は此の方面から開嶺へ直進するのを諦めて、擱坐した戦車をその儘にして一旦興安街道を東に戻って、体勢を整え直すと再び南下して来た。
ソ連軍は矛先を変え、第三大隊が布陣する一〇二七高地の開嶺東山陣に驀進して来た。此の方面守備の歩兵部

隊は、ハイラル方面への分遣隊や斬込隊に出動して手薄だったが、飯島中尉の率いる速射砲中隊が陣を構え、更に南に五粁下った鞍部に、先刻ソ連軍戦車隊に猛抱撃を浴びせた、開嶺唯一の機械化部隊である野砲一個大隊が配属されていた。

速射砲中隊は、山陣の北に峙つ崖に沿って陣を張り、敵が鉄道と興安街道に沿って進攻して来るのを待ち構えていた。

ソ連軍戦車隊は赫く焼けた洗鉄の奔流のように此の絶壁の真下にぶち当って来た。

飯島中尉以下六十三名の速射砲中隊は、速射砲では重戦車を擱坐できないので、五門の砲口を付随する装甲車輌に集中して激しく砲撃を加え、野砲大隊は兼てから敵進攻路を距離測定済みなので、待ち構えていたとばかり十二サンチ榴弾砲や十加農砲を盛んに山頂を越して撃ち落した。

凄まじい爆発音、吹き飛ぶ土砂、濛々とあがる土煙や爆煙、戦車のエンジンの吐く黒煙が一帯に罩って見通しが利かなくなった。ソ連軍も野砲、戦車砲を盛んに撃ったが、山上に向けての砲撃に効果が薄かった。

躯てソ連軍は犠牲を払って急斜面を攻め登る愚を悟って、擱坐した数台をその儘に北へ十粁程退却すると、興安街道東側に停止して野砲陣地を構築し、対峙の構えを取り始めた。

飯塚中隊は、ソ連軍を退却させたのは自分達だとばかり歓声をあげ、肩を叩き合って喜んだ。飯塚中尉は、日本軍の抵抗の強さに快哉を叫び乍らも、ソ連軍の火力の強大と露人の渋太さをノモンハンで経験しているので、

「油断するな、敵は今度は迂回して来るぞ、砲座を左後方に移して置け、」

と命じた。

ソ連軍を撃退させた主戦力の野砲大隊でも、猛烈な砲撃戦で砲弾が残り少なくなった時に、ソ連軍が後退したので、野田少佐はホッとしたが、部下将兵に気を緩めさせてはならないと、息つく暇も与えず

「敵の逆襲に備えて砲の手入と弾薬の補給を迅速にやれ」

と各隊の砲座を巡って叱咤激励していると、師団司令部から電話があった。

「第四軍司令部から野砲大隊は四平街方面の四九〇野砲機械化兵団に合流を命ずと緊急連絡があった。直ちに陣地を引揚げ開嶺駅に集結すべし」

と軍命令を伝えた。

野田少佐は、ソ連軍を撃退したが、再び攻撃して来る敵に最後の砲撃を敢行しようと、砲の整備に大童となっている最中の移動命令に、

「何んたることか！」

と憤然と電話を切った。

「急な陣地替えで起重機が無いのに、十二サンチ榴弾砲は動かすことが出来るか！」

と後方軍司令部の机上の作戦変更に腹を据え兼ねて、取り敢えず迫撃砲だけでも先発させてやれ、と中山見習士官に命じて、迫撃砲二門と弾薬を三頭に輓かせて一個小隊を先発させた。

中山隊は山坂を人馬諸共、急ぎ喘いで開嶺駅に駆け付けた。駅周辺はハイラル方面からの引揚邦人や、避難民でごった返し、砲を積載する軍用貨車の手配も届いていなかった。発車する列車には避難民が溢れて乗り込む余地も無かった。

中山見習士官は、便々と大隊の集結を待つよりは新南興迄行って軍用路線に乗り込もうと構外に出ると、山の日本軍陣地を爆撃中のソ連機に発見され、二機が旋回して機銃掃射を加えて来た。

中山隊は無人の満人家屋の土壁の陰などに退避してソ連機の去るのを待っていたが、中山見習士官は、

「此の分では到底四平街はおろか、新南興迄も行けまい。野砲大隊の移動など到底出来やしまい。迂路迂路しないで腹を据え、此処に砲を構えてソ連軍に一泡吹かせてやろう」

と思いついた。ソ連機が去ってから兵を集めて決意を告げ、開嶺駅東南の丘陵に好個の地点があるので、輓馬で迫撃砲を引き上げて街道に向けて砲を据え、来襲するソ連軍に一撃を加えようと待ち構えた。

（七）

第二大隊六中隊の兵隊達は、十三日朝から第三大隊の山陣方面で盛んに砲声がするので、何時ソ連軍が第二大隊の前面に現れるかと緊張し続けていたが、昼頃より砲声が熄んで静かになった。兵隊達は不安と緊張が急に弛んで壕内にぐったりと横になっていると、麓の方から牛の唸り声がして来た。山を登って来るらしく唸り声は間断しては次第に近くなった。一寸と唸り声が跡絶えていたが、急に高良軍曹等三名が二頭の牛を曳つ張って悠然と現たれ。

昨夜近くの満人部落に徴発に行っていたが、空襲に遭って無人部隊に避難していると、爆撃に驚いて群から離れた放牧の牛がいたので頂いて来たらと云う訳だった。

兵隊達は歓声をあげて

「今夜は今生の名残りに腹一杯鋤焼が喰えるぞ」

と忽ち小銃で二頭を屠殺し、五、六名で皮を剝いで料理に取りかかっていると、中隊本部から伝令が来て、

「宮田上等兵、梶原上等兵、土屋、竜崎一等兵の四名は至急中隊本部へ集合せよ」

と告げた。

四名は何事かと急いで山襞に張った蒙古包の中隊本部に入ると、反田中隊長と従兵の原一等兵だけだった。

「宮田上等兵以下四名只今参りました」
と一同が整列して敬礼すると、反田中尉はすっくと立ち上って、
「愈々我が第二大隊へ出撃命令が下り、先ず六中隊から四名の肉迫攻撃隊を出すことになった。ご苦労だがお前達に特に命ずる、肉迫攻撃の場所は開嶺駅北側の土橋付近、明朝敵戦車が此の方面に来るのを待って攻撃をかけろ、出発は今朝八時」
と簡単に命令した。原一等兵が急造爆雷を二筒ずつ各個に渡し終ると、反田中尉は菊正宗の一升瓶を持って一人一人に飯盒の中蓋を水盃にして注いだ
「俺達も直ぐ後から行くぞ、確っかり頼むぞ」
と肩を叩いた。
四名は愈々最後の時が迫ったか、と胸が高鳴り中蓋を持つ手が震えた。
四人が陣地に戻って肉迫攻撃の出撃と分ったので、六中隊では久々の豪勢な牛肉の喰べ放題が、その儘決別の宴となった。日頃飢えているので僅かの酒にも忽ち酔って「先に行こうが後から行こうが、いずれ戦車に体当りさ」と半ば自嘲的に大声で軍歌や、流行歌を喚き歌った。
酒宴と聞いて反田中尉が、褌姿の上半身に左から斜に日の丸の旗を襷がけにし、戦闘帽の上から日の丸鉢巻を締め軍力を鷲掴みにして現れた。
「おい、今夜が最後だ、後も先も無いぞ、みんな爆雷抱えて鉄甲機団に体当りだ！存分に呑め、生命の有るうちだ、歌え、踊れ、俺も歌うぞ！」
と大声で叫んで清酒を一升瓶ごと喇叭呑みにし乍ら、

満蒙曠野果しなく
酷熱燃ゆるノモンハン
兵も愛馬もあえぐ汗
夏草薫る将軍廟

ハルハの河もたぎりたち
今前戦の伊勢部隊
天地もゆらぐ万雷の
砲火は吠える砲撃戦

と、反田中尉が参加したノモンハン戦の歌を哀調をこめて歌った。兵隊達も拳を振って声を合わせ、更に満洲行進曲となり、討匪行となった。若い兵は眦を上げて高調し、現地召集の老兵は家族を想って涙を流し、共に感極まって声を詰まらせ乍ら肩を組んで歌い踊った。
午後七時、肉迫攻撃の四名が決然と立って、反田中尉に挙手の礼をすると、冷たい雨の降り出した夜の戦野に向い立った。

十七迫撃砲大隊の福富隊にも、ソ連軍の後退に追尾し

て地雷を敷設せよ、と命令が出た、夜になって雨が降り出したのを幸いと、各分隊は真暗闇の野を這い進んだ。
ソ連機甲部隊は道路を挾んで大休止していた。尾崎分隊は雨の中を匍匐して散開している敵中に忍び込み、円匙や素手で地雷を埋めた。雨中泥塗れの作業で全員泥人形となった、雨水は軍衣の襟やボタン穴を透して下着迄ぐっしょりと濡れた。地雷を敷設し終えて三百米程引き返して蛸壺を掘って潜り込むと、作業の熱気が消えて冷え込み、ガタガタと震え出した。八月と言えども満蒙の奥地は夜は冷え込みが甚しかった。
尾崎分隊は寒さと孤独に耐えて雨水の溜る蛸壺に凝っと夜明を待った。疲労と飢えで直ぐ睡り倒れそうになっては、遠近の銃声にハッと気付いたりした。睡魔と闘う夢現の中でも故郷の山野が明滅し、肉身の顔が浮んだ。
尾崎伍長は、寒さと不安を紛らそっと雑嚢から乾パンを出して噛った。寒気が益々募って我慢がならず躰中をばたばた叩いたりしていた。
突如、大音響と共に薄明の空の彼方に真赤な火柱があがった。驚いて壕の縁辺から見渡すと、暁雲の浮んだ山裾の松林から白鉢巻に迫襷、草鞋履きに爆雷を抱えた決死の兵が次々に現われ、ソ連軍陣地に向って駆け抜けては伏せ、跳び出しては駆けて草叢に消えた。師団選抜の肉迫攻撃隊であった。
夜が明け切ると、三百米程隔てたソ連軍野砲陣地に砲声があがり、日本軍の山陣や山麓の壕を盛んに砲撃し始めた。
蛸壺に潜んでいた日本兵は、空気を引き裂く裂帛音の下を、穴から涌き出した昆虫のように、爆雷を背負って這い進んで行った。絶対に生還の有り得ない死の突撃に向う彼等の目は飢えた獣のように異様な光を発していた。
見送る尾崎伍長は、一個の尊い人命が一台の戦車と引換に散華することを神は許すのであろうか、と物狂おしい程の憤激を覚えて、何かにその怒り狂う激情を叩きつけたかった。
「安全装置を外せ！」
と福富隊長の声が響き渡って、尾崎伍長の狂気も、兵隊の不安や孤独感も一挙に吹き飛んだ。兵隊達は爆雷の安全装置を外すと、もう迷いが消えて捨身の勇気が湧き出て、全身に血潮が駆け巡ぐり、荒い呼吸を壕土に吹きつけた。
尾崎伍長が壕の上縁からそっと覗くと、砂煙をあげて敵戦車が斜面を上って来た。大きくピッチングする戦車の巨大な腹が、人喰鮫のように見えた。尾崎伍長は軍袴にタラタラと尿の流れるのを感じた。
「自分の前に戦車が来ても蛸壺から跳び出るな、頭上を通過する瞬間に槓杆を引け！」
と福富隊長の大声が伝わって来た。戦車のキャタピラが聞え、地響が壕土を揺がす。凝っと待つのに耐え切れ

なくなった兵隊が、爆雷を抱えて跳び出した。十米程駆けたが、戦車に至らず草に倒れ込んで消えた。

戦車隊の先頭車が急に左に方向を変えると、砂煙をあげて去って行った。続く戦車も艦隊が一斉に方向を転換するように向きを変えて消えた。

ソ連戦車にとって跳び出る日本兵は眼中に無かったが、蛸壺に潜伏して頭上通過の瞬間に、戦車の腹の下で爆発させる新手の肉弾爆雷には恐怖を覚えた。戦車の展望穴からは無数の小さな蛸壺は判らなかった。だから地雷原を行く同じ危険を感じて迂回して行ったのだった。

尾崎伍長は、死神は頭上に来なかった、と一挙に緊迫感が吹き飛んで急に力が抜け落ち、深い穴倉の底に落ちて行くように思えた。すうっと血の気が失せて、蛸壺の底にペッタリと腰を落して仕舞った。

空虚な時が随分長く流れたようだった。時々砲声やキャタピラの響が伝わって来たが、戦車は姿を見せず気の抜けたように静寂があった。蛸壺から見上げる圓い空は、地上の戦闘などには何んの関係も無く蒼く高く突き抜けて、気が遠くなるように広く、高く、深い蒼穹であった。辺りはシーンと耳の奥に突き抜けるような音を感じさせる静けさであった。

尾崎伍長は曠野に置き去られて仕舞ったような孤立感に、その儘待っているのが耐えられなくなった。戦車が再び自分の頭上に来るのを待つのは、生命の消滅の時を待つことである。死の宣告を受けた死刑囚が処刑を待つようなものであった。その緊張と虚脱の交々に来る時間と空間の中にいるのが耐えられなくなった。

尾崎伍長は擬装の草を拡って隣の蛸壺の兵を

「おうい！」

と呼んでみたが、同じように

「おうい！」

と元気そうな声が返って来るだけだった。別に話すことが無いのであった。尾崎伍長は思い出したように、

「おうい！今頃内地ではお盆だなア」

と言うと、

「牡丹餅が喰いたいなア！」

と答えが返って来た。尾崎伍長は無性に故郷が恋しくなった。再び生きて故郷を見ることは出来まい、一人ぼっちで潜んでいる壕の真上に戦車がくれば、ぬっと死神が顔を見せて生命を引攫って行く、今生きている躰が直ぐ消えて仕舞う、何んとも不可解なことだ。死は捉えようもない悪戯のように思えた。不安と焦慮が再び募って来た。

ズウーンと腹にこたえる砲声と地鳴りが再び始った。死の漠たる不安は吹き飛んで、一挙に生命を叩き潰す激音となって全身を震わせた。

逆島記

——佐原の喜三郎——

大和禎人

一、うそっぽの喜三郎

博徒、佐原の喜三郎は伊呂波屋喜三郎、また、朝日象現とも称した。「朝日逆島記」の島抜け喜三郎である。伊呂波は佐原新町に経営した料亭の屋号であり、朝日は江戸浅草茅町の普化宗一月寺に身を寄せた折の虚無僧名である。普化は有髪の僧形だから象現なぞと名乗られると、身分正体がわからなくなる。

天保七年二月十一日のことであった。陽暦では三月二十七日、彼岸桜もチラホラ、ようやく利根に河霧も立つ陽気、喜三郎は木下（きしたし）から船で下り、石納村の船宿池成屋の船着き場に着いた。石納は（こくのう）、利根本流添い、佐原の町へ入る西の船着きである。ここから流れが急に東にそれる曲りの淀である。船頭が竿を突いてぴたり岸壁へ寄せ繋留を終わった。

と、待ちかねていたかのように待ち伏せていた捕り方が襲いかかった。喜三郎は不意をつかれた。

「御用」

と、二声ばかり、一人を捕らえるには大袈裟な人数がドッと繰り出し、喜三郎を囲みたちまち縛めをかけた。喜三郎が無抵抗で悪びれなかったからだ。平然として潔く、天晴れ博徒らしい振る舞い、胆のすわった態度であった。さすが、一瞬はいくぶん唇を歪めたようにも見えたが、

「ごくろうさんで、なんのお咎めか存じませんが、あっしに御用で、へ、あっしなら逃げも隠れもいたしません、ご番所でもどこへでもお供いたしやす、ご安心なすって」

と、あくまで落ち着き払って見えた。

（新田の代貸、中川の彦兵衛でもまたヘマをやらかしたな、なぁに、こっちとらにゃ少しも悪さをした覚えはね

え、ここはいちばん、彦をかばってやろう）
ぐらいに思った。それが実はあとあと思えば不覚だった。

新内の流しの三味を聞きしより
すて身の我となりにけるかな
露は尾花とねたという
尾花は露と寝ぬという
アレねたという
ねたという
尾花が穂に出てあらわれた

また、

起きてみつ
寝てみつ待てど便りなく
蚊帳のひろさにただひとり
蚊をやく火より胸の火の
燃ゆる思いをさっさんせ

こうした小唄もうまいが、さらに新内となるといよいよその美声が冴えわたる。新内は浄瑠璃の一派、流祖鶴賀新内の名に拠る。（泣きぶし）と呼ばれ、心中もので涙を絞る体、まことに罪なものであった。哀絶な歌詞、悲絶な声調が相まって人の肺腑をつき、ほとんど絶叫に近い語り口で情怨綿々、糸の乱れるごとき思情を誘う曲風が新内の特色だった。喜三郎はその新内の名手であった。

新内の代表曲「明烏夢泡雪」はもっとも得意であったようだ。「明烏—」というこの曲題の素材は喜三郎の時代からおよそ六十余年を遡る明和期のお話である。江戸新吉原の蔦屋（扇屋とも、また三崎屋とも）の遊び女、三吉野と浅草蔵前の伊勢屋の養子（次男とも）伊之助（一説には幕府御賄方伊左衛門せがれ）とが、三河島付近の田圃（一説では本所の菩提寺慈眼寺とも）で情死した。男は二十一、女は二十四。これを初代鶴賀若狭掾が三吉野を浦里、伊之助を時次郎として「夢泡雪」を作った。時次郎実は赤穂義士佐藤与茂七とする歌舞伎が八代団十郎の時次郎、浦里を板東しゅうか、という組み合わせで演じられることもあったが、もちろん荒唐なお話になる。さすが初演以後はこの「忠臣蔵」に関連する部分は省かれたというが、元禄は明和をほぼ七十年も遡るのだからありうべきことではない。「夢泡雪」ではそんな部分はない。

さて、こんなふうに語りだす。絶妙の喉だ。追随を許さぬ境地である。

そなたも共にといいたいが、いとしいそなた
を手にかけて、どうなるものぞ、永らえてわが
亡き跡で一遍の回向を頼む、さらばやと、いい
捨てて立つを取り付いて、あんまり酷い情なや、

ここで情がこもらないといけない、

あんまり酷い情けなや、

と、繰り返してから、あとを続ける。

今宵離れてこなさんの、まめでいさんすその身
ならまた逢うこともあろうかと、

三味を爪弾く手つきにもこのあたりで感情がこもる。

楽しむこともあるべきが、死のうと覚悟さんし
た身を、いかな気強い女子じゃとて、どうして
放しやらりょうぞ、かねて二人が取り交わす起
請誓紙はみんな仇、（合）どうで死なん覚悟な
ら、三途の川もこれこのように、

ここでは手を持ち添えるシナもよろしく三味線をかたわらに置き、恍惚の風情、酔うかのようす、さて、語り継ぐ、

二人手をとり諸共と、なぜにというてはくださ
んせぬ、わしゃやりはせぬ、放しはせぬ、殺し
ておいていかんせと、男の膝にすがりつき、身
をふるわして、泣きいたる、……

……

この「明烏」のほかに彼の好みの曲に「蘭蝶」、「伊太八」などがある。ウレイカカリ、カンウレイ、また、ハリマーと節回しに浮身をやつし、新内にうちこむとき無上の陶酔が彼を虜にし、桃源の境に踏み迷わせるもののようだ。

思えば喜三郎のこれが至福の時だったかもしれない。

料亭「伊呂波」は繁盛していた。

江戸中期、利根川の流路改修に伴い町中を流れる小野川は舟運も繁く、柳の枝が川面に影を映し、白壁の土蔵が建ち並び、荷役のために川岸には石段が下りる風情、佐原の町は利根下流最大の物資集散地として殷賑を見て、筑後柳川に比べられたものだ。

利根舟運の要衝木下から佐原までは当時の舟航で九里、銚子へは十八里である。佐原へは小船で四百文、茶船で七百文、銚子へは小船で八百文、茶船なら一貫三百文が船賃であった。

（夜出て夜戻る）といわれ、多くの江戸市民や文人墨客はとくに木下から三社詣でや銚子の磯めぐりに出かけたものである。三社はもちろん香取、鹿島、息栖を指すものだ。利根の舟運は城米、蔵米の輸送が主だった元禄までは高瀬舟が主であったが、地方都市の発展、ことに九十九里のいわし、銚子沖の海産物や、佐原、神崎の酒、銚子、野田の醤油などの物資輸送が明和、安永のころからにわかに活気を呈し、従来の領主の荷物輸送の河岸問屋に対抗する新たな商い荷物をうけもつ問屋が台頭するようになった。同時に茶船と呼ばれる八人乗りの客船が出現したものである。高瀬舟は船頭四、五人または六人も乗るのに対しこちらは軽便な乗物だった。舟運の賑いはとくに木下を中心として、年間の船数約四千に達するほどだったという。

「だんさん、お客人ですよ」
トントンと階段を上ってきて、女の声がした。
「だんさん、お稽古のところ申し訳ないス」
襖を開けたのは女中のクメだ。（だんさん）というこの女が一つ覚えの繰返しも煩わしい。いいつもりで、クメはそれを言っている。ベタベタ田舎風なのだ。
「お客人はおこもさん、尺八をもって、編笠もとらない変なお人」
「ふーむ、そうか、余計な口をおききでない、おこもさんはないだろう、いま下りていくから」
と言って、三味をかたえに、置いて立ち上がった。小女はクメのほかに何人かいるが、この女はとくにまめまめしい振る舞い、憎くからずも思えるが、なんとなく、（俺もまずったな）
と思う。いまだ独り身の彼はというより、生涯妻帯することのなかった彼だから、こうした奉公人の扱いはあまり得手でない。どちらかといえば女は苦手だった。クメは色気にあふれすぎる。料亭であればこんな女も一人はいてもいいが、やはり煩わしいのだ。
階下に降りてみると、たしかに店の土間に一人の虚無僧が立っていた。なるほどクメの言うとおり、垢染みた身装はいかにも（おこも）と見紛うものだ。
「しーっ」
と、口をきくなと制しておいて、外へ連れ出した。
「おお、小金からわざわざ、なにかね」
袖を引いて路地奥へ連れこんだ。
「困るじゃないか、店へ顔を出されちゃ、ま、いいやな、それはおくとして、よほどのことか」
「……」
それからあとのところは、なにやらヒソヒソ話に変った。
そのようすをあの小女のクメが喜三郎のいままでいた二階の部屋からそっと覗き見していたことを二人は知っていない。
ところで、伊呂波の小女クメがなにか隠密、諜者のたぐいであったというわけではなさそうだ。
しかし、クメの言う（おこもさん）は明らかに虚無僧だった。字をあてて薦僧（こもそう）とする時代があったことからいえば、あながち的はずれではない。普化宗は唐代普化禅師を開祖とする禅宗の一派で、鎌倉時代の臨済僧心地覚心が入宋してわが国に伝えたといわれる。行脚、修業に薦席を携えたところから薦僧と呼ばれたのが起りという。しかし、後に字の俗を忌み、虚無空寂の義をとり虚無僧と改められたという。
普化宗は江戸時代に入ると、幕府はこの宗派を公認し、武州青梅の鈴法寺と下総小金の一月寺を本寺格とし、武士のほかは門に入ることを禁じた。しかし、明和頃から伊達の風しだいに著しく、禁制もゆるみ、百姓町人も本

寺の許可を得て、尺八を弄し、宗門ようやく腐敗し、一種、演芸の徒に堕した。寺院の数も古くは百二十余か寺に達したものが、幕末には九十二寺のみ。明治十年廃宗に帰し、住僧は民籍に編入されるにいたる。
ここにいうその伊達風は時に世の婦女子を惑わすに足り、およそこのようであった。
金襴錦の袋に尺八、天蓋、袈裟または掛絡をまとい、木太刀、懐剣を帯びることを許されていた。手甲、脚絆、わらじばきは後には高下駄、布施を入れる偈箱を首からさげる。
白衣も粋、清潔であれば、天蓋の内の男振りを想い、女を惑わすことがあったとしても不思議ではない。
喜三郎はいったん部屋に戻った。そして、身装をあらためて階段を降りてきた。白衣も真新しく、なんと虚無僧姿である。帳薄を預かる伊助がキョトンとして迎えた。
「あれまぁ、だんさん」
と、クメともどもの驚きの声をあとに、
「江戸まで行ってくる」
と、言い捨てると、喜三郎は身を翻えし、風のように店を出ていった。
クメや伊助のほかに誰か気付いたものがあったかどうか、軒灯に火を入れるには早すぎる料亭の無人の時間だった。あっけにとられた二人は交わす言葉さえ失っていた。主の思ってもみない変身だった。
「あれ、ほんまにだんさんだっけがぁ」
クメがややあって声を上げた。
「だんさんは、うそっかたりだぁ、」
クメにしてみれば、たしかに喜三郎のこの変身ぶりは大嘘つきに値したのだった。
一方、伊助の方は背筋をなにやら冷たい風が吹きぬけでもしたような不吉な予感を覚えた。
料亭伊呂波の主、喜三郎の姿はこの日を最後に再び見ることがなかった。
さて、佐原の喜三郎は文化三年（一八〇六）下総の国佐原村新田（現在の佐原市向津）の百姓本郷武右衛門の子として生をうけた。母は佐原村で酒造業を営む江戸屋新兵衛の娘初で、姉（名は不詳だが、戒名は貞義妙住信女）と妹（名はふち）の三人姉弟であった。幼時から少年期の生活については詳らかでない。
橋塘伊東専三氏は「島千鳥沖の白浪」の中で、喜三郎は佐原村川口の米穀商平兵衛の継子で、平兵衛の実子に家督を継がせるため家を出て、博徒になったとしている。「眠狂四郎」で一世を風靡した（柴錬）こと柴田錬三郎氏も「江戸群盗伝」で同じように書き、十八歳ごろには銚子、成田あたりを遊び歩くようになり、放蕩は三年あまりつづいたとしている。
しかし、佐原の郷土史家海野正造氏が、寺の過去帳な

どから丹念に調べたところによると、喜三郎はれっきとした本郷武右衛門の実子で、義父に義理だてするような必要はなく、実の弟もいない。

ただ放蕩については、新内の名手だったという言い伝えがあるし、後に料理屋を営んだり、旦那賭博に手をだして、ついに親分と呼ばれるようになるくらいだから、その素質は充分にあったと思われる。

（だんさんは、うそっかたりだぁ）

と、思わず小女クメが叫んだのは主の変身を詰るもののようであったが、実のところ、クメにしてみると、ほかの意味があった。

それは帳場を任されている伊助がもっとも苦々しく思っていた経緯でもある。伊助は伊呂波の先代から料亭の経営いっさいを取り仕切り、喜三郎が店を買い取って主におさまってからも、同じ立場を与えられてきた堅物で通っている男だった。

喜三郎はこの年（縛についた天保七年）、すでに数えで三十一歳である。料亭の主が独り身であること自体なにか不自然を免れない。

（あの男振りでおかしいよ、どういうことかねぇ）

（すくんだねぇ）

驚いたほどの意味だ。

伊助は女達をたしなめながら、やはり同じように思っていた。

（男んモノがござってんじゃない）

（こら、にしら、めったにこなすでねぇ）

悪く言うなと伊助は恐い顔をした。

健康上妻帯せぬと伊助に語ったことが、そういう意味だったかもしれない。

（まさか）

と、思う。

しかし、一方、彼は二宮尊徳よろしく、店に働く女たち仲居や女中のうちでもっとも良く働くものを女房にすると、言って競争させていたのだ。伊助の苦々しく思っていたわけはこのへんのものだったのだ。

喜三郎が伊呂波を手に入れるについては、考えられるすじみちとして姉の連れあい青柳甚兵衛の庇護が考えられる。この義兄は左官業で、手広く仕事をしていて栄え、江戸に支店をもつほどの分限者であった。喜三郎が江戸に出て普化宗の門を叩くについてもこの青柳の力を借りたものだったから、おそらく同じであろう。

ところで、普化宗は江戸浅草茅町に宿寺があり、江戸番所、または面白いことには風呂屋と称したようで、彼はここに止宿し、修業したものと思われるが、後にはそこをはなれ、本所の舟橋屋に寄宿し通うようになる。この時代にも青柳氏はなにくれとなく手厚い面倒をみている。

佐原の青柳家には今にその経緯を証かす喜三郎の手蹟にかかる文書が残されている。

その日付は丙戌四月十四日、つまり、文政九年（一八二六）のもので、数え二十一歳の時のものである。

まず、その手蹟の若さに似ぬ見事さに驚かねばならないが、それよりも、びっくりすることは、その内容である。

それは一種の借用書で、「覚え」とあり、『東鑑』二十五冊、『本朝通記』三十冊などの本代合計十四両の文字が見える。金額に驚くことはもちろんだが、これだけの学が本当に身についたものだったろうか。かなり疑問があるとしても、これは姉の青柳家が学費を援助していた明らかな証拠でなければならないのだ。

二、まがっとの喜三郎

未明の印旛布佐河岸に農舟（サッパ舟）を横付にした二人の男たちがあった。櫓を操っていた方が、

「親分、着きやした、上りなすって」

と、言った。

「おお、ご苦労だったな、お前さん櫓のほうなかなかのもんだな、上りはしんどいから、疲れたろうよ」

ねぎらった方は喜三郎だった。二人ともいつかあの虚無僧姿から身装を変えていた。近在の農民に紛れる体のものだ。しかし、商人ふうに首かけの荷物を二人とも背負っていた。おそらく虚無僧支度一切を入れているはずだ。

「ひと休みしていくか」

「いえ、昼までに松戸へ、あっしなら疲れちゃいませんから」

「そうか……」

わらじを締めなおす連れを待って喜三郎は歩きだした。

「お前さん、並んでお歩きな、人目につくからな」

「へぇ、」

物腰おのずから、威厳とはこういうものか、争えぬものがあるらしい。おずおず並ぶのを肩を叩いて、喜三郎が励ますあんばいだった。

ここまで来ると、伊呂波のクメや伊助は遠く思っても想像の全くつかない変身ぶりである。高瀬舟は木下を過ぎたころ追い抜いていたから、荷駄が出るにはまだよほど早い時間なのだった。

利根水運の発達により、江戸日本橋魚市へ銚子や、鹿島灘の鮮魚が盛んに輸送された。鯛・すずき・ひらめ・かつおなど、夕刻銚子を発し、翌朝、印旛郡布佐河岸に荷揚し、松戸河岸までを駄送し、さらに舟便で行徳を経由して江戸に入るもので、また、夏の水量の多い時期には関宿を迂回し活舟で日本橋へ運ばれたものである。将

軍家が賞味したという銚子産の活すずきはこうして膳に上ったものだった。この活舟の江戸川に入り日本橋までの全行程は四十八里、三日目の朝売り、という具合だった。

ここに鮮魚（なま）街道という二つの陸路が生まれた。前記したように冬季渇水期、木下河岸からの駄送の場合の白井、鎌ケ谷と通り行徳に出る三十八キロ、もう一つは布佐から松戸へ出る三十キロである。

喜三郎たちはあとの方の道をたどっていたのだ。

学者喜三郎と異名をとる、佐原の喜三郎はまぎれもなく天保水滸伝の中の一人物だった。笹川の繁蔵、銚子の五郎蔵、飯岡の助五郎、万歳村の勢力富五郎と肩を並べる一人だ。ただし、講談、芝居に出てくる腕の喜三郎は全くの別人である。

亨保、天明、天保の飢饉は東北だけでなく下総の農民をも襲った。没落農民を博徒の親分が吸収していったのだ。彼らはとかく無秩序な世に絶望の生活をおくった一部農民の庇護者をもって、みずから任じるふうがあり、また、無宿者を配下としてそれぞれ勢力を張ったのである。利根川筋は上州と並ぶ隆盛地になった。人も金も物も動くところに彼らは集ったのである。

ところで、こうした下利根の事情は複雑な支配関係の錯綜に根ざすところが多分にあることを無視できない。

里見氏の改易された後の房総では、佐倉藩の十万石を最大として、久留里の三万石、飯野、大多喜の各二万、佐原に近い小見川で一万など大藩は配置されず、旗本領、または天領がモザイク状に複雑していた。宝永七年（一七〇二）の旗本領を見ると、関東では三、〇〇九領で全国三七七八領の八割を占める。下総で四二〇領、上総四七五領、安房四一領、房総三国に全旗本領の四分の一が集中している。

香取郡の村々の支配の実態を煩わしくなるが、ここで見ておきたい。江戸末期の弘化二年（一八四五）、奇しくも、それは喜三郎のまさに死を迎えた年にあたるのだが、「関東取締役手扣」によると、やはり、旗本領が圧倒的に多く、六八・七パーセントに及んでいる。代官領（天領）と大名領が一三・一パーセントである。モザイク状のいかに甚だしいかが知れよう。しかも、一村が一人の領主に支配されるとは限らず、何人もの領主に支配される相給の方が多かった。香取郡下の一給村は一四一カ村で四九パーセント、相給は一四六カ村で五一パーセントである。相給の最高はなんと十三給である。

こうした将軍の膝元の親衛を旨とし、重視した幕藩体制は一方、皮肉なことには罪を犯しても、他領に逃げこめば追手はかからぬという無法地帯を構成し、彼らの跋扈に好都合を与えたのであった。

しょせん喜三郎とて、無事ですむはずもないことはと

うに覚悟はできていたものの、その日が来てみると、慌てざるをえない。伊呂波をすてて逃亡をしたのはそのためだった。

松戸河岸に着いた二人はそこで再び虚無僧姿にかえって、江戸へ向っている。

朝まだき日本橋の船宿を出て、注意深くあたりをうかがい、河岸をはなれた新内流しがいる。

もちろん、流しをするには夕刻まで冬の日がいかに短くとも間がありすぎる。前夜遊里に遊んだ帰りとでも見ればいいのか。

新内の流しは語り手と三味をもつ上調子の二人連れである。例の二人に違いなかった。

身装を二転三転して江戸の地を踏んだものだった。つき従ってきたあの男も、こざっぱり派手な唐桟の着ながし、いなせな裾さばきで、三味線を抱えている。どこで化けたのか二人とも月代に豆絞りの手拭をのせている。まげのハケ先も心もちななめに、粋に見える。伊呂波を出てくる際にはそこまでの支度を整えたものではない。おそらく松戸河岸での工面であったろう。

江戸に入れば虚無僧姿はかえって怪しまれる。虚無僧の無頼はそのころ、ようやく嫌われる兆しがあり、木賃米代を払わず、押して止宿し、あるいは合力を強要し、応じない時は尺八をもって罪なき百姓町人を打擲するなぞ、目に余る無法者が現われていた。

喜三郎はかねて苦々しく思っていたから、それを避けたのである。

「お主もな、ちいっと身奇麗にしておくれ、新内は粋なものさね、お前さんは三味線を持って、黙ってついてくればいい、」

もちろん、支度代は喜三郎の懐中からだ。松戸でもその程度のものは用意が出来たようだ。

それから、二人の新内の流しは十軒店の手前で右折し、あとはまっすぐ本町、大伝馬町、塩町と通り抜け、浅草橋を渡った。

逢い初めてより一日も、烏の鳴かぬ日はあれど、お顔見ぬ日はないわいな、しげしげ逢えばお宿の首尾、悪しきは胸に知りながら、好いたが因果つかのまも、そば離るるがいやまして、朝の帰りもまだ早い、もう一服と抱きしめし、その言の葉が居続けと、しげりし故にお前の身、仇となしゆく悲しやな、許してくださんせ八様と、手を合わせ伏し拝み、おもわずわっと泣き

い出す。

これは「伊太八」の語りだ。

太夫と三味の形通り二人連れの新内流しは大伝馬町の呉服問屋、木綿問屋の店前に立ち、なにがしにもならなくとも、時を稼ぎ、ここ浅草近くまで来たものだった。

これから先は門前町から新吉原へかけて流すつもりだ。
日本橋近くにあった「吉原」が浅草寺北方、日本堤近くにその規模を大きくして移設され「新吉原」となったのは明暦の大火の後である。田んぼの中に移されたもので、移転料一万五千両が与えられ、これまで昼だけの営業を夜まで許されたといい、当時の男ども上から下までの身分に応じた遊里となったものだ。
新内のもつ悲痛な表現、濃艶な情緒にほだされ、情死する遊女が多かったというが、その妙手、喜三郎はこの巷にすっかり溶け入っている。
高音をうけもつはずが、三味ひとつ弾かぬ奇妙な上調子を供に、喜三郎はもちろんたどりつくところを普化の宿寺と決めていた。「の」字型の江戸の市域拡大にともない、寺社もまたこのあたりにたくさん移転していたのである。
折から、川向こう両国では回向院を定打ちとした春場所も開かれていて、大関小柳、稲妻を頭に二月の興業中だった。当時は二月、十月といった年二回、晴天十日の興業形態だが、この小柳は長吉の方で、この年（天保七年）この場所に大関に昇進した人気力士だ。
町の賑いはさすが大江戸という風情、活気でいっぱいだった。
ところで、ここで気づくことは飯岡の助五郎や笹川の繁蔵が相撲取りあがりだったということだ。長谷川伸さんの名作「一本刀土俵入り」の駒形茂兵衛は創作中の人物であろうが、妙に力士と彼らのかかわりは多い。ここに現実、佐原出身に大浜岩五郎という幕内力士がいる。のち龍ケ淵と改め、天保五年十月に引退したばかりだが、いまは相撲会所に出ていたものらしく、バッタリ出会うことになった。
「親方さんでねぇかな、もし」
と言うのだった。
「なんでまた、親方さんが、そのなりで……」
と不審げなのに、喜三郎はわけを隠せない。
「そりゃあ、いけやせん、親方は佐原の大事なお方、胸を張っていておくんなんしょ、いけない、いけませんなぁ、なんとも、へ、それは」
と言うのだった。
相手はどんなつもりでそれを言ったか、喜三郎にしてみれば、胸をふいに突かれる思いを隠せなかった。
「ここではお前ぇさんを匿まうわけにはいかないな」
普化の番所頭、覚道は手を振った。もともと虫の好かぬ男の部類だった。寺社方の手がすでにまわっているというのだった。
（ここは、こうとなれば男らしく、あの相撲取りの大浜も言う通り、佐原に朽ちるとするか）
学者喜三郎はハッとして諦めへ向けて目を見開いた。

（ともかく戻るんだ）
と思ったものだった。
「源治、たいそうに世話をかけた、ありがとうよ。お前さんは罪も科もねぇお人だ、小金におかえり」
「……」
「な、本寺にお戻りな、お前ぇさんの古巣、粗末にはあつかうまいよ、そうおし、佐原くんだりまで申しわけなかったな、ありがとうよ、ここで別れるとしよう、おいらの言うとおりにしてくれ、な、いいな」
男はなにをいってみても無駄とみてうなずいた。
このインテリらしい過敏な判断が実はそれからあとの彼の運命を過酷なものにしようとは、この時、もちろん気づいてはいなかった。

三、ちくぬくなの喜三郎

賭博の胴元、並びに宿をしたもの。
遠島に処すべきものの罪の中に明らかにこの条規がある。賭博についてはことのほか厳しく、関連して、辻番所内の賭博、イカサマ賭博、合力賭博ならびに合力金の横領など細かに決めている。辻番所内というのは町方にある今日なら町会事務所に相当する。ギャンブルとなるといつの時代も同じ、巧妙な抜道が考えられるものだ。
ところで、こうした刑法規範を定めた『御定書百箇条』は「奉行中の外他見あるべからざる者也」と奥書に厳然と記されている。この禁を犯し青表紙として公刊した大野広樹なるご仁、お咎めをうけ綾部候に「お預け」、果ては病死したという記録がある。「依らしむべく知らしむべからず」という時代だったが、ここでもう少し、他の遠島に該当する罪を眺めておこう。
江戸十里四方の内、並びにお留場にて鉄砲を隠し所持したもの。
口論の上、重傷を負わせた者。
過失で人を殺した者。
指図をうけて人を殺した者。
殺人の手引をした者。
不法をしかけられ、止むなく人を殺した者。
子殺し
弟妹、甥姪殺し
幼女に不義をしかけ、負傷させた者。
僧侶の女犯
三島派、不受不施派に類する法を勤めた者。
ざっとこんなふうである。ここで、今に異るものは女犯の僧、不受不施派にかかわる事例だけだ。
さて、喜三郎の石納の河岸に捕らえられたあれからだが、天保七年二月十一日召し捕りの後、同二十五日、江

戸送りのうえ吟味をうけた。関東一円一斉手入れの網にひっかかったものだ。市井の雑踏に紛れるうちは無事であったものが、故郷に舞い戻ったところで御用になる図式は昔も今と少しも変っていない。まんまと罠にはまった案配であった。

吟味といっても即決に近いものだ。やがて、勘定奉行大草能登守の裁定で「遠島」が確定した。八丈流罪であった。

奉行は直ちに月番老中に上申する。老中から島支配奉行に通知がある。支配奉行は島役に通達するというのが順序だった。この島支配奉行ははじめ下田奉行、のちに浦賀奉行に変っている。

さて、どの島に流されるかという「島割」が当人に知らされるのは出帆の前日が原則である。ただし家族には数日前に奉行所から知らせがあった。

はじめ島から迎えの船を、漁船か回船を出していたものが、回船は将軍家献上の絹織物を運ぶから、不浄を忌まねばならぬという、いささかの島の抵抗もあり、もっぱら個人持ちの漁船の雇いあげに変った。いずれにしても強権の前に島の犠牲は少なからぬ実情があった。その後、この弊は改められ、幕府の官船が護送に当ることになるが、裁決の時期によっては渡海が四カ月も遅れる場合があった。

そのわけはこうだった……。

寛政八年、前記『御定書百箇条』が定められてから五十六年を経て、幕府は江戸鉄砲洲十軒町に、伊豆七島物産売捌所（島会所）を開設した。七島の物産を買い取り、諸島民の生活必需品を売り捌く交易所である。もちろん官業である。勘定奉行の支配下におき、春、夏、秋の三回に七島巡回の交易船を就航させた。この時から流人をこれに便乗させるようになった。

島送りの前夜は牢役人石出帯刀の大広間に集められる。そして、このあとの事情を喜三郎は自ら次のようにその「朝日逆島記」の中で述べる。

（略）遠島被　仰渡候者、出帆前夜、伝馬町石出帯刀様御屋舗内大広間にて嶋割之上、出家、侍、長袖之者は金一両宛、百姓、町人、無宿躰之者は金二歩つつ、皆鐚銭にて従御公儀様御手当被成下、其外膳、椀壹人前つつ、薬品に半紙弐状銘々被下置、従是不残遠島之者は揚屋と申牢え参り、其夜は右御手当銭之内壹人前四百文つつ拝借仕、銘々之存寄に任せ、酒食等買求、種々鋪（保）養罷在候。

思いがけぬ手当もあって、一夜無礼講、罪を犯し明日はいよいよ遠流の身、会費を払って名残を惜しむコンパ、さすが牢役人も情をかけたものと見える。せめてもの心入れであった。膝を抱え、こうした雰囲気に溶け入れない者もあったろう。サメザメ心は泣きぬれた者もあろう。

膝を叩き、肩を叩くことで陽気に傷ついた内心を紛らわし、酔うほどにヤケッぱち、今宵ばかりは高声を張り上げる者もあったであろう。

さて、

従是夜明次第に向井将監様御船手御役所え差立に相成申候。永代橋、万年橋、霊厳島、右三ケ所は先例之作法を以、年々両度之流人は此所より順番に出船罷在候。

ここに両度とあるのはさきに記した春、夏、秋三回の誤りであろう。なお、家族への知らせがあったことを前記しているが、通知をうけた家族は島にもっていける許可された範囲の品物を出帆前日までに届ける。米なら二十俵まで、銭二十貫文、金は二十両、麦は五俵ぐらいまで、刃物、書籍、火道具の類は許されない。この制限数量は時によって違っているが、制限いっぱい持っていける流人は滅多にいない。身分ある武士や富豪の町人ならともかく、住も定まらぬ無宿者や水呑百姓の多い彼らだから、まさに絵に描いた餅に等しい。大方が無一物で流されている。

御用船之様躰の記

一、船は五百石積余之船にて、右舟櫓之前に舟牢作り、長さ三間、横幅六尺、高さ四尺、右櫓之口に三尺四方之詰め有之、船頭、水主之者八人乗也。

喜三郎の朝日象現は船の大要をこう記す。回船には舟牢がしつらえられ、流人はすべていっしょに放りこまれた。高さ四尺とあるから、背を屈めなければ立居もままならない。詰は便所のことだ。五百石積みはおよそ五十トン、積荷の余に流人を乗せるのだから牢は船底でなく、船上のはずである。船底説は誤りであろう。「徳川幕府刑事図譜」の出船の図に様子がうかがえる。また、『御定書百箇条』には御目見得以上の身分（旗本にして持高二百石以上）の流人、または女流人については別の囲いを船内にしつらえ押送する、という定めがあった。護送役は御船手番所の同心が普通四人、この中に一名の書役を加えたといわれる。

「お願いでございまァーす、お願いしまーす」

これは今日の選挙運動に似て、まったく趣の違う光景である。悲痛な叫び声であった。

あとに続けて、たとえば、

「与兵衛めの縁者でございまするーッ、なにとぞお慈悲をもってひと目、ひと目お会わせを願いまするー」

と、これはかなり慣れきった口調で呼びかける。（お目こぼし船）がひとしきり回船を追いかけ、船腹に寄り添い、船上に向って船頭が呼びかけるものだ。陸上では許さなかった面会が、船が艫綱を解きすべり出した海上で行われる。もちろん、これとても銭次第、金次第でそ

んな専門の船頭が佃島牢近くにいて、役人に普段袖の下を使い、その賂いしだいで顔の利き方が違ったという。まさに、地獄の沙汰もなんとやらであった。

一、遠島出帆之節は永代橋、万年橋、霊岸島、此所にて諸親類一家一門身寄之者暇乞に参り、夫々身継物、見舞物色々申受、従是御用船は順風に任せ出船に趣。此時御舟手御役所より引船にて引出候。其時諸親類逢人之者共老若男女に不限、一生の別故、何れも泪をながし、無是悲相別申候。御用船へは流人敬固役人、御船手御役所より一艘に三人宛三宅島迄行き、御用船は順風に任せ相州浦賀御関所を志し出帆仕、浦賀御番所無相違致着。

あえてママ写したが、かなり誤字に気がつく。これまでに写したところでもそれを指摘できるが、この部分では、趣は赴、敬固は警固、致着は到着でなければならないなどである。しかし、そうした誤りが、資料としてはかえって思わざる真実性をもって迫るようである。

船出の模様は少し異なる部分もあるが、これは喜三郎の目に写った情景である。冷静な目を感じられる。彼自身に差し入れがあり、また面会をする者があったかどうかは明らかでない。

一、御用船は御関所にて御改有之、其上にて流人之名前を銘々壹人つつ呼出し御尋有之、御改相済候得は亦亦御用船は順風待受、豆州下田湊、細（網）代湊、洲崎湊（須崎か）、此三ケ所を志し致出船候ても、灘（凪）にて順風悪敷相成候得は、其浦々近郷役人之下知を以引船数知れす参り、其湊へ逼（逗）船仕罷在候。

近海を離れることも容易ではなかった。当時の航海術ではすこしでも風があればもう風待ちをしなければならなかった事情が伺える。

大川（佃河岸）の船出に踏板をはずされた瞬間、というより、踏板に足を一歩かけたそのときが、江戸の土の踏み納めであった。再びその土を踏めるという確信はどの胸にもなかった。

難航の中に病気、病死があり、最悪の場合海難さえある。病気は浦賀番所までに発病した者は検視の上、押送困難な者はここで下船させ、番所では島役宛に証文を書いた。浦賀を過ぎてからの発病は最寄りの島で処置することになっているが、大方目的の島まで運んだ。途中で死ねば船上病死として取扱い水葬にした。

海難もとくに難破した場合、命が助かっても自首しなければならない。改めて送り直しになる。逃亡した者は人相書をつけて浦触れをし、親類縁者にも捜索を義務づけたことが『御定書百箇条』に見える。船上流人たちの反抗、反乱には、備えて護送役に切り捨ての権限を与えていた。

さて、

逼（逗）留中は其湊は不及申、近郷村々より七八人つつ参り、昼夜番仕候。御用船は格別之順風を待居、夫より新嶋を志し出帆仕、右嶋え無相違着舟。新嶋濱邊には嶋役人、流人頭、小前之者共不残罷出待居候。新嶋割之流人は御舟手敬（警）固之役人之下知にて不残舟上り。此濱邊にて先例之通り御舟手敬（警）固之役人より嶋役人へ不残流人えもの引渡申し候。引取相済候得ば、御用船は是より西北に當り海上壹里半計り離れ、泊嶋と云嶋へ行、一両日之内逼（逗）船仕罷在候。逼（逗）留中之内、敬（警）固之役人同道にて流人不残此嶋疾病之銘湯に行、保養致し罷在る。

さて、ここでは泊嶋というのが謎の島になる。新島近くには式根島があるだけだ。元祿のころ、島が別れて二つになり、式根はいわゆる七島の中でない。同島の海水をうめて入浴する地鉈、もしくは足付の温泉だったのではないか、おそらくはそうに違いない。とすれば西北でなく西南である。なにしろ長い牢生活のうち「湿病」と呼んだ疥癬にかかる者も多く、また積る垢を落す、これは命の洗濯であり、申し分ない保養であったはずに思われる。

里見弴さんの作品に「くちやね島」というのがある。この小説の名人が式根島に逗留した折の見聞が書かれている。食っちゃ寝の気ままな持病保養の旅を材料にしているのだが、この湯の描写がある。昭和十四年七月の作品で、こんな文章である。

荒磯の岬を、幾回りかすると、地奈多の入江で、そこの岩間には、鉄錆色の温泉が湧いてゐた。少しの人工も加えてない露天風呂で、満潮には打ち込んでくる海水に、ぬるくてはいれず、あまり退きすぎても、浅くなり、熱くてこまる、といふような、ひどく原始的なものだが、ホテルのや、その近くの、足付といふ、これも海岸の、着物の脱ぎ場ひとつない露天風呂の、ただの塩類泉らしいのに比べて、見るから利きさうだった。

あえて作の年月を写したのは、この年代ではほぼ昔の面影をまだ多分に残していたと思われるからである。作中、電報を打ちに新島まで出かけるくだりがある。明治中葉までは無住の島だった。

流人たちはそうした鉄錆色の湯に思わざる湯浴みをした。波しぶきを浴びる中を男たちは一時、はしゃぐようすであった。

じっと腹這うように身を沈めると、なんともいえぬ痒みが背筋を走った。皮膚病ではなくそれは虱に血をすわれた傷口なのだ。奇妙な快感で、捕われ者の自棄がその

痒みに共鳴するように這いのぼってきた。
役人たちもここまで来てしまえば、という安堵を胸にもっている。同じ目を向けていても、かなり彼らに対して寛大になっていた。
と、その時である。思わぬ出来事がおこった。一人の流人が裸のまま崖の方に駆けあがったのである。獣のようなわめき声がその口からもれるのを流人たちは聞いた。あっ、という間もなかった。男は崖上に出て海に身を投げた。

四、さるげおちの喜三郎

元祿十四年（一七〇一）、
「新島大海嘯、式根島切断分離すといふ」
文化十二年（一八一五）、
「天文方高橋作左衛門門人永井甚右衛門及伊能忠敬門人等来島地図作成（伊豆七島及無人島図成る）」
これは浅沼悦太郎氏の「三宅島歴史年表」に拾える記事だ。
この年表はいまは貴重な資料の一つである。あるいは復刻されているかもしれないが、昭和二十六年（一九五一）、六人社というところから発行された本だ。
この発行よりさかのぼる二十四年、私は八丈へ渡海している。それはまさしく渡海というにふさわしいもので、六〇〇トンの黒潮丸に便乗したものだった。離島への関心、とくに流人に対する興味をもっていた私だから、この眇たる七十六ページの冊子は飛びついて買ったものだった。
さて、それはさておき、ここに拾い得るものは式根島生成の事実だったり、伊豆七島の精密な地図が喜三郎と同じ佐原の伊能氏にかかわり、完成している事実だ。このことは後日、喜三郎の島抜けに重大な関連がありそうに思われる。
喜三郎らをあ然とさせた流人仲間の身投げは、女犯の僧であった。僧侶ゆえにそうした罪のあげく、すでに引き回しの上、晒しという惨い仕置をうけ、傷つき、ボロボロにされた心身をここまで堪えに堪えてきたものだった、と思える。彼は全裸の生まれたままの姿にかえり、そして狂い、崖から身を投じたのだった。
一、従是御用船は格別之順風待、三宅嶋を志出船仕候。三宅嶋濱邊には地役人、名主、組頭、濱役人、流人頭、小前之百姓、流人之者共不残罷出待居候。御用船は此濱邊に無相違着、敬（警）固之役人之下知にて三宅割、八丈行流人は銘々之荷物持参にて此濱邊に不残上り申候。
ここでは、格別の順風を待ち、と、あるところに注目

したい。よほど天候を見定めた上の出港をしている。三宅に着いてからの役人その他、島人の出迎えがいかにものものしいものだったか、目に浮かぶようである。
引取相済候得は、嶋役人之下知にて流人は不残荷物持参にて寺へ行、其夜は此寺へ一泊す。
さて、これから彼ら罪人扱いに、やはり、と、いう体の事実が書き継がれている。
夫より流人頭かしきと申者六七人も参り、夫々禮儀有之、其上にて右之者共流人之者へ申候には、是迄両度之流人は先例之作法を以多少によらす祝義（儀）を申受来り候由相談に付、凡壹人前金百疋位之處、持合手薄之者は無據有合之仲間之者共にて取繕差遣す也。
この末尾のところで、
（持ち合わせ手薄の者はよんどころなく、ありあわせの仲間の者どもにて取り繕い差しつかわすなり）
と、あるところが泣かせる大事な部分だ。サワリとして読みとれる。
とくに、（差しつかわすなり）がいい。喜三郎の文才、なかなかのものを感じさせる。やはり学者の異名はふさわしいものかもしれぬ。そして、紙背に彼の俠気のたぎりをこらえているさまが伝わってくるようだ。
夫より舟上り川岸上け之荷物に應し遣す。其前此寺より一宿之雑用相拂置、夜明次第流人は不残鬮（くじ）取にて村々之流人頭へ被引取申候。従是流人は此所にて三日間喰秡と申て諸色を任せ罷在候。三日之内に世話役え木水代と申て、流人壹人前に金三分つつ差出也。其外かしきと申者へ金百疋つつ祝義（儀）に遣す。其外衣類、帯、細物、手拭之類心次第に、（略）
さきの経緯と同じ流人仲間の持ち合わせをやり繰りしている。記事としては重複するので割愛した。三日間の喰秡という作法も（勘定相拂申候）と記している。なんのことはない、客分の扱いをしたものではなかった。
ここに（かしき）なる人物の名が二度ほど出てくるが、漢字を当てるとすれば「樫木」ではないか。流人頭は牢名主に匹敵するにらみを利かしていたらしい。
喜三郎は腹が立って、煮えくりかえるようであったに相違ない。ここは我慢、我慢であった。
さて、
八丈之流人は諸勘定相済候上、世話役之指図を以、八丈出帆迄夫々住居罷在候。
この島では八丈へ行く流人は仮の宿り、かかわりはないはずだが、合力を惜しまなかったもののようだ。互の間に、連帯する人情であったし、互の身上を哀れむ心から出た挙であったろうと思われる。

従是八丈之様躰を記

八丈嶋行之流人は、江戸表春船にて出帆致し候
者は三宅嶋に船待を致し、秋御用船にて三宅よ
り八丈へ出帆致し、江戸表秋御用船にて参り候
流人は三宅に年を越し、来春之御用船にて八丈
へ出帆致。

江戸からの護送してきた役人はほどなくこの島から引き返す、あとは八丈島役人の引取りになる。喜三郎は護送役人に、

「旦那、お情でございます」

と、すり寄るようにして言った。

「なんだ、お主、うわさと違い、かくべつ神妙だったな」

佐原村喜三郎といえばこんどの流人の中では大物として、とくに監視の目をはなさないできた。支配奉行から旨を授けられてもいた。

「へ、ちいっと、お願ぇのすじがござんして、お情でございます、へぇ」

「なにかな、申してみるがよかろう」

「へ、佐原までこれを、あて名の伊助は手前営みまする（伊呂波）の番頭でございます」

佐原に入る寸前の逮捕で、店の始末もなにかと心残り、手紙を届けてほしい、と、いうものだった。

「ふーむ、お主なかなか美事な手蹟、して、これをいつ書いた」

「へ、かしきさまのお情でございます」

と、喜三郎はいっそうすりよって、

「だんな、これは飛脚の駄賃でございます、おさめといてくだせぇ」

すばやく袂へ、まるで歌舞伎の所作よろしく否やは言わせない巧みさ、そして鋭い目付で相手を射すくめた。

「あい分かった、神妙に免じてのう」

「ありがとうさんで、これで手前、八丈へ心おきなく参れます、なんともありがとうさんでござんす」

この時、役人に託した手紙はあの忠実ものの伊助のもとになんとか届けられたもののようだ。年を越して、伊助からは見届物が届いている。

この見届物は見継物ともいわれ、流罪人へ国もとの親類縁者から届けられる生活物資である。大体、食料が多く、島々の嘆願もあって、はじめは特別の流人に限られたものが、次第に自由になっていた。流人が飢えないだけの緩和があり、島の治安上も流人たちの犯す犯罪の減少に役立つものであった。もちろん、その手続は厳しく、当然品あらためも行われ、めったなものは持ち込めるはずはまずなかったが、喜三郎はひそかに伊助の送ってくれた見届物の中に紛らせ、あるものを入手していたのである。

「黒瀬乗り切るのは月に三日」といわれた難所が前途に待ちかまえていた。御蔵島と八丈島の間を流れる黒潮

の急湍である。澄んだこの濃藍の流れを昔の人はいみじくも黒瀬川と呼んだのである。

黒潮の流れはつねに一定ではない。一般に春から夏へ強勢になり、秋弱くなり、冬また少しく強くなり、春のはじめ一時衰えて、初夏のころから「青葉潮」、「青山潮」と俗称されるように強くなる。風がちょうど息をするように低気圧の通過する前後、「急潮」といって急に流れが早くなるような変化がある。また、当然ながら大潮、小潮に応じての強弱の変化もある。さらに年により沖に離れ、または岸に近づく変化がこれに加わる。

いま、喜三郎らが風待ちの上、十月に至りようやく出航したのはよほど潮の弱まりを見定めたためだった、ということができる。

ただし、「逆島記」では、

但し出帆之時分は、春は四五月頃、秋は七八月頃也。御用船は出船之時分順風次第出帆致す。

とあり、喜三郎の実際の八丈到着は十月十日になっている。新暦では同年、十一月の十八日だから、かなりの遅れですでに初冬である。この遅れはよほど天候が不順だったためであろう。

さて、島に着いてからを彼はこう記す。

八丈嶋へ着致し候へは、此嶋之濱邊には地役人、名主、組頭、書役、流人頭、小前之百姓、流人之者共不残相出待居候。

そして、続いては、こう述べる、

流人之者共は何れも舟上り致し、此濱邊にて先例之通地役人下知にて村々百姓、五人組と申組合へ薪取にて被引取申候。引取相済候へは、流人は夫々之荷物持参にて、五人組之宅へ参り申候。夫より三日之間休息いたし、休息相済候得は組頭同道御陣屋へ参り、嶋方之御法度承り、銘々名前へ爪印いたし罷帰り申候。従是流人は組頭之差圖を以、當人勝手次第渡世致し居候。

渡世難成者は、無據村方之内修業抔致、露命をつなぐなり。

いよいよこれから本当の流人生活に入る。生存についてはなんらの保証もない。特別のお慈悲による遠島ははたしてご仁政、ご憐憫に値するものであったかどうか、押送してしまえばあとは島のすべて責任とされていたのである。しかもそれは義務づけられていたものだ。

まことに迷惑しごくの仕組である。これを受け入れた島々自体がつねに食糧不足に悩まされていたのだから、犠牲はあまりにも多すぎた。

七島中、川の水利に恵まれているのは八丈だけである。水田がここにはあったが、しかし、それは島民の半数を養うに足りないもので、麦、粟、稗が常食だった。いったん凶作ともなれば薊雑炊、塩草雑炊を食べたものだった。甘薯の採り入れでようやく慢性的飢饉から脱するこ

八丈嶋行之流人は、江戸表春船にて出帆致し候
者は三宅嶋に船待を致し、秋御用船にて三宅よ
り八丈へ出帆致し、江戸表秋御用船にて参り候
流人は三宅に年を越し、来春之御用船にて八丈
へ出帆致。

江戸からの護送してきた役人はほどなくこの島から引き返す、あとは八丈島役人の引取りになる。喜三郎は護送役人に、

「旦那、お情でございます」

と、すり寄るようにして言った。

「なんだ、お主、うわさと違い、かくべつ神妙だったな」

佐原村喜三郎といえばこんどの流人の中では大物として、とくに監視の目をはなさないできた。支配奉行から旨を授けられてもいた。

「へ、ちいっと、お願ぇのすじがござんして、お情でございます、へぇ」

「なにかな、申してみるがよかろう」

「へ、佐原までこれを、あて名の伊助は手前営みまする（伊呂波）の番頭でございます」

佐原に入る寸前の逮捕で、店の始末もなにかと心残り、手紙を届けてほしい、と、いうものだった。

「ふーむ、お主なかなか美事な手蹟、して、これをいつ書いた」

「へ、かしきさまのお情でございます」

と、喜三郎はいっそうすりよって、

「だんな、これは飛脚の駄賃でございます、おさめといてくだせぇ」

すばやく袂へ、まるで歌舞伎の所作よろしく否やは言わせない巧みさ、そして鋭い目付で相手を射すくめた。

「あい分かった、神妙に免じてのう」

「ありがとうさんで、これで手前、八丈へ心おきなく参れます、なんともありがとうさんでござんす」

この時、役人に託した手紙はあの忠実ものの伊助のもとになんとか届けられたもののようだ。年を越して、伊助からは見届物が届いている。

この見届物は見継物ともいわれ、流罪人へ国もとの親類縁者から届けられる生活物資である。大体、食料が多く、島々の嘆願もあって、はじめは特別の流人に限られたものが、次第に自由になっていた。流人が飢えないだけの緩和があり、島の治安上も流人たちの犯す犯罪の減少に役立つものであった。もちろん、その手続は厳しく、当然品あらためも行われ、めったなものは持ち込めるはずはまずなかったが、喜三郎はひそかに伊助の送ってくれた見届物の中に紛らせ、あるものを入手していたのである。

「黒瀬乗り切るのは月に三日」といわれた難所が前途に待ちかまえていた。御蔵島と八丈島の間を流れる黒潮

の急湍である。澄んだこの濃藍の流れを昔の人はいみじくも黒瀬川と呼んだのである。

黒潮の流れはつねに一定ではない。一般に春から夏へ強勢になり、秋弱くなり、冬また少しく強くなり、春のはじめ一時衰えて、初夏のころから「青葉潮」、「青山潮」と俗称されるように強くなる。風がちょうど息をするように低気圧の通過する前後、「急潮」といって急に流れが早くなるような変化がある。また、当然ながら大潮、小潮に応じての強弱の変化もある。さらに年により沖に離れ、または岸に近づく変化がこれに加わる。

いま、喜三郎らが風待ちの上、十月に至りようやく出航したのはよほど潮の弱まりを見定めたためだった、ということができる。

ただし、「逆島記」では、

但し出帆之時分は、春は四五月頃、秋は七八月頃也。御用船は出船之時分順風次第出帆致す。

とあり、喜三郎の実際の八丈到着は十月十日になっている。新暦では同年、十一月の十八日だから、かなりの遅れですでに初冬である。この遅れはよほど天候が不順だったためであろう。

さて、島に着いてからを彼はこう記す。

八丈嶋へ着致し候へは、此嶋之濱邊には地役人、名主、組頭、書役、流人頭、小前之百姓、流人之者共不残相出待居候。

そして、続いては、こう述べる、

流人之者共は何れも舟上り致し、此濱邊にて先例之通地役人下知にて村々百姓、五人組と申組合へ圖取にて被引取申候。引取相済候へは、流人は夫々之荷物持参にて、五人組之宅へ参り申候。夫より三日之間休息いたし、休息相済候得は組頭同道御陣屋へ参り、嶋方之御法度承り、銘々名前へ爪印いたし罷帰り申候。従是流人は組頭之差圖を以、當人勝手次第渡世致し居候。渡世難成者は、無據村方之内修業抔致、露命をつなぐなり。

いよいよこれから本当の流人生活に入る。生存についてはなんらの保証もない。特別のお慈悲による遠島ははたしてご仁政、ご憐憫に値するものであったかどうか、押送してしまえばあとは島のすべて責任とされていたのである。しかもそれは義務づけられていたものだ。

まことに迷惑しごくの仕組である。これを受け入れた島々自体がつねに食糧不足に悩まされていたのだから、犠牲はあまりにも多すぎた。

七島中、川の水利に恵まれているのは八丈だけである。水田がここにはあったが、しかし、それは島民の半数を養うに足りないもので、麦、粟、稗が常食だった。いったん凶作ともなれば薊雑炊、塩草雑炊を食べたものだった。甘藷の採り入れでようやく慢性的飢饉から脱するこ

とができたのが、文化年間という、水利に恵まれず、天水のみに頼る他の島の事情はおして知るべきであろう。縹渺たる大海原の中の粟粒のような列島である。新島、三宅島には畑すらなかった。

山の幸がこのようでも、海の幸は豊富であるはずだが、さてこれを獲ろうにも満足な漁具を持っていないのが実情だった。辛うじて小舟を漕ぎだし、回遊する鰹を釣り上げるか、深く海に潜り、あわびやさざえを採るのがせいぜいであった。

露命、とはよく言ったもの、露の命、いつ、果てたとも知れず、寒さに堪えず、食を乞うてもかえりみられず、ついにひそと死ぬものも多い。裟婆での生き方が、ここでものをいう。見届物のあるなしも彼らの生き死にを分けた場合が多い。家持流人と小屋流人の別は結局、生活力にかかっていた。

ここにいう家持流人とは見届物が多く、食に困らず、金も困らない流人に限られていた。

喜三郎はそのいずれであったかは不明であるが、彼の在所、津田鉄太郎知行所には代貸しの彦兵衛のほか長島の半兵衛という幹部がいた。当然、彼らは見届けを惜しまなかったであろうし、「伊呂波」の伊助も忠実が身上、それぞれ怠りなかったであろう。恐らく家持流人であったのではないか、多分そうであろう。

家持流人は島民の家を借りて住み、水汲み女と称するなんでもやってくれる島娘ややもめを雇い入れ、島民とも対等、もしくはそれ以上の交際をすることができた。

一方、小屋流人の方はどうかというと、総じて、海岸の岩蔭や部落はずれの木立の蔭に、原始人さながら、粗末な小屋がけをして住んだ。

彼は在所にあって善根を施すこと厚く、佐原にはそれなりの地盤を持っていた。

（ありがたい、ありがたい、申し訳ない、拝みます、拝みます）

と、感謝してもし足りない暮しぶりであったろう。そのへんのところ、自らがどうであったかを「逆島記」は書き残してくれてはいない。

八丈にては金銭一切通用無之、売買は交易にて通用いたし候。

ここでいう交易は物の交換であろう。彼の記すところを要約すると、三根三百戸、大賀郷四百戸、この二村を坂下と呼び、樫立百五十戸、中之郷三百五十戸、末吉二百戸の三村を坂上として、流人は均等に約七十、都合、五ケ村で三百十と記している。村方の義務を平等にする建前からであったろうか。

嶋の長さ八里余。横六里余。此嶋之内富士山と云名山あり。高さ三里余。廻り三里半余。駿河富士と異事なし。

簡単に島の地理としてこんな文字が書き添えられている。

喜三郎は三根村割になっている。そのことが、やがて女流人花鳥との出会いを運命づけることになった。花鳥は文政十一年（一八二八）十五歳で島にきたもと吉原の遊女である。すでに島の生活八年におよび、いまは女盛りであった。

伊豆七島の女流人の中に吉原出身の女囚の占める率はかなり高く、八丈では「お豊虫」の豊菊もさきに来ていた。

喜三郎はこれから破島まで在島約二年におよぶのである。

五、つんげる喜三郎

花鳥、豊菊の二人との出会いは喜三郎にとってきわめて運命的であった。

豊菊のお豊は文政四年（一八二一）三月、やはり花鳥と同じ十五歳で島に来ていた。二人はともに多分下級の切見世女郎であったろう。豊菊は簪による客殺し、相手にも殺されても仕方のないわけもあり、死一等を減じられたもの、花鳥の方は放火だった。吉原の全焼は二十数回、小火、未遂を加えれば数えきれない。放火する方は苦界を脱しようとするもの、または怨恨によるもの、うかうかそそのかされたり、さまざまで、楼主の方は焼けるたびに、焼け太りにホクホクものだったという。幕府も保護を与え、仮宅営業を許され、民家を借り、また仮の小屋かけをし、家庭的な雰囲気で客を迎え、かえって喜ばれ、いっそう繁盛したという。妓たちにとってはどこまでも浮かばれない世界だった。遠島は彼女たちにとってはむしろ悲しい社会復帰であった。

夫（それ）、閨の内にても、先初会には恥かしき心持第一にて、余り打解けざるをよしとす。二会より少し打とけ、又三会四会と段々に打解たるがよし。四五会過ては、いとしどけなく取乱したる風情あらまほし。女は唯八十を経るとも、ただ恥かしきという情忘るべからず。斐なる衣・紅の下紐なんど肌身にまとひて風情ハ有なれ。いか斗（ばかり）美女たりとも、赤裸を見せて何の風情かあらん、然りといへども、情に堪えず、おのづからあからさまに成りたるハ又格別興まさりたらんか

これは「遊女大学教草」という指南書に見えるもの。遊女のまことは嘘の皮と承知しながら、男をひきつけ、のめりこませるのが女のいろ、そうした魔力が磨かれるところが廓だった。

さて、三根村割を同じくした男女、しかも流人の運命をかこつ仲間とあっては、袖振り合うことの方が自然で

あったろう。時に、花鳥は二十三、流人としてすでに八年。豊菊は三十、こちらはなんと島の生活十五年におよんでいる。二人がどう生きてきたかは想像にかたくない。

流人と流人、流人と島娘、島の若者と女流人、といった組み合わせの人間のドラマは多分もっとも原始的な共有すら認めるかたちでありふれたと思われる。

後に喜三郎が他に語りあう仲間があっての破島に際して、花鳥が加わっていることは決して偶然ではないはずだ。単なる道連れ説は採れない。遊び人の喜三郎は若い花鳥のもとに通いながら、豊菊のお豊にも気をもたせていたもののようだ。

やがて喜三郎らの破島を知ったお豊は、逆上ぎみにおのれも後に女犯坊主や御家人崩れその他を語らい、無謀の破島をはかるが、夜を徹して波濤とたたかいながら、夜が明けてみると同じ八丈の周りを漂う徒労におわり、追手の舟に囲まれ、仲間の三人が射殺され、四人が捕らえられる始末になった。男三人は島牢に責め殺され、お豊は銃殺刑になった。

（死んだら毒虫になって、島の作物を食い荒してやるぞ、覚えておけ）

と、わめきながら撃ち殺された。その秋、害虫が大発生して収穫が半減したという。たたりを恐れ島民の呼んだ「お豊虫」は「てんとう虫だまし」であった。

お豊には風流の心があり、その小屋を訪ねるものに先客があると、それを知らせるため門口に竹筒をさげ、季節の花が飾られたものだという。女の哀れを誘う話に思われる。

「喜ぃさん、明けがらす、ネ、お願い」

花鳥は巧みな口三味線で合いをつとめる。

「お前さんに三味をもたせたいねぇ」

これは喜三郎の実感だった。聞き惚れ、目を細める花が愛しくてならぬ。

花鳥の俗名が花かどうか。そんなことはどうでも良い。喜三郎にとって花は花なのだ。飽きのこない若さがある。三十一歳の男が燃えたとしてもふしぎはない。

「花、もういっちょう、伊太八でいこう」

たとえ、切見世女郎でも、吉原で磨かれた素養で応えてくれる。落魄を慰め、はじめて覚える女への情があった。

地役人は相川兵左衛門と云った。もとは下田の浜支配の配下にあったが、なにかのわけあってこの島に来ていた。いまは島の女を娶り、幸せな暮しむき、結構満足しているようすだ。

「親分、どうかねぇ、ちったぁ、島に慣れなすったかね」

人の良い笑顔をむけてくる。狭い島の中とはいえ、なぜか出会うことが多い。

「親分はよしにしておくんなせぇ、尻こそばゆいこって、

ご勘弁を」

あくまで腰の低い態度をわすれない。

「いいじゃないか、違いなかろう、ときになぁ親分さんよ、金蔵とうまくやっちょくれよ、いいかいな」

「へ、また親分ですかい、それがいけませんや、お頭に聞かれたら、それこそまずい」

「心配するなて、心得ておるわな」

この男、ひたすら平穏を願いながら、かといってこちらに目は離せないでいる、小心と見えた。よく出会うのもなぜか、先刻喜三郎は承知していることだった。

ところで、その流人頭の斉谷金蔵の方は花鳥に執心して通いつめている一人だ。厄介なことに違いない。喜三郎を向こうでは充分意識においているのは当然で、ハチ合わせは双方でさけてはいるが、いつどうなるかわかったものではない。

「喜ぃさん、なぁ、親分さんぇ、わちきはねぇ、信じておくれな」

花鳥が鼻声を出して意外なことを言い出した。

「おや、おや、お前さんまで親分さんかいな」

「ね、これほんまのはなし、信じておくれな、あのお頭のゲジゲジには前尻売っても、肌は許したことはないんよ」

花鳥のような女のそれが操だとは喜三郎も承知している。

「いいやな、そんなことはおくがいい、おいらには男と女のつきあいがあるだけさ」

「そんなのいやだ、あたしゃいやだよ」

「わかっちゃいねぇな」

喜三郎の「逆島記」にはつぎのようなくだりがある。

一、男女交合することを　カタルト云

一、抱て寝る事を　カコムト云

この短い獄中記は島の言葉をおよそ二十余り書きつけて、こんな言葉をあげている。島の生活の中でこれらが重要な意味をもったと想像される。

そして、

一、男流人之事を　ヂイサマト云

一、女流人之事を　カコウト云

というのもある。

つまり、これを借りて言えばヂイサマの喜三郎とカコウの花鳥の痴話には明らかな隔たりがあった。それが男の、そして、女の真情というものかも知れない。

「ね、いっそ親方がお頭になればいい」

「めっそうもないことをお言いでない。そいつぁいけねぇ、おいらにゃ、そんな他人さまを蹴落そうなんて考えはこれっぽっちもないよ」

この女の肌は抜けるように白くやわい。そして生き血が通っていることで良い。それで良いではないか。

喜三郎の健康はかなり損なわれていた。生への執着は

そうした点からも強く、ことさら性への激しい欲求に駆り立てられるようすに見えた。
（生きたい）
と、思う。生きてもう一度生まれ故郷の土を踏みしめたい。花鳥との行為の中に実在感をつかみ取ろうとでもするようなふしぎな心理であった。
嶋方之者平日食する物は、おもに芋、薩摩芋、
あしたばと云ものを食するなり、
と、「逆島記」は食生活に触れるところがある。茄子、唐辛子は自生するとあり、不思議なことと述べている。
なお、その他の記事として、
此嶋に沢山に有ものは蘇鉄、猫、牛、蝮、郭公、
外之蛇は一切なし。外に四足無。
牛は耕牛だろう。これを食する習慣はない。推して島の食生活が察せられる。衣と住はともかく、食は足りない。栄養を得られない。気丈を保とうとしても、これでは無理だ。見届物にも際限がある。
天保は十一代家斉の将軍時代で、この一代の八丈流罪は六百四十五人という記録がある。治世が長く四十九年におよんでいることを考慮に入れても、この数はかなり多い。素性の上でもっとも多いのが武士と僧侶、それに無宿者となっている。武士は汚職、服務規律の違反など、僧侶の大方は女犯、無宿者は賭博、泥棒、火付、殺人という罪科である。
いまさらに詳しく八丈流人史を知ろうとすれば、どうしても同島に流謫生活六十年をおくった近藤富蔵守真の『八丈実記』を繙かねばならない。同書は実に六十九巻（現存三十六巻）、量的にも質的にも優れたものである。富蔵は千島、エトロフ探検の徳川幕府譜代旗本の近藤重蔵守重の長子としても有名で、その流罪のいきさつの数奇は別に自序の『鎗北実録』を残している。島民に慕われる徳行とともに、文筆に親しむ喜びをもって憑かれたように書き綴られた、しかも客観性に富む厖大な資料である。
宇喜多秀家に始まり、明治四年事実上流刑廃止までの八丈流人数はこの『八丈実記』によると一八二三人、大体次のようになる。

大名	四	無宿	三二四
陪臣	六二	非人	一二
僧侶	二二一	小者	六一
社人	一〇	山伏	六
百姓	二八一	町人	三一五

そして、

官女	二	女	七三

となる。無宿者が多く、また女流人のさすがに希少なことだけをいまは知っておきたい。そして、そのために起こりがちな葛藤をここでは追っていきたい。

喜三郎にそのつもりがあれば、博徒無宿を糾合することは易々たることに違いない。しかし、彼はそれをしようとしていない。喜三郎の着島を知ると、次々そうした仲間が訪ねてきている。連中はいまにも動きだしそうであったが、喜三郎は肯じることをしなかった。
「おいといてくれ、お頭は金蔵さん、荒だては止めにしておくれ」
斉谷金蔵は上州無宿、それなりにこれまで培ってきた勢力を保っている。無宿同志争えば島の騒動になりかねない。そこを喜三郎にしてみれば分別しているのだった。
「佐原の、不自由はしていないかな、役にたつようにいつでもするからな」
金蔵は過敏になりながら、喜三郎にさしあたり格別の動きもないと見きわめると、近づいてきてそんなことを言った。ヘラヘラ笑いを浮かべている。
（この男悪にしちゃあ、案外人は悪くない）
とふめるのだった。
「ありがとうさんなこって、お頭にそういうときにはご迷惑でも、ぜひすがらせていただきやす」
この小天地の中に生きて喜三郎はかってない試練をうけながら、人間としての幅を広げてきたようである。花鳥にしてみればそこのところが歯痒い。この男だけは彼女の思うとおりにならない。そういう歯痒いさだ。
（あたしは、だからこの人に惚れちまったのさ）

喜三郎の胸に顔を埋めながらそう思った。
花鳥から脱島ばなしが出た。その動機はどうやらあのお豊との摩擦に原因をおいている。喜三郎と流人頭の斉谷金蔵の場合よりも、この女同志の間に飛びかっている火花は凄じいものであったようだ。表面、先輩のお豊は姐さん気取りでいるし、こちらも万事下手の付き合いをしていながら、瞋恚のほむらを互いに燃え盛らせていたものらしい。
「だが、こりゃあ必死のもんだぜ」
千に一の成功もおぼつかない。脱島を企てる心理には、野垂れ死にするくらいならいっそ、といった捨身の考えが多くを占める。捨身は勢い無謀に走らせる。他島はともかく八丈は黒瀬をひかえて条件が悪い。しかも自暴自棄では計画性に欠ける。自殺行為に等しいのだった。
実は喜三郎とて胸の内を割ってみれば、そうした考えがないわけではなかった。「伊呂波」の伊助を頼って、伊能家が同じ佐原という縁故をたどり、ひそかに、あの「伊豆七島及無人島図」を手に入れていた。もちろん、公儀公用の地図だから、正当には入手できるものではないが、同家の門弟関係から下図を手に入れたものであった。伊能忠敬先生は文政元年（一八一八）、喜三郎十二歳の時、七十四歳を一期にすでに亡くなっている。前記したように実測、作図のすべて、意志を継いだ門下の手

に成ったものだ。地役人相川兵左衛門は見届物の検分にあたって、これを見逃してしまった。きわめて上質の和紙に描かれた下図は巧妙に包装紙として使われていれば、容易には見破られないのだった。

いかに知能とはいえもちろん単独で事を決行できるものではない。花鳥を抱えこめば、足手まといのようだが、かえって謀議をすすめる上で人目をごまかすことが出来るかも知れない。花鳥の小屋は一種の開かれた社交場だった。

「鰹節をあつめよう、できれば生干しがいい」

「……」

「お前さんは猫を飼いな」

これはだしぬけだった。

ふと、喜三郎は二人の情事の場に不気味に光る獣の目を想像していた。

六、ごしょんなる喜三郎

天保九年（一八三八）七月三日未明、この日は新暦の八月二十二日に相当して、まさに黒瀬の弱まる秋であることに注目せねばならない。台風の発生しやすい直前でもある。漁船を盗んだ喜三郎らはいよいよ脱島という冒険を実行に移した。

下総大倉村無宿利八、上総大網村無宿常太郎、同じく木更津村百姓久兵衛、常陸鉾田村無宿九兵衛、下野正音寺無宿万吉、それに喜三郎、花鳥の都合七人である。

もちろん、風向、潮流を充分見定め、食糧、用具すべて周到な準備を抜かりなく整えていた。

握り飯白米五升、干飯一升、鰹節二百本、火縄と真水は竹筒に入れ、帆柱二本、舵二本、櫂八梃、海路見取図などなどである。ここで鰹節の用意をしているところ、舌を巻く叡智であろう。海路図は「伊豆七島及無人島図」に相違ない。

花鳥に猫を飼わせ、鰹の生節を集めた。喜三郎の「逆島記」の所見にあったように、島には猫、牛が飼われていた。（外に四足無）とある、その猫に着眼をおいて、はじめは一匹だったが、しだいに数が増える成り行きになった。

「あたしはいやだよ」

と言っていたが、花鳥も渋々従っていた。

「嫌いだねぇ、猫の目って」

懸念した獣たちの、複数の目にこれまでの抜船計画進行のすべてを凝視されてきた。

もちろん、見届物として手に入った米と交換に、魚介を手に入れながら、とくに海流に関しての知識を努めて聞くようにしていた。

インバナ嶼を遙かに右に望み、南に進むに、船

の動揺漸次に増し、浪は山のごとく高きに檣頭は殆ど浪をなめんかと思う程に傾き、一度は右し一度は左し、船頭は忽ちにして半空に揚がるが如く、忽ちにして数仞の谷に陥るが如く、潮水は甲板上を打越し、飛沫のために衣服は濡れ、水色を見れば、蒼緑濃厚を極め、黯然として黒色を帯びたり、蓋し黒瀬にかかりたるなるべし、

伊豆七島巡視目録という古書の描写である。黒瀬についてはすでに触れているが、八丈島と御蔵島の間を西南から東北へ、幅約二キロにわたり、時速二十キロから二十四キロの速さで流れる潮流である。

（蒼緑濃厚をきわめ、黯然として黒色をおびたり）

まさに冒険の前途に立ちはだかる最大の難所である。決死とはいえ七人の心のうちにそれこそ、黯然たる不安が黒くひろがる。

喜三郎らの舟は回船や流人押送に使用された交易官船に比較すれば木の葉のように心細いものだ。喜三郎はここでかねてからの考えを一か八か賭けてみるつもりだった。

（黒瀬を突っ切ろうとするから無理をおかす、逆に黒瀬を利用すればいい、流れに乗って北上するんだ）

というものだ。

なるほど、潮流には流軸がある。流れの芯は安定している。それに舟を乗せようというのだ。

「いいか、おれの推測では五日後には銚子沖に出られる」

この予言はもちろん確信はないが、仲間を励ますうえで役立った。

猶八丈嶋喜三郎事朝日象現と改名いたし罷在候處、尤、前々より両親之事而已（のみ）第一にて不限晝夜に信心致し、今一度両親へ対面致度由心願にて、國々諸々大社は不及申、金毘羅大権現、十一面観世音へ三七二十一日之間物断いたし心願こめ候處、二十一日目夜、金毘羅大権現の利益にて、夢知らせ有之。是より象現ふと心替り致し、夫より段々手勢を促し、同戌年七月三日に七人連にて致逆嶋、

八百万の神に念じたことは本当であろう。そして、父母に会いたい一念というのもうなずける。だが、

（夢知らせこれあり）

（ふと心替わりいたし）

というくだりになると嘘を感じる。これは獄中記だから止むを得まいが、だが、同じ嘘をつくにしても神仏をかつぎだしているところに、したたかさがある。琴平の金毘羅さまとなると、なおのこと、吹き出しそうになる。航海するものの願いをかなえるという神さまだから、いよいよおかしいのだ。これを読んだ役人ははたしてどう思ったものか。

要するに神さまが行けよ、孝心に免じてそう宣われた

というものだ。脱島は神さまがそそのかしたあんばいになる。

喜三郎のことだ。おそらくは彼の仲間うちにも、この神さまを利用することを忘れなかったであろう。金毘羅さまのお告げが行けよとあったのなら、勇気百倍したに違いない。

前夜は申し分なく満天の星空であった。

決行の夜明けも東の海上、水平線上には棚ひき雲があったが、うらうらと日の出を漕ぎ出した舟上から望んでいた。

（南無、朝日象現幸先よし）

漕手に向い大声で励ましを与えていた。

彼らが舟を漕ぎ出した底土の浜は三根の村の死角にある。舟着の神湊から東にわずかに鼻を隔て湾入している。「谷落し」と呼ぶ島内犯罪の処刑が行なわれた所で、村方ではそれを「底土の刑」と称んだ不気味な浜だ。谷落しは後手に縛り上げたまま海中へ突き落す水刑だった。

島椿や赤榛の覆う奥山を背に黒々、明けやらぬ島の姿が望めた。彼らは島を離れるために必死に漕ぎ急いだ。御蔵島の方角を目差せばひらかれた海の上にはもう死角はなかった。舟影が点になるまでは急がねばならなかった。どの顔も必死の形相だった。

幸い、気づかれなかった。追手はかからなかった。

半刻ほどで黒瀬にさしかかった。はげしく舟はうねりにぶつかり、奈落へ逆落しと思うばかり翻弄されはじめた。舟底が不気味にきしみ、櫓と櫂のすべてを使い乗り切ろうとする。

「帆柱を一本すてろっ、舟を軽くするんだ」

喜三郎が叫んだ。思い切った判断である。

流れに乗ることができた。思っていなかった速さに小舟が流されはじめた。どうやら流軸に乗れたようだ。漕ぐ手を休めて六人の男たちは体を伏せるようにした。花鳥は舵をとって健気に見える。

「舵は軽くもつんだ、真直でいい、頼むぞっ」

花鳥は髪をふり乱し女夜叉のように厳しい顔だ。喜三郎はその夜叉を従える、さしずめ北方鎮護の毘沙門天であろう。まさしく、いま北方へ舟を進めようとしている。（この女とおれはとうとう心中することになるかも知れぬ）

抜船計画をすすめる中で、当然二人はすでに夫婦同然の暮しを数か月つづけてきた。脱島に備える食糧を整えるためにもそれは避けられない成り行きだった。猫を飼い、鰹の生節を集める苦肉からはじまったことだ。流人頭のあの斉谷金蔵は喜三郎が煙たいらしく近づかなくなっていた。

三日目、三宅島をはるか望み、大島の間で急に風向きが変った。西の方から黒雲がひろがりはじめ、強風が吹

きはじめた。海面を叩くように大粒の雨が降ってきた。雨足はしだいに激しく、たちまち視界が真っ暗になった。舟は木の葉の舞うように自然の猛威の中を翻弄され、積んでいた荷物の一部を洗い去った。それを取り上げようとして、大倉村の利八が波間に吸い込まれた。舟はその瞬間も潮に流されているから、助けようがない。つづいて木更津の久兵衛、大網村の常太郎が波に呑まれ姿を消した。漕手を三人も失った舟はこれ以上は運ぶてんぷ漂うほかはない。

残した一本の帆柱もへし折られていた。

五日目、彼らの舟は奇跡を恵まれ、銚子沖を流されていた。この沖合は土地の漁師も言う、（てんでんしのぎ）の難所になる。南下してくる親潮が黒潮とぶつかりあうからだ。各個に命を張っていかに慣れた土地の漁師でも、他人さまはかまってはいられないというものだ。

もはや観念もし、疲労も極度であったから、ここまでの命であっても良い、生きるための根も張りも失いかけていた。ぼーっと意識も薄れかけるありさまだった。

さらに、ここでも彼らの舟はまたまた奇跡というべきツキに救われている。潮流のぶつかりあう瀬の中から陸地の方に舟が弾かれ、まるで放うり出されでもするように押し流されたのだ。

（南無、金毘羅大権現）

喜三郎が気づいて、神を念じた。なんでもこの男は南無だが、神仏混淆の時代だから、それでよさそうだ。大物主命も許し給うたであろう。

（南無、金毘羅大権現）

なんべん手を合わせてもいい、神はまさに彼らの上に奇跡を恵まれたのだ。

（南無、金毘羅大権現）

さらに、さらに、なんべん唱えても感謝は足りるものではなかった。

同七月九日に常陸國鹿嶋浦に乗寄、是より七月十三日夜に至、親子対面致、弥心願相届き候得共、日陰之身之上なれば難立行候故、無是悲

（非）相別申候。

彼らの漂着した鹿島浦はいまの茨城県鹿島郡大野村荒野浜だった。

ここで上総方面から漁場を転々として稼ぐ雇われ者の岩吉という男に助けられた。

沖釣に出てシケに遭ったものと偽った。男は深く疑うこともなく親切にしてくれ、仮小屋に招き入れて、味噌炊きの粥をふるまってくれた。なにしろ、二日目あたりまでは握り飯を食べていたが、予期せぬ暴風雨の猛威に遭い、舟底にしがみつき辛じて命だけは助かったありさま、波間に消えた仲間たちの悲鳴も耳底に、食べ物を喉に通す気力さえ萎えきっていた。だいいち、積み込んだ

食料その他ほとんどが怒濤に洗い流されてしまっていた。飲まず食わずのありさまだったから、地獄に仏、三人は涙を流し、むさぼるように馳走になった。そして、泥沼のような眠りに落ちた。

翌朝、たがいの無事を祈り、鉾田の九兵衛とは別れた。この男のそれからがどういう運命であったものかは知りようがない。

十三日夜、喜三郎と花鳥の二人は佐原の土を踏んだ。喜三郎にとってはほとんど三年ぶりに踏みしめる故郷の土だった。

まず、彼はすぐその足で代貸の彦兵衛を訪ねた。

驚きあきれた彦兵衛は、すぐ機転でエンマと呼ぶ沼に繋がれていた手持ちの苫舟に匿まってくれた。

「すまねぇ、すまねぇな、お前さんに迷惑をかけちゃならねぇが、よろしくな」

「へ、合点でござんす、あっしが良いようにいたしやす」と、心強く言ってくれるのだった。

連絡をうけ、父親の武右衛門がかけつけ、老いの身の涙ながらの対面をした。

翌日は夜陰に紛れ、幹部の一人、半兵衛を訪ねたが、

「喜三郎だ、開けてくれ」

あたりに気配りしながら戸を叩いたが、

（親分は八丈だ、佐原にいるわけがねぇ、大方、狐か狸のいたずらだろう）

そして、空耳ぐらいに考え、家人に戸を開けさせなかった。がっかりして舟に引き返してきた。

いつまでも彦兵衛の厄介になってもいられない。誰一人、彼の家族以外の人間にはまだ気付かれてはいないようだったが、これ以上は危険である。

ひそかに寺宿の青柳甚兵衛宅に移った。この姉婿の家では土蔵の二階をあてがわれ、約十日ほど喜三郎、花鳥の二人は寝起きをさせてもらっている。甚兵衛は義理の関係にかかわらず、これまでと同じようによくしてくれ、よほどの太っ腹に実の姉のほうがハラハラして見えた。

青柳が江戸に左官業の支店をもつ分限であることは前に書いたとおりだが、その手を通して花鳥の親元をあたってくれていた。ようやくそれも浜町と知れ、送りとどけることになった。七月二十二日、彦兵衛ほかの二人の幹部に守られ二人は利根を舟で遡行し、翌夜江戸に入った。

ここで、喜三郎は花鳥とともに浜町で再逮捕になる。

御町方御役人様六人、御先手三十人余にて、浜町に止宿候處御召捕に相成、

と自らは記し、その日を戌十月三日としている。彼はそれまでの潜伏生活を

虚無僧に身をやつし、御当地に住居いたし罷在候處、

として、青柳に累のおよぶことを避けている。

花鳥の方は江戸引き回しの上早々に斬首になったが、彼の場合は吟味中、なかば公命による手記を書かされるうち、日一日と処断が遅れ、後記するような出来事から無期禁固に減刑される。

「逆島記」の差出しを終ると、さすがに永の牢生活に倦み、また健康も著しく損なわれ、労咳の患いが重ったころ、こんどは佐原の人々による釈放嘆願が行われた。

恐れながら書附をもって願上げ奉り候。

津田鉄太郎知行所、下総香取郡佐原村百姓武右衛門伜喜三郎儀、先年不身持ちの儀に付き、喜三郎お召捕りに相成り候處、格別のご慈悲を蒙り、今もって入牢お咎中に御座候處、右当人儀、老年の父これあり、最早七十余歳に罷り成り、外に相続いたし候者もこれ無く、朝夕老衰の余り悲嘆、沈み罷りあり候間、不悪見に寺院、村役人、親類、隣村村々一統連印をもって恐れも顧みずご愁訴申上げ奉り候。

何卒この上、幾重にもご慈悲のご沙汰を蒙り奉りたく一同伏してお願い申上げ奉り候。

以上

天保十五年辰年

そして、青柳甚兵衛以下親類七人、百姓代五人、組頭八人、名主五人、年寄一人の外、篠原村、津宮村、大倉村など隣村名主十一人、それに菩提寺法界寺、縁寺浄土寺、の連署というもの。

いかに喜三郎の人気があったかを物語っている。もちろん同情は老父に対するものもあったろう。この父もなかなかの男気を持ち合せ、人々のため情を施していたものであろう。

ここでも、青柳の尽力がいかに大きかったかが経緯の中に伺える。この嘆願書は近年になって青柳家の土蔵から奇しくも発見されている。

入牢すでに七年、彼は四十歳になっていた。

八丈島抜けに成功した男、アウトローの英雄としての彼の事蹟は当時、南の町奉行であった入れ墨判官として知られる遠山金四郎の耳にも達していた。

そのへんのところを「逆島記」はこのように述べている。

浜町に止宿候處御召捕に相成、町御奉行所は大草安房守御役所へ御差出に相成、度々の御吟味之上伝馬町石出帯刀様御屋敷内獄屋へ御預け相成、入牢中両三度御呼出有之、又候（またぞろ）御勘定奉行遠山左衛門尉様へ御引渡に相成、度々御吟味之上、篤御利（ママ）解　仰聞、是亦御勘定奉行深谷遠江守様御役所へ尚又御引渡相成。御吟味中獄屋にて、豆州沖之流人嶋并外嶋之荒増（あらまし）を不残是に記す。

さて、遠山金四郎景元は喜三郎入牢に先立つこと数か

月の、天保九年二月から勘定奉行であり、同十一年三月町奉行に転じ、十四年三月まで在任している。度々の吟味はその関心、並々ならぬものがあったことを示している。喜三郎に獄中記を書かせた役所の動きもここに躍如としている。

やがては死罪に処せられるはずの者が、死一等を減ぜられたことについては東大牢に幽囚中、喜三郎は牢名主をつとめていて、たまたま牢屋火災に遭うことがあり、囚人解き放しの処置のとられた際、彼の牢のみ鎮火後全員無事帰牢するという出来事があり、平素牢名主の訓戒のよろしきを得た、抜群の指導力によるものとして功を認められたことによるのだった。

せっかくの嘆願にかかわらず、役所の対応は遅れ翌弘化二年の五月まで放置されている。天保十五年辰は十二月、改元して弘化になっていた。

「江戸十里四方追放」という沙汰のあったのは五月九日だった。労咳を病む彼の衰えを機に処置がとられたものと言えるが、一方にこの間、二年ほど罷役中であった遠山金四郎が同年二月、町奉行に再び登用されているという事実がある。裁定に重大な関わりを考えられる。

一、天保十二丑五月五日、深谷遠江守様御役替に付、又候佐橋長門守様御役所へ附渡相成罷在候。

一、元文三午五月、伝馬町石出帯刀様獄屋始り候砌より、寺社御奉行所、両町奉行所、御勘定奉行所、御加役方にも、ケ様之儀は希成事と、前書之御役所は不及申、老弱男女、数万之諸役人も申伝る也。

他見無用事也。

喜三郎の朝日象現はその獄中記の末尾をこうしめくくっている。「逆島記」を公儀から勧められて書き了え、差出をした年月が明らかである。少しずつ健康を害していたとしても、まだ彼は元気であった。むしろ、意気軒昂の気概を伺える。

（かようなことは希有である。公儀は言うに及ばず、老若男女、役人どもにも申し伝える）

というものだ。

『朝日逆島記』はこうして成った。

喜三郎は釈放の後一か月足らずでこの世を去った。深川富岡町綿貫藤助方に労咳に細った体を横たえ、燃え尽きるように静かに息をひきとった。所払いにかかわらず、彼はその江戸に客死した。七年前、断罪によって花鳥が命を終えた同じ江戸の地であった。

彼の霊は佐原に帰り、菩提寺である法界寺の墓域の一隅に葬られている。その墓石の表には、

「即誉無生信士」

そして、左側面には、

弘化二年歳在乙巳六
月初三年四十而没
俗称喜三郎

と刻されている。六月初三、すなわち三日が彼の命日である。

（六一・五・三〇）

（付記）

※本編の各章小題使用の方言解説（一、うそっぽ＝嘘）、（二、まがっと＝曲がり角）、（三、ちくぬくな＝嘘つくな）、（四、さるげおち＝転落する）、（五、つんげる＝逃げる）、（六、ごしょんなる＝助かる）

※参考引用の資料はすべて単行本に収録の際明らかにしたい。

カットの吉田　漱氏紹介

現代歌人協会会員・浮世絵協会会員、東京美校卒大学教授・歌人であり、また美術史家として、とくに小林清親の研究の権威として知られる。「開化期の絵師・小林清親」などの著書がある。

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

※同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

掲載作品総目次（十一号ー二十号）

第十一号（五十九年二月）

子の権現　大和禎人
遠足　茂里英介
年寄りの冷ミステリー　山本儀一
フルートの奏でる
アンダンテ・トリスト　山根三枝子
○町○丁目○番地（四）　山口健二
ハイラル挽歌（十一）　金子正義
藤木屋酒店の終焉　柴田富佐子
鏡花の女（上）　三戸岡道夫

第十二号（五十九年六月）

故里の案山子　山本儀一
さいたま屋歳時記　左老庵
モーニングコール　大和禎人
○町○丁目○番地（五）　山口健二
ハイラル挽歌（十二）　金子正義
鏡花の女（下）　三戸岡道夫

第十三号（五十九年九月）

縁日屋の平さん　大和禎人
さいたま屋歳時記　左老庵
○町○丁目○番地　山口健二

第十四号（六十年一月）

阿多多羅山涅槃　大和禎人
聖マリアの亭主　山本儀一
うすみどり色の林檎　山根三枝子
杖　左老庵
絢爛のあわれ　三戸岡道夫
松尾芭蕉ー瓢の艶ー　八十島元

第十五号（六十年四月）
追悼・常石三郎号

さいたま屋曼陀羅　山口健二
男たちの瀑（一）　三戸岡道夫
追悼　常石三郎
前島幸視・弓削悟・永原博人・佐藤庄造・小久保勝義・柴田富佐子・井上二三男・八十島元

第十六号（六十年八月）

午前堂恒石居左文氏還浄図　大和禎人
男たちの瀑（二）　三戸岡道夫
秋思　茂里英介
お遍路道中記　山口健二
離婚届　柴田富佐子
『汽笛一声』今は昔　大和禎人
松尾芭蕉ー臨終の蝿ー　八十島元
ハイラル挽歌・第二章（一）　金子正義

第十七号（六十年十一月）

さいたま屋点鬼簿　山口健二
競馬屋の加代ちゃん　柴田富佐子
水出書店　大和禎人
ハイラル挽歌・第二章（二）　金子正義
男たちの瀑（三）　三戸岡道夫
大和禎人寸描　八十島元

第十八号（六十一年二月）

玉千代の廃業　大和禎人
花粉は路地の風に乗って　山口健二
男たちの瀑（四）　三戸岡道夫
ハイラル挽歌・第二章（三）　金子正義
山口健二寸描　Q太郎

第十九号（六十一年四月）
短編特集号

姓名学叙事詩　山口健二
電話　井上二三男
夕映え　山根三枝子
結婚　柴田富佐子
李赤の雪隠の死　金子正義
吉原遊廓　八十島元
コマーシャルタイム　三戸岡道夫
夢芝居　大和禎人
松尾芭蕉ー貝おほいー　八十島元
八十島元寸描　Q太郎

第二十号（六十一年七月）

三戸岡道夫寸描　Q太郎
老桜　三戸岡道夫
井中加和寿氏の易占術　山口健二
ゾーリンゲンのかみそり　山根三枝子
ライスカレー　柴田富佐子
天皇誕生日　茂里英介
松尾芭蕉ー坐り胼胝の蚊ー　八十島元
ハイラル挽歌・第二章（四）　金子正義
逆島記　大和禎人
柴田富佐子寸描　Q太郎

編集後記

本誌は季刊を原則にし、多少遅れることはあったかも知れないが、ここに二十号が発行できて、大変感概深いものがある。

同人雑誌には「三号雑誌」という異名がある。三号ぐらいで、あとが続かない、一応終りにしようよ、というケースが多いので茶化しているのである。

続かない理由はさまざまであり、これこそケースバイケースであろう。反対に二十号、五年間続いているという場合にも、それなりの理由がある。

本誌の同人たちはそれぞれ豊かな人生経験をもつ人々である。特に文学歴は古く、若くして作家をこころざした者が多い。読書や思索により形成された人生観、人間観で秀れた働きをし、今も多忙な毎日を過している。

そして、ともすれば沈滞しがちな同人たちを叱咤激励し、機関車の役目を果してくれた人に恵まれていたということが、ここまで来た最大の要因ではないかと思う。有難いことだと常々感じている。

二十号は記念号と銘打って、ほとんど全同人の作品を掲載することができた。それぞれ苦心して書き上げた作品である。充分時間をかけて味読していただきたいと願っている。この辺で、創刊号から二十号まで机の上に積み上げ読み直してみようと思っている。

（も）

「まんじ」第二十号

昭和六十一年七月一日発行　（非売）

編集　大和禎人

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三ー十一
☎（261・5743）

発行　「作家群」（まんじ）編集部

〒一〇一東京・千代田区神田駿河台二ー九
☎〇三（二九三）〇〇九四　柴田方
郵便振替口座　東京二ー九〇八一五